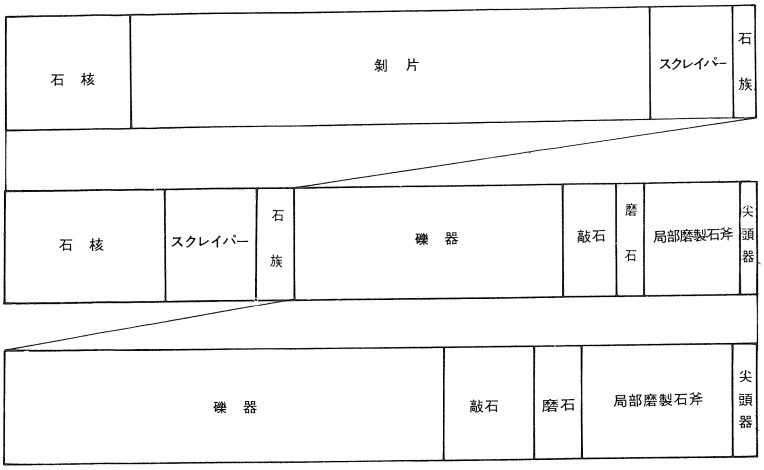


表1 石 器 組 成 表

もの（2～5，7），片面に剝離が入り，片面が研磨によるもの（1，6）がある。

礫器（第**81**図～第**84**図）

A（第**81**図1～3，第**83**図1～3）楕円形，及び長楕円形の礫の端部に剝離を加え，刃部を形成するもの。大部分は，片側からの剝離によって刃部を形成する。2は，両面から刃部形成が行なわれる。

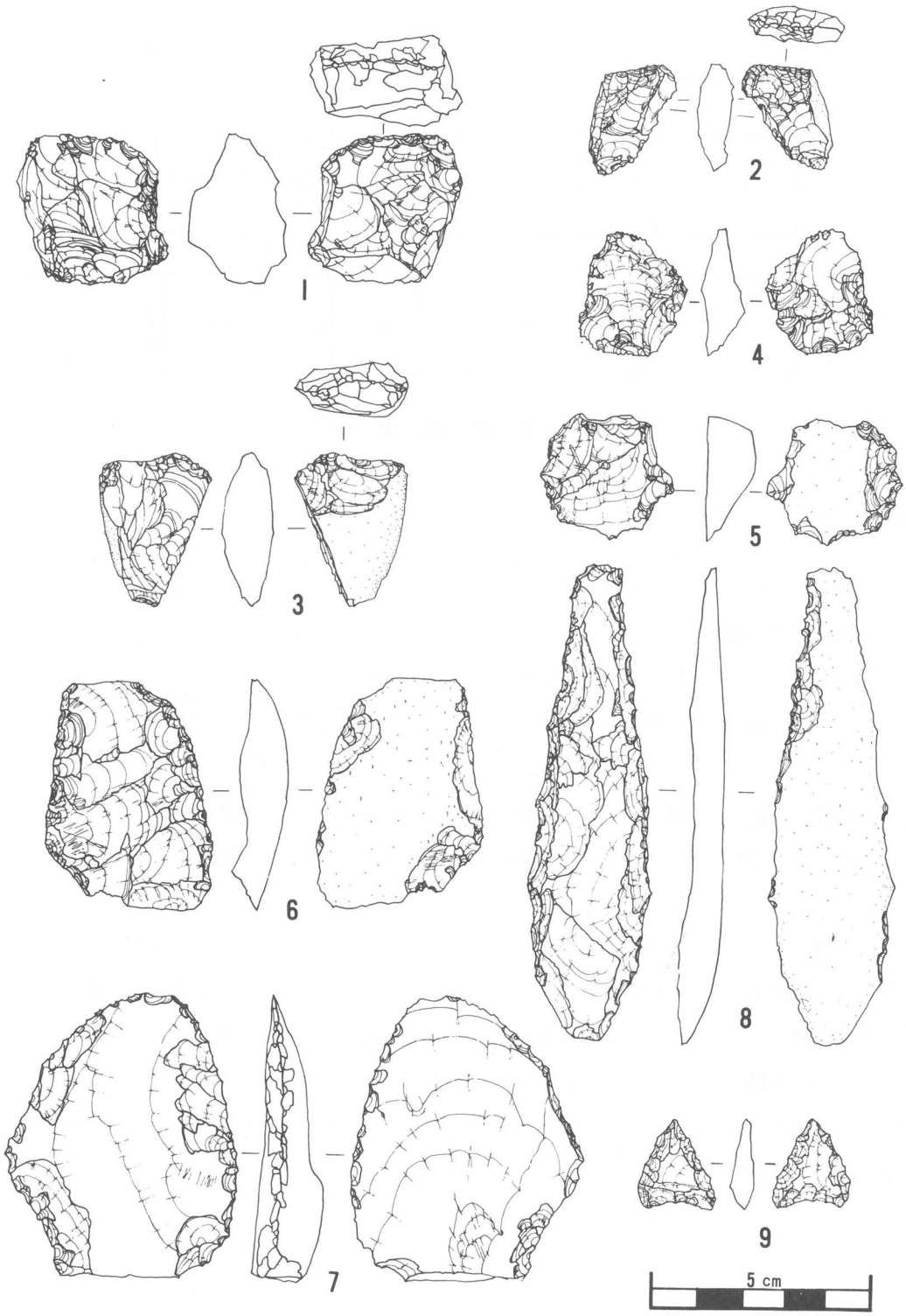
B（第**82**図2，3，第**84**図3）Aと同様であるが，全周の$\frac{1}{2}$以上に剝離が加わるもの。片側からの剝離によって刃部を形成するもの（第82図3）と，裏面から若干の剝離が加わるもの（第82図2，第84図3）がある。

C（第**84**図1，2）礫の全周に剝離を加えるもの。片面の自然面をほとんど残さない。

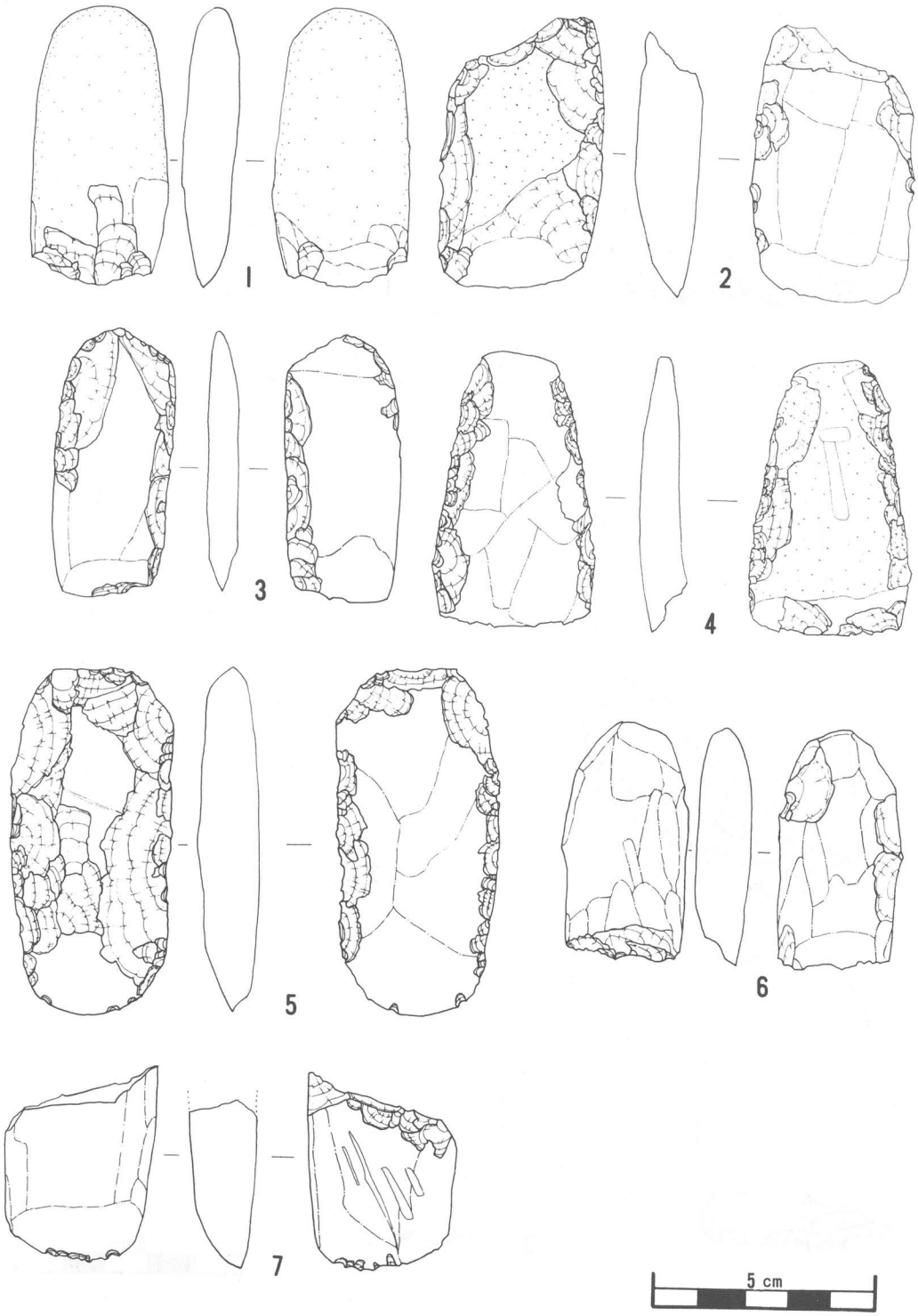
敲石（第**85**図1，2）長楕円形の礫平坦部に敲打痕が認められる。両面に認められる。

磨石（第**85**図2，3）円形の素材の側面に磨痕が認められる。4は，磨痕が明瞭に認められる。

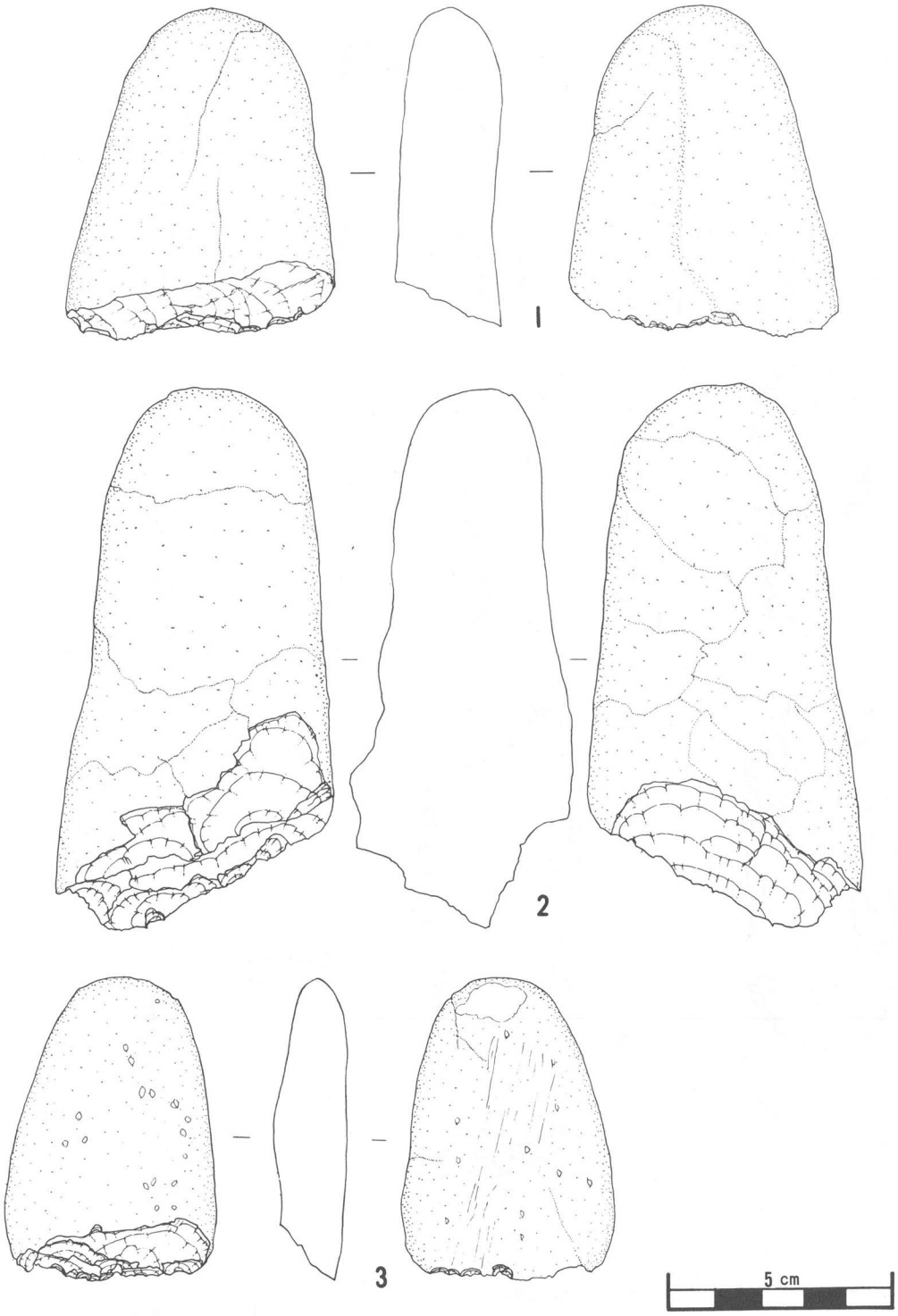
磨製石斧（第**85**図5）弥生時代に属する大型蛤刃石斧である。基部に剝離痕が残る。全体に，敲打による整形が行なわれ，刃部付近が研磨される。刃部は両面からの研磨によって形成される。左側に使用痕が認められる。



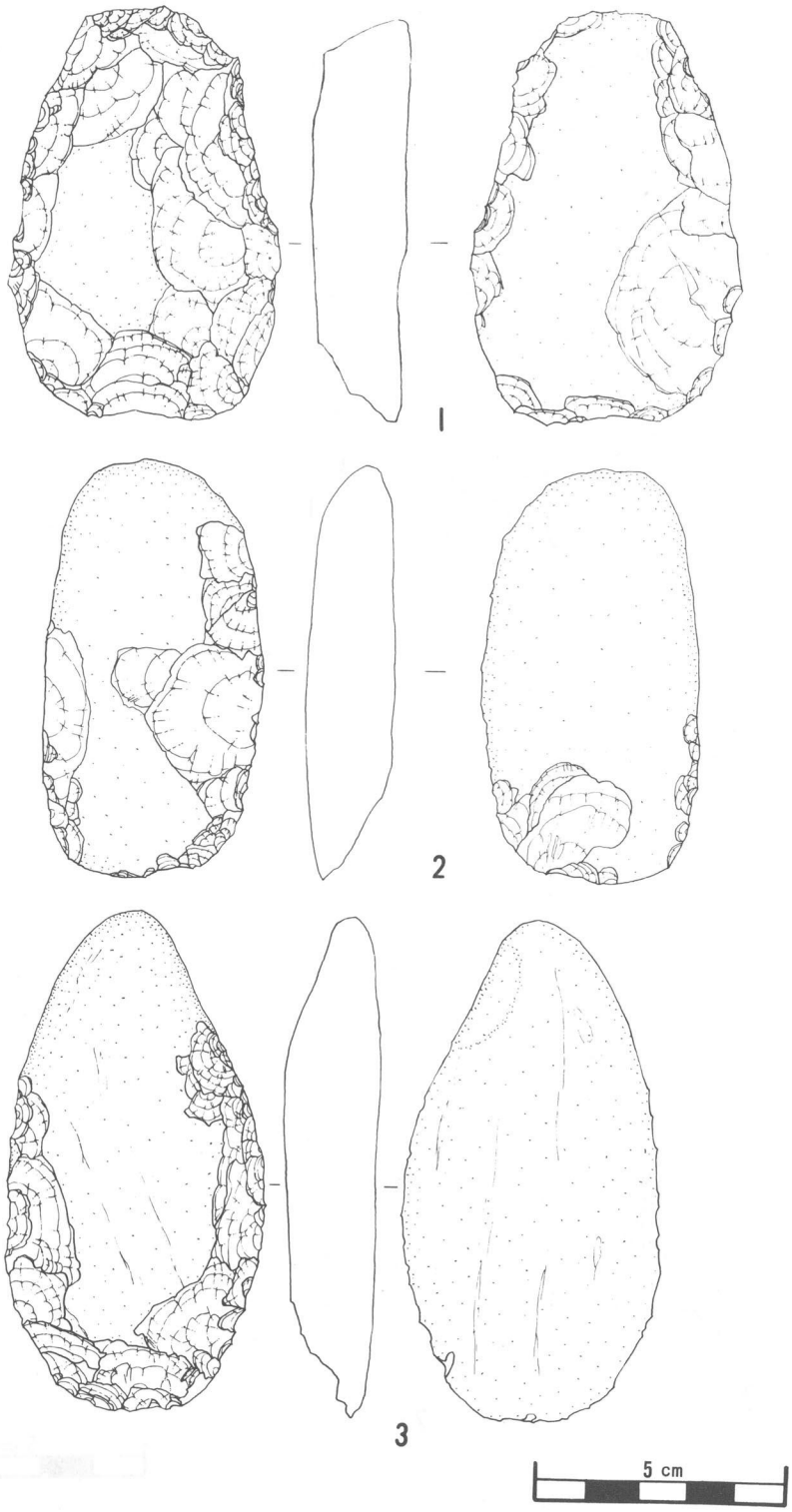
第79図　グリット出土遺物（21）



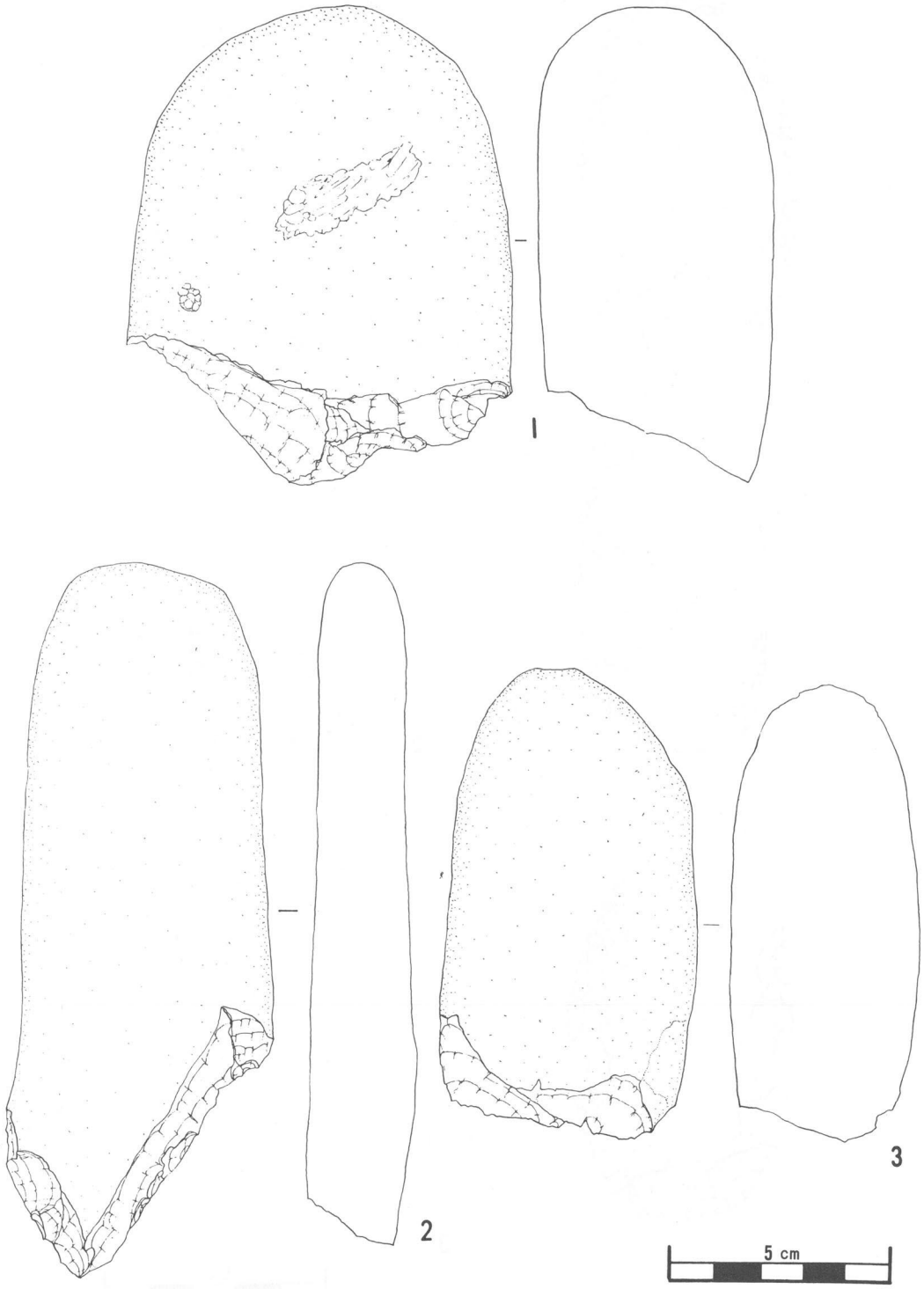
第80図　グリット出土遺物（22）



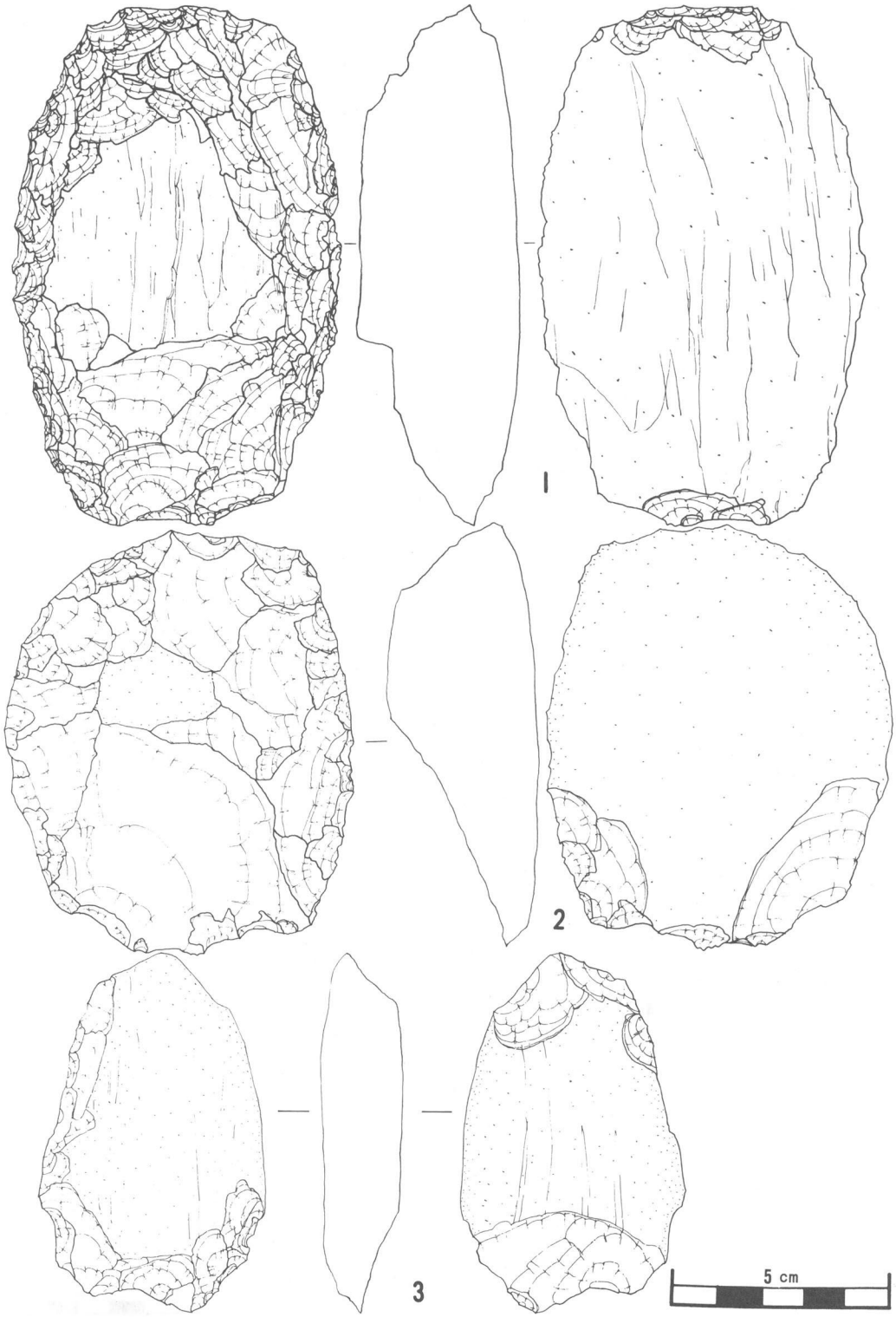
第81図　グリット出土遺物（23）



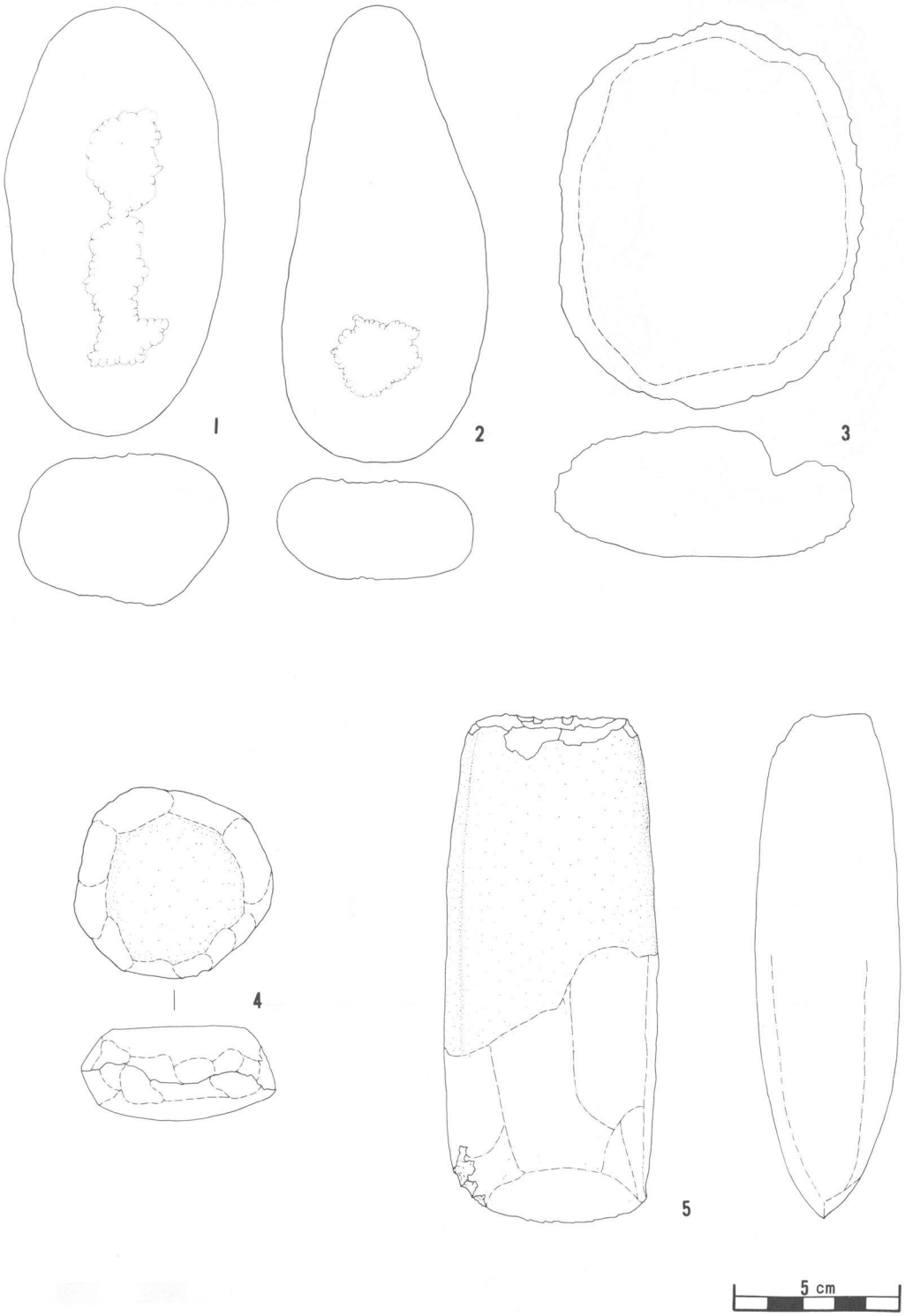
第82図　グリット出土遺物（24）



第83図　グリット出土遺物（25）



第84図　グリット出土遺物（26）



第85図　グリット出土遺物（27）

付論

本遺跡における弥生式土器には，次の種類の縄文が認められた。この縄文分類をもとに図化した資料について表を作成した。（本遺跡では，８割以上の土器を図化しているため，ある程度信頼できるデーターと思われる)。

①ＲにＲを（Ｚ）方向に附加したもの。

②ＬにＬを（Ｓ）方向に附加したもの。

③ＲＬにＲＬを（Ｚ）方向に附加したもの。

④ＬＲにＬＲを（Ｓ）方向に附加したもの。

⑤ＲＬに２Ｌを（Ｚ）方向に附加したもの。

⑥ＬＲに２Ｒを（Ｓ）方向に附加したもの。

⑦Ｒを軸として，Ｒを２本同時に（Ｓ）方向に附加したもの。

⑧羽状縄文を配するもの。

⑨ＬＲにＲを（Ｓ）方向に附加し同一条にＲをもう一本加えたもの。逆の撚りも含む（ＲＬにＬを（Ｚ）方向に附加し同一条にＬをもう一本加えたもの)。

⑩ＬにＲを（Ｚ）方向に附加したもの。

⑪Ｒに２ℓを（Ｚ）方向に附加したもの。

⑫Ｒにｒを（Ｓ）方向に附加したもの。

⑬ＲにＲを（Ｓ）方向に附加したもの。

⑭ＬにＬを（Ｚ）方向に附加したもの。

⑮ＲにＲを（Ｓ）＋ＬにＬを（Ｚ）方向に附加した羽状縄文。

⑯Ｒにｒを（Ｓ）＋Ｌにℓを（Ｚ）方向に附加した羽状縄文。

⑰Ｌにℓを（Ｚ）方向に附加したもの。

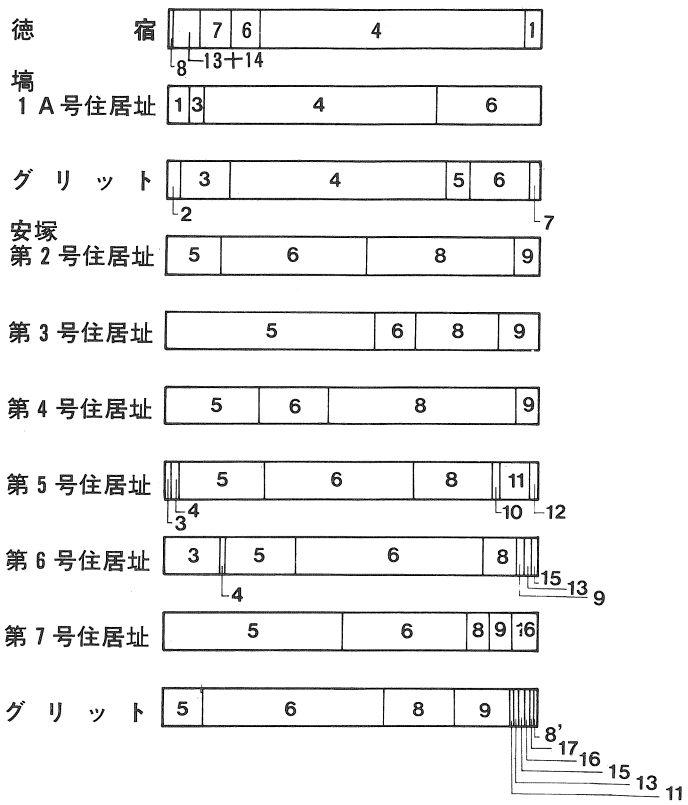


表2　弥生式土器における縄文原体の占める割合

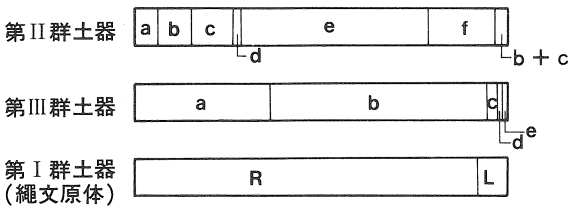


表3　縄文式土器(第II群，第III群)における割合及び縄文原体の割合（第I群）

第5節　ま　と　め

縄文時代

縄文期に属すると思われる遺構は，炉穴6基と土壙1基で出土遺物に比してかなり少ない。遺物は，縄文式土器，及び石器が少量出土しているが，縄文式土器は，早期に良好な資料がみられる。ここでは，縄文式土器の編年的位置について中心に記述してまとめとしたい。

第Ⅰ群土器

早期撚糸文系土器群である。第Ⅰ群aは，第2様式に属すると思われるが，1片しか出土していない。[注1] 第Ⅰ群bは，第3，4様式に属すると思われる。本遺跡では，大部分が撚糸型であって縄文型が極端に少ない。これは本遺跡の大きな特徴である。縄文原体は，Rが90%でLが10%でありRが圧倒的に多い。第Ⅰ群cは，第5様式に属するものと思われる。粒の荒い単軸絡条体の回転文が配される。一部には回転方向を変えているものも見られる。縄文原体は，大部分がRである。この類は，当地方で所謂「花輪台Ⅰ式」[注2]と呼ばれるものと思われる。

この第Ⅰ群には，局部磨製石斧が伴うものと思われる。

第Ⅱ群

早期条痕文系の土器群である。本群は，「子母口式」土器[注3]と想定される部分を含んでいる。これは，当地方では，ごく少ないものである。水戸市柳崎貝塚[注4]，勝田市東中根例[注5]で紹介されているにすぎない。本群は，前二者との様相を異にしている。文様の特色は，a—貝殻腹縁文を有するもの（6.1%）。b—微隆起線文を配するもの（8.5%）。c—絡条体圧痕文を配するもの（11%）。b＋c—微隆起線文＋絡条体圧痕文を配するもの（3.7%）。d—沈線文を配するもの（2.4%）。e—条痕文を配するもの（50%）。f—無文のもの（18.3%）[注6]である。

本群の「子母口式」土器の特色は，①，微隆起線文を含んでいる。一部には，微隆起線＋絡条体圧痕文の組み合わせを持つものも存する。②，貝殻腹縁文を配する土器群も少量出土しているが，全体の割合は低い。③，絡条体圧痕文を配するものがある。④，本土器群には，繊維を少量含み，一部に金雲母を多量に含むものが存在し著しい特徴となっている。本群の復元資料は，土壙16から出土している。深鉢形土器である。表裏に擦痕状の調整痕があり，口唇部に絡条体の圧痕文が配される。

以上，第Ⅱ群土器は，絶対的に資料不足[注7]であって前後関係等々の細部については，くわしく触れない。今後の資料の増加を待ちたい。

第Ⅲ群

縄文＋条痕文系の土器群である。若干問題があるが早期後半[注8]としておきたい。内容は，a—表

面に縄文，裏面に条痕を配するもの（36.4%）。b—表面に縄文が配される（57.6%）。c—隆起線文が配されるもの（3%）。d—側面体圧痕文を配するもの（1.5%）。e—沈線文を配するもの(1.5%）である。本群は，県北地方で類例を増加しつつあるが，当地方では，筆者の知る限りでは初見である。馬目順一氏の言う「大畑G式」[注9]に関連するものと思われるが，本群は，所謂単軸絡条体の回転施文される土器群[注10]が少ない点，全体の90%以上が縄文＋条痕，縄文のみが施文される点，本遺跡の特徴と思われる。以上，第II・III群には，礫器が伴うものと思われる。

弥生時代

本遺跡の主体をなす時期である。遺構は，住居址が6軒検出された。遺物は，かなりまとまった良資料と思われる弥生式土器，及びそれに伴う石器，土製品が出土した。個々については記述しているので，ここでは住居址と遺物の関係，本遺跡弥生式土器の編年的位置についてまとめておきたい。

住居址と遺物

本遺跡から検出された住居址は，大きく2つのグループに分かれる。第2号住号址，第3号住居址，第4号住居址，第7号住居址の4軒による遺跡南側グループと，第5号住居址，第6号住居址の2軒による遺跡北側グループである。

次に上述2つのグループの住居址群は，各住居址の覆土出土弥生式土器とどのような関係をもっているのか（所謂，各住居址の時間的差異があるのかないのか）を検討していきたい。

（南側グループ）

第2号住居址

a——判断できる資料は，第10図2～5，第12図1である。この内，第12図1は，良好な資料である。確認できる文様帯は2帯である。I文様帯は，波状櫛描文で縦区画はない。IIa文様帯は，波状櫛描文＋縦区画である。このI文様帯とIIa文様帯を分離する隆起線はつぶれたような断面形を示し，軽い押圧がある特徴的なものである。

b——判断できる資料は，第10図6，7である。いずれも口縁部に縄文原体による押圧がある。

c——胴部片。判断できる資料は，41片である。⑤が14.64%，⑥が39.02%，⑧が39.02%，⑨が7.32%である。羽状構成を示し，附加条第一種で2本巻きつけるものが大半を占める。

高杯—底径が小さく，円孤状にカーブしてなだらかに杯部に移行するもの。

第3号住居址

a——判断できうる資料なし。

b——第17図1～4。1が附加条第二種の縄文による羽状縄文である。

c——判断できる資料9片。⑤が55.56%，⑥が11.11%，⑧が22.22%，⑨が11.11%である。

やはり⑤，⑥，⑧が大部分を占める。⑧の中に⑮の附加条第二種の縄文を含めておいた。

第４号住居址

ａ――（第**20**図１～４）Ⅰ文様帯に属するもの１，２である。櫛描波状文を配するが縦区画が入るかどうか判断できない。Ⅱａ文様帯は，４の資料より縦区画がうかがえる。文様帯を区画する隆起線はつぶれた状態である。４は，細い隆起線に縄文原体末端による刺突がある。

ｂ――（第**20**図５）折返し口縁を有する点特徴がある。

ｃ――判断できる資料16片。⑤が25％，⑥が18.75％，⑧が50％，⑨が6.25％である。やはり，⑤，⑥，⑧が大部分を占める。

杯形土器――内面に折り返し口縁を持つ。

第７号住居址

ａ――（第**43**図６，８，第**45**図１）第45図１が完存に近い。Ⅰ文様帯は，櫛描波状文を持ち縦区画はない。Ⅱａ文様帯は，櫛描波状文で縦区画が４単位配される。Ⅱ文様帯との区画には，櫛描波状文を用いている。Ⅰ文様帯とⅡａ文様帯との区画には，つぶれたような断面の微隆起線が用いられる。第43図８は，Ⅱａ文様帯で櫛描波状文＋縦区画である。櫛描波状文を用いて，Ⅱ文様帯と区画している。６は，子細は不明であるがⅡａ文様帯とⅡ文様帯は直接接しているものと思われる。

ｂ――（第**43**図１～３，５，第**45**図３）ストレートに立ち上がる口縁を持つ。５は，縄文原体による刺突が一列配される。第**45**図３は，つぶれた断面を持つ隆起線で区画する。Ⅰ文様帯が無文化される点特異である。全面に附加条第二種が配される。

ｃ――判断できる資料は，15片である。⑤が44.66％，⑥が33.33％，⑧が6.67％，⑨が6.67％，⑯が6.67％である。⑤，⑥，⑧が大部分を占める。附加条第二種を含んでいる。

筒形土器――⑤の縄文を持つ。内面に接合痕を残す。

（北側グループ）

第５号住居址

ａ――（第**25**図１～15）１～４は，異時期である。Ⅰ文様帯は，５，６しか判断できる資料はない。現状で縦区画はない。Ⅱａ文様帯は，９，10，14，15に縦区画が認められる。隆起線は，つぶれた状態で押圧が加わる。10は，隆起線がⅡ文様帯との区画に使われている点注目しておきたい。

ｂ――（第**25**図16～18）甕形土器と思われる。口縁部は，比較的ストレートに立ちあがる。

ｃ――判断できる資料は，64片である。③が1.56％，④が1.56％，⑤が23.44％，⑥が40.63％，⑧が21.88％，⑩が1.56％，⑪が7.81％，⑫が1.56％である。ここでも，⑤，⑥，⑧が大部分を占めるが，附加条第二種グループもかなり多い。

第６号住号址

ａ――（第**33**図１～29，第**34**図１～22，第**40**図１，２）Ⅰ文様帯は，第33図１～８，21で櫛描波状文が配される。現時点で縦区画はない。第33図９，第40図１では，Ⅰ文様帯に縦区画が配される。Ⅱａ文様帯は，櫛描波状を配する。第34図３，４，７，８，10，11～14，16，19は，縦区画が配される。隆起線は，つぶれた状態を示す。第33図19は，隆起線上に縄文原体末端による刺突が行なわれる。

ｂ――（第**35**図１～10）１～４までは，壺形土器と思われる。１，２は，附加条第２種である。４は，複合口縁。端部に縄文原体による刺突が比較的多い。

ｃ――判断できる資料は，122片である。③が14.75％，④が0.82％，⑤が19.67％，⑥が50％，⑧が9.84％，⑨が1.64％，⑬が1.64％，⑮が1.64％である。③の増加は，覆土から出土した第２群土器の影響であろう。⑤，⑥，⑧が大部分を占める。

高杯――基部径が小さいもの。第４号住居址例と変化がない。

以上，各住居址出土の土器を検討してきたが，南側グループ内での変化は，認められない。北側グループにおいても変化は，ほとんどない。ただ第６号住居址でⅠ文様帯に縦区画が入るものが２点ほど出土している。さらに，南側グループと北側グループを比較しても，大きな差は，認められない。従って，本遺跡の住居址は，同一型式内に存在したものと推定される。

土器群の編年的位置

第Ⅰ類――縄文＋沈線文を持つものである。少数しか出土していない。本類は，徳宿遺跡出土土器に比定される。[注14]

第Ⅱ類――沈線文系の土器群である。本類は，「足洗式」に比定される。[注15]一本描き沈線によるものと半截竹管によるものの２種類ある。第６号住居址覆土から出土した土器群は，良好な資料である。

第Ⅲ類――本遺跡の主体となる土器群である。櫛描文を持つグループは，Ⅰ文様帯に櫛描文を配する。すべて波状文である（縦区画が入るものは２例だけである）。Ⅱ文様帯は，Ⅱ文様帯とⅡａ文様帯に分帯し，これ以上の分帯は，行なわれない。Ⅱａ文様帯には，櫛描波状文＋縦区画が行なわれる。又，Ⅰ文様帯とⅡ文様帯には，つぶれたような状態の隆起線が配される。Ⅱ文様帯には，附加条第一種を使用した羽状縄文を配するものが大部分である。

これらの土器群の編年的位置であるが，鹿行地方における弥生式土器編年が確立していないのでくわしくは触れることはできないが，[注16]一応『十王台式併行』期としておきたい。ただし，本遺跡では，[注17]Ⅱ文様帯に十王台式に独特な附加条第二種による羽状縄文がほとんど見られない（この

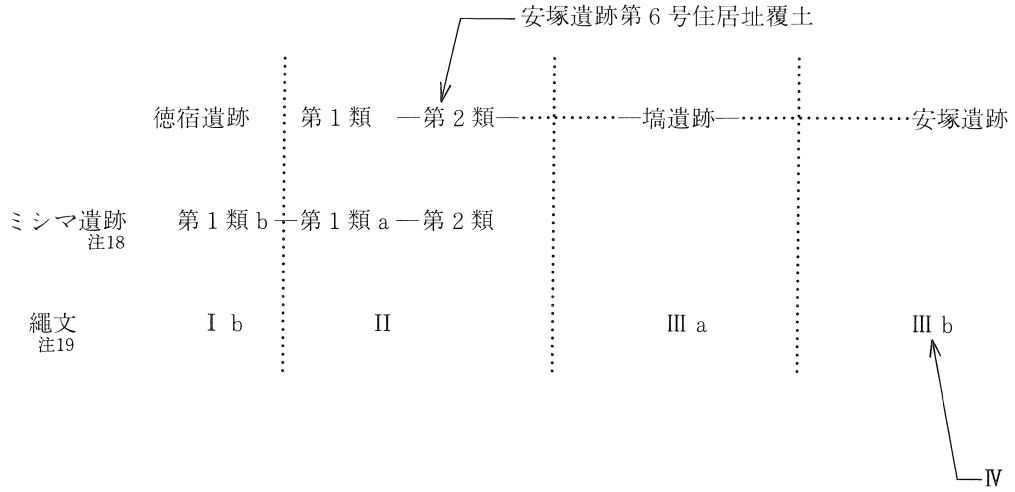
点が併行期とした理由であるのだが)。地域的特徴であろうか。

異系統土器について

本遺跡では，異系統と思われる土器が少数出土している。第II群に伴なうと推定されるのが，第52図１である。口唇部に縄文原体による押圧があり，縄文を地文として３本櫛による上向きの連孤文を配する。これは，北からの系統かと思われる。第６号住居址例（第40図５）は，底面に布目痕を持つ壺形の胴部と思われる。無文化している。同住居址例（第33図23）は，壺形土器の胴部上半で，網目状の撚糸文（又は，附加条第三種）が充塡される帯状の文様が配され，縦位の波状文によって連結される。この２点は，南関東よりの系統と思われる。又，頸部に「Ｓ」字状の結節回転文を持つものが若干入っている。これは，千葉方面よりの系統であろう。

徳宿，塙，安塚遺跡出土の弥生式土器について

筆者が整理を担当した上記３つの遺跡出土の弥生式土器について補足総括しておきたい。少なくとも筆者は，３つの遺跡がそれぞれの編年的位置を明瞭に示し得ると考えている。鹿行地方の編年が確立していないため，編年を考えるための目安として，理解し得た関係を示して，総括に変えたい。



古墳時代

古墳時代に属すると思われる遺構は，住居址１軒，古墳１基が調査された。この内，第１号墳についてだけ若干触れておきたい。

第１号墳

円墳である。この古墳は，主体部が中心になく南側周溝付近に存在する。茂木氏編年の第Ⅲ期[注20]に入り，杉山氏のＢ―□―Ｓ型[注21]である。しかし，主体部は当地方の例にもれず石の大部分が抜き

取られているため箱式石棺等の構造に触れることはできない。B—□—S型は，宮中野古墳群に類例がある。安房西古墳群中の第1号墳はB—□—O型であり異っている。安房西古墳群第1号墳で確認された周溝部への敷石も確認できなかった。又，安房西古墳群第1号墳で検出された周溝内土壙は，本古墳でも一基検出された。注目しておかねばならない施設である。編年的位置について明確な解答はできないが，安房西古墳群第1号墳と前後する時期と思われる。

注

1．小林達雄　「多摩ニュータウン遺跡調査報告II」　多摩ニュータウン遺跡調査会　1966
　安孫子昭二「多摩ニュータウン遺跡調査報告IV」　多摩ニュータウン遺跡調査会　1967
　小林達雄　「縄文土器の世界」　日本原始美術大系I—縄文土器—　1977
2．吉田　格　「関東の石器時代」　1973
　「茨城県史料」考古資料編—先土器・縄文時代　1979
　篠原　正　「金堀遺跡発掘調査概報」　富里村史編纂委員会　1977
3．山内清男　「子母口式土器」　日本先史土器図譜
4．佐藤次男　「水戸市柳崎貝塚貝層下出土の子母口式土器について」　茨城考古学第2号　1969
5．久保脇美郎「茨城県勝田市東中根における縄文早期の遺跡」　常総台地8　1976
6．条痕文を配するもの，及び無文のものが多いが，無文で繊維を有しないものについては，若干の見落しがあるかも知れない。
7．小野真一他「常陸伏見」　伏見遺跡調査会　1979　子母口式土器が出土している。全体的に見て細隆起線文を含む段階のようである。本遺跡例と共通する。
8．今橋浩一　「茨城県日立市鹿野場遺跡—北部関東太平洋岸地域における縄文式前期初頭の諸問題」　常総台地9　1978
9．北茨城市教育委員会　「糖塚—糖塚1号墳第1次調査報告」　1975
　高萩市教育委員会　「リュウガイ遺跡」　1976
　注8に同じ
10．馬目順一他「大畑貝塚」　いわき市教育委員会
11．山内清男　「縄文式土器・総論」　日本原始美術工　1964
12．注11に同じ
13．注11に同じ
14．「徳宿遺跡」参照

15. 伊東重敏　「茨城県足洗発見の幼児葬に使用されていた弥生式土器について」　考古学雑誌40―4　1955

井上義安　「常陸足洗遺跡発見の弥生式甕棺」　古代19・20　1956

「北茨城市足洗遺跡における甕棺調査概報」　古代32　1959

川崎純徳他「赤浜遺跡発掘調査報告」　茨城県高萩市教育委員会　1972

16. 田口　崇，森重彰文　「木滝台遺跡・桜山古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書」　鹿島町木滝台遺跡発掘調査会　1978　弥生から五領にかけて多量の資料が提出された。まだ分析しきれないのでここでは述べない。

17. 山内清男　「十王台式土器」　日本先史土器図譜Ⅰ（再版合冊版）　1967

鈴木正博　「『十王台式』理解のために(1)，(2)」　常総台地７，８　1976

井上義安・宮田　毅　「十王台式土器分類図譜」　1978

18　豊郷台遺跡調査会　「豊郷台遺跡群Ⅰ―ミシマ遺跡―」　1976

19. 注18. 及び本文「徳宿遺跡」参照，あらためて記せば以下のようである。

(I)　広義の「磨消縄文」を有する土器群における

(a)　単節縄文

(b)　単節に単節を巻きもどしながら条に沿って附加（第一種）

(II)　沈線文系土器群における単節に単節を巻きもどし条に沿って附加

(III)　櫛描文系土器群における

(a)　単節に単節を巻きもどしながら条に沿って附加，及び無節を１本，又は２本巻きつける附加条第一種が増加

(b)　無節を１本附加するもの，２本附加するものの爆発的増加と羽状縄文の発生，増加

(IV)　十王台式における附加条第二種における羽状縄文

である。これらの縄文原体の分類は，一つの要素である。他の多くの要素を加えて要素複合である土器を理解できるものと思われる。

20. 茂木雅博　「箱式石棺の編年に関する一試論」　上代文化第36輯　1966

21. 杉山晋作　「所謂『変則的古墳』の分類について」　茨城考古学第２号　1969

第7章　烟田遺跡

第1節　遺跡の位置と環境

東茨城台地南部は，巴川と北浦によって鉾田市街地で行方台地と鹿島台地に二分され南東へ伸び利根河口低地へ続く。

遺跡は巴川，七瀬川，烟田川が合流する北浦北部地帯に突出した鹿島台地（烟田）に占地する。

附近の同一台地上には，烟田A・B貝塚（縄文中期）をはじめ氷川古墳・烟田古墳群，寺内古墳等が存し中世の烟田城址（現新宮小学校敷地）井川城址，塙城址，小高根城址が存在するが，なかには湮滅に近い状況のものもある。

本遺跡は北浦北部低地帯に突出した台地に位置し，台地の西端部は既に土取りによって消滅している。表面採集等の調査の結果，縄文及び弥生，古墳，奈良平安各時代の土器片，土玉等が出土しているが摩滅が激しい。台地上一帯は主として蔬菜等の畑地で，茨城県遺跡地図に示されている烟田山王は現在墓域となっている。

標高は23～26mで現河川の平水位との比高は約22.6mを測る。（串挽平水位0.41m）

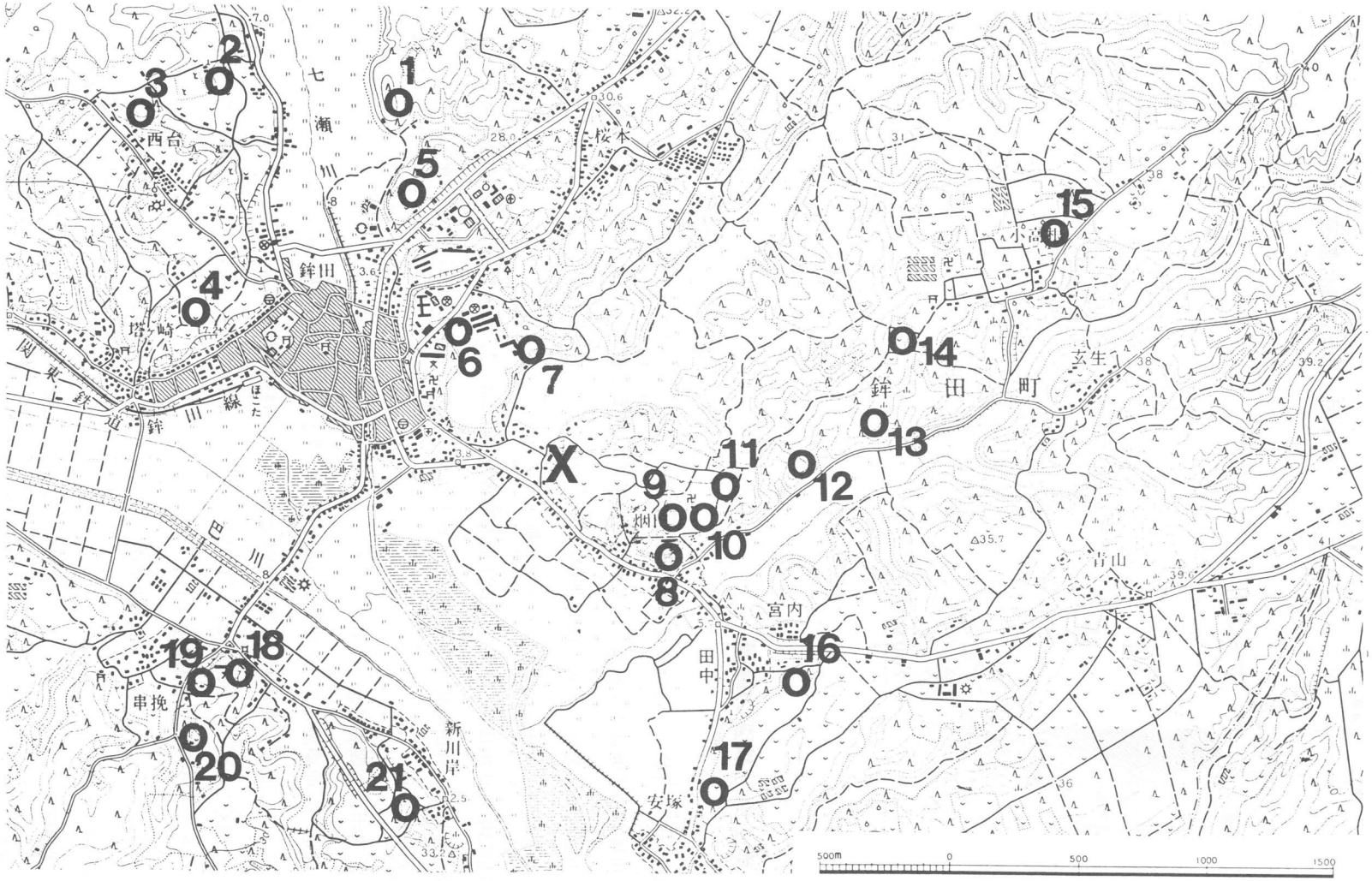
烟田（かまた）の烟は「けむり」の意があるが，地名由来は不明である。又，烟田地区内の小字名は約260ほどあるが，意味不明のものが多い。

〔例〕　えげ，枝窪，上秀，小秀，皿方，白水等

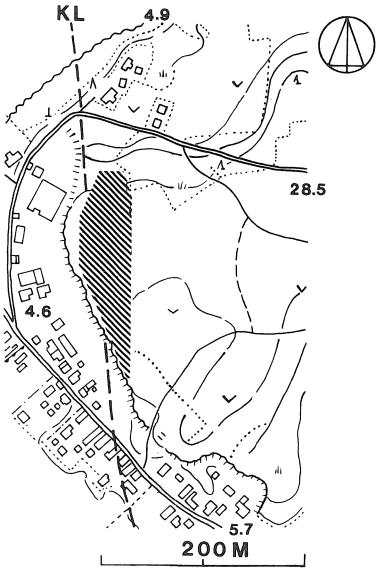
また，小高根城址にまつわる近世以降の史話もあるが多くは伝承の域を脱していない。

烟田遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	摘要	番号	遺跡名	摘要
1	三階城跡	城館跡	12	井川城跡	鎌倉・室町
2	西台遺跡	縄文	13	塙館跡	鎌倉・室町
3	西台古墳群		14	小高根城跡	
4	餓鬼塚古墳群	昭和52年度円墳1基 鉾田町教育委員会調査	15	小高根古墳群	
5	富士山古墳群		16	みのわ遺跡	縄文
6	山王古墳群		17	安塚遺跡	弥生・古墳前 昭和51年度調査 鹿島線遺跡調査会
7	鉾田貝塚	縄文	18	串挽館跡	鎌倉・室町
8	烟田城跡		19	串挽貝塚	縄文
9	永川古墳		20	郷土館跡	鎌倉・室町
10	寺前古墳		21	新川岸貝塚	縄文
11	烟田古墳群				



第3図 烟田遺跡位置図 (A)



第４図　烟田遺跡位置図（Ｂ）

第２節　調査の経過

昭和53年11月初旬，発掘調査開始に至るまでに次のような諸準備が行なわれた。

１．現場事務所兼倉庫を建設し，又西側突端部の安全柵を施し作業上の危険予防策をはかった。

２．方眼抗打作業終了と共に前期調査のための69グリットを設定した。

３．発掘器材・遺物収納用コンテナ等の搬入。

昭和53年11月20日鉾田町大字烟田字皿方遺跡現場において，日本鉄道建設公団東京支社，茨城県教育委員会，鉾田町教育委員会等の来賓を迎えて起工式を挙行，直に発掘調査を開始した。

昭和53年11月

１．11月中の実調査日数は７日であった。

２．設定した前期調査グリットの表土層の除去作業をＥ２区から開始した。

３．Ｅ２区は表土（耕作土）が25～30cmと浅く，作業は順調に進行した。

４．Ｅ２区で６グリット，Ｄ２区で10グリット，Ｃ２区で７グリット，Ｂ２区で17グリット，Ａ２区で７グリットの表土除去を行った。

５．Ｄ２ｇ８からは（後６号住号址の覆土），完形に近い土師式の坩形土器が出土した。

昭和53年12月

１．遺構確認のためのグリットを調査区の状況により増加しながら表土除去を行った。

２．強風により，作業員用幕舎，仮設便所が倒壊されるトラブルがあった。

3．表土除去と併行して，E2区D2区から確認された住居址遺構の発掘に入る。

4．降霜期に入ったため調査実日数は14日であった。

5．グリット表土除去は62グリット，住居址プランは7軒が確認された。

昭和54年1月

1．作業実日数は16日で，そのうち雨天のため室内作業（遺物洗浄・註記）に切りかえた日が2日あった。

2．鉾田地区の冬期特有の季節風が激しく，吹き上る砂塵のため作業は難行した。調査の進行と共に，本遺跡は2以上の住居址が複合していることが多いことが確認された。

3．遺跡を降霜から保護するため，ビニールシートや土のう等を用意して作業終了時には必ず遺構を被覆する等の配慮をした。

4．拡張したグリットは約40，住居址は更に4軒を確認，再びD2区E2区から遺構の精査に入った。

昭和54年2月

1．2月中の作業実日数は18日で，降雪あるいは雨天のため室内での遺物洗浄・註記を行ったのがそのうち2日ほどある。

2．1月に引き続き遺構の精査に入る。住居址遺構は更にB2区，C2区において14軒確認され，又C2区においては東から西へ延びるV字型の溝が確認された。

3．下旬においてB2区，C2区に住居址プランを更に3軒ほど確認する。従って住居址遺構は29軒となった。

4，相変らず西からの季節風が激しく，作業は難行する日が多い。

5．遺構の出現率が予想を上廻る数となり，今後の作業の進捗状況を考慮し，遺跡エリアの排土を敏速に行うため重機を導入した。実施したのはC2区のうち西側突端部及びC1区であるが，遺構検出に影響の無いよう配慮したのは勿論である。

昭和54年3月

1．調査はいよいよ最終月を迎えた。3月中の作業日数は22日で，そのうち雨天のため室内作業に切りかえた日が1日ある。

2．3月中旬までに遺跡内の全住居址のプラン確認が終了した。

3．作業員も作業に熟練したため遺構の精査は相当はかどった。図面の作成，写真撮影等も予定どおり進行した。

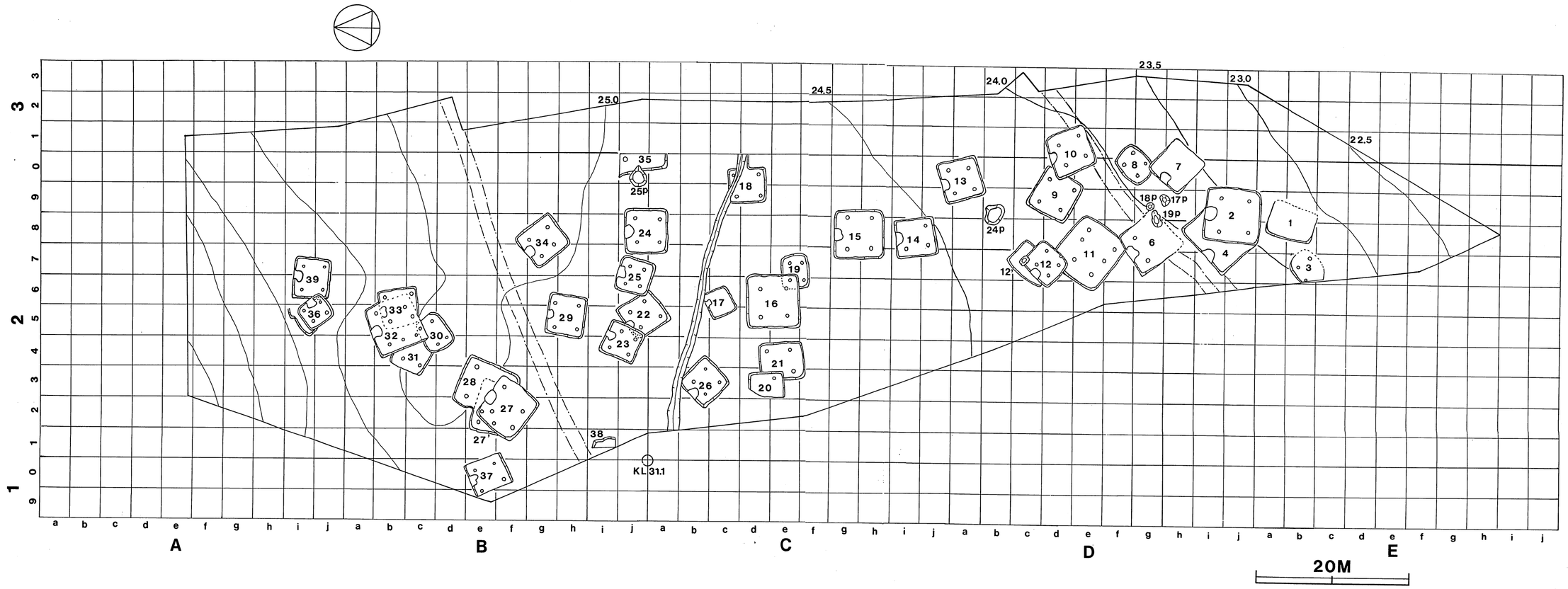
4．3月中旬には，住居址遺構の検出も数軒残すのみとなったので下旬に入ると共にカマド・貯蔵穴の精査に入った。

5．3月30日大雨となり，夜に入ってから暴風雨となった。そのためローリングタワーは倒壊し，

調査の最終日３月31日はタワーからの撮影は不能となった。

６．終了した住居址遺構は40軒，土壙25，溝１，遺物は遺物収納箱に80余箱を数えた。

11月20日よりの作業実日数は77日，作業員は平均１日20人前後で，その延人数は約1,480人である。

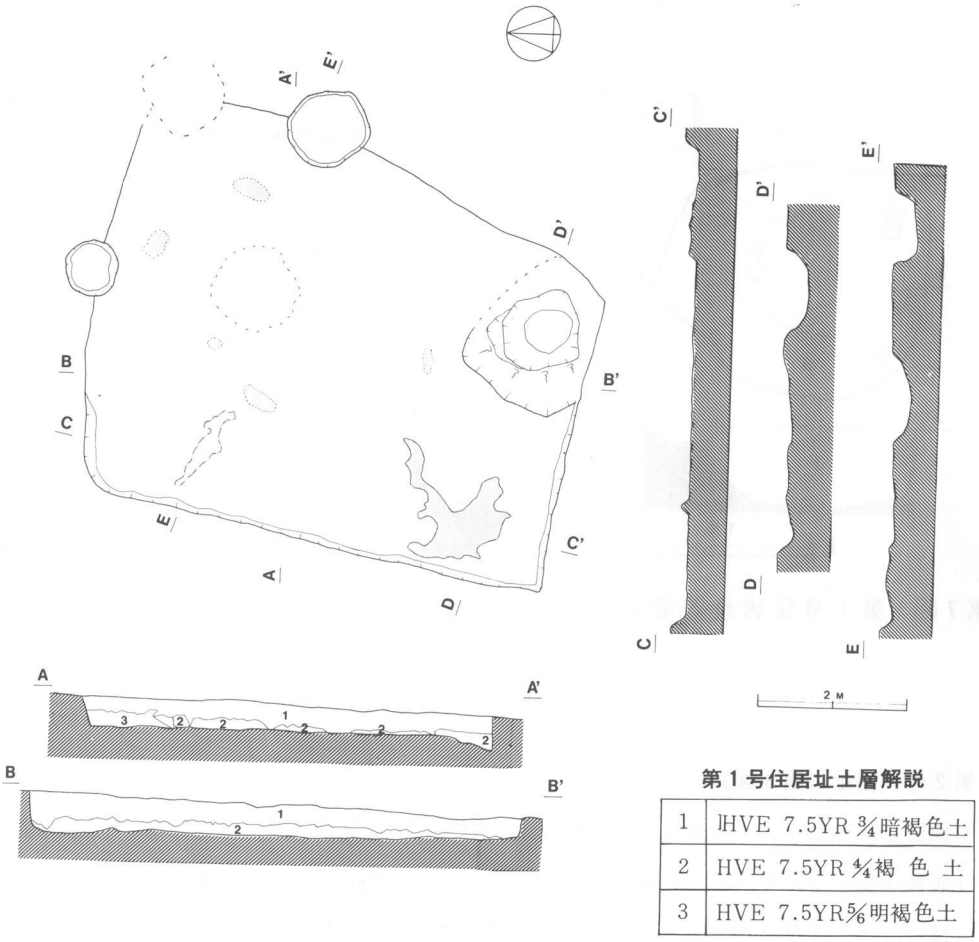


第 5 図　畑 田 遺 跡 全 体 図

第3節　遺構・遺物

1　遺　構

1．住居址



第1号住居址土層解説

1	HVE 7.5YR 3/4暗褐色土
2	HVE 7.5YR 4/4褐 色 土
3	HVE 7.5YR5/6明褐色土

第6図　第1号住居址実測図

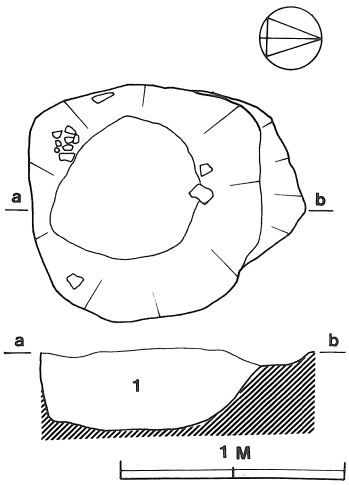
第1号住居址（第6図）

本住居址は，発掘区の南端Ｅ２ａ８・Ｅ２ａ９・Ｅ２ｂ９・Ｅ２ｂ８に確認され，北側１ｍほ

どの所に第２号住居址がある。西側の壁は約20cmほどの深さでやゝ外反して立ち上るが，北壁と東壁は床が消滅していて不明瞭である。主軸方向はＮ―14°―Ｅで6.6ｍ×5.5ｍの長方形の床面のみが確認された。

床はにぶい褐色を呈し，しまりが悪く，西側から東側にかけてやゝ傾斜している。

南東コーナー部に貯蔵穴がみられ，土器片がその周囲にみられた。西北コーナーにはやゝ厚い焼土の堆積が認められ，土器片が集中的にみられた。焼土，炭化物は床面の西側に多く見られた。火災のあとと思われる。床面中央部及び北側・東側に土壙がいくつかみられたが攪乱によるものと思われる。本住居址の西側には第３号住居址がある。



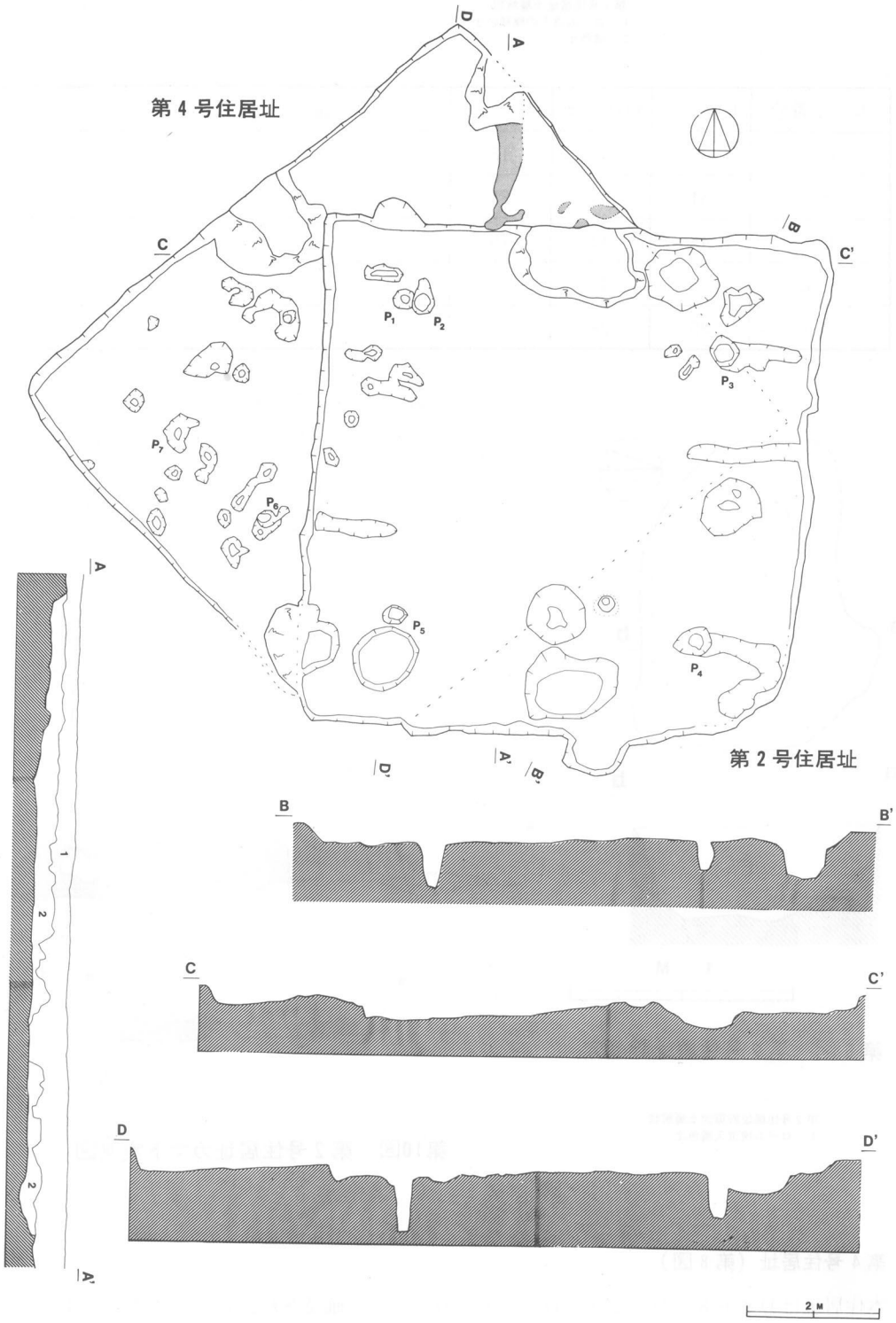
第１号住居址貯蔵穴土層解説
1　褐色土

第７図　第１号住居址貯蔵穴

第２号住居址（第８図）

本住居址はＤ２ｉ８・Ｄ２ｉ９・Ｄ２ｊ９・Ｄ２ｊ８に確認され，Ｄ２ｉ８・Ｄ２ｊ８で第４号住居址を切りこんでいる。主軸方向はＮ―３°―Ｅで7.6ｍ×7.3ｍの方形を呈する。西壁及び北壁はほぼ20cm，北壁は23cmありほぼ垂直に立ち上る。床面のしまりは良い。ピットは５個ほど検出されＰ２～Ｐ５が主柱穴と考えられる。

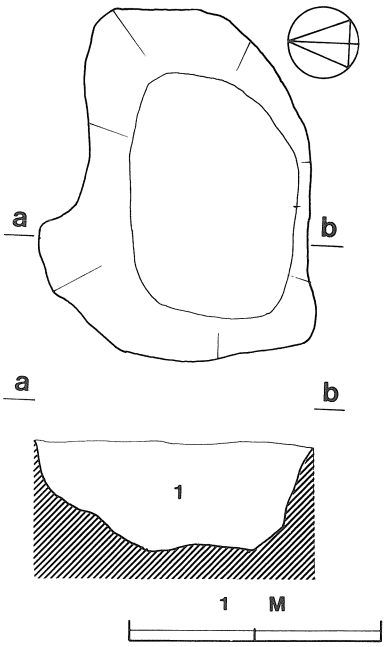
南壁中央及び北東コーナーのカマドよりに貯蔵穴がみられる。東壁及び西壁中央部あたりに，約1.5ｍほどの長さで，深さ17cmほどの溝状遺構が交互に向きあっているのは間仕切りとも見られる。住居址内には約20cmほどの深さをもつ土壙がいくつかあるが，本住居址に伴うものではないであろう。カマドは火袋を２個もち，練瓦色に焼けた焦土や土器の破片がみられた。



第8図　第2号住居址 第4号住居址 実測図

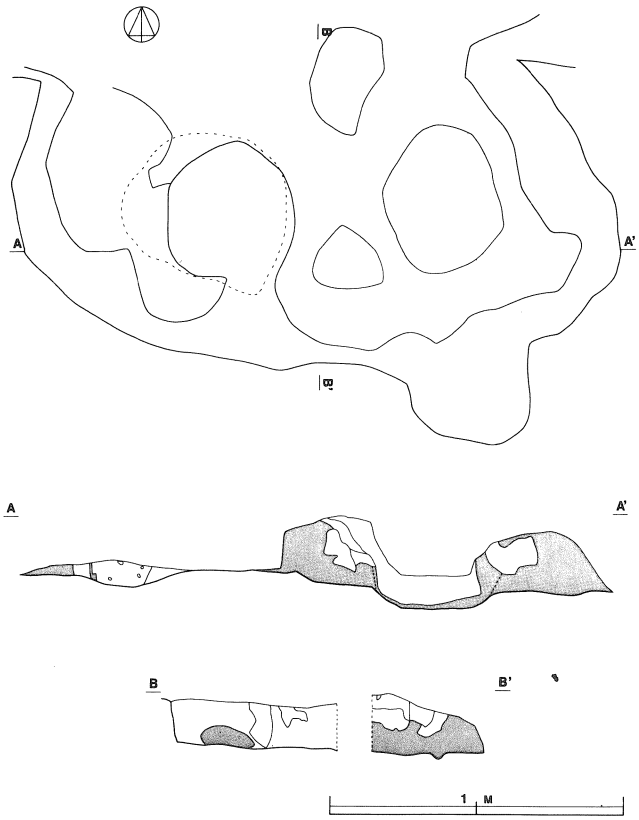
第２号住居址土層解説
1　ローム混入の暗褐色土
2　褐色土

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	36	35	15	
Ｐ２	54	33	84	主　柱　穴
Ｐ３	48	42	75	〃
Ｐ４	55	39	75	〃
Ｐ５	35	28	68	〃



第９図　第２号住居址貯蔵穴

第２号住居址貯蔵穴土層解説
1　ローム塊混入褐色土



第10図　第２号住居址カマド実測図

第４号住居址（第８図）

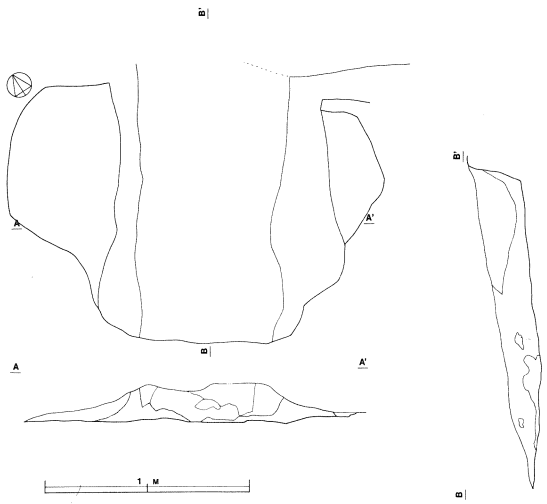
本住居址はＤ２ｈ８・Ｄ２ｉ９・Ｄ２ｉ８・Ｄ２ｉ７に確認され，Ｄ２ｊ８で第２号住居址に切られている。主軸方向はＮ―43°―Ｅで，プランは方形をなし8.8ｍ×7.7ｍの大型住居址であると推定される。

北壁は31cm，西壁は23cmほどでほぼ垂直に立ち上っているが，東壁は９cmほどで浅くなっている。東北コーナーに帯状の焼土層，炭化物塊がみられ，火災のあとと思われる。

床面の西側には，攪乱による深さ10～20cmほどの多くのピットがみられ，柱穴は不鮮明であるが，Ｐ７が主柱穴の一つであると思われる。北壁の中央部にカマドを有する。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ６	32	26	40	
Ｐ７	58	39	11	主　柱　穴

（第５号住居址は欠番である。）

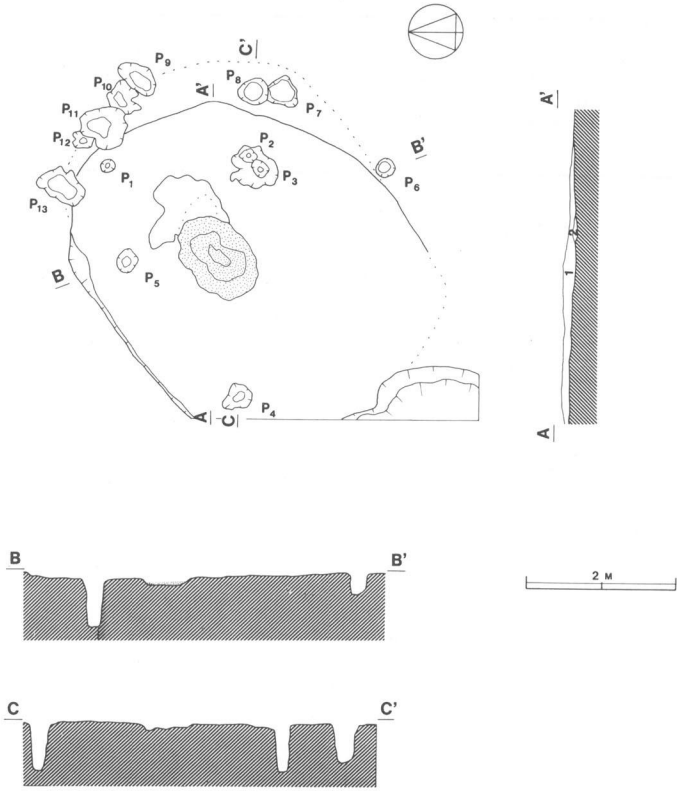


第11図　第４号住居址カマド実測図

第３号住居址（第12図）

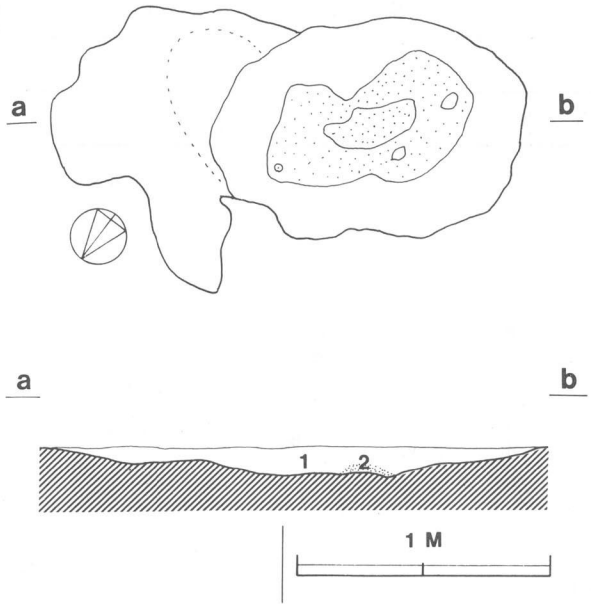
本住居址はＥ２ｂ７・Ｅ２ｂ８・Ｅ２ｃ７に確認され，主軸方向はＮ－３°－Ｅで，4.8ｍ×4.2ｍほどの楕円形のプランを有する。長軸の西側はすぐに崖部となり，安全柵を施してあるので床面の西側は確認できなかった。覆土はローム粒子を混入した褐色土で20cmほどしかない。西壁は８cmほどの外反した立ち上りが見られるが，東壁・北壁は消滅していて不鮮明である。中央部の炉址は1.3ｍ×0.9ｍの不整形楕円で，練瓦色に焼けた焦土が良く残存している。床面の保存はわるい。ピットは，床面の残存された所に５個，東壁が消滅している所に８個ほど検出された。Ｐ２～Ｐ５は60～70cmと深いので主柱穴と考える。炉址の北側に弥生式の壺形土器の破片群がみら

れた。なお，Ｅ２ｃ７の南西コーナー部分を切りこんでいる土壙がみられたが，本住居址とは関係ないものである。



第12図　第３号住居址実測図

ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備　　考	ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備　　考
Ｐ１	17	15	3		Ｐ８	40	36	48	
Ｐ２	24	21	65	主柱穴	Ｐ９	59	34	8	
Ｐ３	23	21	70	〃	Ｐ10	51	38	10	
Ｐ４	42	35	68	〃	Ｐ11	62	48	11	
Ｐ５	30	29	66	〃	Ｐ12	35	28	7	
Ｐ６	25	23	30		Ｐ13	65	35	10	
Ｐ７	44	33	43						



第 3 号住居址貯蔵穴土層解説
1　暗褐色土
2　焼土

第13図　第 3 号住居址炉址

第 6 号住居址（第14図）

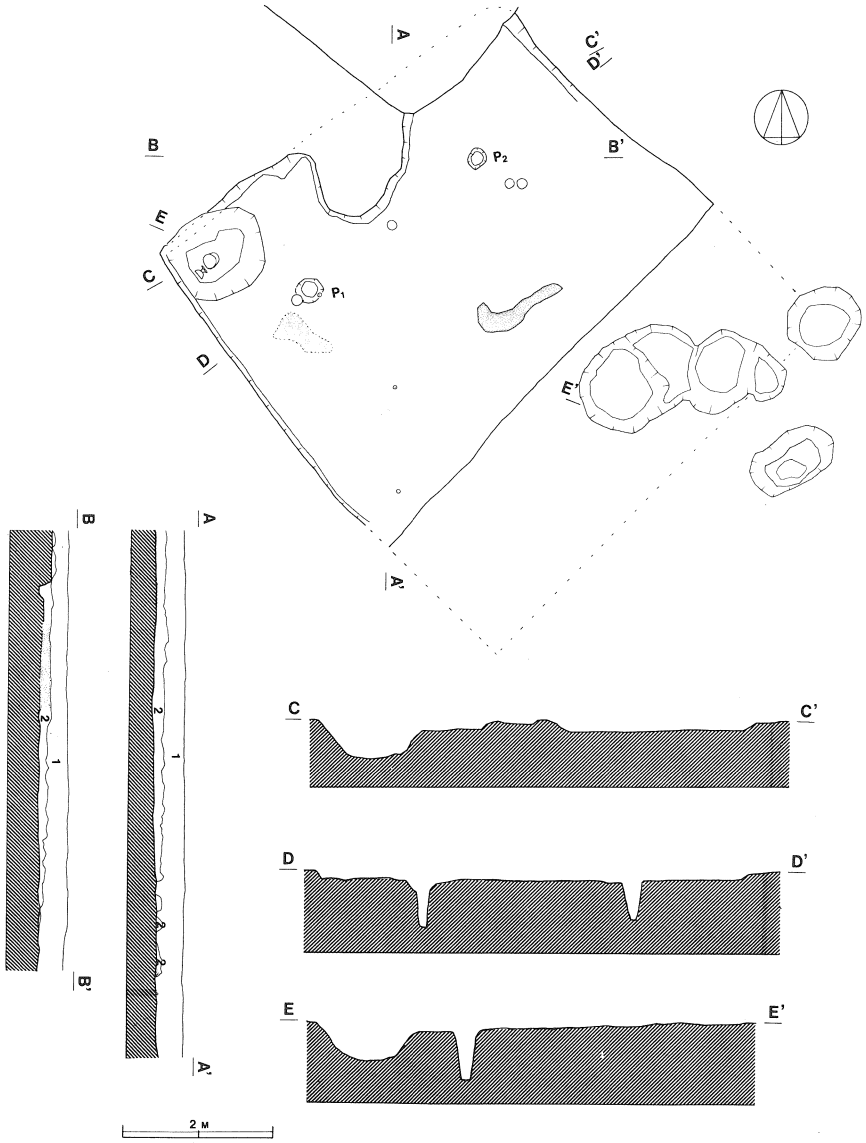
本住居址は，Ｄ２ｆ８・Ｄ２ｇ８・Ｄ２ｇ７・Ｄ２ｈ８に確認され，第４号住号址の北側約１ｍほどに位置する。本住居址は北側に切り合いをもつ第11号住居址があり，第12号住居址，第12′号住居址と切り合いつつ接続する。

本住居址の南壁部には土壙群（第17号土壙，第18号土壙，第19号土壙）が見られ，住居址の床面の広がりやピットが不鮮明である。ピットは２個ほど検出され，Ｐ１Ｐ２は共に主柱穴であろう。主軸方向はＮ―38°―Ｗ，長軸6.6ｍ，短軸は推定で5.8ｍほどの方形の住居址で，残存された床面の保存は良い。覆土は浅くローム粒子の混じった暗褐色土である。

北壁と西壁は12～14cmほどの深さでほぼ垂直に立ち上る。本住居址は北東コーナーで第11号住居址を切っている。北壁にカマドを有する。カマドは1.3×1.1ｍの丸みのある平面形をもち，内部には良く焼けた焼土塊がみられた。北西コーナー部には1.2×1.0ｍの不整形の貯蔵穴がみられ，深さは50cmほどである。貯蔵穴の覆土からは完形の甑，高杯等が検出され，甑の内部には高杯が挿入されていた。これ等の土器はセットの一部であろうか。

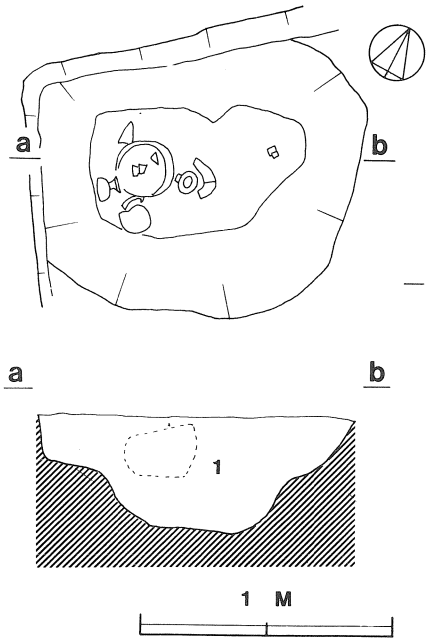
本住居址は，表土が旧農免道路であったためか遺物の保存が良く，床中央部の覆土から坩形土器，貯蔵穴周囲の覆土から壺形土器（底部欠損）のほか床面中央部から完形または完形に近い杯が６個ほど検出されている。又，床面や覆土から土玉，土器片錘が検出され本住居址の生活面の一端がうかがわれた。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
P 1	37	31	78	主　柱　穴
P 2	29	24	65	〃

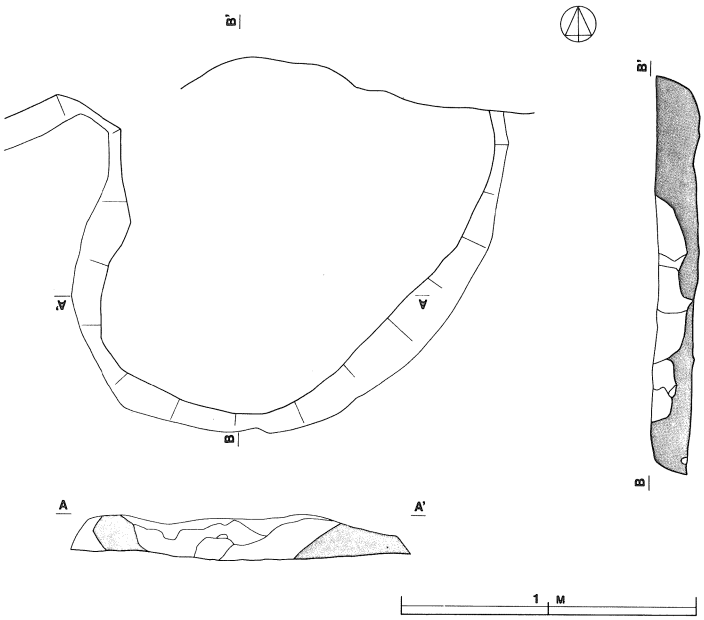


第14図　第 6 号住居址実測図

第６号住居址土層解説
1　ローム粒子混入の暗褐色土
2　褐色土



第15図　第６号住居址貯蔵穴

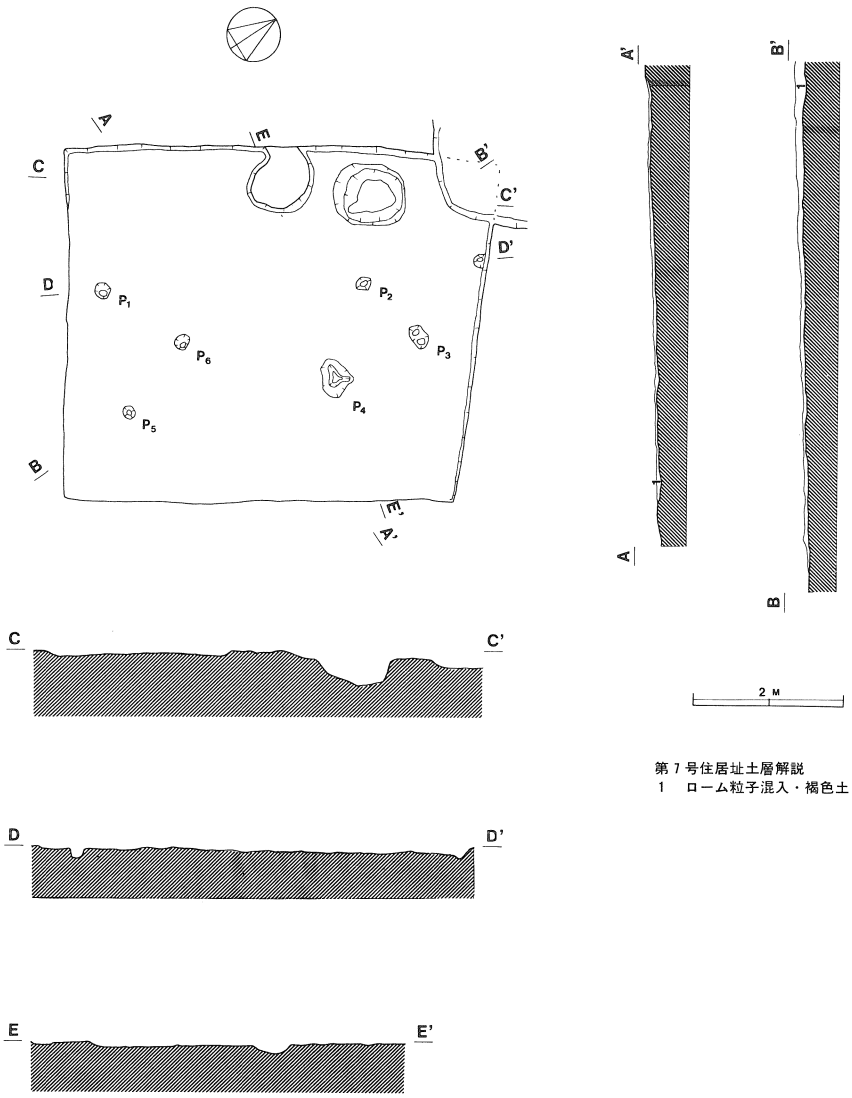


第16図　第６号住居址カマド実測図

第７号住居址（第17図）

本住居址はＤ２ｇ０・Ｄ３ｈ１・Ｄ２ｈ０・Ｄ２ｉ０に確認され，第２号住居址の東北４ｍほどの所に位置する。主軸方向はＮ―33°―Ｗで5.5ｍ×4.8ｍほどのプランを有する方形の住居址で，北側に位置する第８号住居址の一端を切っている。覆土はローム粒子が混入している褐色土である。

北壁は13㎝，西壁は18㎝ほどの深さでほぼ垂直に立ち上っているが，東側と南側は壁が不鮮明で立ち上りが見られない。しかし，そのわりには床面の保存は良く，わずかに西から東へ傾斜している。北東コーナー部は，第８号住居址の一部を埋めて第７号住居址を掘りこんでいる。



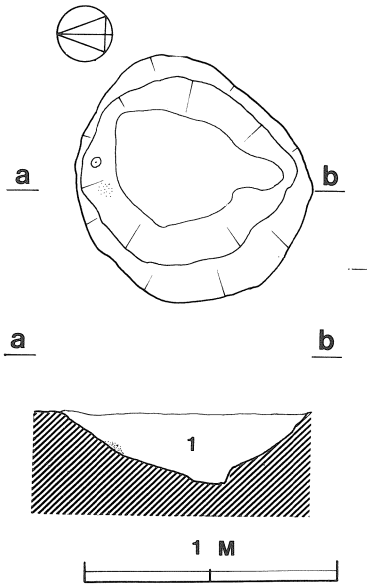
第７号住居址土層解説
1　ローム粒子混入・褐色土

第17図　第７号住居址実測図

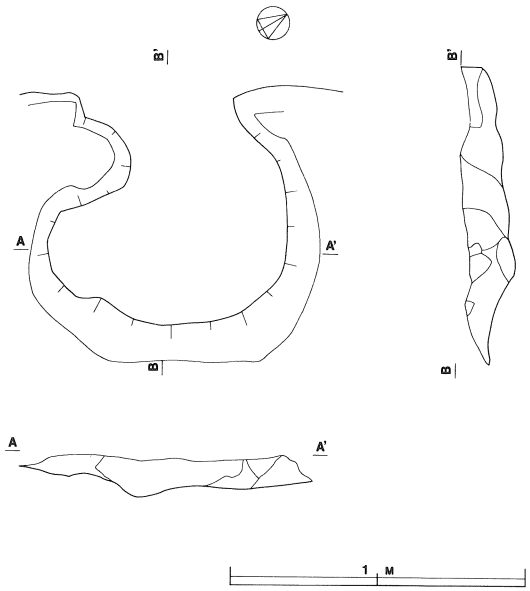
ピットは10～18cmほどのものが6個検出されたが主柱穴は確認できなかった。

西側の壁中央部にカマドを有し，その北側に貯蔵穴をもつ。遺物はいづれも土器の破片で覆土から，又床面には散布された状態で検出された。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
P 1	23	19	18	
P 2	18	14	11	
P 3	25	14	10	
P 4	54	36	14	
P 5	14	12	17	
P 6	19	16	10	



第18図　第7号住居址貯蔵穴



第19図　第7号住居址カマド実測図

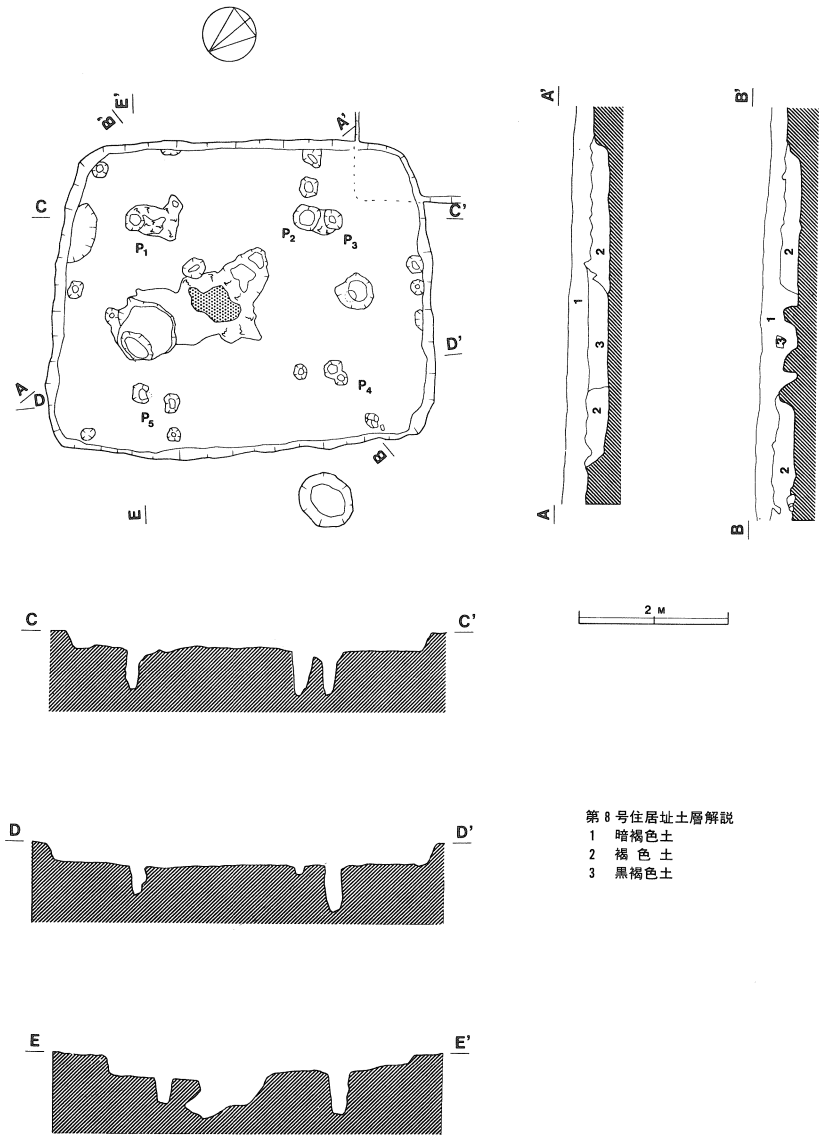
第7号住居址貯蔵穴土層解説
1　ローム塊混入暗褐色土

第８号住居址（第20図）

本住居址はＤ２ｆ０・Ｄ３ｈ１・Ｄ２ｇ０・Ｄ３ｇ１に確認され，第７号住居址の北側に位置する。主軸方向はＮ―40°―Ｅで，5.1ｍ×4.2ｍの隅丸方形を呈するプランで南端コーナー部が第７号住居址によって切られている。覆土は暗褐色土で第２層に褐色土がみられ，第３層は黒褐色土である。

ピットは５個以上検出されているが，主柱穴とみられるのはＰ１～Ｐ５であろうか。Ｐ２とＰ３は同じ62cmの深さをもち，Ｐ２の方がやゝ口径が大きい。Ｐ４も同じ深さである。

壁高は，東壁で15cm西壁で30cm南壁で28cm北壁で29cmほどで，ほぼ垂直に立ち上る。

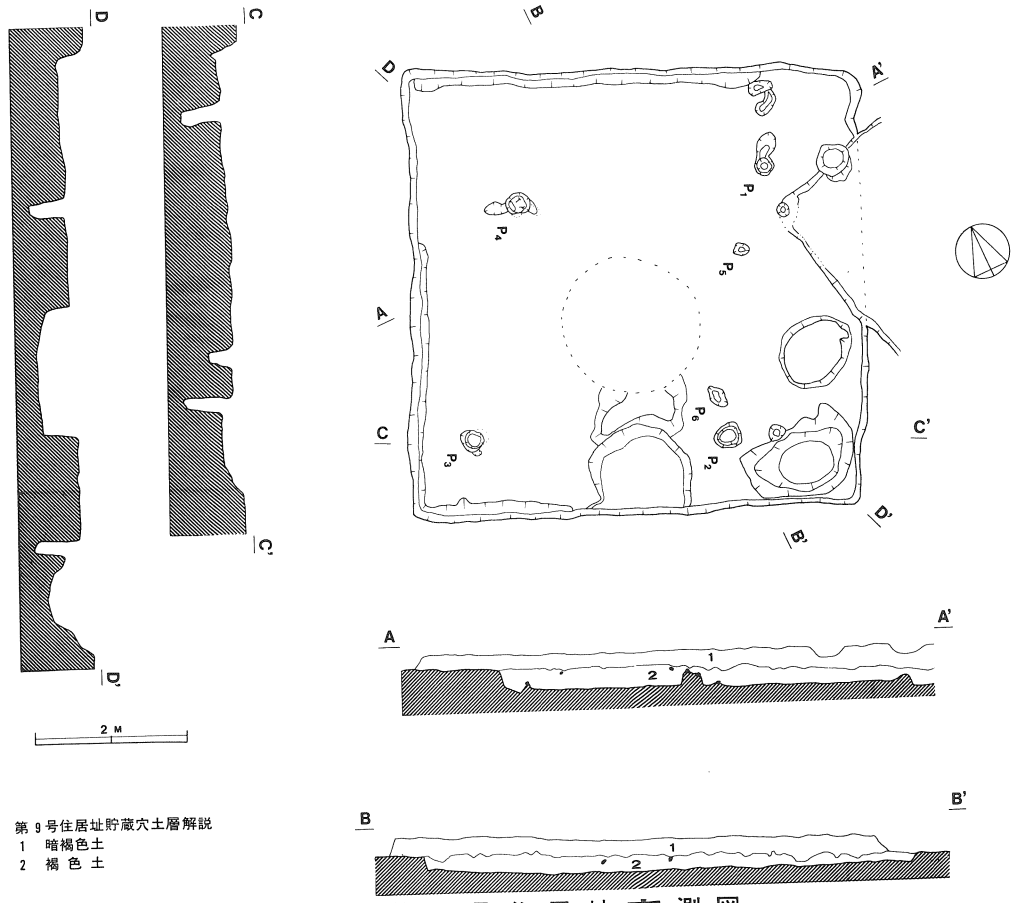


第20図　第８号住居址実測図

周溝はみられないが，いくつかのピットが床面の周囲に検出されている。そのうち南壁のＰ６も柱穴と考えられる。床面のしまりは良く，中央部に炉址が検出された。炉址内の炭化物は良好に保存されていた。西端コーナー部の床面からは，弥生式の壺形土器が倒れた状態で検出された。胴部は羽状縄文，底部には木葉痕をもつ壺形土器の半個体分の破片である。そのほか壺形土器の底部破片で木葉痕のあるものが，床面から２個ほど，覆土中からは４個ほど検出されている。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	27	26	58	主　柱　穴
Ｐ２	36	35	62	〃
Ｐ３	30	25	62	〃
Ｐ４	25	24	62	〃
Ｐ５	25	24	35	〃
Ｐ６	19	18	49	

第９号住居址（第21図）



第９号住居址貯蔵穴土層解説
1　暗褐色土
2　褐色土

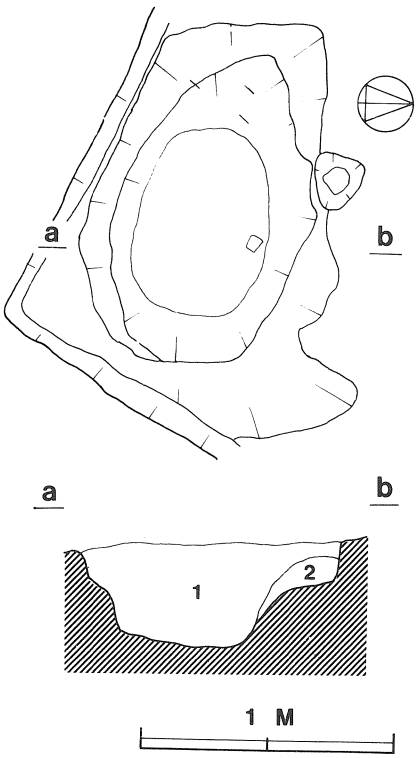
第21図　第９号住居址実測図

本住居址はＤ２ｃ９・Ｄ２ｃ０・Ｄ２ｄ９・Ｄ２ｄ０に確認され，東壁の一部が第10号住居址に切られている。覆土は暗褐色土で第２層は褐色土を呈している。主軸方向はＮ―37°―Ｗで，6.0ｍ×5.9ｍほどの方形のプランを有し，床面はしまっていて保存は良い。中央部に円形の土壙が検出され，覆土中に土器の小破片があったが，本住居址とは関係ないものと思われる。

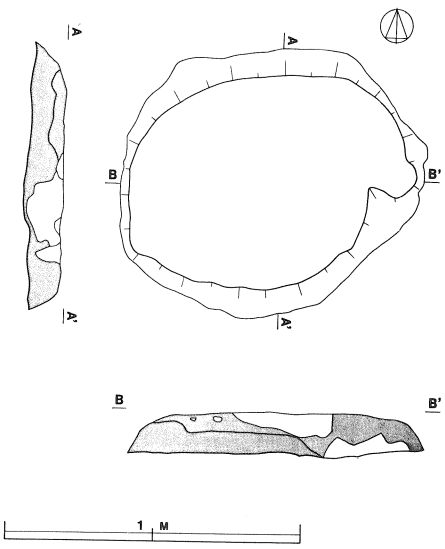
壁高は西壁が32cm，南壁が32cm北壁が30cmほどで，東壁は18cmと低くほぼ垂直に立ち上る。北壁，西壁には周溝があるが鮮明ではない。

ピットは７個ほど検出され，Ｐ１～Ｐ４が主柱穴と考えられる。床面の南側中央部はやゝくぼみを有し硬い部分がみられる。東壁に径１ｍほどの円形の焼土ブロックが見られ，Ｐ３の辺に炭化物がみられるので火災にあったものと思われる。

貯蔵穴を南東コーナーに有する。カマドは持たない。中央の土壙により炉址と思われる部分が攪乱されている。



第22図　第９号住居址貯蔵穴

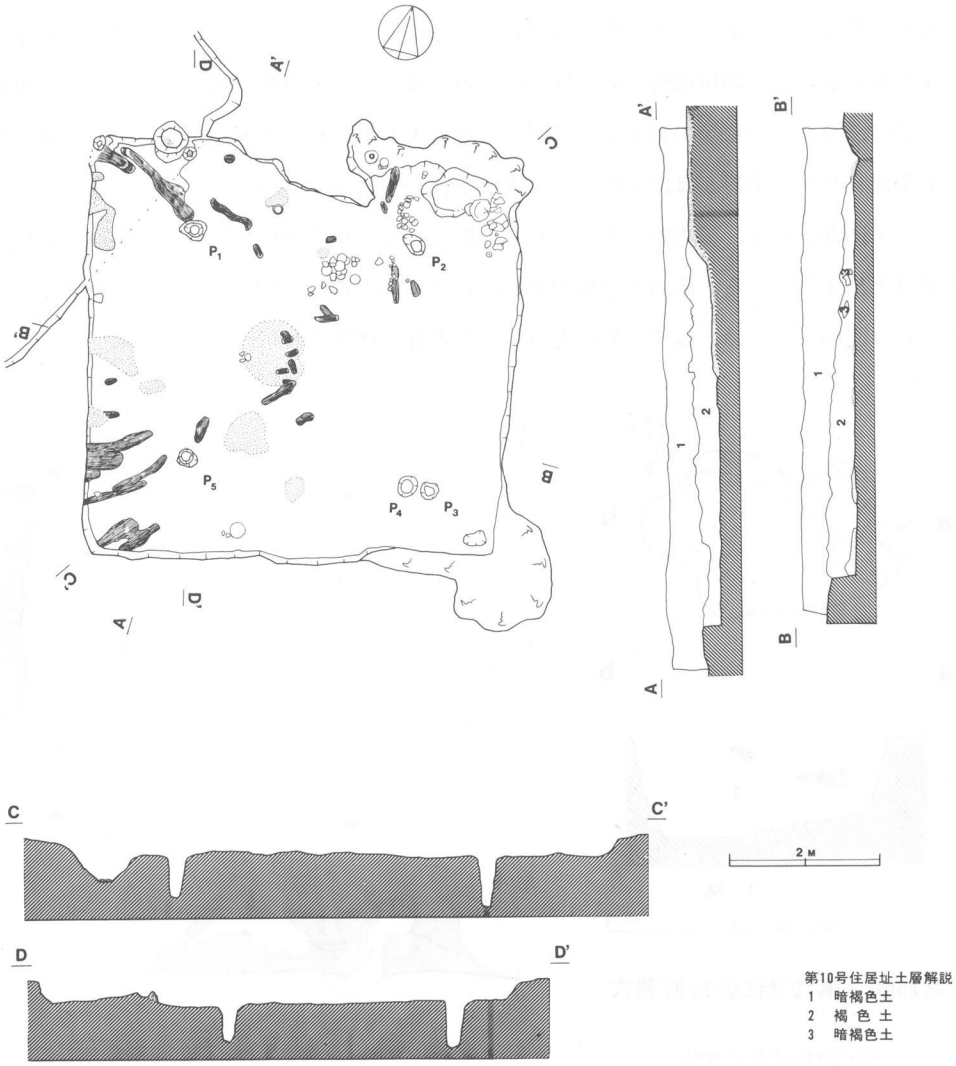


第23図　第９号住居址焼土ブロック実測図

第９号住居址貯蔵穴土層解説
1　暗褐色土
2　褐色土

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
P 1	24	20	65	主　柱　穴
P 2	22	19	63	〃
P 3	26	23	50	〃
P 4	32	28	50	〃
P 5	21	19	24	
P 6	33	21	10	
P 7	41	30	34	

第10号住居址（第24図）



第24図　第 10 号 住 居 址 実 測 図

本住居址はＤ３ｄ１・Ｄ３ｅ１・Ｄ２ｅ０・Ｄ２ｄ０に確認され，覆土は暗褐色を呈している。

主軸方向はＮ―15°―Ｗで5.6ｍ×5.6ｍの正方形のプランを有し，東壁は22cm，西壁は43cmと高く南壁北壁は22cmほどでほぼ垂直に立ち上る。北東コーナー部の壁は攪乱をうけて不鮮明である。

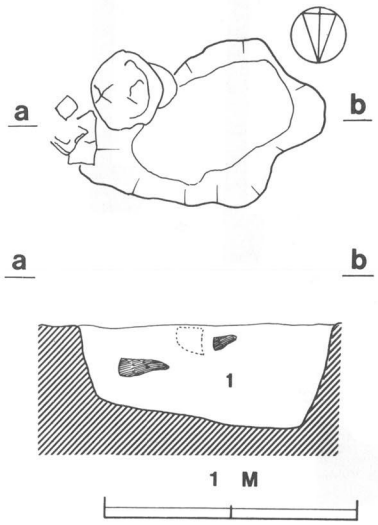
東南部コーナーに攪乱をうけた土壙がみられるが本住居址とは関係のないものと思われる。本住居址の北西コーナー部は第９号住居址を切っている。床面上には炭化物・焼土が充満し，主柱穴とみられるＰ１Ｐ２Ｐ４Ｐ５の内部は殆んど火を受けているので，火災にあったものと思われる。

本住居址も農免道路の下にあり，火災により廃絶した後のある時期以後の保存が良好であったと考える。

北壁の中央部にカマドを有する。カマドは火袋を２個有しており，練瓦色に焼けた粘土層がみられる。貯蔵穴は北東コーナー部に設けられ，床が攪乱をうけているので形状は不明確である。

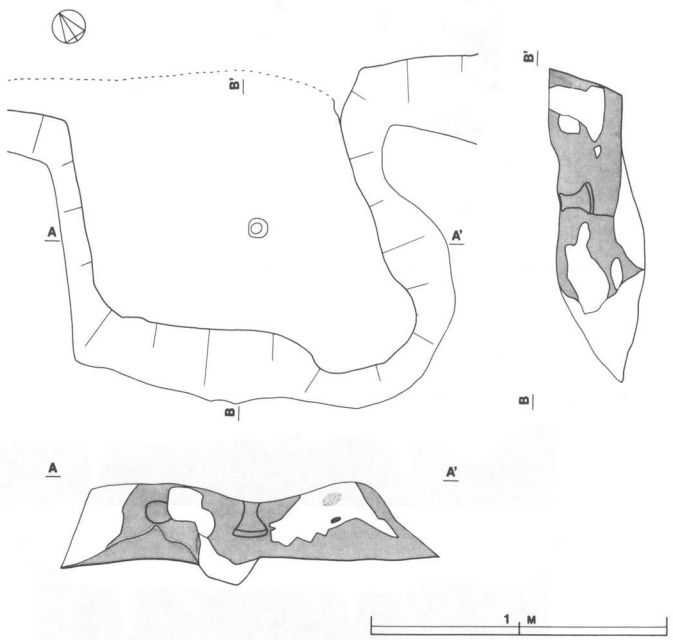
本住居址からは，烟田遺跡住居址群の中で最も多く完形の遺物が検出されている。概ね土師式のもので，カマドの東側の袖部からは円窓付壺形土器及び杯形土器が出土した。貯蔵穴の東辺では大型高杯や杯形土器がほぼ完形で，又甕形土器一個体分の土器片ほかが出土している。

カマド内部からは，二次的に用いられたと思える小破損の高杯や，ほぼ完形に近い杯形土器が４個ほど出土している。床面の南端中央部からは鉢形土器が完形で出土し，中央部カマドよりの所からは完形もしくは，ほぼ完形に近い杯形土器群が検出されている。



第25図　第10号住居址貯蔵穴

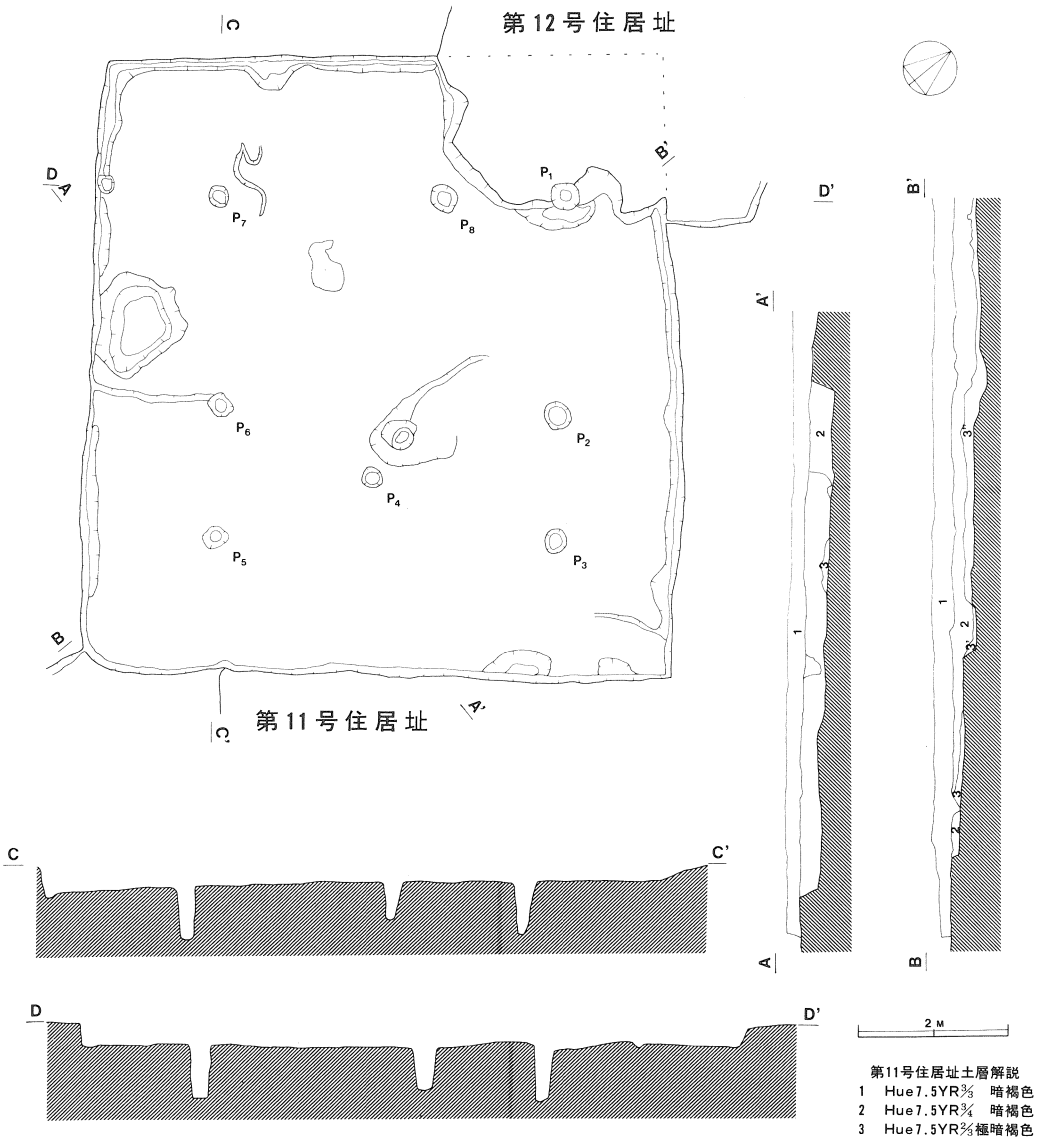
第10号住居址貯蔵穴土層解説
1　褐色土



第26図　第10号住居址カマド実測図

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
P 1	34	26	47	主　柱　穴
P 2	35	23	58	〃
P 3	25	22	32	
P 4	28	27	72	主　柱　穴
P 5	27	23	55	〃

第11号住居址（第27図）



第11号住居址土層解説
1　Hue7.5YR3/3　暗褐色
2　Hue7.5YR3/4　暗褐色
3　Hue7.5YR2/3極暗褐色
3'　Hue7.5YR5/6　明褐色
3''　Hue7.5YR5/3　褐　色

第27図　第 11 号 住 居 址 実 測 図

本住居址は，Ｄ２ｄ７・Ｄ２ｄ８・Ｄ２ｅ８・Ｄ２ｅ７・Ｄ２ｆ８・Ｄ２ｆ７に確認され，南西コーナー部を第６号住居址に切られ，北西コーナーを第12号住居址に切られている。

主軸方向はＮ―47°―Ｗで，8.2m×7.9mほどの大型の住居址である。覆土は暗褐色を呈し，第３層は極暗褐色土となる。

床面のしまりは良い。東壁40cm，西壁は45cmと深く，南壁は28cm，北壁は36cmほどである。西壁・北壁・南壁には周溝がみられるが，西壁のほかは明瞭でない。床面の中央部に炉床がみられるが鮮明ではない。主柱穴と思われるものはＰ１～Ｐ８で８個である。

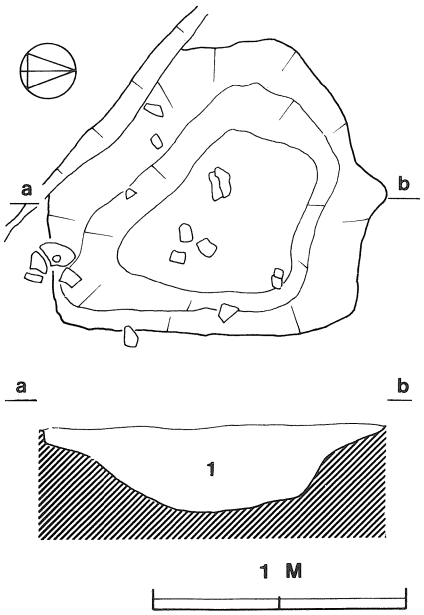
貯蔵穴は西壁中央部にあり，カマドは有しない。遺物は覆土中から欠損して出土しているが，杯形土器４個体分，高杯形土器の脚部片等である。

西壁からと東壁から溝状の浅い掘り込みが，床中央に突出したようにみられる。

覆土中からの遺物としては，壺形土器の底部片等で，底縁部に羽状縄文，底部に木葉痕のあるものが４個ほど検出されている。

本住居址は和泉期のものと思われる。

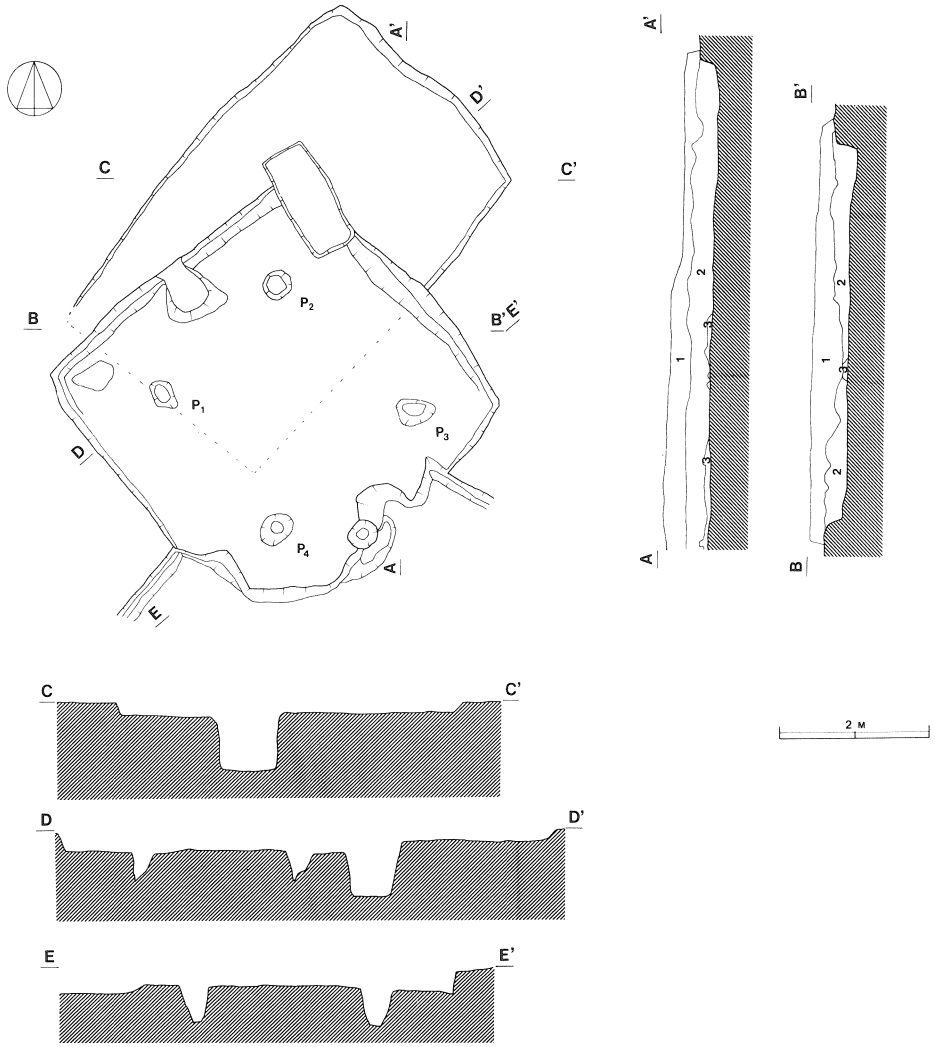
ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備　　考	ピット番号	長径 cm	短径 cm	深さ cm	備　　考
Ｐ１	40	38	75	主柱穴	Ｐ５	37	28	72	主柱穴
Ｐ２	37	34	33	〃	Ｐ６	35	28	48	〃
Ｐ３	33	30	65	〃	Ｐ７	29	26	71	〃
Ｐ４	30	23	53	〃	Ｐ８	40	35	57	〃



第28図　第11号住居址貯蔵穴

第11号住居址貯蔵穴土層解説
1　褐色土

第12号住居址（第29図）



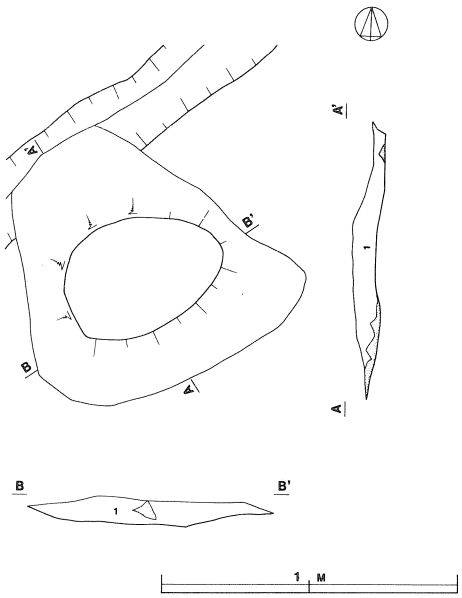
第29図　第12号住居址 実測図
第12号住居址

第12号住居址土層解説
1　Hue7.5YR3/3　暗褐色
2　Hue7.5YR3/4　暗褐色
3　Hue7.5YR4/3　褐　色

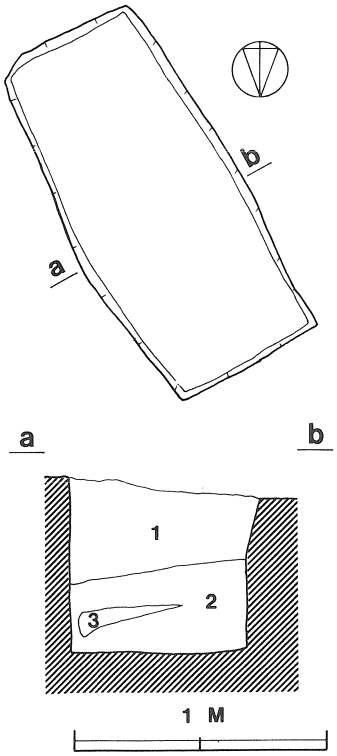
本住居址は，Ｄ２ｃ７・Ｄ２ｄ７に確認され，覆土は暗褐色を呈するが第３層は褐色である。

主軸方向はＮ—49°—Ｗで，4.6m×4.3mの方形のプランを有し，南コーナー部に貼床がみられ第11号住居址を切っている。貼床は第11号住居址の床よりも高い。床のしまりは良く，柱穴は対角線上にあるＰ１～Ｐ４が主柱穴と考えられる。東壁32cm，西壁37cm，南壁32cm，北壁19cmほどで，ほぼ垂直に立ち上る。北壁の中央部にカマドを有する。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	46	30	77	主　柱　穴
Ｐ２	40	38	71	〃
Ｐ３	51	42	79	〃
Ｐ４	48	36	53	〃



第30図　第12号住居址カマド実測図



第31図　第12′号住居址土壙

第12′号住居址土壙土層解説
1　暗褐色土
2　暗褐色土
3　明褐色土混合

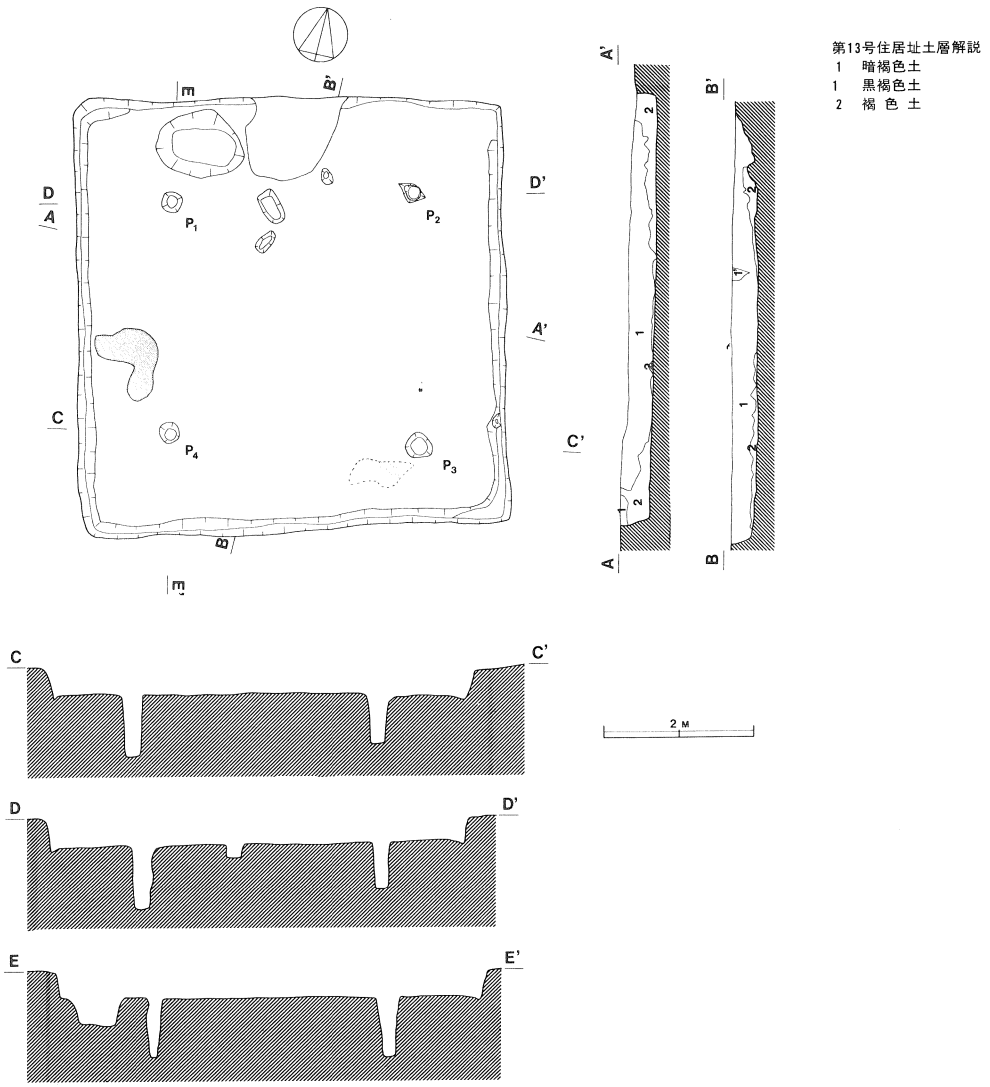
第12′号住居址（第29図）

本住居址はＤ２ｃ７・Ｄ２ｃ８に確認され，覆土は暗褐色を呈する。

主軸方向はＮ—39°—Ｅで，5.7ｍ×3.7ｍの長方形を呈する。床面のしまりは良い。柱穴は確認できなかった。床面中央部の土壙は，本住居址の廃絶後に掘られたものであろうか。

本住居址には不明な点が多い。

第13号住居址（第32図）



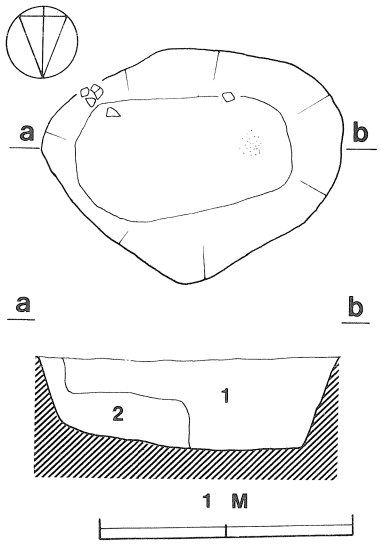
第32図　第13号住居址実測図

本住居址はＣ２ｊ９・Ｃ２ｊ０・Ｄ２ａ０・Ｄ２ａ９に確認され第９号住居址の北側８ｍほどの所に位置する。

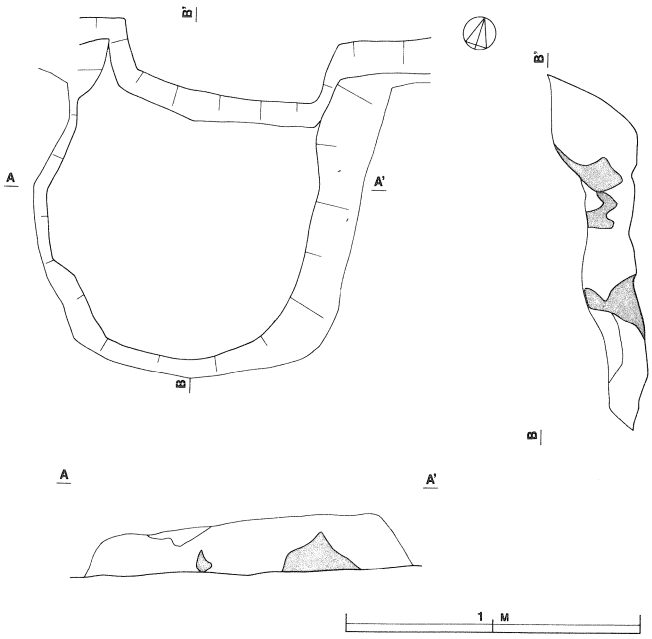
主軸方向はＮ―15°―Ｗで，5.8ｍ×5.6ｍほどのほぼ正方形のプランを呈する。東壁42cm，西壁42cm，南壁36cm，北壁は34cmほどでほぼ垂直に立ち上る。北壁を除いては浅い周溝がみられ，東南コーナー部では明瞭になる。ごぼうの耕作のために床は攪乱されているが，床面の露呈している部分の保存は良い。柱穴は対角線上のＰ１～Ｐ４が主柱穴であろう。

北壁にカマドを有し，その西側に貯蔵穴をもつ。住居址には，焼土塊，炭化物等がみられる。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	31	30	80	主　柱　穴
Ｐ２	40	25	65	〃
Ｐ３	36	33	65	〃
Ｐ４	29	29	81	〃



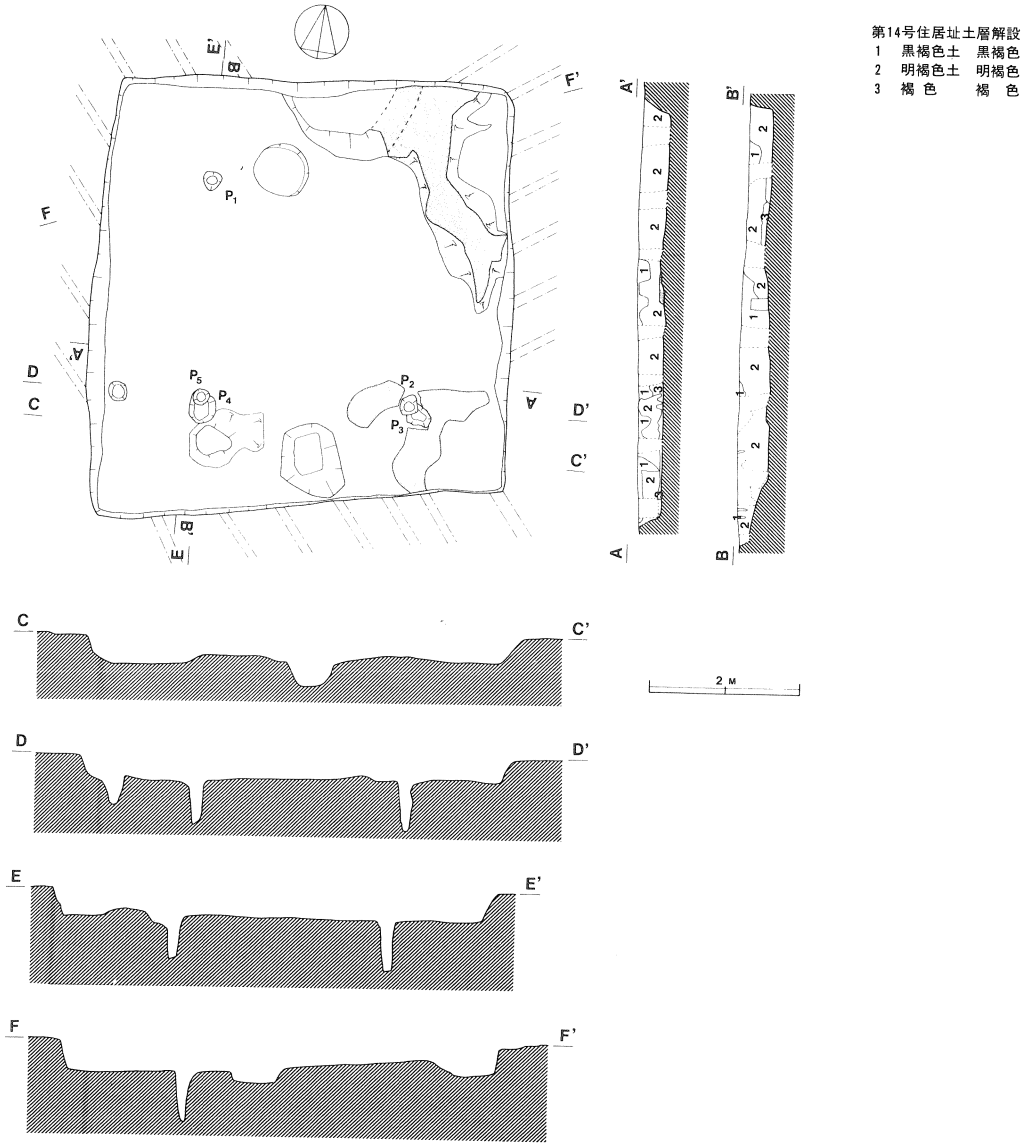
第33図　第13号住居址貯蔵穴



第34図　第13号住居址カマド実測図

第 013 号住居址貯蔵穴土層解説
1　暗褐色土
2　褐 色 土

第14号住居址（第35図）



第35図　第14号住居址実測図

本住居址はＣ２ｉ７・Ｃ２ｉ８・Ｃ２ｊ８・Ｃ２ｊ７に確認され，第13号住居址の北西約３ｍのところに位置する。

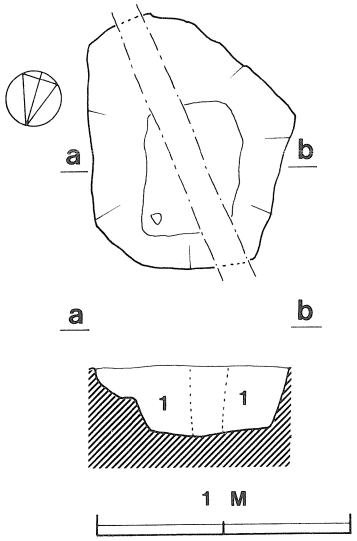
主軸方向はＮ－５°－Ｗで，5.5ｍ×5.5ｍの正方形のプランを呈する。覆土は第１層が黒褐色を呈する。ごぼうの耕作によるトレンチャーの痕が，北側から南側に斜めに見られる。

東壁30cm，西壁40cm，南壁36cm，北壁は30cmほどで，ほぼ垂直に立ち上る。周溝はみられない。

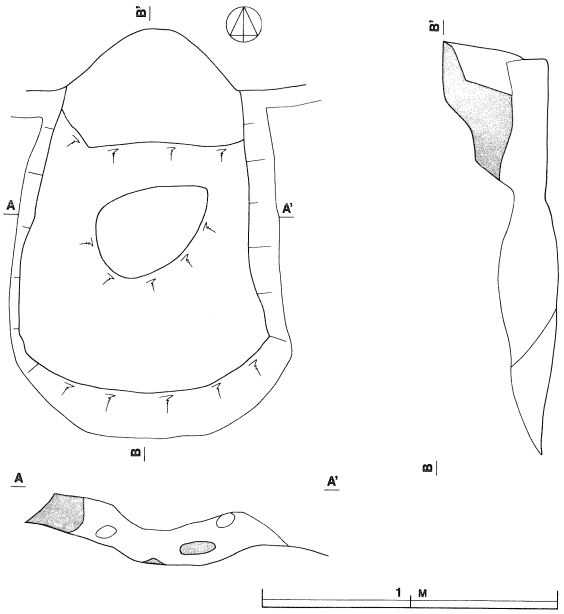
ピットは５個ほど検出されたが，Ｐ１Ｐ２Ｐ５が主柱穴と考えられる。北東コーナー部の柱穴は，北壁側より張り出している焼土層により確認できなかった。

北壁にカマドを有し，その正反対の南壁中央部に貯蔵穴がみられる。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	26	23	68	主　柱　穴
Ｐ２	31	27	70	〃
Ｐ３	33	27	30	
Ｐ４	45	39	8	
Ｐ５	24	21	59	主　柱　穴



第36図　第14号住戸址貯蔵穴



第37図　第14号住居址カマド実測図

第14号住居址貯蔵穴土層解説

1　褐色土

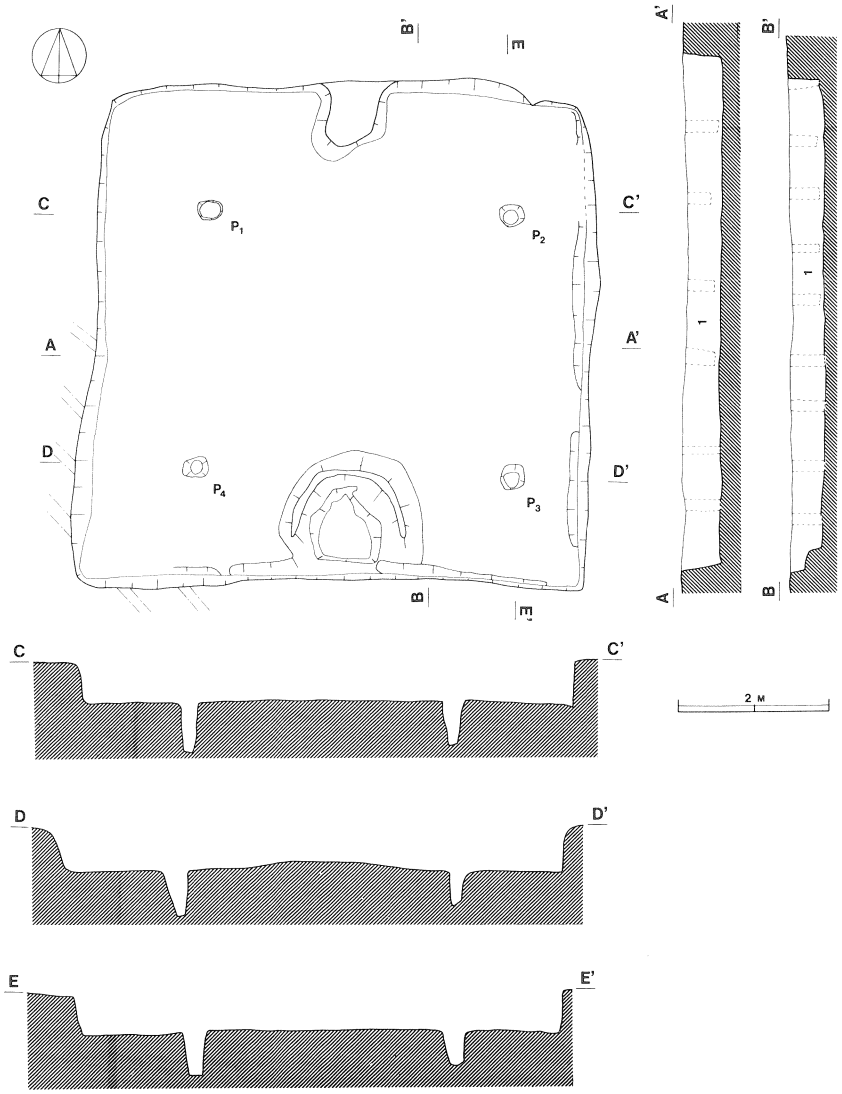
第15号住居址（第38図）

本住居址はＣ２ｇ７・Ｃ２ｇ８・Ｃ２ｈ７・Ｃ２ｈ８に確認され，第14号住居址北側ほぼ１ｍの所に位置する。覆土は褐色を呈する。Ｃ区出土の遺構は覆土の堆積が深い。

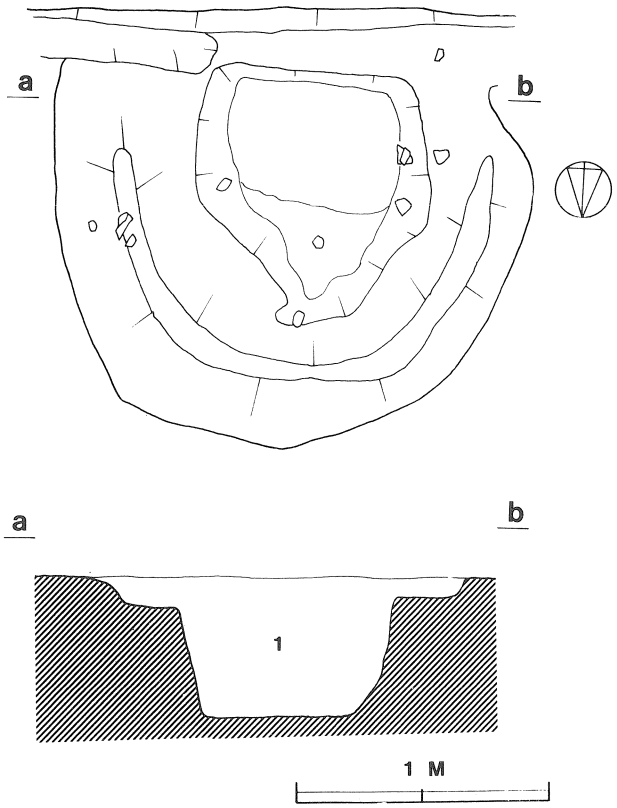
主軸方向はＮ－０°－Ｗで6.5ｍ×6.5ｍの正方形のプランを有し，西側にごぼうの耕作による攪

乱がみられる。柱穴は対角線上のＰ１～Ｐ４が主柱穴と考える。北壁にカマドを有し，その正反対の南壁中央に貯蔵穴をもつ。東壁57cm，西壁53cm，南壁64cm，北壁54cmと深く掘りこまれ，壁はほぼ垂直に立ち上る。東壁，南壁に浅い周溝がみられるがそれ程明瞭ではない。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	34	28	68	主　柱　穴
Ｐ２	35	30	59	〃
Ｐ３	38	35	45	〃
Ｐ４	37	27	60	〃



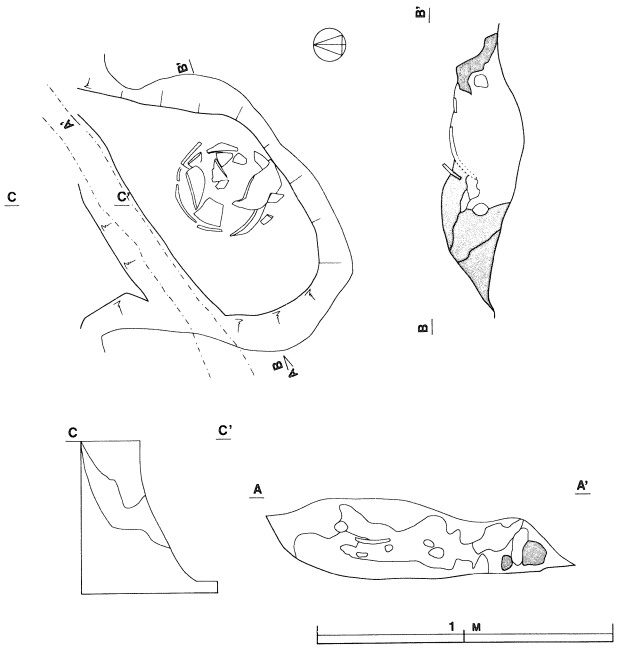
第38図　第15号住居址実測図



第15号住居址貯蔵穴土層解説

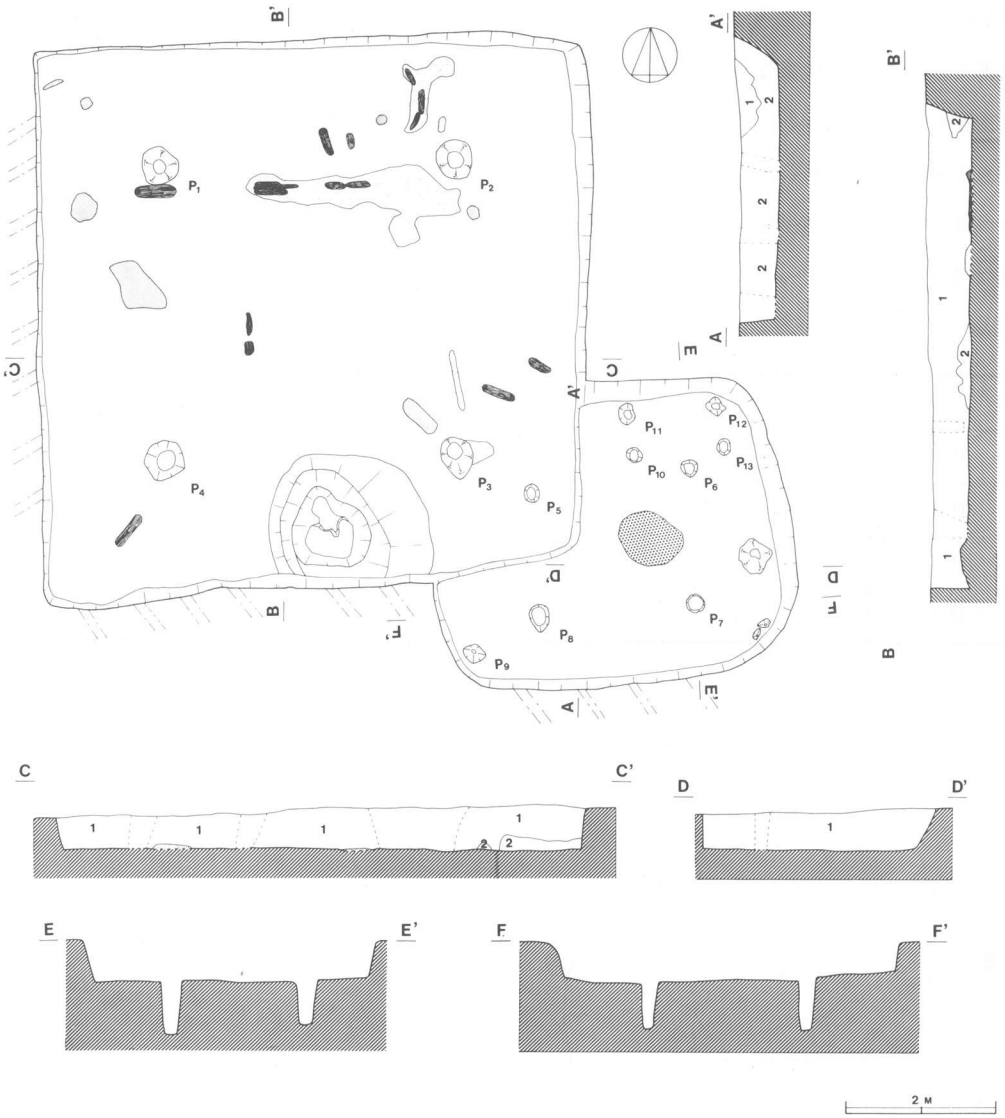
1　褐色土

第39図　第15号住居址貯蔵穴



第40図　第15号住居址カマド実測図

第16号住居址（第41図）



第41図　第16号住居址 第19号住居址 実測図

第16号住居址土層解説
1　暗褐色土
2　褐色土

第19号住居址土層解説
1　Hue7.5YR3/3　暗褐色
2　Hue7.5YR3/4　暗褐色

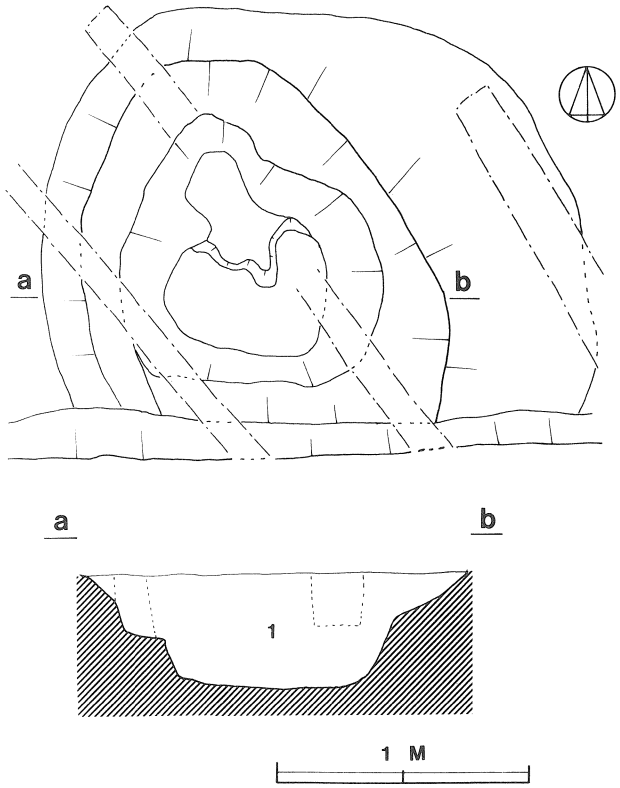
本住居址はＣ２ｄ５・Ｃ２ｄ６・Ｃ２ｅ６・Ｃ２ｅ５に確認され，覆土の堆積は第１層が暗褐

色土で第２層が褐色土である。本住居址はＣ２ｅ６で第19号住居址を切っている。

主軸方向はＮ－２°－Ｗで，7.5m×7.3mのほぼ正方形プランの大型住居址である。東壁46cm，西壁56cm，南壁53cmで北壁は75cmと深く掘りこまれ，壁はほぼ垂直に立ち上る。床は平坦をなし，中央部では焼土が帯状をなし，炭化物がＰ１，Ｐ３の周囲にみられた。床の南側はごぼう耕作による攪乱がある。ピットは５個ほど検出されたがＰ１～Ｐ４が主柱穴と考える。それらの深さはいづれも80cm以上である。

カマドを有せず，南壁中央部に貯蔵穴を有するが，ごぼう耕作の攪乱を受けている。貯蔵穴の周囲はやゝ高く盛り上っている。遺物は土器片のほかに，ミニチュアや管状土錘，土玉，及び石器剥片（チャート）がある。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	53	49	88	主　柱　穴
Ｐ２	54	48	82	〃
Ｐ３	57	43	89	〃
Ｐ４	56	55	86	〃



第42図　第16号住居址貯蔵穴

第19号住居址（第41図）

本住居址はＣ２ｅ６・Ｃ２ｅ７・Ｃ２ｆ７・Ｃ２ｆ６に確認され，北西コーナー部は第16号住居址に切られている。覆土の堆積は第１層が暗褐色土・第２層が褐色土を呈する。

主軸方向はＮ―83°―Ｅで，4.8ｍ×4.0ｍの楕円形のプランを呈する。床面の西側はごぼう耕作により攪乱されているが，床面はしまっている。東壁50cm，西壁49cm，南壁42cm，北壁56cmで壁はほぼ垂直に立ち上る。

ピットは８個ほど検出されたが，Ｐ５及びＰ６～Ｐ８が主柱穴と考えられる。

中央部に炉址がある。床の中央部からは，口縁部を欠損しているが，胴部に縄文を斜行させた弥生式の壺形土器一個体分が検出された。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ５	24	20	50	主　柱　穴
Ｐ６	23	21	74	〃
Ｐ７	26	24	56	〃
Ｐ８	36	26	60	〃
Ｐ９	32	23	30	
Ｐ10	22	20	34	
Ｐ11	29	21	27	
Ｐ12	26	24	33	
Ｐ13	21	19	32	

第17号住居址（第43図）

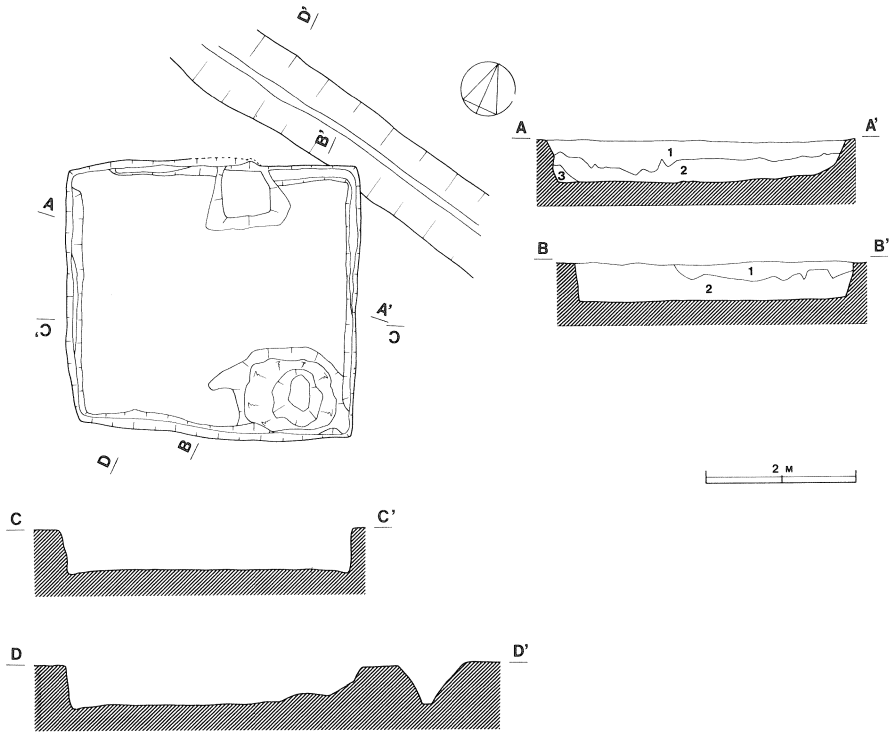
本住居址はＣ２ｂ５・Ｃ２ｂ６・Ｃ２ｃ６・Ｃ２ｃ５に確認され，覆土の堆積は第１層が暗褐色で，第２層に褐色土があり，第３層は暗褐色土である。第16号住居址の北側約１ｍに位置し，北東コーナー部を第１号溝に切られている。

主軸方向はＮ―23°―Ｗで，3.8ｍ×3.6ｍのほぼ正方形のプランを呈する。東壁60cm，西壁50cm，南壁56cm，北壁53cmとやゝ深めに掘りこまれ壁はほぼ垂直に立ち上る。かなり明瞭な周溝がみられ，北壁にはカマドをもつ。東南コーナーには貯蔵穴を有する。床は平坦で，土層の攪乱がないため保存は良い。柱穴は確認できなかった。

カマド中央部に，完形の甑形土器が横位の状態で検出され，その中に鉢形土器が置かれた位置でみられた。又，二次的に使用されたと思われる高杯が出土した。

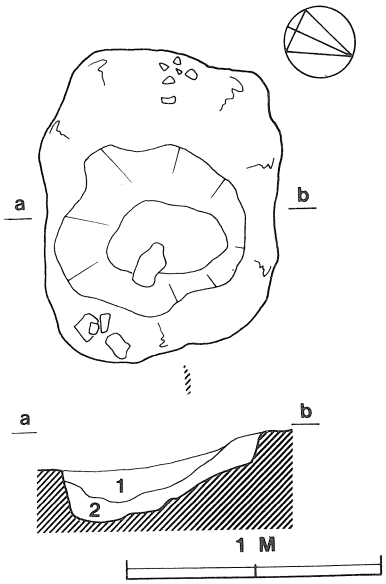
床面からは，砥石片，杯等が検出された。

貯蔵穴の周囲はやゝ高めに盛りあがっている。



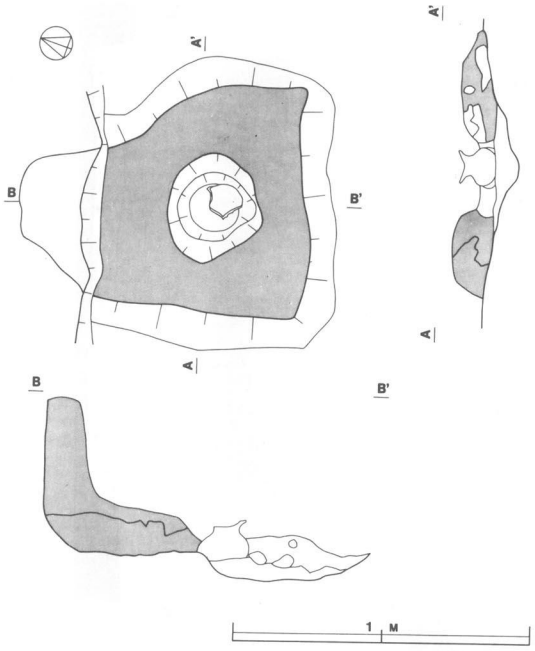
第43図　第 17 号 住 居 址 実 測 図

第17号住居址土層解説
1　暗褐色土
2　褐 色 土
3　暗褐色土



第17号住居址貯蔵穴土層解説
1　褐色土
2　ローム塊混入明褐色土

第44図　第17号住居址貯蔵穴



第45図　第17号住居址カマド実測図

第18号住居址（第46図）

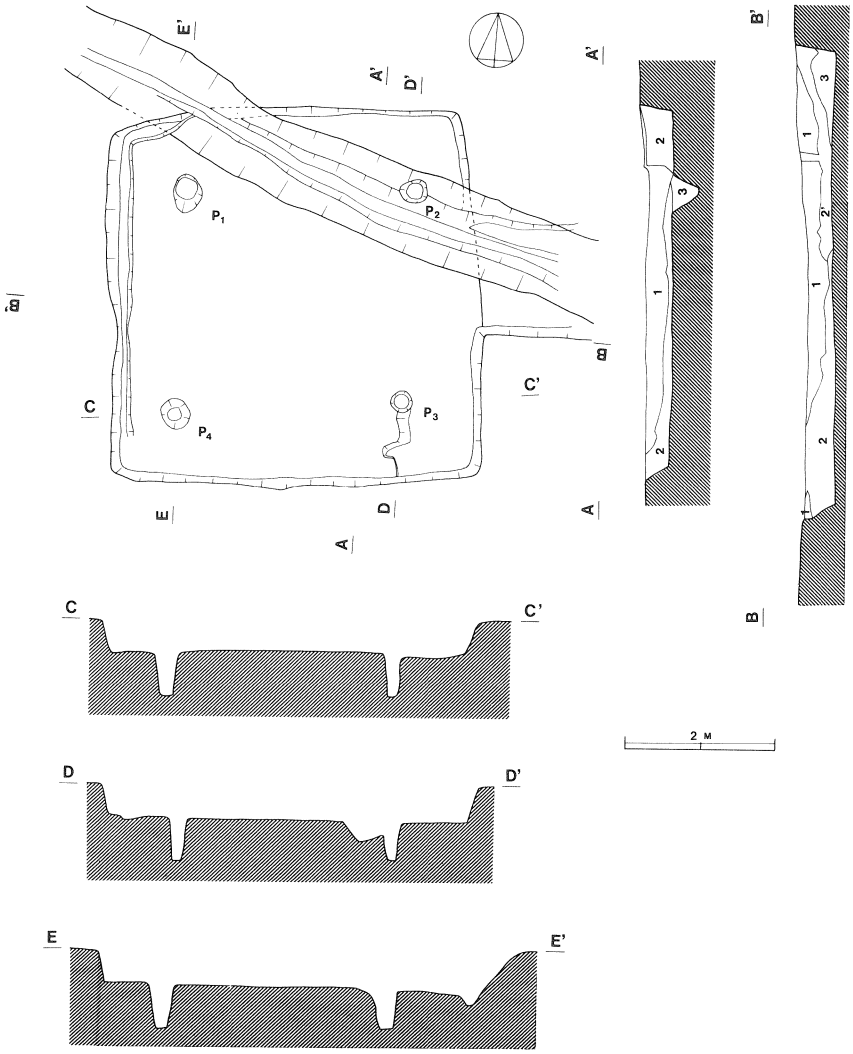
本住居址はＣ２ｃ９・Ｃ２ｃ０・Ｃ２ｄ０・Ｃ２ｄ９に確認され，覆土は暗褐色土を呈する。本住居址の中央北側を第１号溝が切っている。

主軸方向はＮ－２°－Ｗで，5.3ｍ×5.0ｍの方形プランを呈する。東壁43cm，西壁55cm，南壁43cm，北壁43cmで，壁はほぼ垂直に立ち上る。北壁には周溝がみられるが，東南コーナー部で不明瞭となっている。床は平坦で，柱穴は対角線にあるＰ１～Ｐ４が主柱穴と考えられる。

東壁は発掘区の東端であったので不明確である。

遺物には，欠損した須恵式の碗形土器や石器剥片などが検出された。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	52	38	54	主　柱　穴
Ｐ２	37	30	53	〃
Ｐ３	29	28	60	〃
Ｐ４	41	38	62	〃



第46図　第 18 号 住 居 址 実 測 図

第18号住居址土層解説
1　Hue7.5YR2/3　暗褐色土
2　Hue7.5YR3/3　暗褐色土
2'　Hue7.5YR2/2　黒褐色土
3　Hue7.5YR3/4　褐 色 土

第20号住居址（第47図）

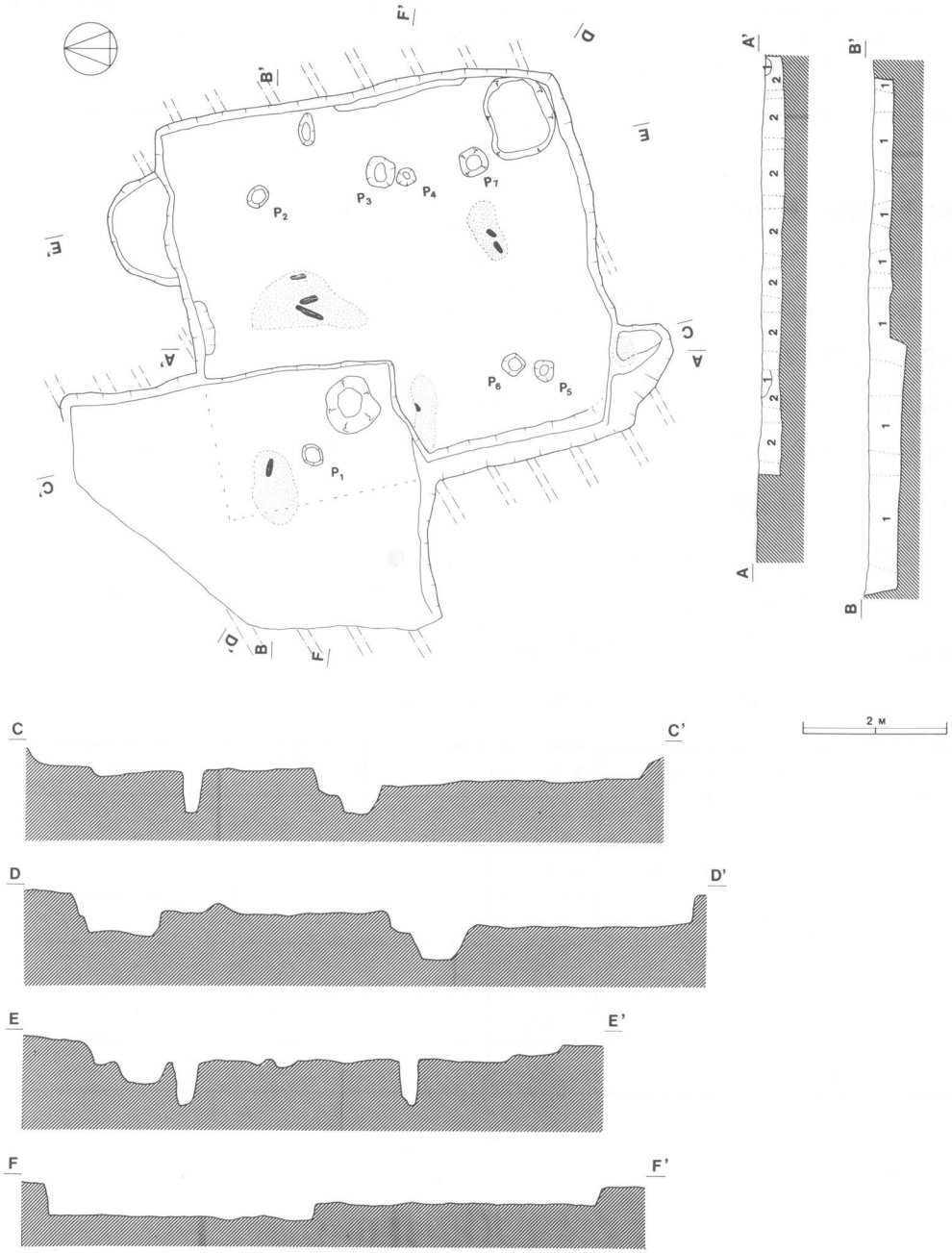
本住居址はＣ２ｄ３・Ｃ２ｅ３に確認され，第21号住居址を切っている。発掘区の西端に位置するため，北側及び西側の壁部は確認できなかった。覆土は第１層が暗褐色土，第２層が褐色土を呈する。

主軸方向はＮ－３°－Ｗで，方形のプランを呈するものと思われるが，長軸4.5ｍ，短軸3.3ｍのみしか確認できなかった。床面はごぼう耕作の攪乱を受けている。

東壁は30cm，北壁は28cmで柱穴はＰ１のみしか検出されなかった。主柱穴の一つと考える。

東南コーナー部に貯蔵穴を有し，不鮮明であるが中央に炉址がある。

焼土，炭化物等から見て，火災にあったものと思われる。



第47図　第20号住居址 第21号住居址 実測図

第21号住居址土層解説
1　Hue7.5YR3/3　暗褐色土
2　Hue7.5YR3/4　褐 色 土

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
P 1	34	27	72	主　柱　穴

第21号住居址（第47図）

本住居址はC２d４・C２e４・C２e３に確認され，北西コーナー部を第20号住居址に切られている。床面全面はごぼうの耕作による攪乱を受けている。覆土は第１層が暗褐色土，第２層は褐色土が堆積する。

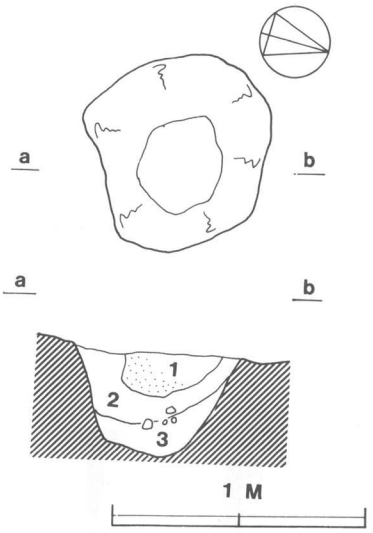
主軸方向はN－９°－Wで，5.7m×5.4mの方形のプランで，北壁44cm，西壁41cm，南壁37cm，北壁44cmで壁はやゝ外反して立ち上る。西壁と東壁の一部に明瞭ではないが周溝をもつ。

柱穴はP２～P７が検出されているが，P２・P５・P７が主柱穴と考えられる。焼土や炭化物の状態からみて，本住居址は火災にあったものと思われる。

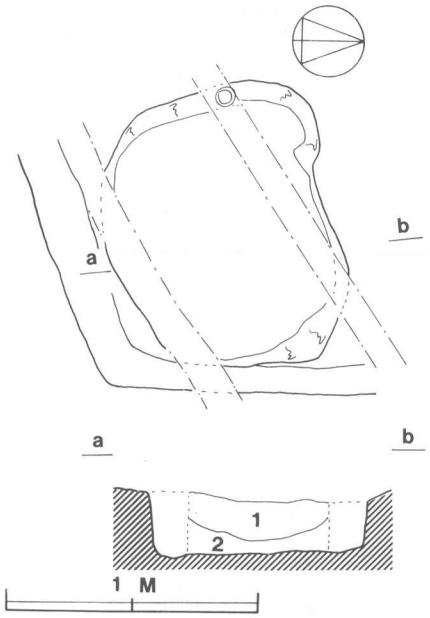
中央に不鮮明であるが炉址をもつ。東南コーナーに貯蔵穴を有し，その周口北側から完形の壺形土器が出土している。又，床の北側中央部からは砥石が１個検出された。

北壁外側の土壙と遺構との関係は不明確である。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
P 2	28	27	62	主　柱　穴
P 3	45	41	11	
P 4	29	21	7	
P 5	29	27	10	主　柱　穴
P 6	33	31	59	
P 7	44	41	64	主　柱　穴



第48図　第20号住居址貯蔵穴



第49図　第21号住居址貯蔵穴

第20号住居址貯蔵穴土層解説
1　焼土混入褐色土
2　暗褐色土
3　ローム塊混入褐色土

第21号住居址貯蔵穴土層解説
1　暗褐色土
2　褐色土

第22号住居址（第50図）

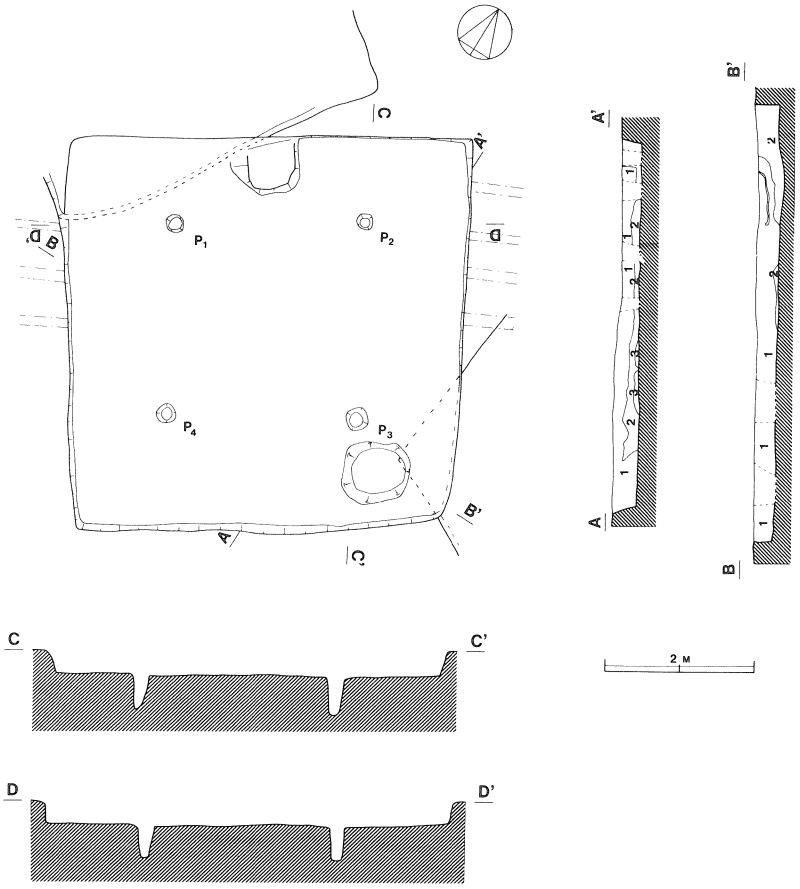
本住居址はＢ２ｊ５・Ｂ２ｊ６・Ｃ２ａ６・Ｃ２ａ５に確認され，第17号住居址から第１号溝を挟んで北約６ｍの所に位置する。本住居址は第23号住居址・第25号住居址と複合している。

覆土の堆積は第１層・第２層が暗褐色土，第３層が褐色土である。床面の北側はごぼう耕作による攪乱がみられるが，床面のしまりは良好である。

主軸方向はＮ―30°―Ｗで，5.3ｍ×5.2ｍのほぼ正方形のプランを呈する。東壁35cm，西壁30cm，南壁33cm，北壁30cmで壁は垂直に近く立ち上る。柱穴は対角線上にＰ１～Ｐ４が検出され，深さは45～49cmである。この４個を主柱穴と考える。北壁にカマドを有し，東南コーナー部に貯蔵穴をもつ。

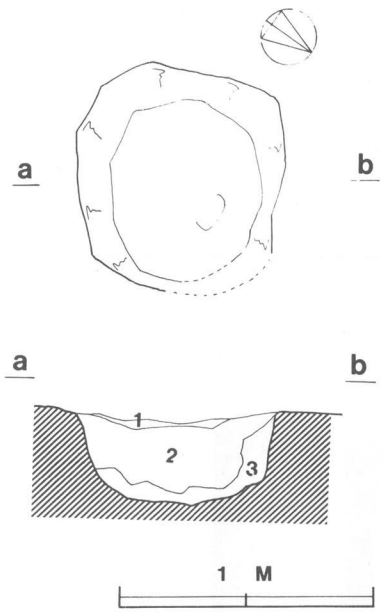
カマドの周囲の床面からは，ほぼ完形の甑が検出され，北西コーナー部からは完形の高杯が出土している。床面の北側からは完形又はほぼ完形の杯形土器が３個ほど検出され，覆土中から完形に近い壺形土器が出土している。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
P 1	26	23	47	主　柱　穴
P 2	23	22	46	〃
P 3	32	29	49	〃
P 4	27	26	45	〃

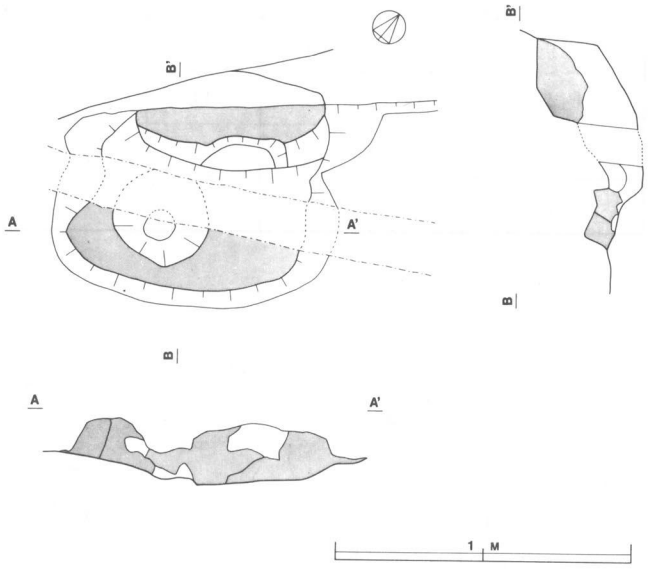


第50図　第 22 号 住 居 址 実 測 図

第22号住居址土層解説
1　暗褐色土
2　暗褐色土
3　褐 色 土



第51図　第22号住居址貯蔵穴



第52図　第22図住居址カマド実測図

第22号住居址貯蔵穴土層解説
1　黒褐色土混合（攪乱？）
2　褐色土
3　ロームブロック混入明褐色土

第23号住居址（第53図）

本住居址はＢ２ｉ４・Ｂ２ｉ５・Ｂ２ｊ５・Ｂ２ｊ４に確認され，覆土は暗褐色土を呈する。

本住居址は東南コーナー部で第22号住居址を切りこんでいる。

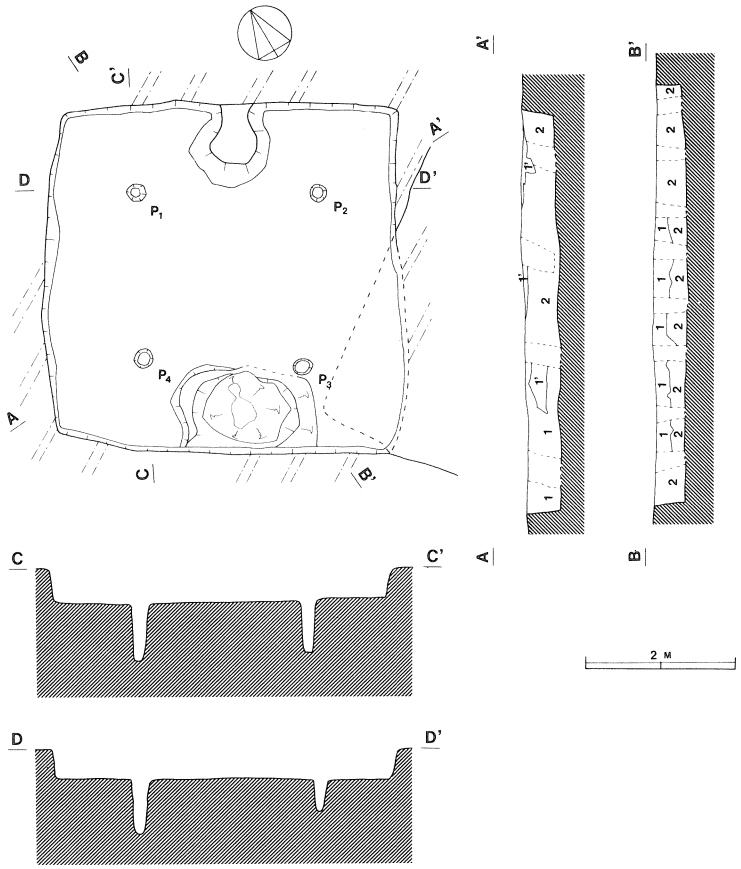
主軸方向はＮ―37°―Ｅで，4.7ｍ×4.6ｍのほぼ正方形のプランを呈する。東壁３６cm，西壁49cm，南壁42cm，北壁34cmで壁はほぼ垂直に立ち上る。

床面は平坦で良くしまっている。ごぼう耕作の攪乱が床をほぼ東西の方向で条溝をなしている。

柱穴は対角線上にＰ１～Ｐ４と検出され，Ｐ２は44cm，Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４は71～76cmほどある。これ等を主柱穴と考える。北壁中央部にカマドを有し，その正反対の南壁に貯蔵穴を有する。

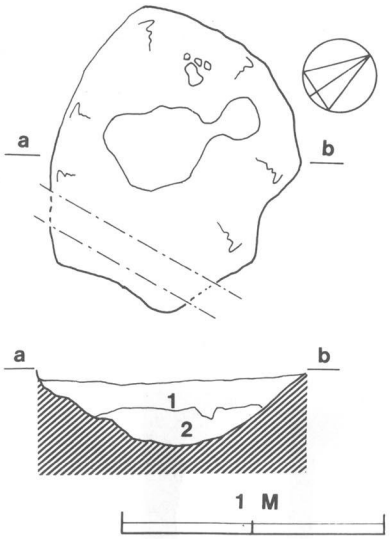
カマドにはほぼ完形の杯形土器が検出され，カマドの周囲から椀形土器が出土している。覆土からは石製紡錘車，単孔の石製模造品が検出されている。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
P 1	26	23	71	主　柱　穴
P 2	23	23	44	〃
P 3	27	23	76	〃
P 4	25	22	73	〃

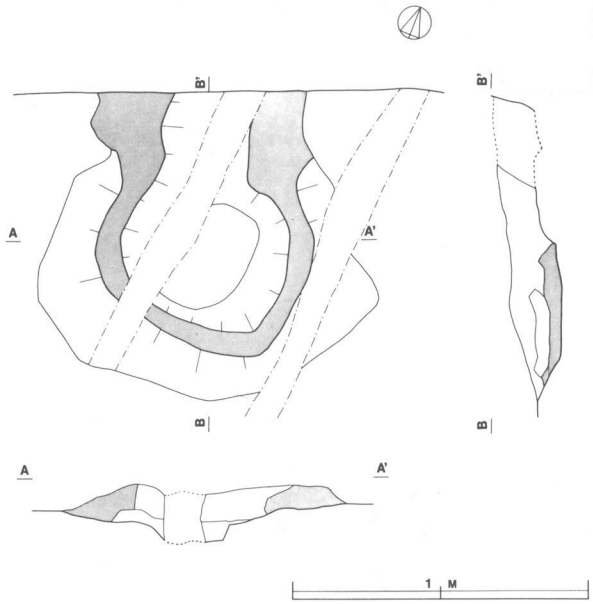


第53図　第 23 号 住 居 址 実 測 図

第23号住居址土層解説
1　暗褐色土
1′　暗褐色土
2　褐 色 土



第54図　第23号住居址貯蔵穴



第55図　第23号住居址カマド実測図

第23号住居址貯蔵穴土層解説

1　褐色土
2　ローム塊混入明褐色土

第24号住居址（第56図）

本住居址はＢ２ｊ７・Ｂ２ｊ８・Ｂ２ｊ９・Ｃ２ａ９・Ｃ２ａ８・Ｃ２ａ７に確認され，覆土は第１層が暗褐色土，第２層は褐色土を呈している。西側0.5ｍの所に第25号住居址がある。

主軸方向はＮ－３°－Ｗで5.8ｍ×5.7ｍの正方形状を呈する。東壁47cm，西壁42cm，南壁46cm，北壁は45cmでわずかに外反して立ち上る。東・南・北壁に浅い周溝がある。

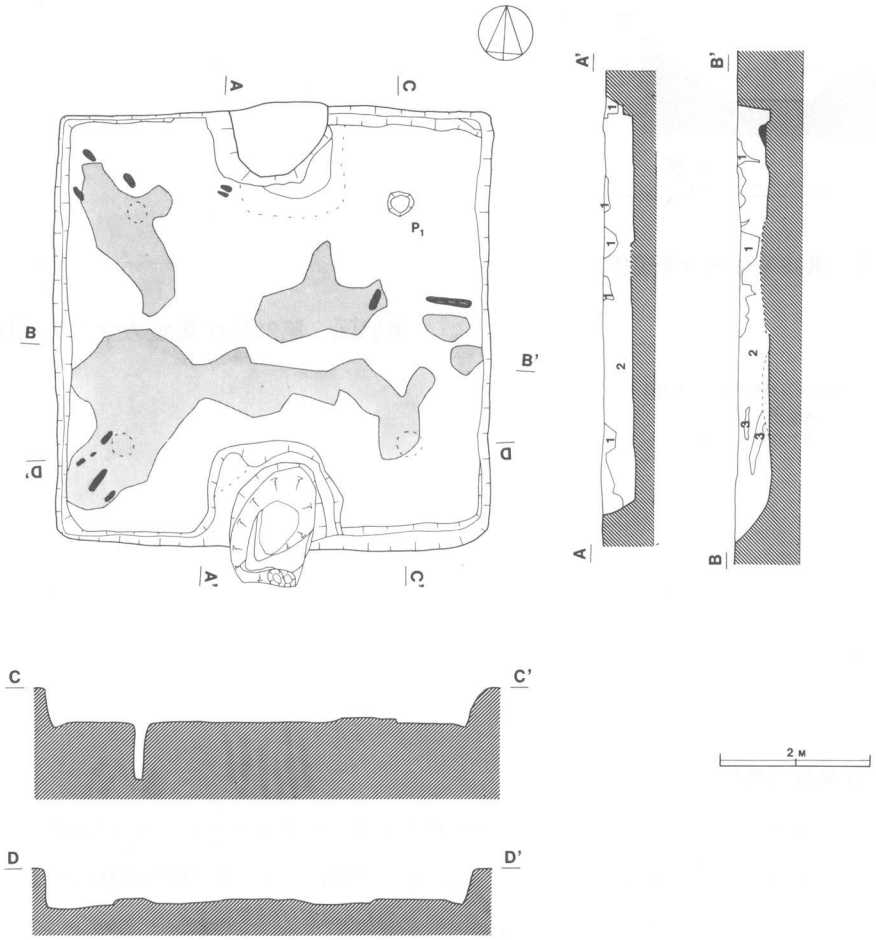
柱穴はＰ１が確認されたが，対角線上のピットは，焼土層の堆積により明瞭でなかった。

北壁中央にカマドを持ち，その正反対の南壁中央部に貯蔵穴を有する。貯蔵穴は南壁から外側に張り出している。床面は焼土層が帯状をなして堆積している。

床面中央部から完形の高杯が１個検出され，又単孔の石製模造品が検出された。

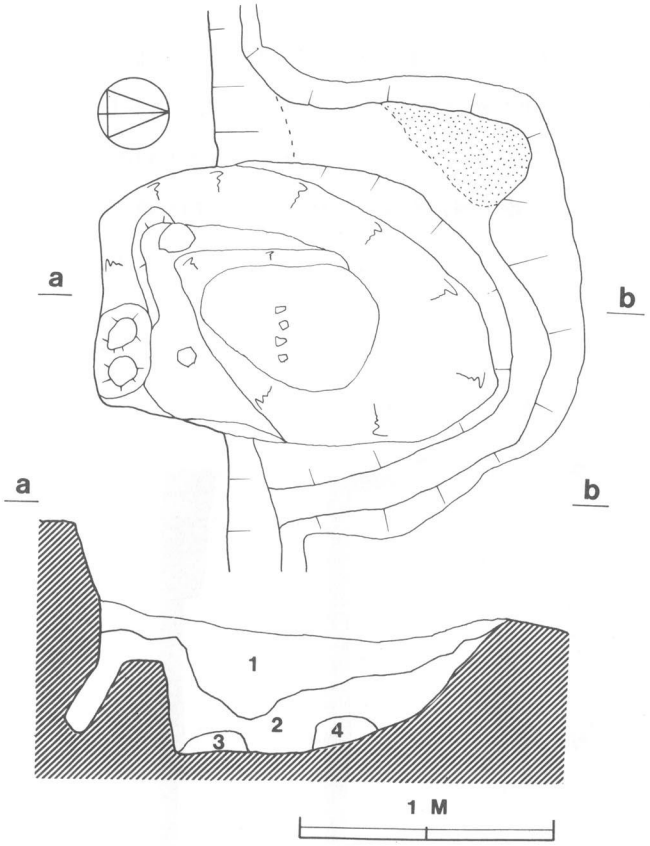
本住居址は火災を受けたものと思われる。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
P 1	35	34	77	



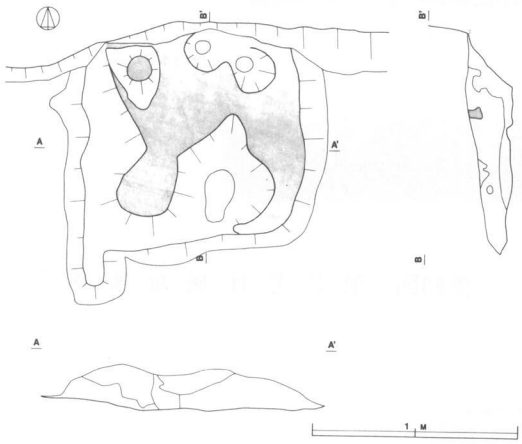
第56図　第 24 号 住 居 址 実 測 図

第24号住居址土層解説
1　ue7.5YR2/3　暗褐色土
2　ue7.5YR4/3　褐 色 土
3 Hue7.5YR3/3　暗褐色土



第24号住居址貯蔵穴土層解説
1　ローム塊混入褐色土
2　ローム塊混入にぶい褐色土
3　ローム塊混入明褐色土
4　ローム塊混入褐色土

第57図　第24号住居址貯蔵穴

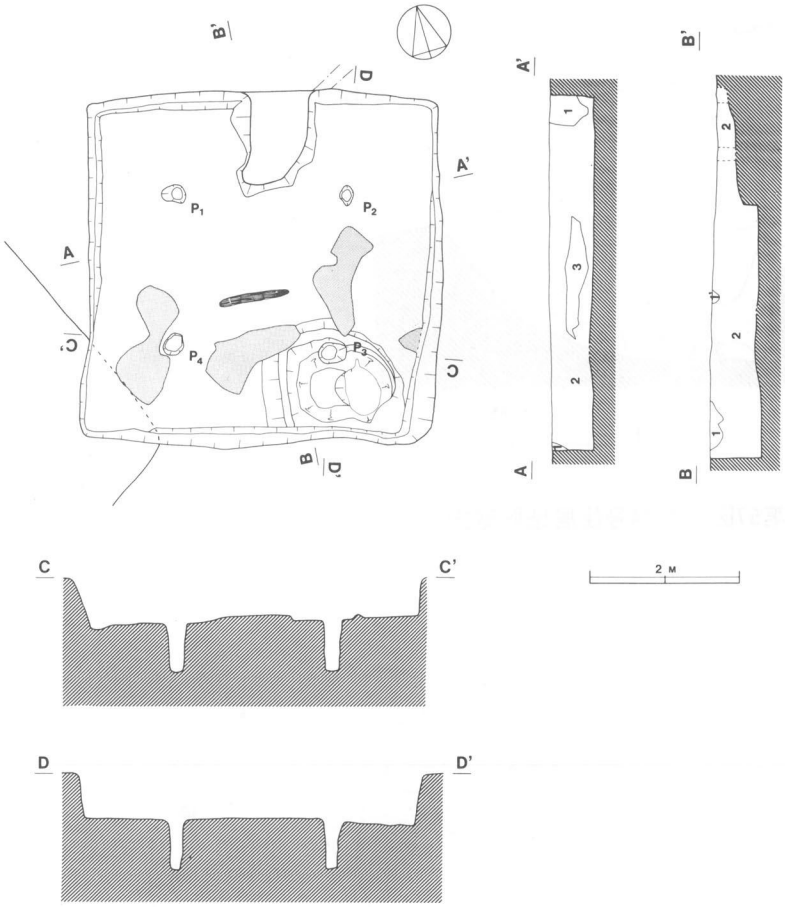


第58図　第24号住居址カマド実測図

第25号住居址（第59図）

本住居址はＢ２ｊ６・Ｂ２ｊ７・Ｃ２ａ７・Ｃ２ａ６に確認され，西南コーナー部が第22号住居址を切りこんでいる。覆土は第１層黒褐色土，第２層は褐色土，第３層は暗褐色土である。

主軸方向はＮ―14°―Ｅで，4.7m×4.7mの正方形プランを呈し，東壁59cm，西壁41cm，南壁61cm，北壁53cmで壁はほぼ垂直に立ち上る。床面は焼土層が充満し，棒状の炭化物や焼土塊がみられた。本住居址は火災にあったものと思われる。ピットは対角線に４個検出されたＰ１～Ｐ４が主柱穴と考える。



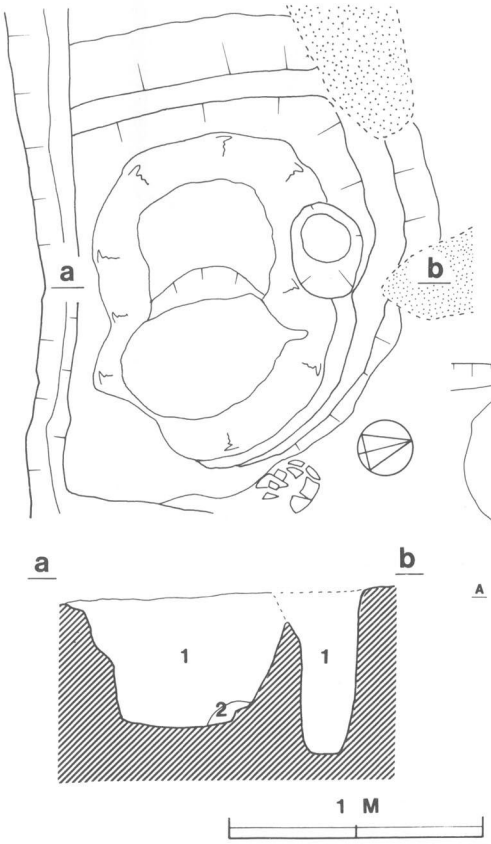
第59図　第25号住居址実測図

第25号住居址土層解説
1　Hue7.5YR3/2　黒褐色土
2　Hue7.5YR3/4　褐色土
3　Hue7.5YR3/4　暗褐色土
1'　Hue7.5YR3/4　暗褐色土

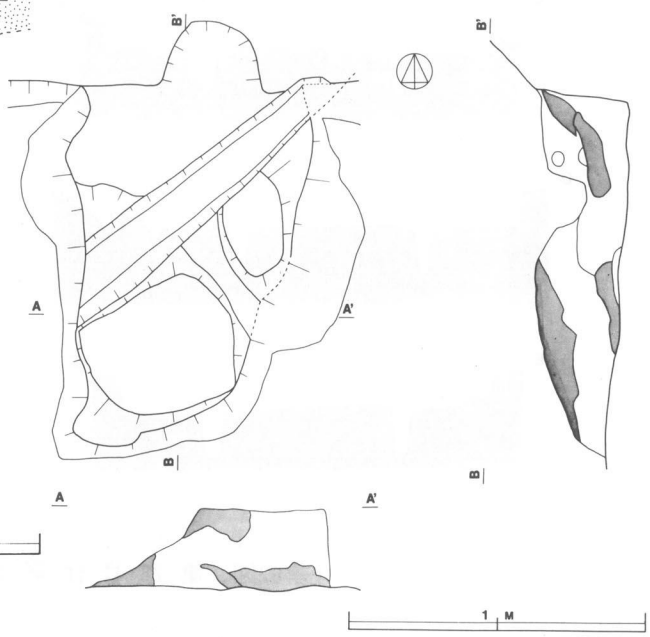
北壁にカマドを有するが，ごぼう耕作により破壊をうけている。南壁中央より東よりに貯蔵穴がみられる。貯蔵穴の周口はやゝ高く盛り上っている。

覆土から縄文土器を用いた土器片錘１個が検出されている。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	32	23	83	主　柱　穴
Ｐ２	26	18	69	〃
Ｐ３	38	28	65	〃
Ｐ４	31	25	73	〃



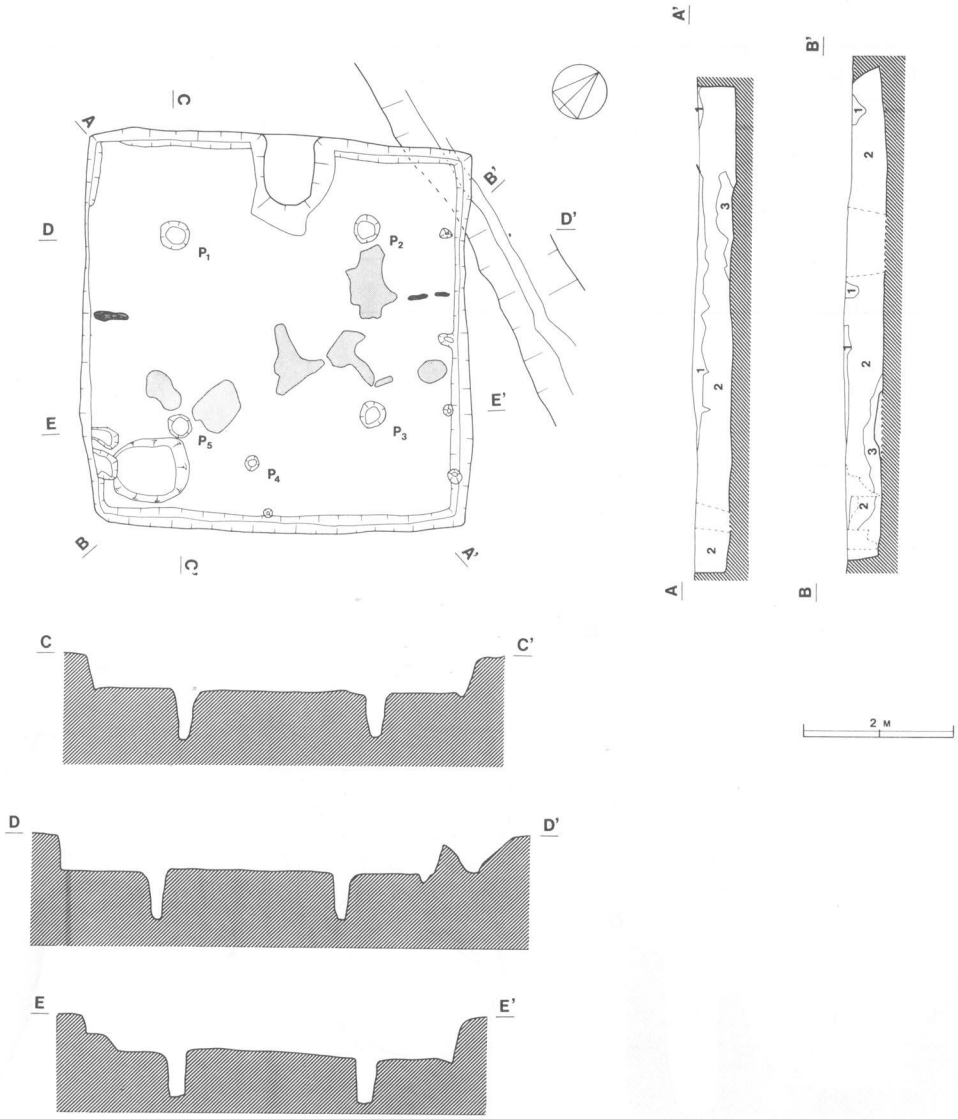
第60図　第25号住居址貯蔵穴



第61図　第25号住居址カマド実測図

第25号住居址貯蔵穴土層解説
1　褐色土
2　ローム塊混入明褐色土

第26号住居址（第62図）



第62図　第 26 号 住 居 址 実 測 図

第26号住居址土層解説
1　Hue7.5YR3/4　暗褐色土
2　Hue7.5YR3/4　褐 色 土
3　Hue7.5YR3/4　暗褐色土

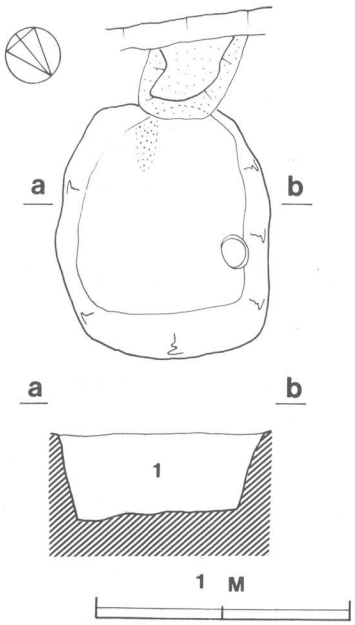
本住居址はＣ２ｂ２・Ｃ２ｂ３・Ｃ２ｂ４・Ｃ２ｃ３に確認され，覆土はローム粒子の混入した暗褐色土が堆積している。第20号住居址の北約３ｍほどに位置する単独の住居址である。

主軸方向はＮ―36°―Ｗで，5.3ｍ×5.1ｍの方形を呈する。壁高は東壁52cm，西壁46cm，南壁42cm，北壁54cmで壁はほぼ垂直に立ち上る。西壁を除いては浅い周溝がみられる。北側のコーナー部を第１号溝が切りこんでいる。

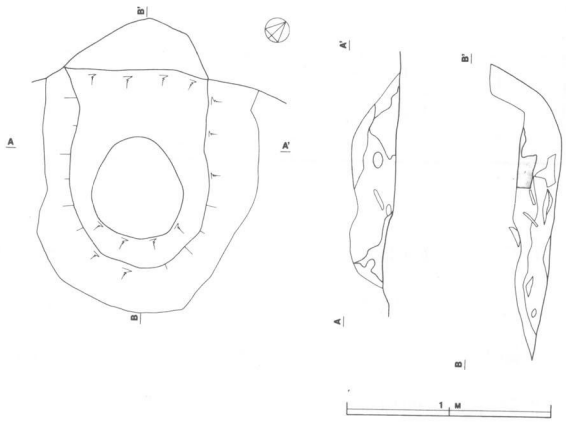
床面は比較的保存が良いが，焼土が充満しているので，火災にあったものと思われる。ピットは５個ほど検出されたが，Ｐ１～Ｐ３，Ｐ５が主柱穴と考える。北側の壁中央部にカマドを有し，南側コーナー部に貯蔵穴を有する。

遺物は完形の杯形土器がカマドの周囲に検出され，覆土からは壺形土器１個と杯形土器が４個ほど検出される。それ等はいづれも土師器であるが，欠損した須恵器の杯も出土している。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	41	38	67	主　柱　穴
Ｐ２	38	35	60	
Ｐ３	36	34	75	主　柱　穴
Ｐ４	19	18	24	〃
Ｐ５	33	30	60	〃



第63図　第26号住居址貯蔵穴



第64図　第26号住居址カマド実測図

第26号住居址貯蔵穴土層解説
1　ローム混入暗褐色

第27号住居址（第65図）

第27′号住居址

第28号住居址

第27号住居址はＢ２ｅ３・Ｂ２ｆ３・Ｂ２ｆ２・Ｂ２ｅ１に確認され，第27′号住居址及び第28号住居址と複合する住居址である。本遺跡にはこのような時期を異にした複合住居址が多く，その一例であろう。

本住居址群は第23号・第22号・第25号と複合する住居址群からは約10ｍほど北西に離れた所に位置する。本住居址群の覆土は，第１層・第２層とも暗褐色土が堆積する。

第27号住居址は，主軸方向Ｎ―45°―Ｅで6.7ｍ×6.5ｍの方形を呈する大型の住居址で，東壁44㎝，西壁35㎝，南壁34㎝で壁はわずかに外反する。北壁は第27′号住居址を切っており，壁は消滅している。東壁のコーナー部には周溝がみられるが，ほかはない。

ごぼう耕作による条溝が北から南へ，又東から西へ走るが床面の保存は良い。この住居址群には10個ほどのピットが検出されているが，第27号住居址の主柱穴はＰ３Ｐ４Ｐ９Ｐ10と考えられる。北壁（方位は北東）の消滅部の中央にカマドがあり，その正反対の南壁に貯蔵穴がみられる。

遺物は床面から完形の杯形土器が出土しており，又欠損した碗形土器，壺形土器等が検出されている。住居址内の土壙は攪乱によるものであろうか。

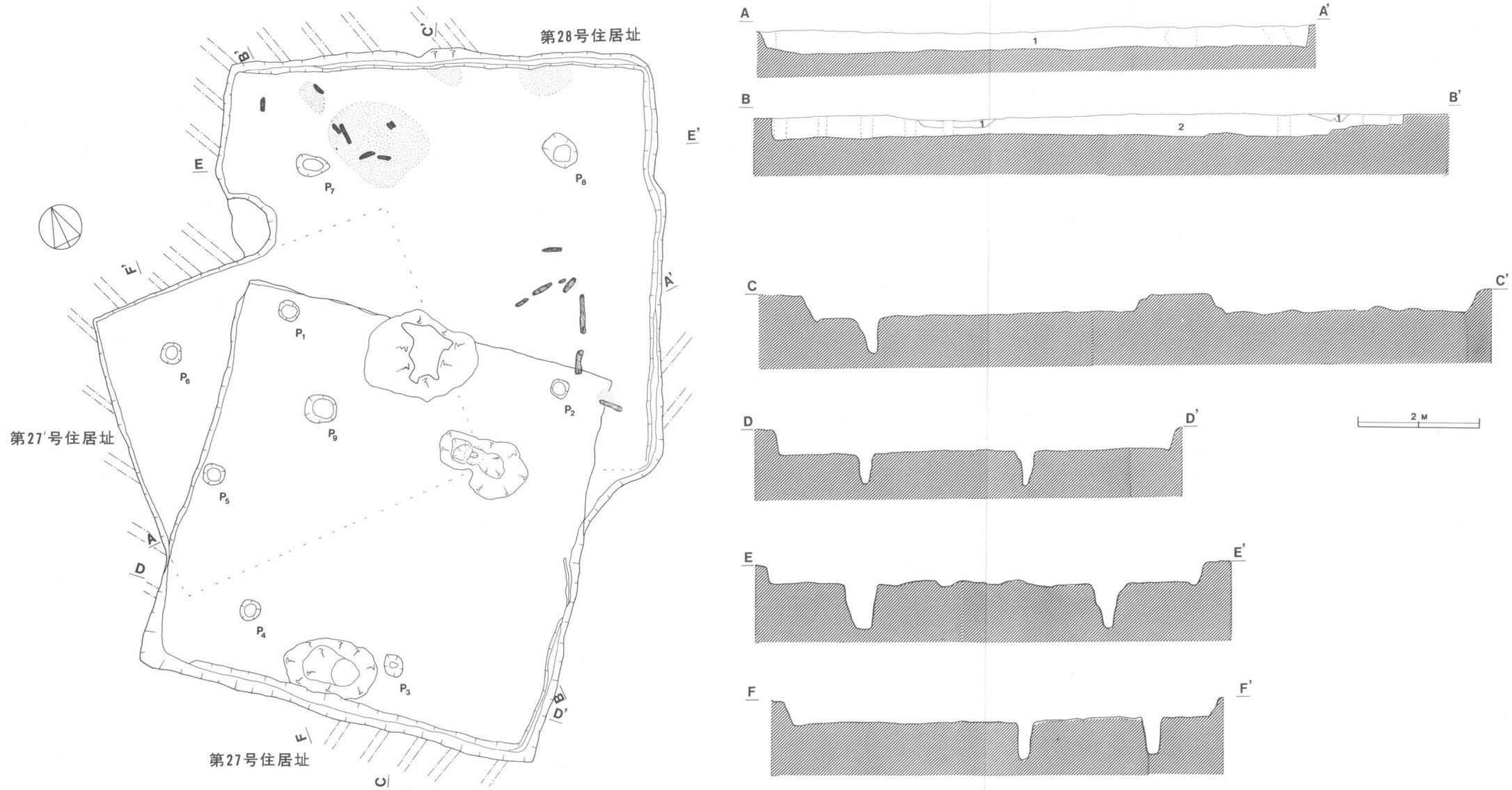
ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ３	40	32	51	主　柱　穴
Ｐ４	35	34	48	〃
Ｐ９	54	48	82	〃
Ｐ10	33	33	51	〃

第27′号住居址はＢ２ｅ２・Ｂ２ｅ３に確認され，第27号住居址に切られている。床面の南側がほとんど第27号住居址と複合しており，ごぼう耕作の攪乱を受けている。

主軸方向はＮ―11°―Ｅで，推定では6.2ｍ×6.1ｍの方形プランを呈していると思われる。

北壁は35㎝西壁は28㎝ほどで，やゝ外反して立ち上るが東壁南壁は第27号住居址と複合しているので不明確である。Ｐ１Ｐ５Ｐ６が主柱穴と考える。

遺物についても，複合した住居のいづれのものか明確ではない。



27
第27′号住居址土層解説
28

1　Hue7.5YR3/4　暗褐色土
2　Hue7.5YR3/3　暗褐色土

第65図　第27号住居址，第27′号住居址，第28号住居址実測図

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
P 1	35	31	79	主　柱　穴
P 5	37	37	63	〃
P 6	36	35	63	〃

第28号住居址は，B２d３・B２e３・B２f３に確認され，第27号住居址・第27′号住居址に切られている。

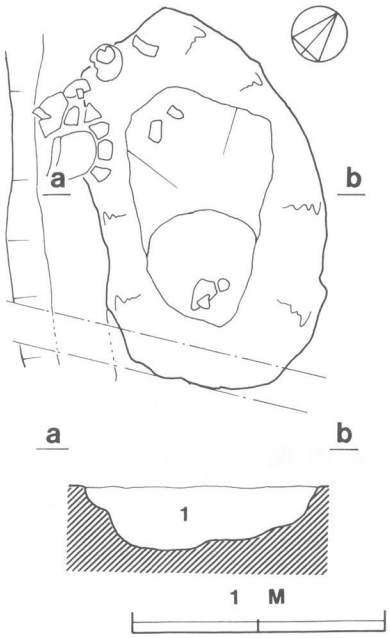
主軸方向N―29°―Eで，7.1m×6.8mほどのプランを有する大型の住居址と推定される。

東壁26cm南壁40cm，北壁34cmで壁はほぼ垂直に立ち上る。北壁と南壁に周溝が検出されている。床は平坦で，それ程硬くはない。棒状の炭化物が充満している。

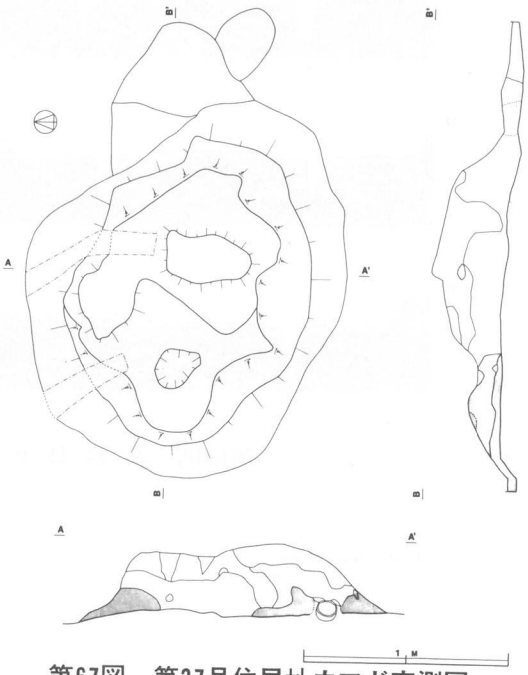
床の中央に炉址がみられるが，鮮明ではない。検出されたピットP２・P７・P８が主柱穴であろうか。

遺物は覆土から鉢形土器，床面から欠損しているが器台が２個ほど検出されている。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
P 2	33	29	78	主　柱　穴
P 7	54	33	73	〃
P 8	62	44	68	〃



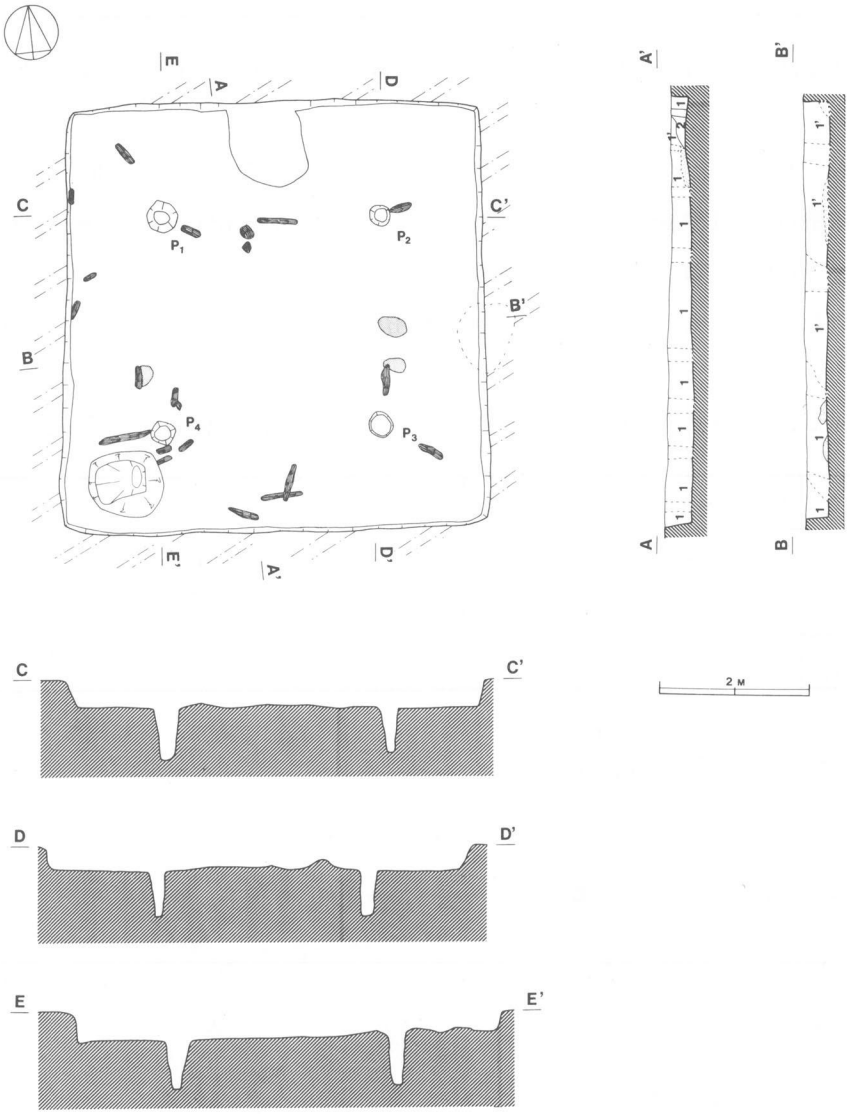
第66図　第27号住居址貯蔵穴



第67図　第27号住居址カマド実測図

第27号住居址貯蔵穴土層解説
1　ローム塊混入黒褐色土

第29号住居址（第68図）



第68図　第 29 号 住 居 址 実 測 図

第29号住居址土層解説
1　Hue7.5YR　3/4　暗褐色
1'　Hue7.5YR　3/3　褐
2　Hue7.5YR　3/4　暗褐色

本住居址はＢ２ｇ５・Ｂ２ｇ６・Ｂ２ｈ６・Ｂ２ｈ５に確認され，覆土は暗褐色土を呈する。第23号住居址の北東約４ｍの所に位置する単独の住居址である。

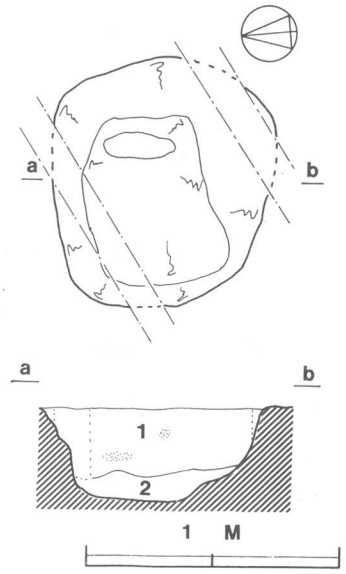
主軸方向はＮ－５°－Ｅで，5.7ｍ×5.6ｍの方形のプランを呈し，東壁39cm西壁47cm南壁29cm北壁34cmで壁はほぼ垂直に立ち上る。

床全面が東から西に斜行するようにごぼう耕作の攪乱の条溝があるが，それ以外の床面のしまりは比較的良好である。

柱穴は対角線上にあるＰ１～Ｐ４が主柱穴であろう。各柱穴の周囲には棒状の炭化物がみられ，又植物せんいと思われる燃焼体もみられた。

東壁中央部にはヤマト硯の貝層（20～30cmの径）が検出された。北壁中央にカマドを有し，南西コーナー部に貯蔵穴をもつ。遺物は欠損した杯形土器のほか，ミニチュア，砥石片，軽石等がみられた。

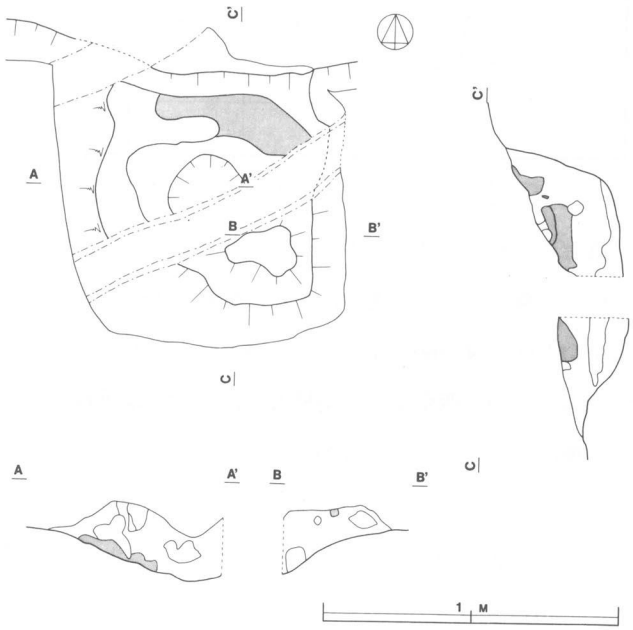
ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	44	38	66	主　柱　穴
Ｐ２	30	27	62	〃
Ｐ３	35	31	61	〃
Ｐ４	33	32	75	〃



第69図　第29号住居址貯蔵穴

第29号住居址貯蔵穴土層解説

1　Hue7.5YR3/4　暗褐色
2　Hue7.5YR3/4　褐　色



第70図　第29号住居址カマド実測図

第30号住居址（第71図）

第31号住号址

第32号住居址

第33号住居址

本住居址群は４基の住居遺構が複合しており，本遺跡中最も複雑な遺構である。

第30号住居址はＢ２ｃ４・Ｂ２ｃ５・Ｂ２ｄ５・Ｂ２ｄ４に確認され，覆土は第１層，第２層ともに暗褐色土層が堆積している。本住居址は第31号住居址を切っている。

主軸方向はＮ―53°―Ｅで，5.3ｍ×4.0ｍの隅丸方形のプランを有する。東壁47cm，西壁42cm，南壁は49cmでほぼ垂直に立ち上るが，北壁（第31号住居址との複合部）は約５cmほどである。

床面は割にしまりを見せており，ピットは４個ほど検出され，対角線上にあるＰ１～Ｐ４が主柱穴と考える。

中央に炉をもつ。炉址には練瓦色の焼土がみられた。

西南コーナー部に，ほぼ完形の弥生式の壺形土器が検出され，覆土中からも欠損した弥生式の壺形土器が２個ほど検出された。同位置から灰黄色を呈する粘土塊が検出されている。ほかに欠損しているがミニチュアの高杯形土器が検出されている。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	45	23	51	主　柱　穴
Ｐ２	33	26	63	〃
Ｐ３	29	27	60	〃
Ｐ４	26	22	64	〃

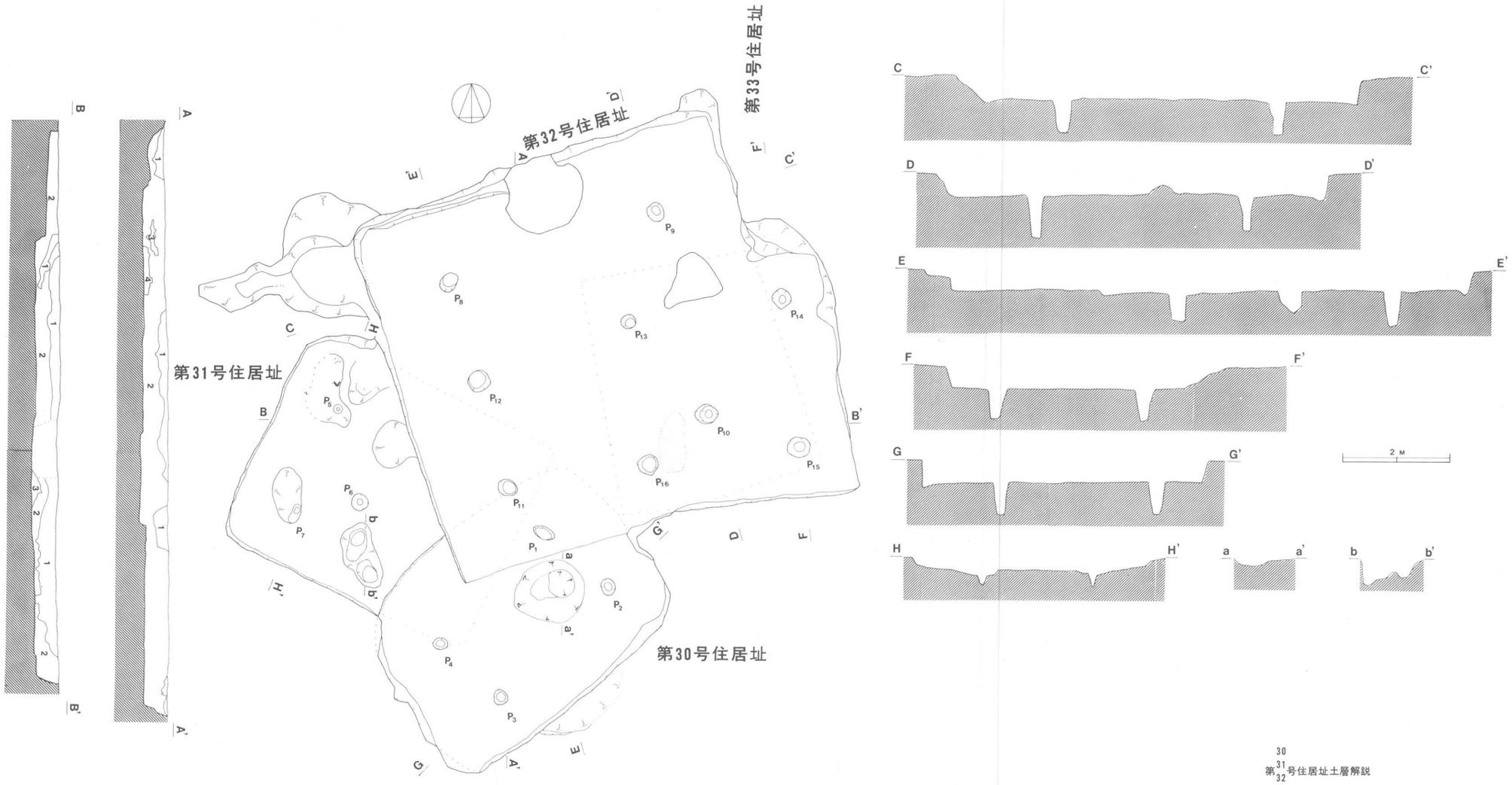
第31号住号址はＢ２ｂ４・Ｂ２ｃ４・Ｂ２ｃ３に確認され，Ｂ２ｃ４で第30号住居址に切られている。覆土はローム塊の混入した暗褐色土を呈する。

主軸方向はＮ―60°―Ｗで，やゝ隅丸かと思われる方形を呈する。長軸は5.1ｍで短軸は4.2ｍほどであろうか。西壁は22cm南壁22cmほどでほぼ垂直な立ち上りを見せている。北壁は約12cmほどで，攪乱のため立ち上りは明確ではない。

床はしまりがなくぼけている。ピットは３個ほど検出されているが，Ｐ５～Ｐ７が主柱穴と考る。炉址は床面中央で第32号住居址に切られているが，明瞭な炭化物は検出されなかった。

床の南側に土壙が見られ，底部は50cmほどの深さである。この土壙には，ピットが掘られた形跡がみられた。第30号住居址と複合する所に，灰黄色の粘土塊が検出された。

本住居址は成立時期に不明な点が多い。



第31号住居址土層解説

1 Hue7.5YR3/3 暗褐色土
2 Hue7.5YR3/4 暗褐色土
3 Hue7.5YR3/3 暗褐色土
4 Hue7.5YR3/3 暗褐色土

第71図　第30号住居址，第31号住居址，第32号住居址，第33号住居址実測図

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
P 5	15	14	31	主　柱　穴
P 6	31	31	18	〃
P 7	36	15	44	〃

第32号住居址はＢ２ａ５・Ｂ２ｂ６・Ｂ２ｂ５・Ｂ２ｂ４・Ｂ２ｃ５に確認され，第30号住居址・第31号住居址を切っているが，第33号住居址には切られている。

主軸方向はＮ―19°―Ｗで，7.6ｍ×7.1ｍの方形を呈する大型の住居址と推定される。西壁はわずかしかみられず，壁高は44cmほどである。北壁は40cmほどでやゝ外反して立ち上る。北壁には周溝がみられるが鮮明ではない。

床面は粘土が平均的にみられ，粘土張りの可能性も考えられる。ピットは４個ほど検出され，Ｐ８Ｐ９Ｐ11Ｐ12が主柱穴と考える。

北壁中央にカマドをもつ，床の覆土から土師で完形の杯形土器が２個ほど検出されている。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
P 8	41	30	68	主　柱　穴
P 9	34	32	65	〃
P11	35	30	53	〃
P12	44	42	42	〃

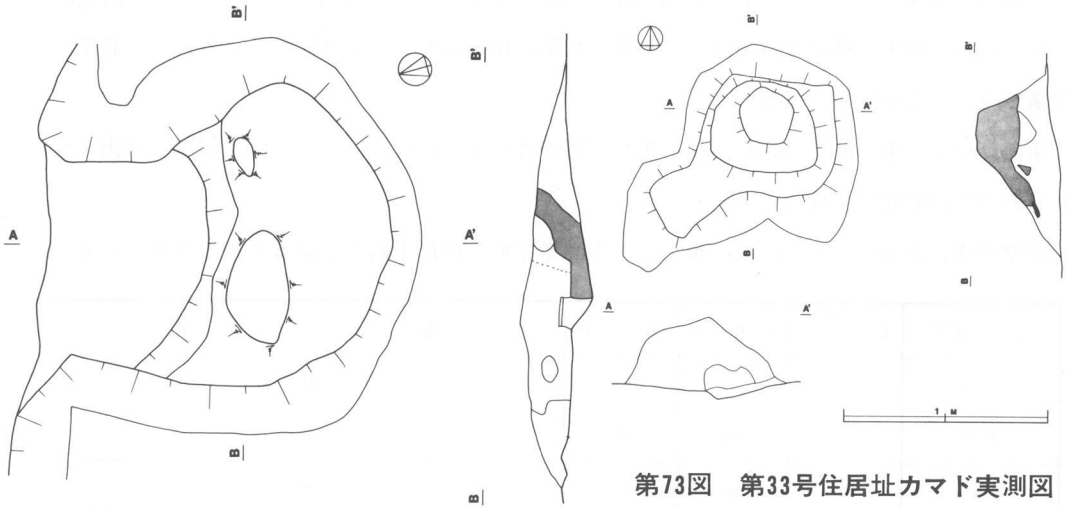
第33号住居址はＢ２ｂ５・Ｂ２ｂ６・Ｂ２ｃ６・Ｂ２ｃ５に確認され，第32号住居址を切っている。

主軸方向はＮ―９°―Ｗで，4.6ｍ×4.4ｍの方形のプランを呈する。床面には棒状の炭化物がみられ火災を受けたものと思われる。東壁は41cm，南壁46cm，北壁は47cmでほぼ垂直の立ち上りである。北壁は攪乱を受けている。

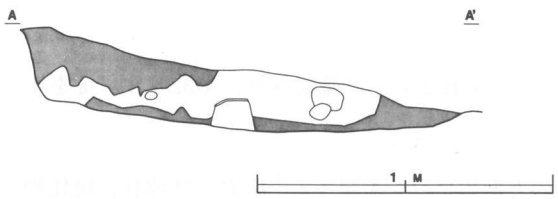
ピットは５個ほど検出され，Ｐ10及びＰ13～Ｐ16はそれぞれ主柱穴と考えられる。北壁中央部に破壊されたカマドがあり，Ｐ13の周辺には濃厚な遺物の散布がある。

本住居址群では，最も新しい住居址である。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
P10	32	31	81	主　柱　穴
P13	29	26	49	〃
P14	36	36	60	〃
P15	45	39	59	〃
P16	40	37	50	〃



第73図　第33号住居址カマド実測図



第72図　第32号住居址カマド実測図

第34号住居址（第74図）

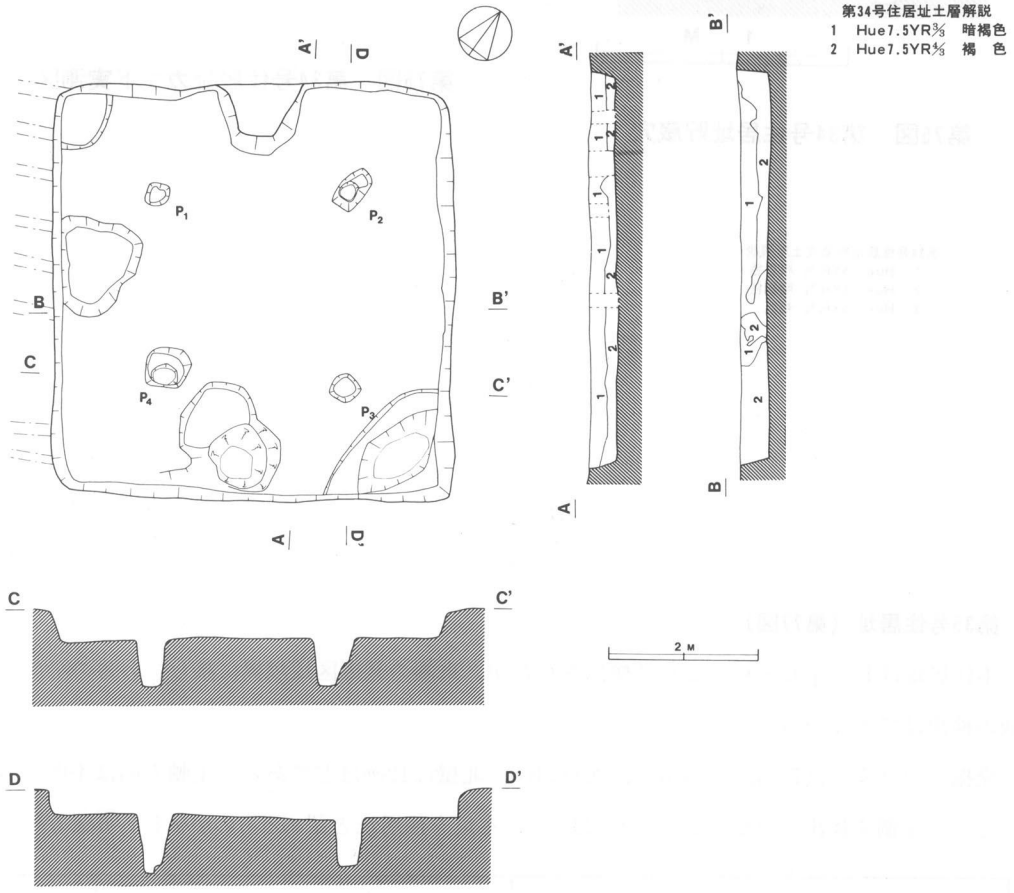
本住居址はＢ２ｆ７・Ｂ２ｆ８・Ｂ２ｇ７・Ｂ２ｇ８・Ｂ２ｈ７・Ｂ２ｈ８に確認され，覆土は第１層が暗褐色土，第２層が褐色土である。

主軸方向はＮ―33°―Ｗで，5.5ｍ×5.3ｍの方形を呈する。東壁41cm，西壁35cm，南壁43cm，北壁39cmで壁はわずかに外反して立ち上る。

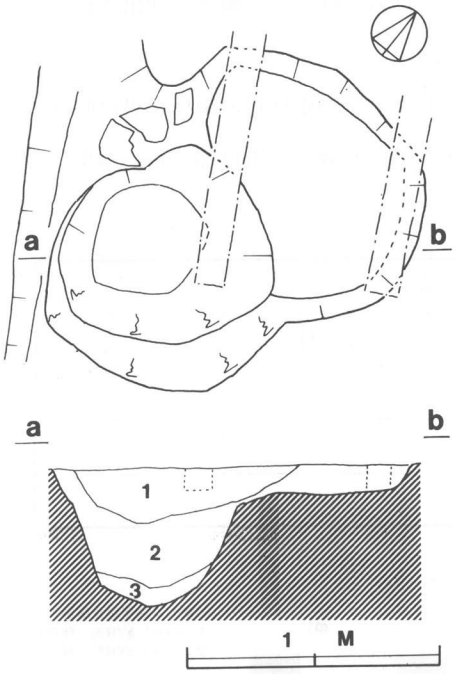
床はごぼうの耕作による攪乱がみられ，保存が悪くぼけている。柱穴は４個ほど検出され，対角線上にあるＰ１～Ｐ４が主柱穴と考える。

北壁中央にごぼう耕作により破壊されたカマドが検出された。その正反対の南壁中央に貯蔵穴を有する。カマドからは欠損した壺形土器，杯形土器が出土し，貯蔵穴の周口部から，須恵式の甕形土器胴部が検出された。

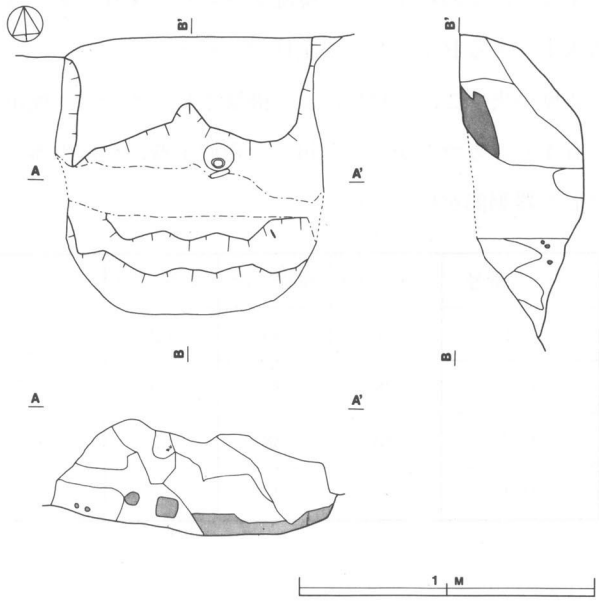
ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	37	33	62	主　柱　穴
Ｐ２	28	26	79	〃
Ｐ３	43	38	62	〃
Ｐ４	37	28	62	〃



第74図　第 34 号 住 居 址 実 測 図



第75図　第34号住居址貯蔵穴



第76図　第34号住居址カマド実測図

第34号住居址貯蔵穴土層解説
1　Hue7.5YR 3/3　暗褐色
2　Hue7.5YR 3/4　暗褐色
3　Hue7.5YR 4/4　褐色

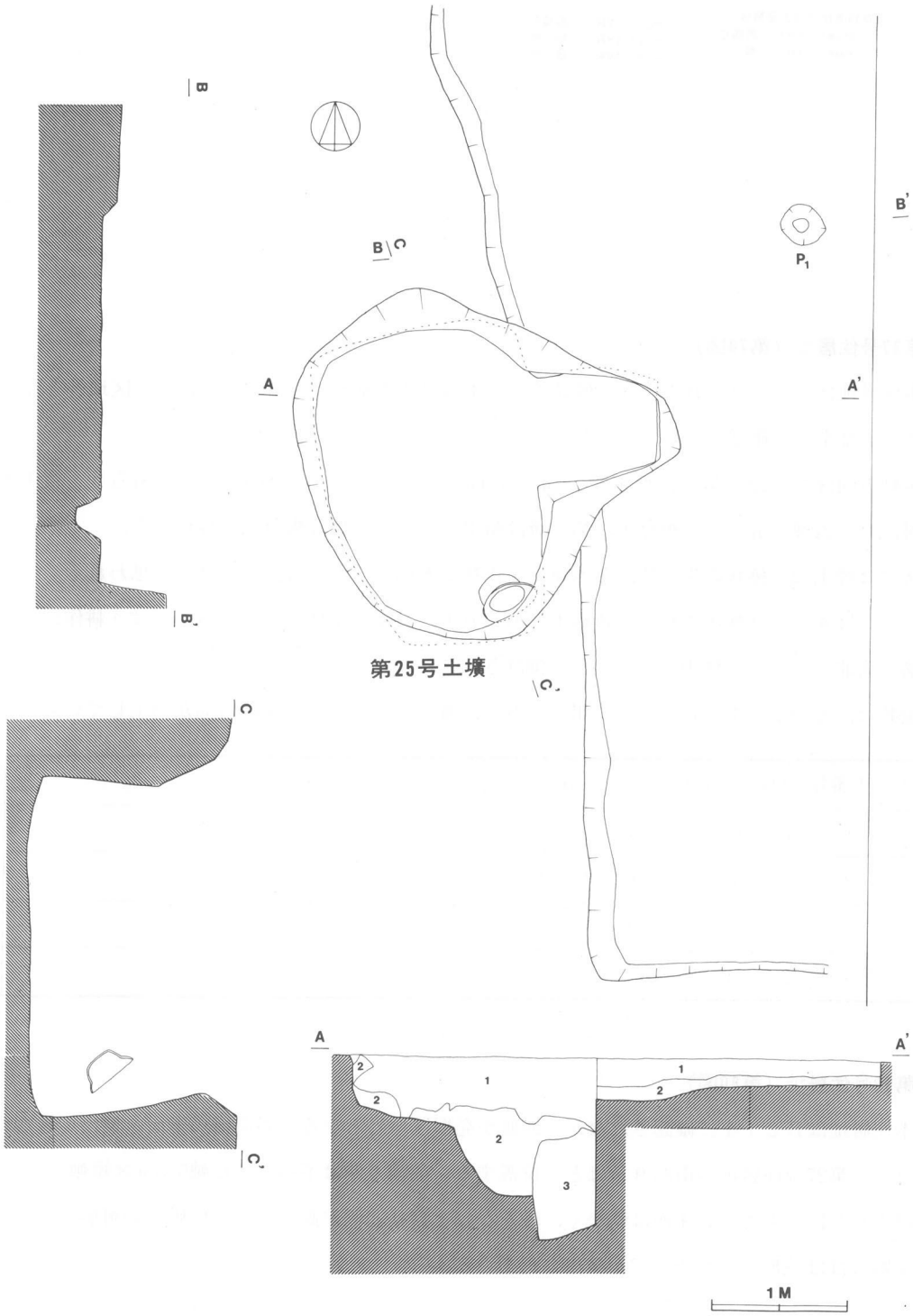
第35号住居址（第77図）

本住居址はＢ２ｊ０・Ｃ２ａ０に検出されたが，東端の発掘区域境界に接しているので床面全域の検出はできなかった。

発掘したプランは7.3ｍ×2.7ｍで，西壁21cm，北壁は12cmほどである。主軸方向は不明である。

ピット１個を検出したが，Ｐ１があるほかは，本址を住居址と認めるものがなく不明確である。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	33	28	18	



第77図　第35号住居址
第25号土　壙　実測図

第35号住居址土層解説
1　Hue7.5YR2/2　黒褐色
2　Hue7.5YR3/3　褐　色

第25号土壙(地下式壙)土層解説
1　Hue7.5YR2/2　黒褐色
2　Hue7.5YR3/4　褐　色
3　Hue7.5YR5/6　褐　色

第37号住居址（第78図）

本住居址はＢ１ｅ０・Ｂ１ｆ０に確認され，本遺跡の西端部に位置する。西側は区域外となるため住居址全面の確認はできなかった。

主軸方向はＮ―22°―Ｗで，推定で5.5ｍ×4.1ｍ？の方形プランを有するものであろう。覆土第１層はローム塊の混入した褐色土，第２層は暗褐色土で第３層は褐色土と堆積する。

床には焼土塊や棒状の炭化物，草木類の炭化物が充満しており火災を受けたと思われる。

ピットは４個ほど検出され，対角線上にあるＰ１～Ｐ４を主柱穴と考える。ごぼう耕作による条溝が南北に走り，北壁中央のカマドも攪乱されている。

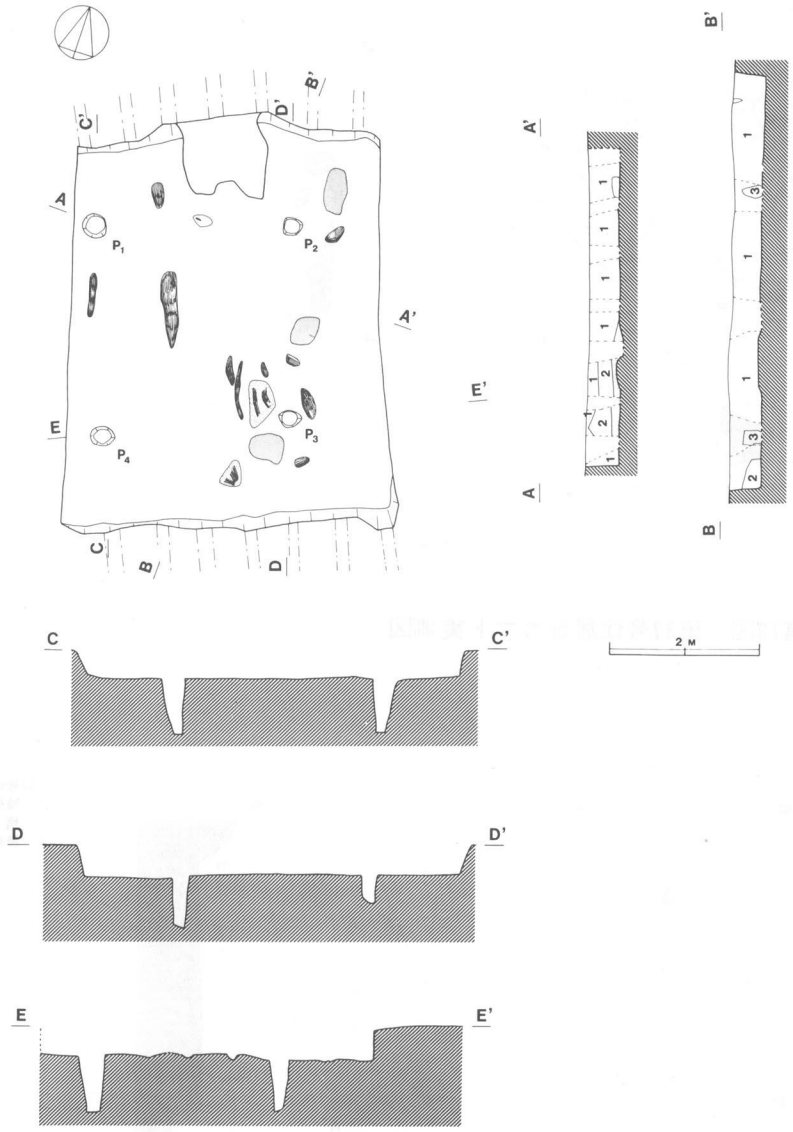
遺物は，カマド内部から欠損した坩形土器が，覆土から双孔の石製模造品が出土している。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	34	31	73	主　柱　穴
Ｐ２	28	26	39	〃
Ｐ３	30	24	67	〃
Ｐ４	34	26	75	〃

第38号住居址（第80図）

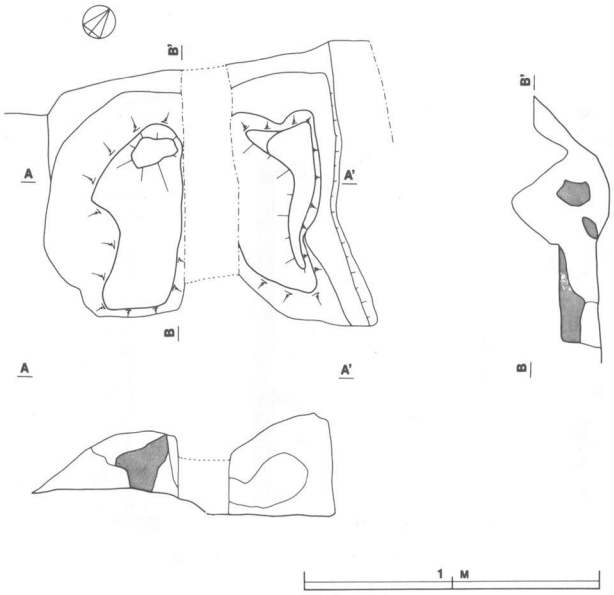
本住居址はＢ２ｉ１に確認されたが，西側が発掘区域外となるため遺構の全面を検出できなかった。　第27号住居址の南約９ｍほどに位置する。主軸方向は不明で，長軸5.3ｍ×短軸4.0ｍが計測されたにとどまる。床面は軟かく，段をなしており北側が高い。複合住居址の可能性もある。

土器はほぼ完形のミニチュアが検出されている。

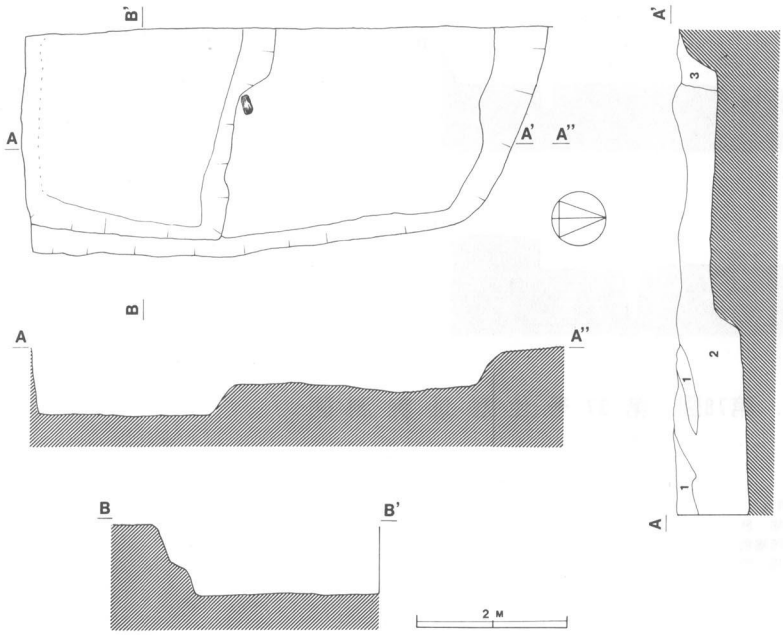


第78図　第 37 号 住 居 址 実 測 図

第37号住居址土層解説
1　Hue10YR3/4　褐　色
2　Hue10YR3/4　暗褐色
3　Hue10YR3/6　褐　色



第79図　第37号住居址カマド実測図



第38号住居址土層解説
1　暗褐色土
2　褐　色　土
3　黒褐色土

第80図　第38号住居址実測図

第36号住居址（第81図）

第39号住居址

第36号住居址はＡ２ｉ６・Ａ２ｉ７・Ａ２ｊ７・Ａ２ｊ６に確認され，本発掘区の北端に位置し，第39号住居址に切られている。表土はごぼうの耕作畑で，覆土は暗褐色土層である。

主軸方向はＮ－６°－Ｅで，5.5ｍ×5.3ｍの方形のプランを呈する。東壁53cm，西壁29cm，南壁43cm，北壁37cmでやゝ外反して立ち上る。床面は焼土層や炭化物がみられ，火災を受けていると思われる。

ごぼう耕作の条痕が東西に走り床面を攪乱しているが，床の保存は割合良いと思われる。

柱穴は４箇ほど検出され，Ｐ１～Ｐ４が主柱穴と考える。

北壁中央にカマドを有するが，耕作のため破壊されている。西南コーナー部に貯蔵穴をもつ。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	35	34	77	主　柱　穴
Ｐ２	38	29	70	〃
Ｐ３	28	28	72	〃
Ｐ４	32	26	85	〃

第39号住居址はＡ２ｉ５・Ａ２ｉ６・Ａ２ｊ６・Ａ２ｊ５に確認され，第36号住居址を切っている。覆土の第１層は暗褐色土で，第２層は褐色土である。

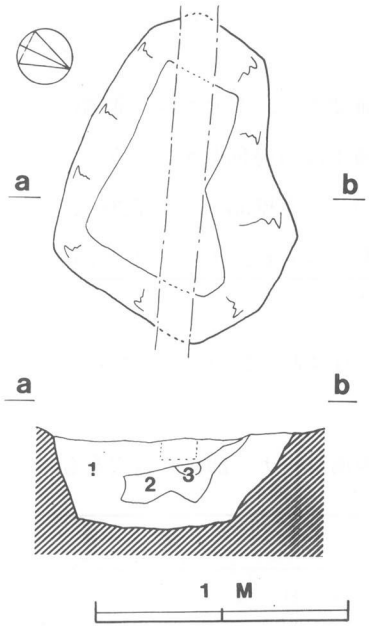
主軸方向はＮ－60°－Ｅで，4.6ｍ×4.3ｍの方形を呈する。東壁・西壁はともに32cm，南壁37cm北壁21cmでやゝ外反して立ち上る。

床面のしまりは悪くない。全面に焼土層，炭化物がみられ火災を受けたものと思われる。

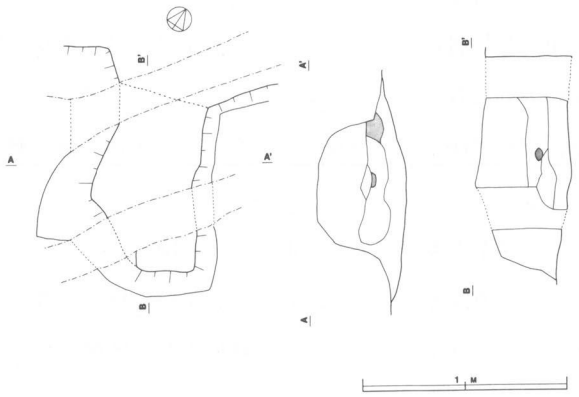
ピットは５箇ほど検出されたが，Ｐ１～Ｐ４が主柱穴であると考える。東壁にカマドを有し，北西コーナー部に貯蔵穴を持つ。カマドは耕作のため破壊されている。

本住居址の北側を囲むように，壁面と思われる遺構がみられたが明瞭ではなかった。

ピット番号	長径　cm	短径　cm	深さ　cm	備　　考
Ｐ１	43	37	63	主　柱　穴
Ｐ２	26	23	50	〃
Ｐ３	30	27	57	〃
Ｐ４	25	23	46	〃
Ｐ５	27	23	35	

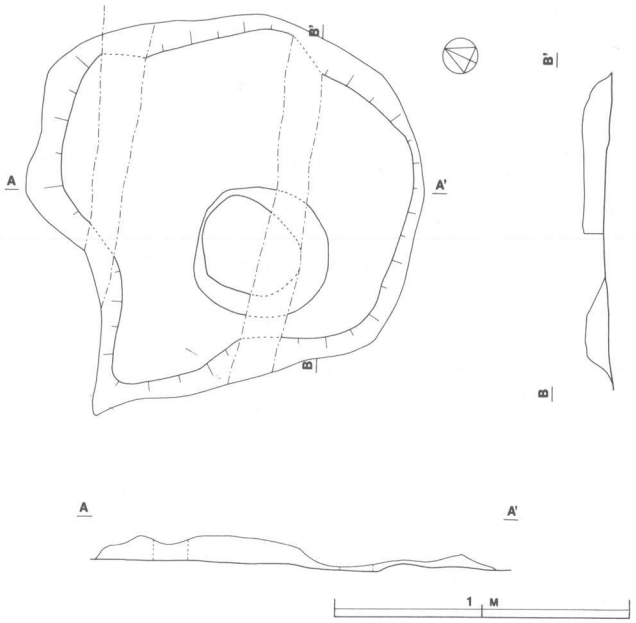


第82図　第36号住居址貯蔵穴

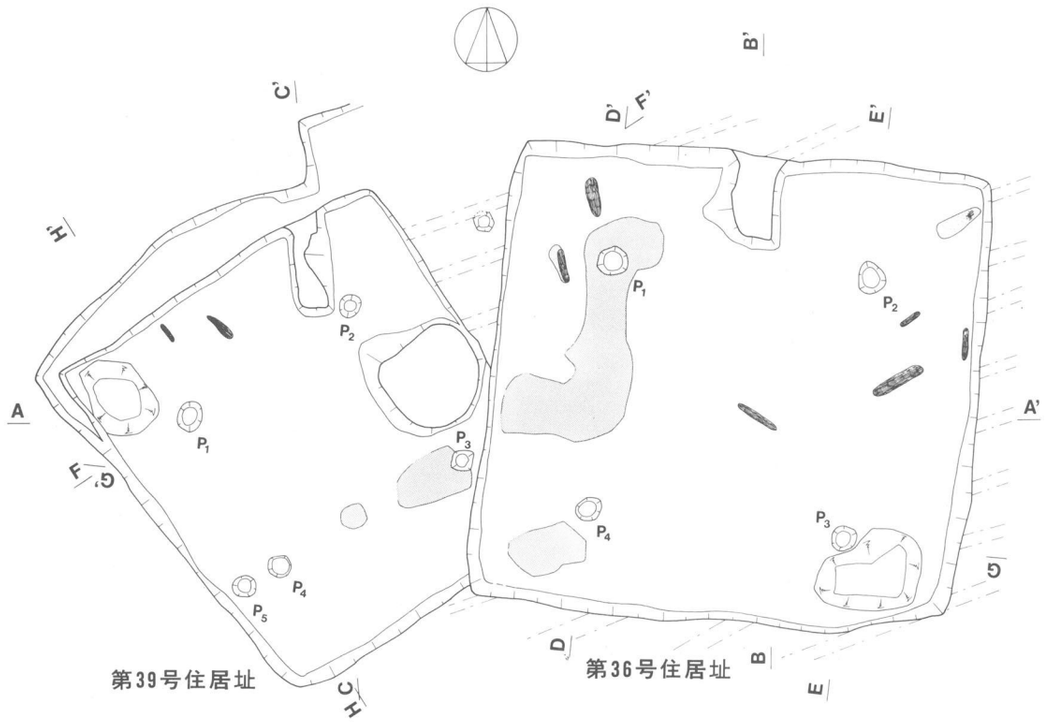


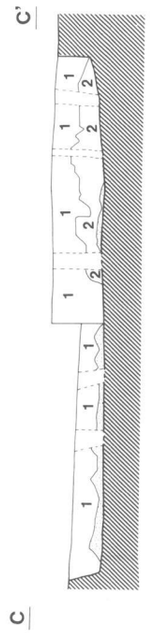
第83図　第36号住居址カマド実測図

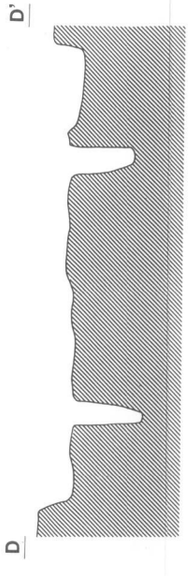
第36号住居址貯蔵穴土層解説
1　ローム混入
2　焼土混入
3　粘　土

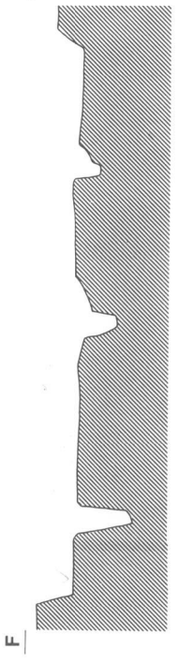


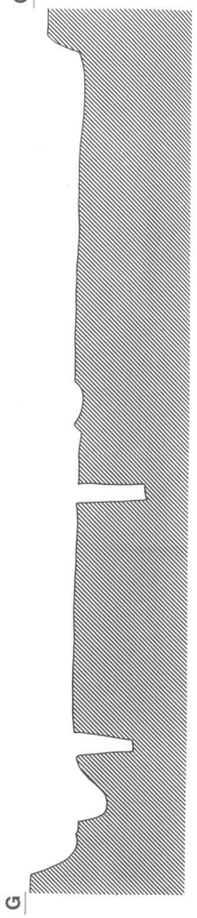
第84図　第 39 号 住 居 址 カ マ ド 実 測 図

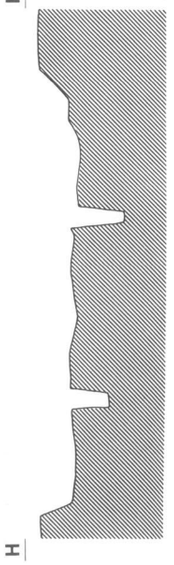


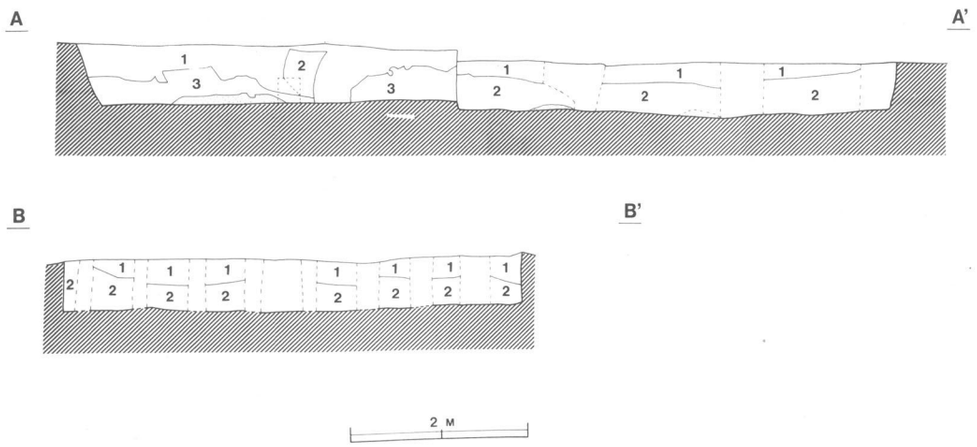












第36，39号住居址土層解説
1　Hue7.5YR3/4 暗褐色土
2　Hue7.5YR3/4 暗褐色土
3　Hue7.5YR3/4 褐 色 土

第81図　第36号住居址，第39号住居址実測図

畑田遺跡住居址一覧

住居址番号	平面形状	主軸方向	長軸×短軸m	貯蔵穴	柱穴数	カマド	炉址	備考
001	長方形	N—14—E	6.6×5.0	○				
002	方形	N—3—E	7.6×7.3	○	5	○		002>004
003	楕円形	N—3—E	4.8×4.2		4		○	弥生期
004	方形	N—43—W	8.8×7.7		1	○		
006	方形	N—38—W	6.6×5.8	○	2	○		(005欠番) 006>011
007	方形	N—33—W	5.5×4.8	○		○		
008	隅丸方形	N—40—E	5.1×4.2		5		○	弥生期
009	方形	N—37—W	6.0×5.9	○	4			
010	正方形	N—15—W	5.6×5.6	○	4	○		010>009
011	長方形	N—47—W	8.2×7.9	○	8			和泉期
012	長方形	N—49—W	4.6×4.3		4	○		012>011
012′	長方形	N—39—E	5.7×3.7					
013	方形	N—15—W	5.8×5.6	○	4	○		
014	正方形	N—5—W	5.5×5.5	○	3	○		
015	正方形	N—0—W	6.5×6.5	○	4	○		
016	方形	N—2—W	7.5×7.3	○	4			
017	方形	N—23—W	3.8×3.6	○		○		
018	方形	N—2—W	5.3×5.0		4			
019	楕円形	N—83—E	4.8×4.0		4		○	弥生期
020	長方形	N—3—W	4.5×3.3	○	1		○	020>021
021	方形	N—9—W	5.7×5.4	○	3			
022	正方形	N—30—W	5.3×5.2	○	4	○		
023	正方形	N—37—E	4.7×4.6	○	4	○		
024	正方形	N—3—W	5.8×5.7	○	1	○		柱穴確認されず
025	正方形	N—14—E	4.7×4.7	○	4	○		25 23>23
026	方形	N—36—W	5.3×5.1	○	4	○		
027	方形	N—45—E	6.7×6.5	○	4	○		27>27′>28
027′	方形	N—11—E	6.2×6.1		3			
028	方形	N—29—E	7.1×6.8		3		○	和泉期

住居址番号	平面形状	主軸方向	長軸×短軸m	貯蔵穴	柱穴数	カマド	炉　址	備　　考
029	方　　形	N—5—E	5.7×5.6	○	4	○		
030	隅丸方形	N—53—E	5.3×4.0		4		○	弥　生　期
031	方　　形	N—60—W	5.1×4.2		3		○	
032	方　　形	N—19—W	7.6×7.1		4	○		003＞032＞31 30
033	方　　形	N—9—W	4.6×4.4		5	○		
034	方　　形	N—33—W	5.5×5.3	○	4	○		
035	方　　形	?	7.3× ?		1			
036	方　　形	N—6—E	5.5×5.3	○	4	○		
037	方　　形	N—22—W	5.5×4.1		4	○		
038	?	?	5.3× ?					
039	方　　形	N—60—E	4.6×4.3	○	4	○		039＞036

2　土　壙

土壙は全体で25基検出されたが，そのうち調査されたものは15基である。形態は不定形・円形・楕円形を呈する。いづれも攪乱とみられる。

地下式壙が２基確認されている。

第17号土壙（第86図）

第18号土壙

第19号土壙

本土壙群はＢ２ｆ９・Ｂ２ｇ９・Ｂ２ｇ８に確認され，第６号住居址の東側に位置する。

第17号土壙は主軸方向Ｎ―54°―Ｅで，1.2ｍ×0.7ｍの不整形を呈し深さは0.4ｍほどである。覆土は褐色でローム塊が微量に混入している。土質はやわらかく，人為的に埋められた可能性がある。

第18号土壙は主軸方向Ｎ―０°―Ｅで，0.9ｍ×0.9ｍほどの円形を呈し，深さは0.4ｍほどである。覆土はローム塊を混入した褐色土で，底部のくぼみは攪乱をうけている。

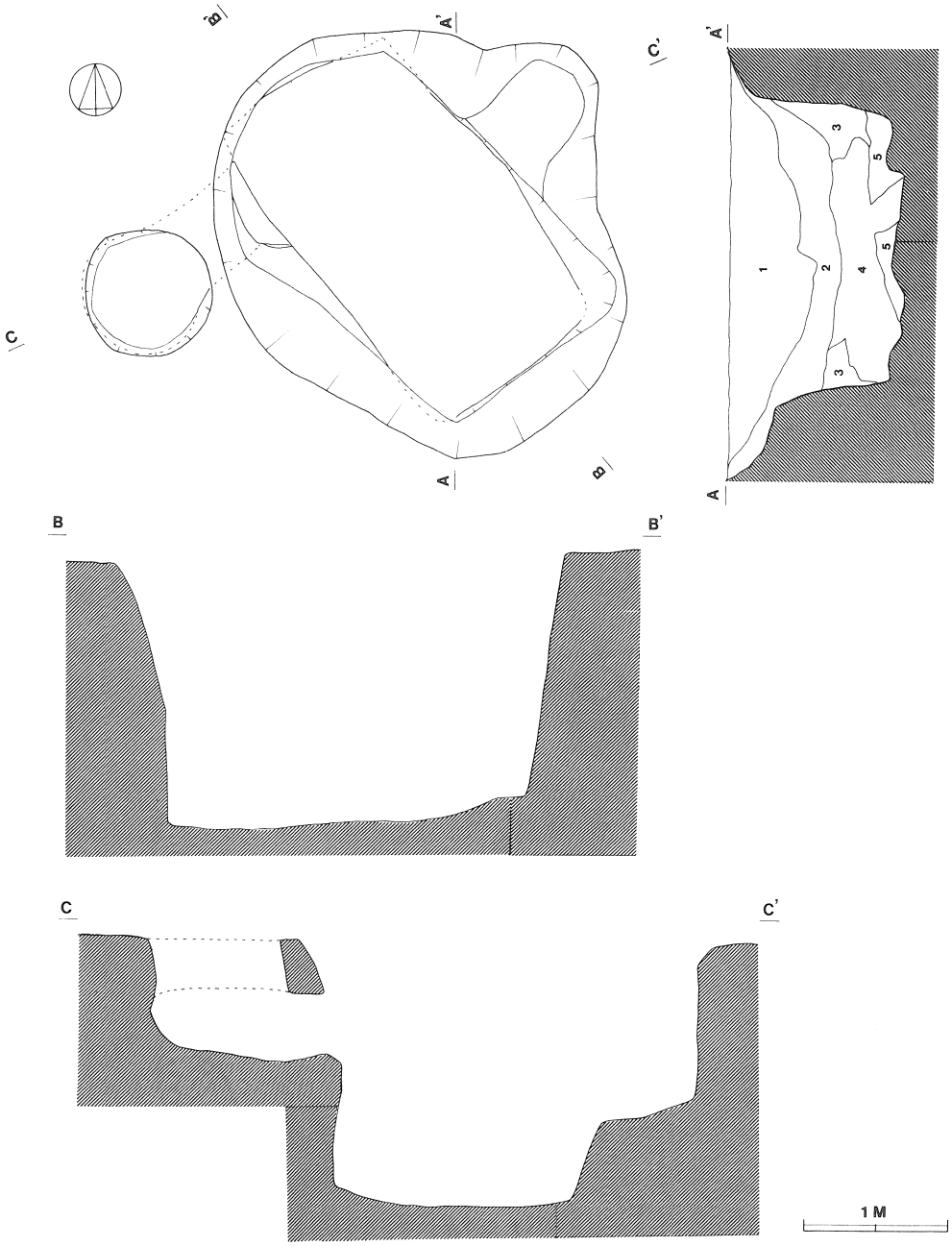
第19号土壙は主軸方向Ｎ―90°―Ｅで，2.8ｍ×1.4ｍほどの不整形を呈する。３個から４個の土壙が切り合っている状態で検出された。東側のくぼみ部が最も深く0.75ｍほどで，西側のくぼみ部は0.70ｍほどである。中央部のくぼみはやゝ浅く0.38ｍほどである。覆土はローム塊が微量に混入している褐色土で，土質はやわらかい。

第24号土壙（第85図）

（地下式壙）

本址はＤ２ｂ９・Ｄ２ｂ８に確認され，第13号住居址の西北２ｍほどの所に位置する。天井部はすべて落ち込んでおり，側壁と底面が検出された。プランは楕円形を示すもので，床面は平坦で固い。東側入口部は，床より0.5ｍほど高く，0.8ｍ×0.5ｍほどの広さである。床は2.6ｍ×1.5ほどで長方形を呈する。壁高は四方とも共に1.8ｍほどを測る。西壁には，床から，1.0ｍほどの高さの所に，トンネル状の掘り込みがみられ，その長さは1.4ｍほどである。トンネルのなかの床は割に平坦で棚状である。このトンネルは発掘の終末期に土が陥没した。出土遺物は，わずかな土器片（土師）以外にはなにも検出されなかった。

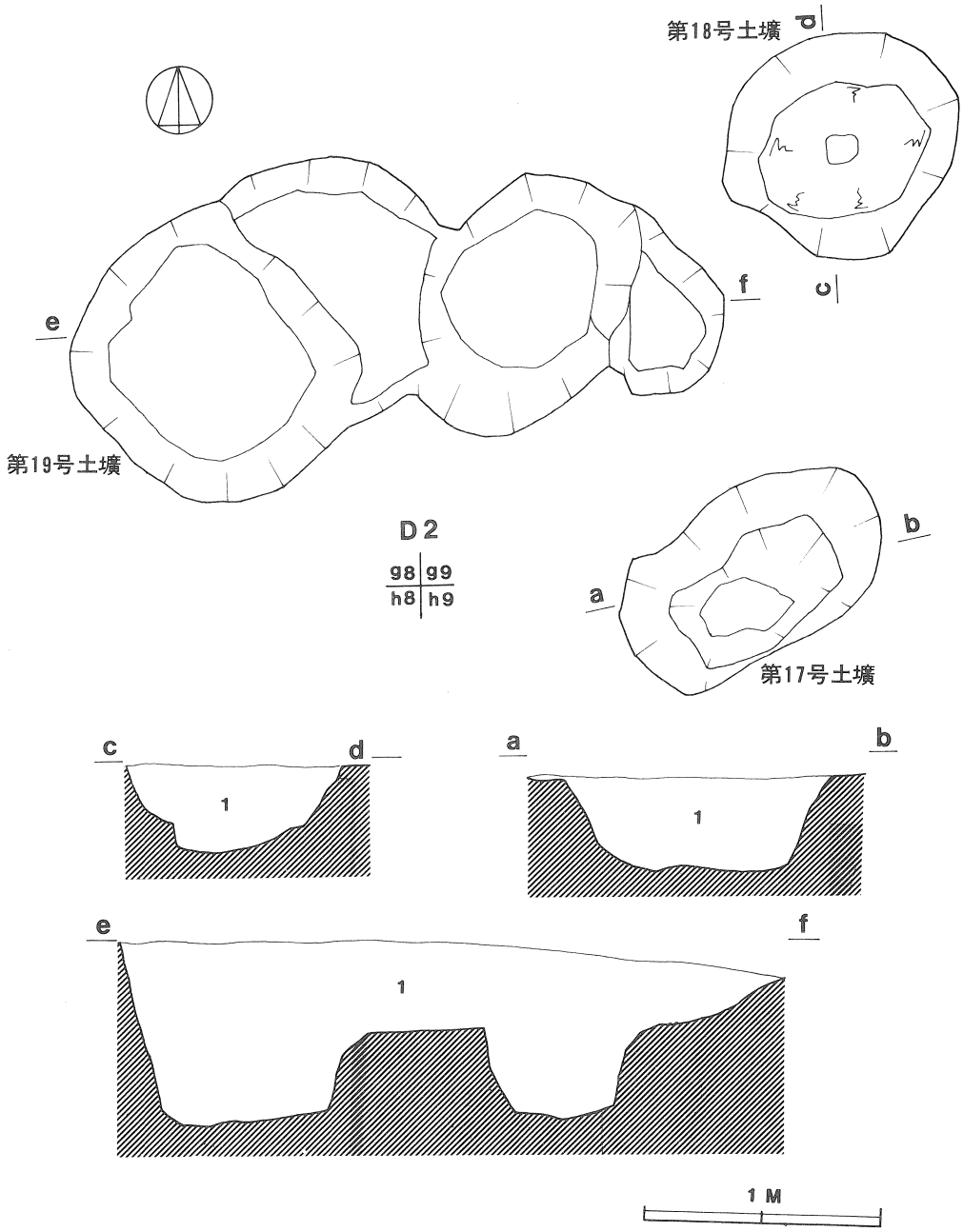
入口部に段を有し，主体部と直接につながる形式のものと考える。



第85図　第 24 号 土 壙 実 測 図

第24号土壙(地下式壙)土層解説

1　ローム塊混入黒褐色土
2　暗褐色土
3　褐 色 土
4　ローム塊混入黒褐色土
5　ローム塊混入暗褐色土



第86図　第17号土壙，第18号土壙，第19号土壙実測図

第17号土壙土層解説
1　ローム塊混入褐色土

第18号土壙土層解説
1　ローム塊混入褐色土

第19号土壙土層解説
1　ローム塊混入褐色土

第25号土壙（第77図）

（地下式壙）

本址はＣ２ｊ０に確認され，第35号住居址を切りこんでいる。天井部はすべて落ち込んでおり，側壁と底面のみ検出された。プランは凸字形を示すもので，床は平坦でしまっている。東側入口部は床面よりわずかに低い。入口部と主体部は直接つながるものと考える。床は2.3ｍ×1.6ｍほどで，入口部は0.9ｍ×0.8ｍ，主体部の方は長方形に近い。壁高は四方とも1.5ｍほどで，ほぼ垂直に近い。南壁コーナー部で床から0.5ｍほどの高さの所に，鉄鍋がやゝ上向きの状態で検出された。３個の内耳をもつもので，発掘約２週間後に自然破損した。（現在復元している。）

鉄鍋については，被葬者の頭部を覆ったものといわれる。

参考文献

埼玉県遺跡発掘調査報告書第８集鶴ヶ丘

1979.5　伊知波良２　本邦地下式壙の類型学的研究

3　溝

第１号溝（第87図）

本遺跡にみられた溝は第１号溝のみである。本溝は発掘区のＣ２区において東西を過ぎる。Ｃ２ｃ０・Ｃ２ｃ９・Ｃ２ｃ８・Ｃ２ｂ７・Ｃ２ｂ６・Ｃ２ｂ５・Ｃ２ｂ４・Ｃ２ａ３・Ｃ２ａ２に確認され，第18号住居址の北側，第17号住居址の北コーナー部，第26号住居址の北コーナー部を夫々切りこんでいる。覆土の第１層は暗褐色土又は黒褐色土を呈し，第２層はローム塊を微量に混入する褐色土である。

1.0ｍ～1.2ｍほどの巾員で，Ｖ字状に掘り込まれ底部は10～15cmほどである。溝の東西のレベルは西端部がやゝ高く，中央部東よりで一旦低くなり東端で又高くなる。その差は約９cm以内である。溝の内部には特に何もみられなかった。

遺物としては，土器片錘１個，土玉１個，須恵の杯形土器片のほか鉄銭等が検出された。

本溝は，生活面に伴う用水路的なものか，或いは地域を分ける境界としてのものであるかは不明である。

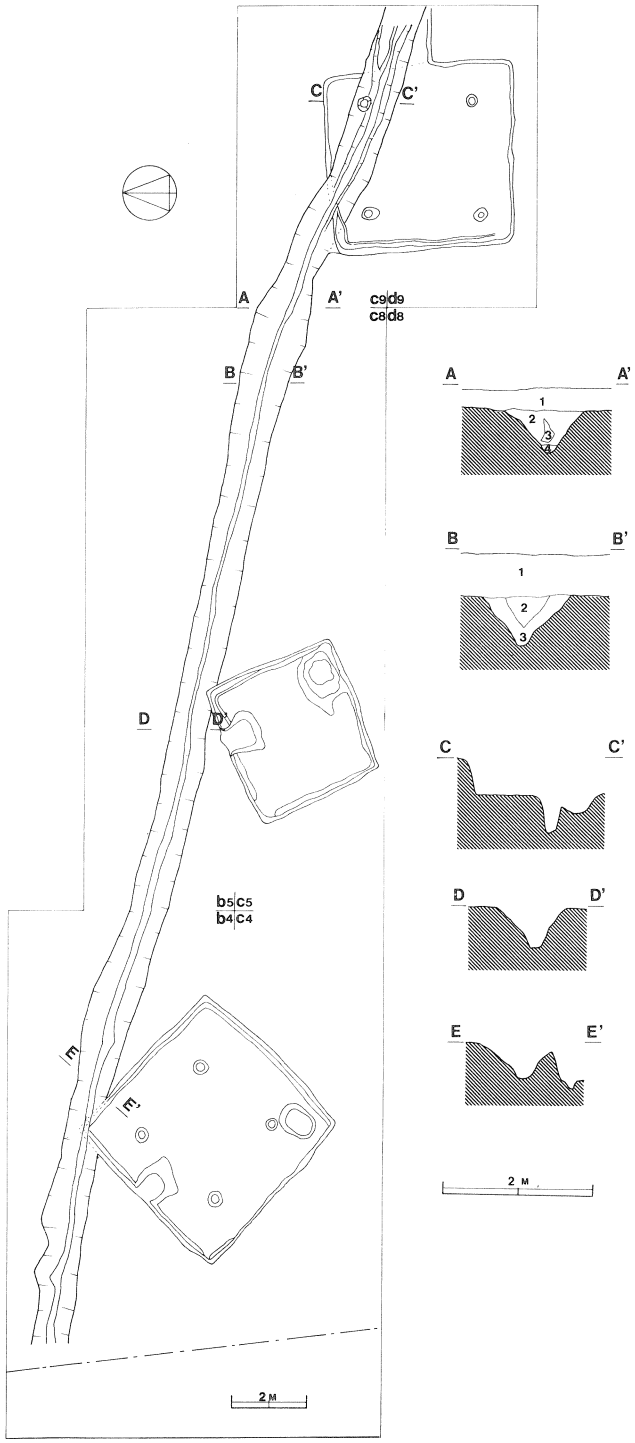
土　壙　一　覧

番号	位　置	主軸方向	形　状	長軸×短軸m	深さ	覆　土	備　考
1	E2e8	N—40—W	不整形	0.90×0.75	0.09	ローム塊混入，暗褐色土	攪　乱
2	E2c8	N—2—W	方　形	0.94×0.86	0.30	ローム塊混入，褐色土	〃
3	E2c8	N—40—E	方　形	0.97×0.76	0.30	〃	〃
4	E2a8	N—45—E	不整形	1.05×0.79	0.30	ローム塊混入，暗褐色土 草木類の灰層あり	〃
8	E2a7	不　明	不　明	0.67×　?	0.35	ローム塊混入，暗褐色土	発掘区西端 攪　乱
10	D2j7	N—0—E	円　形	0.65×0.55	0.30	〃	攪　乱
11	D2j7	N—0—E	?	1.0 ×　?	0.45	〃	発掘区西端 攪　乱
12	E2a9 D2j8	N—0—E	円　形	0.60×0.52	0.14	〃	攪　乱
14	E2a8	N—45—W	不整形	0.90×0.89	0.17	暗褐色土，ローム微量混入	〃
17	D2h9	N—54—E	〃	1.20×0.70	0.40	〃	〃
18	D2g9	N—0—E	円　形	0.95×0.95	0.40	ローム塊混入，褐色土	〃
19	D2g9 D2g8	N—90—E	不整形	2.80×1.40	0.75	褐色土，ローム塊微量混入	〃
20	D2e9 D2f9	N—0—E	円　形	2.60×2.50	1.05	暗褐色土，ローム塊混入	〃
21	D2e9	N—70—E	円　形	2.45×2.00	1.10	褐色土，ローム粒子混入	〃
23	D2f0	N—0—E	円　形	0.70×0.68	0.20	暗褐色土	〃
24	D2b8 D2b9	N—49—E	不整形	3.10×2.95	1.80	暗褐色土，ローム塊混入	地下式壙
25	B2—j0	N—18—E	不整形	2.65×2.80	1.50	黒褐色土，暗褐色土	〃

（欠番　5，6，7，9，13，14，15，22）

第１号溝住居址土層解説

	1	Hue7.5YR	3/3	暗褐色
	2	〃		褐色
A	3	〃	3/	暗褐色
	4	〃	4/3	明褐色
	1	〃	3/3	暗褐色
B	2	〃	〃	〃
	3			褐色



第87図　第１号溝実測図

4　遺　物

1．住居址出土の遺物

第1号住居址出土土器（第88図1～2）

1は土師式の壺形土器で，住居址の覆土中から検出された。口径13.4cm器高24cm底径は6cmを測る。器表，器内共に磨滅がはげしく，又全体に煤の付着がみられる。器色は橙色を呈する。箆削りのあと刷毛なで調整がなされたものと思われる。胎土は砂粒・石英を含み焼成はわるい。

2は土師式壺形土器の口縁部で覆土中から検出された。口径14.8cm現存器高は7cmほどである。胴部上位から口縁部にかけ「く」の字形に外反する。色調はいわゆる素焼色で，胎土はスコリアを含み焼成は普通である。

第2号住居址出土土器（第88図4～7）

4は床面から出土した土師式高杯形土器で，器体の約40%が現存している。口径12cm器高8.8cm底径8cmで口縁部がわずかに内彎する。胎土には砂粒を含み色調はにぶい橙色，焼成は良い。箆削り，なで調整，脚の内部は未調整で輪積みあとがみられる。赤色の着色がみられる。

5は覆土中から検出された土師式の高杯形土器で完存率は25%，推定で口径19cm器高15cmほどで口縁部は外反する。胎土は石英を含み，にぶい橙色で器表は箆整形で刷毛なでの調整，脚内部に輪積みあとが残る。橙色の着色がみられる。

6は覆土中から検出された土師式甑形土器で65%ほど現存している。器高は22cm口径22cmで最大巾が胴部上位で口径とほぼ同じである。底径は8cmを測る。胎土はスコリア・石英を含み，橙色で焼成は普通。内部には輪積み痕がのこり，器表は箆削りである。胴部に煤の付着がみられる。

7はカマドから出土した土師式の碗形土器で，口径10cm器高10.5cm。最大巾は胴部中央で12cm，広口で口縁部がわずかに外反する。胎土はスコリアを含み，にぶい黄橙色を呈する。焼成は普通。器表は磨耗してざらいているが箆削りであろう。煤の付着がみられる。完存率は60%。

第3号住居址出土土器（第88図8）

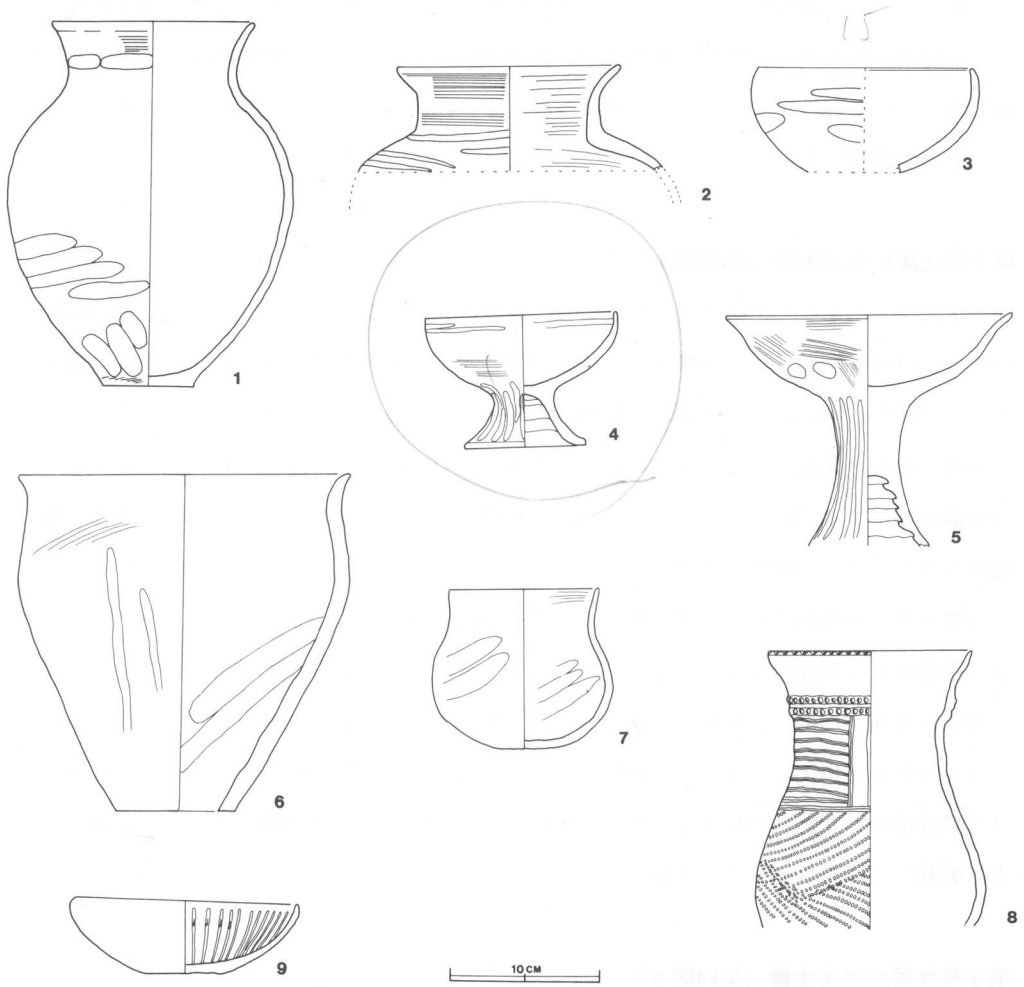
8は炉址にかかる床面から出土した弥生式の壺形土器で，口径13.6cm器高は推定で30cmほどで完存率は45%ぐらいである。胴部の最大巾は15.4cmで胎土は砂粒を含み，色調はにぶい黄橙色を呈し，口縁部は外反しつつ口唇部でわずかに内彎する。焼成は堅緻で良好である。

口唇部に箆状工具による刻み目を有し，頸部には指頭や工具により押圧された隆帯がある。頸部の櫛描文は3本づつで縦位に3条，横位には8～9条みられる。胴部には羽状縄文を施文する。

十王台式併行もしくはその前後のものであろう。

第４号住居址出土土器（第88図９）

９は床面から出土した土師式の杯形土器で口径15cm器高５cm底径５cmを測る。胎土には砂粒・砂礫を含み焼成はやゝ軟かい。色調は橙色を呈すると思われるが，かなり摩耗している。箆磨き，なで調整が施されている。



第88図　住居址出土遺物（その１）

第６号住居址出土土器（第89図１～12）

１は覆土から出土した土師式の坩形土器である。口縁部が½ほど欠損している。口径9.6cm器高

8cm底径は4.7cmほどである。胎土は砂礫を含み，色調は橙色で焼成は良好である。口縁部はなで整形，胴部下位は右回りの削りであろうか。

2は貯蔵穴から出土した土師式の甑形土器である。口径24cm器高20cm底径は8cmほどの完形品である。胎土には砂礫を含み，色調は明褐色で焼成は良い。口縁部はなで，胴部の器表は篦磨き，器内は縦位に篦で削り，それをすり消している。この甑の中には7の土師式高杯形土器が挿入されていた。

3は覆土から出土した土師式の壺形土器で口縁部が$\frac{2}{3}$ほど欠損し，胴部下位も欠損している。色調はにぶい橙色で，胎土に砂粒を含む。焼成は普通である。器内は摩耗し，ざらざらしている。

4は貯蔵穴から出土した土師式の高杯形土器で，口径11cm器高8.5cm底径は8cmを測る。口縁部はやや内彎し，胴部はやや張出している。明赤褐の塗色がみられ，胎土は砂粒を含み焼成はやや軟かい。削りのあと篦なでで整形している。本器は完形品である。

5は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径13.5cm器高は5.2cmである。色調は橙色で，胎土に砂礫を含む。焼成は良好で，口縁部は外反し胴部にわずかに稜がある。口縁部はなで整形，胴部は篦磨き，器内部は右廻りに刷毛目痕が見られる。ほぼ完形である。

6は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径12.2cm器高5.2cmほどである。口縁部は垂直に立ち上り，胴部に稜がある。色調は橙色で内面は煤が付着する。胎土に砂礫を含み，焼成は良好である。口縁部はなで整形，胴部は器表・器内とも篦磨き。ほぼ完形である。

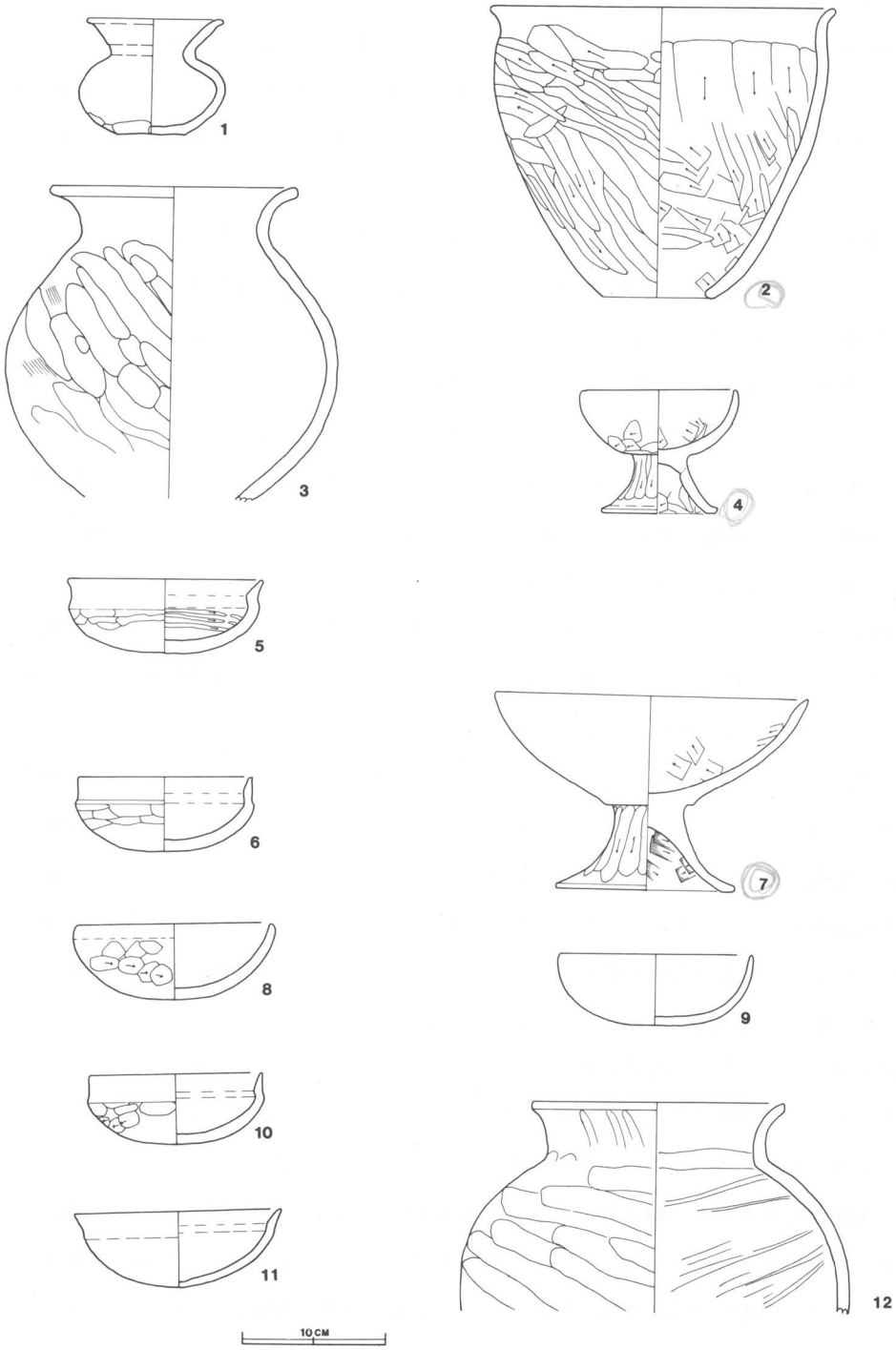
7は前記2に記した土師式の高杯形土器である。口縁部は鉄鉢形にひらき，口径22cm器高13.6cm底径は12.5cmほどである。色調は明褐色であるが，朱色の塗付がある。胎土には砂礫・スコリアを含み焼成は普通である。頸部の接合部に稜がみられる。削りのあとなで調整。完存は60%。

8は床面中央に，5と並んで出土した土師式杯形土器である。口径14.2cm器高5.3cmで口縁部はやや内彎する。器表は浅い黄橙色で，赤色の塗付がある。胎土に砂礫を含み，焼成は良好。器表は篦磨き整形，器内はなで整形。ほぼ完形である。

9は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径13.8cm器高5.2cmを測る。
口縁部はわずかに内彎する。底部に煤が付着するが色調は橙色で，胎土は砂礫を多く含み焼成は良好である。器表・器内ともなで整形で丁寧な作りである。ほぼ完形。

10は床面から出土した土師式杯形土器で，器高12.4cm器高は4.9cmを測る。口縁部はほぼ垂直で，胴部から口縁部にかけて稜をもつ。色調は明褐色であるが，器表の大部分は黒褐色に変色している。胎土は砂礫を含み，焼成は良好である。器表は篦磨き整形，器内も同様である。ほぼ完形である。

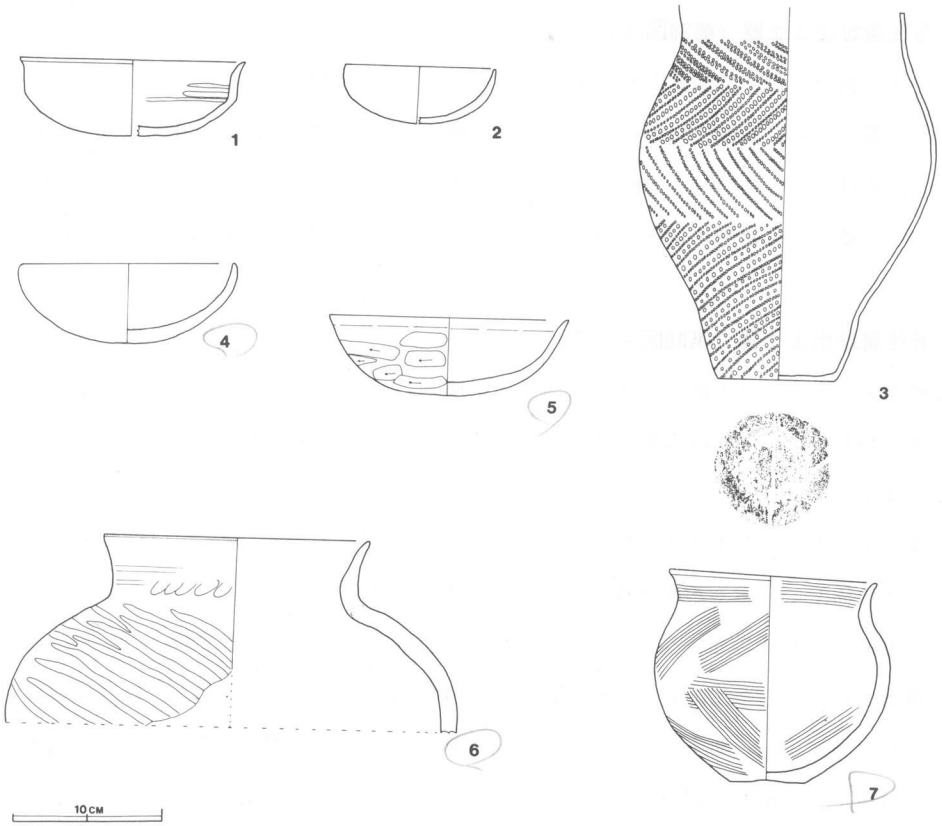
11は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径14.6cm器高は5.3cmを測る。口縁部は外反し，赤色の着色がある。器表は橙色で，胎土は砂粒を含み焼成は良好である。器表・器内ともなで整



第89図　住居址出土遺物（その2）

形。完形品である。

12は覆土中から出土した土師式の壺形土器である。完存率は約10%なので，推定では口縁部の径は17cmほどと思われる。胴部上位から口縁部にかけて「く」の字形に外反する。色調は橙色を呈し，胎土にスコリア・石英を含む。焼成はやや軟らかい。篦削りの整形で器内は摩耗し，ざらついている。



第90図　住居址出土遺物（その3）

第7号住居址出土土器（第88図3，第90図1～2）

第88図の3は床面から出土した土師式の杯形土器で完存率は25%である。推定口径14cmほどで口縁部はやや内彎する。色調はにぶい橙色である。胎土には石英粒子を含み焼成はやや軟らかい。表面は摩耗しているが，篦削りのあとはなで調整によるものであろう。

1は床面から出土した土師式の杯形土器で，完存率は55%である。口径は15cmほどで，口縁部は垂直に立ち上り口唇部は外反する。胴部中位に稜がみられ，器高は5cmほどである。色調は橙

色で，胎土に石英粒子・スコリアを含み焼成は普通よりやや硬い。器表は植物繊維を用いた痕がある。

2は不明位置から出土した土師式の杯形土器で，口径10cm器高3.5cmほどを測る。口縁部はやや内彎して立ち上る。色調は明褐色を呈し，胎土には石英及びスコリアを含み焼成は硬い。

肌荒れしている。完存率は75%ほどである。

第8号住居址出土土器（第90図3）

3は住居址検出のために設定された東西のベルトの直下，調査区分で4区の床から出土した弥生式壺形土器である。頸部・口縁部を除いては一個体をなす。推定器高は30cmほどで，胴部最大径は20cm，底径は7.7cmである。胴部上位から底縁部まで羽状縄文が施紋されている。色調は明褐色を呈し，胎土には砂粒の混入がみられる。底部に木葉痕を有し焼成は堅緻にて良好である。

第9号住居址出土土器（第90図4～7）

4は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径14.7cm器高5.4cmを測る。口縁部は内彎し，赤色の着色があるが，本体は赤褐色である。胎土には砂礫を含み，焼成は良好である。器表は磨きで器内はなで調整である。

5は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径16cm器高5.2cmを測る。口縁部は外反するが全体的には鉄鉢型である。器表は黄橙色を呈し，胎土は砂礫を含み焼成は良好である。胴部に箆削のあとがあるが摩耗している。器内はなで整形。完存率は70%であろうか。

6は覆土から出土した土師式の壺形土器で，口縁部と胴部上位が現存する。口縁部の現存径は17.5cmでやゝ外反する。胎土にはスコリア・石英粒子を含み焼成はやや硬い。色調は橙色を呈する。作りは箆による削りが斜位にみられ，器の内部は肌荒れしている。

7は床面から破片の一部が，他は覆土中から出土している土師式の壺形土器で，口径13.8cm器高13.7cm底径4.8cmほどである。器形はやや歪形しており，口縁部は「く」の字に外反する。色調はにぶい橙色で，胎土は砂粒を含み焼成は軟らかい。箆削りのあとの刷毛目がのこる。器表はざらついている。底部にも刷毛目痕がある。完存率は65%。

第10号住居址出土土器（第91図1～7）（第92図8～35）

1はカマド東側の床から出土した土師式の円窓付壺形土器で，口径18.2cm器高23.5cm底径は8.8cmを測る。器形はやや歪み，口縁部は「く」の字に外反する。胴部最大巾は24cmほどで，中ほどに直径8.2cmほどの円窓がみられる。これは一旦整形した後に箆で削りとったものであろう。

器表はにぶい橙色で，煤の付着がみられる。胎土は砂粒を含み，焼成は良好である。器表・器

内とも箆削りの後，入念な箆磨きで整形している。完形品である。

2は貯蔵穴周口から検出された土師式の高杯形土器で，本遺跡出土遺物の高杯形土器のうち最も大型のものである。口径30cm器高22cm，底径は16.5cmを測る。口縁部は朝顔状に外反し，胴部下位に稜をもち器形はやや歪形する。器表は黄橙色で，赤色塗料の塗付が褪色して残る。成形は脚内部に輪積みの痕が9～10条ほど残り，箆磨き整形を入念に施している。胎土は石英粒子・スコリアを含み焼成はやや軟らかい。口縁部が$\frac{1}{5}$ほど欠損している。完存率85%ほどである。

3は床面及び覆土にほぼ一個体分が検出された土師式の壺形土器で，口径20.7cm器高31cm底径6.9cmと大型である。口縁部は「く」の字に外反し，歪形する。器表は赤褐色を呈し，胴部下位には灰褐色に変色した所がある。胎土は砂粒・砂礫を含み，焼成は良好である。胴部は摩耗しているが箆整形の痕がのこっている。口縁部はなで調整。完存率は80%ほどである。

4は覆土から出土した土師式の甑形土器で，口径26cm・器高21.5cm底径6.3cmを測る。
胴部から頸部にかけて稜をもち，口縁部は外反する。器表は橙色で，口縁部の内側に赤色塗料の塗付がみられる。胎土は砂礫を含み，焼成はやや軟らかい。器表胴部下位に掌大の煤の付着がある。器表はざらついているが箆削りのあと刷毛で調整している。器内は箆整形。

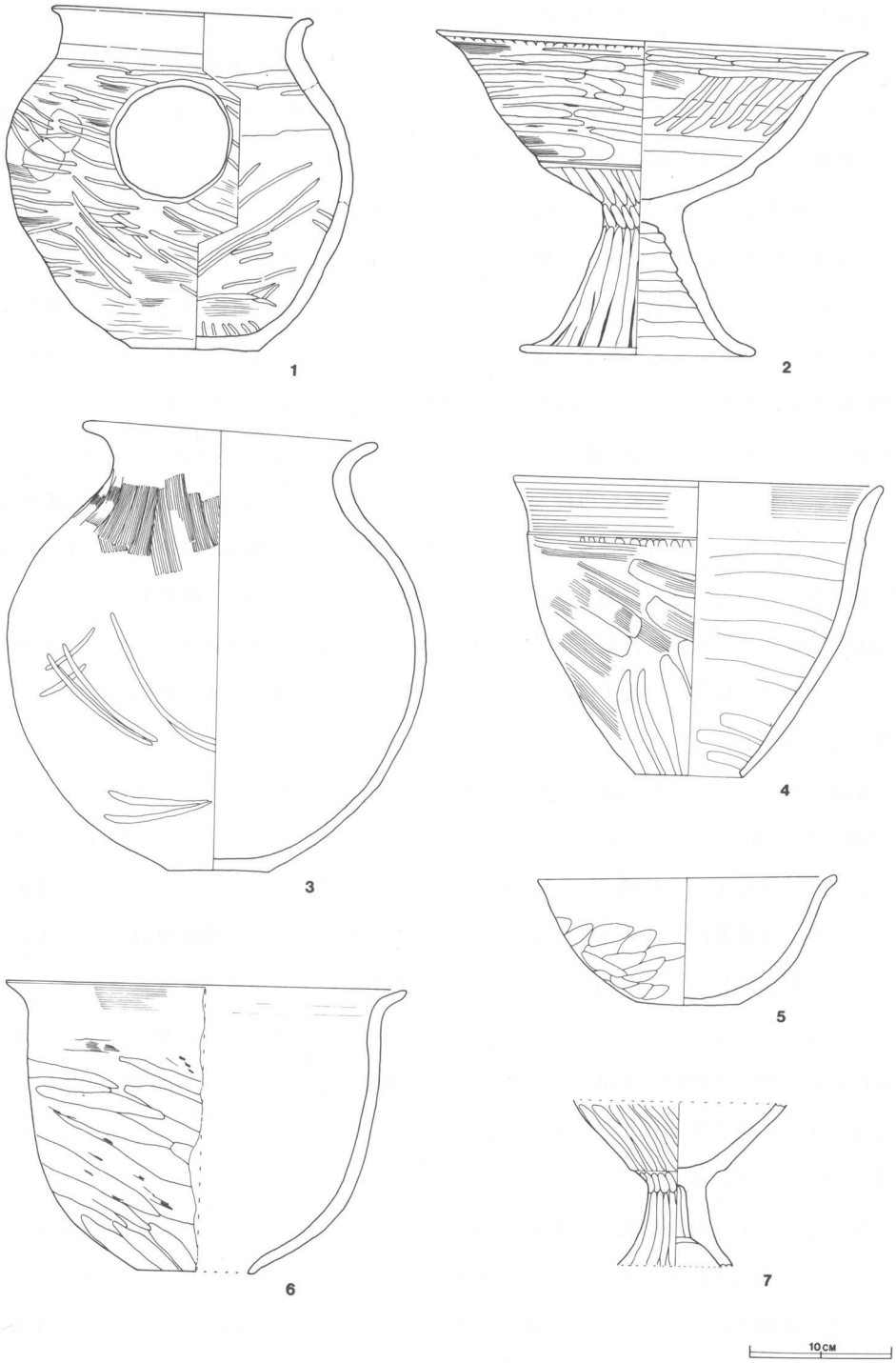
5は南側の床面から検出された土師式の鉢形土器で，口径21cm器高8.8cm底径7cmを測る完形品である。器表は赤橙色で，胎土は砂礫・スコリアを含む。焼成は良好。胴部は箆削り，口縁部と器内はなで調整。

6は貯蔵穴内から出土した土師式の甑形土器で，概ね半個体分（40%）が現存している。推定で口径28cm器高20cm，底径は8cmほどを測る。胴部は上位から下位までほぼ同径で，口縁部は「く」の字形に外反する。色調はにぶい橙色で，胎土にはスコリア・石英粒子を含み焼成はやや軟らかい。器表は肌荒れしているが斜位の箆削りがなされている。植物繊維痕がよく残る。

7はカマド東側のピットから出土した土師式の高杯形土器で，口縁部・底部を欠損している。現存する口径は15cmで，器高は11.5cm底径は8cmである。器表はにぶい赤褐であるが，赤色の着色がみられる。胎土は砂粒と多量のスコリアを含み焼成は普通である。胴部下位に稜があり，口縁部は外反するものと思われる。整形は箆磨きであろうか。出土位置からみて，カマド内で二次的に使用されたと考える。

8は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径12.6cm器高5.2cmを測る。口縁部は「く」の字形に外反し，胴部上位から頸部にかけて丸みのある稜をもつ。器表はにぶい橙色を呈し，胎土に砂粒を含み焼成は軟らかい。底部は煤けて黒色を呈する。胴部に箆なでがみられ，底部は未調整である。ほぼ完形に近い。

9は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径は13.2cm器高は5.5cmである。口縁部は直立し，胴部上位から頸部にかけて稜をもつ。色調は灰黄色で，胎土に砂粒を含み，焼成はやや軟ら



第91図　住居址出土遺物（その4）

かい。口縁部はなで調整。完存率は90%である。

10は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径は13.8cm器高５cmほどである。器表は褐色を呈し，胎土は砂粒を含む。焼成はやや軟らかい。口縁部及び器内はなで調整，底部外側は調整されていない。完存率は80%である。

11は床面から出土した土師式の杯形土器で口径13.4cm，器高5.8cmほどである。胴部上位から頸部にかけて稜をもち，口縁部はわずかに外反する。色調はにぶい赤褐色を呈し，胎土は砂礫を含む。焼成はやや軟らかい。口縁部になで調整がみられ，底部外側は未調整。完存率は70%ほどである。

12は覆土中から出土した土師式の杯形土器で，口径13cm器高5.8cmほどである。色調は灰黄褐色を呈し，胎土は砂粒を含み焼成は軟らかい。口縁部になで調整がみられ，底部内側はなで調整してあるが，外側は未調整。完存率は90%である。

13は貯蔵穴内から出土した土師式の杯形土器で，口径13.2cm器高は4.7cmほどである。胴部上位から頸部にかけて稜をもち，口縁部はわずかに外反する。色調はにぶい黄橙色で，胎土は砂礫・スコリアを含み焼成は良好である。口縁部の内側は箆磨き，外側はなで調整。底部内側には放射状の箆磨きがみられ，外側は箆削りで完形である。

14は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径は13.1cm器高は5.0cmほどである。色調はにぶい褐色で，胎土は砂礫を含む。焼成は良好。口縁部は内・外ともになでのあと磨き，底部外側は箆削りのあと指頭による調整。完形である。

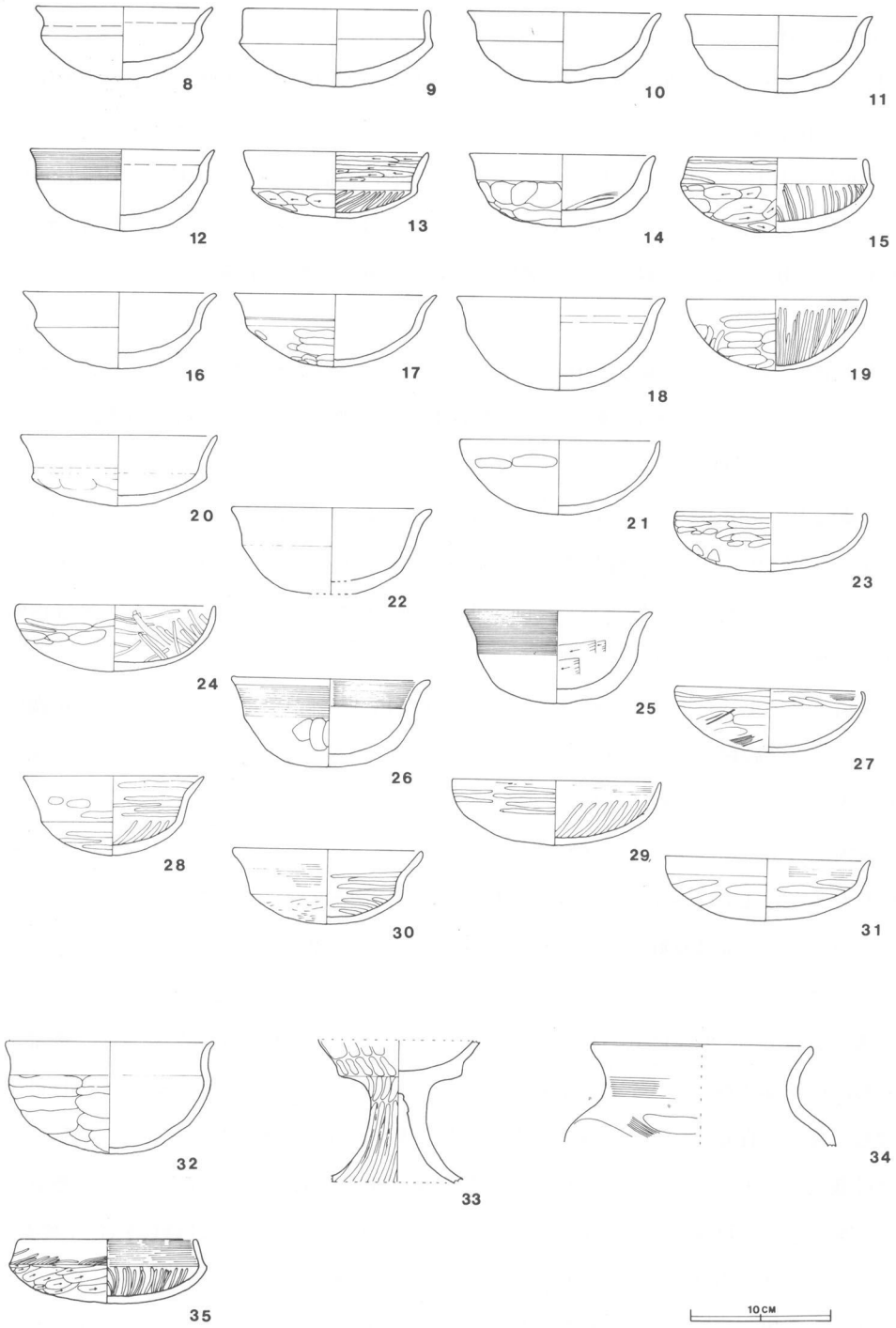
15は床面から出土した土師式の杯形土器である。口径は12.6cm，器高は5.2cmほどで，胴部上位に稜をもち，口縁部は内傾する。器表は黒色を呈し，内部はにぶい黄褐色を呈する。胎土は砂礫･スコリアを含み焼成は良好。口縁部は内外共なでのあと箆磨き，底部は内側は箆磨き，外側は箆削り，ほぼ完形であろう。

16は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径13.8cm，器高は5.4cmほどである。胴部上位に稜をもち，口縁部は外反し「く」の字形を呈する。色調はにぶい褐色を呈し，胎土には砂礫・砂粒を含む。焼成は良好である。口縁部は内外共なで調整，底部は未調整。完存率は70%である。

17は貯蔵穴から出土した土師式の杯形土器で，口径14.5cm器高は５cmほどである。胴部上位にわずかに稜をもち，口縁部は外反する。色調はにぶい黄橙色で，胎土には砂粒を含み，焼成はやや軟らかい。口縁部は内外共になで調整，底部内側はなで調整，外側は箆削り。完形である。

18は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径14.9cm器高は6.6cmほどである。形は椀形で口縁部はゆるく外反する。色調は灰褐色で，胎土は砂粒・砂礫を含み焼成は軟弱である。口縁部に内外共なで調整が施され，完存率は90%であろうか。

19は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径は12.8cm器高は5.0cmである。口縁部は橙色



第92図　住居址出土遺物（その5）

を呈するが，総体的に黒褐色に変色している。胎土には砂粒・砂礫を含み焼成は良好である。口縁部は内外共になで調整，底部内側は篦磨き，外側は篦削り，完形である。

20は床面から出土した土師式の杯形土器である。口径は14cm，器高は50cmほどで，胴部上位に稜をもち口縁部は外反する。色調は器表はにぶい褐色で，器内は橙色であろうか。胎土には砂礫・砂粒を含み，焼成は良好である。口縁部は内外共なで調整，底部外側は削りと思われるがかなり摩耗している。完存率は90％であろうか。

21は床面から出土した土師式の杯形土器である。口径は14.2cm，器高は5.2cmほどである。形状は鉄鉢形で，器表はにぶい褐色を呈する。胎土は砂粒を多く含み，焼成はやや軟弱である。口縁は内外共なで調整で，底部外側は篦削りのあと磨いている。完形品である。

22は床面から出土した土師式の杯形土器である。口径は14.3cm，器高は6cmで口縁部はやや外反する。胴部上位にわずかに稜をもつ。色調はにぶい赤褐色，胎土には砂粒を含み焼成はやや軟弱。口縁部は内外共なで調整，底部は未調整のままである。完存率は80％であろうか。

23は床面から出土した土師式の杯形土器である。口径は13.9cm，器高は4.2cm，深皿形で口縁部はわずかに内彎する。器表はにぶい赤褐色であるが，底部は黒変している。胎土は砂粒・砂礫を含み焼成は良好である。口縁部内側はなで調整，底部の内部は磨いている。外側は篦削りでほぼ完形に近い。

24は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径14.2cm，器高は4.7cmほどである。23と同じ形状で口縁部はほぼ直立であろうか。器表は黒色を呈し，器内はにぶい褐色である。胎土には砂粒・砂礫を含み，焼成は良好である。口縁部は内外共横なでで，底部は内側が篦磨き外側は篦削りである。ほぼ完形である。

25は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径13.4cm，器高は6.6cmである。胴部上位にわずかに丸みのある稜をもつ。口縁部は外反し，作りは厚手である。色調は黒褐色を呈し，胎土には砂粒を含み焼成はやや軟弱と思われる。口縁部は内外共なで，底部は内側は篦なで，外側は未調整である。完存率70％。

26は貯蔵穴から出土した土師式の杯型土器である。口径は14.2cm，器高は6.3cmで胴部上位はわずかに稜をなす。口縁部は外反し色調は橙色である。胎土には砂粒を含み焼成は軟らかい。口縁部は内外共なで調整，底部は篦なでか。外側は摩耗が激しく，完存率は70％である。

27は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径は13.4cm，器高は4.5cmである。口縁部はやや内彎する。色調は浅黄色を呈し，胎土には石英・砂粒を含む。焼成は硬い。口縁部内外共に篦なでで底部外側は肌荒れをしている。ほぼ完形である。

28はカマド内から出土している土師式杯形土器である。色調は黒色で，胴部上位に稜をもち，口縁部は外反する。口径は13.5cm，器高は5.5cmほどである。胎土は砂粒を含み焼成は硬い。ほぼ

完形である。箆なでの調整がみられ作りは丁寧である。

29はカマド内から出土した土師式杯形土器である。口径は13.5cmで器高は5.2cmである。色調は橙色で，胎土にはローム粒子，砂粒を含む。焼成は普通である。軽量で，ほぼ完形である。箆なでの調整が内・外側にある。

30はカマドから出土した土師式の杯形土器である。口径は14.8cmで，器高は4.5cmである。器表はにぶい橙色であるが，一部褐灰色に変色している。胴部上位に稜をもち，口縁部は外反する。器内は箆なで，器表はなで調整。底部外側は摩耗しているが，植物繊維痕がみられる。ほぼ完形である。

31はカマドから出土した土師式の杯形土器である。口径は14.5cm，器高は4.8cmである。口縁部はほぼ直立する。器表・器内共箆なで調整がみられる。色調はにぶい黄橙色で，赤色の着色がみられる。胎土は砂粒を含み，焼成は軟らかい。ほぼ完形である。

32は貯蔵穴から出土した土師式の椀形土器である。口縁部はわずかに「く」の字形をなす。色調は灰黄褐色だが，黒褐色の焼けむらがある。胎土には砂粒及びスコリアを含み，焼成は普通。箆削りで整形しているが摩耗している。完存率は65％である。

33はカマド内から出土した土師式の高杯形土器で，口縁部と底部は欠損している。胴部との接合部は稜をなす。現存部の口径は11cm器高10cm底径は９cmほどで色調は明赤褐色を呈する。
赤色の着色があり，胎土は砂礫・スコリアを含む。整形は箆なでが見られる。

カマド内で二次的に用いられたものと考える。完存率は45％。

34は貯蔵穴から出土した土師式の壺形土器の口縁部である。胴部の中位以下を欠損している。現存の口径は15cmである。胴部上位より口縁部にかけて「く」の字形に外反する。器表は変色しているが原体は橙色と思われる。胎土はスコリア及び石英粒子を含む。焼成は軟らかい。

35は床面から出土した土師式の杯形土器である。口径12.5cm，胴部の最大径は胴部上位の稜の所で14cmを測り，器高は4.5cmほどである。口縁部は内傾する。器表は橙色で，器内は褐色である。胎土は砂粒・石英を含み，焼成は軟らかい。口縁に内外共なでのあと磨き，底部は内側は箆磨き，外側は箆削りである。完形品である。

第11号住居址出土土器（第93図１～３，５～７）

１は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径15cm器高4.8cm，底径は4.2cmほどである。器形は歪形しているが，底部を有する。胎土には砂粒・砂礫を含み焼成は軟らかい。完存率は70％。

２は覆土から出土した杯形土器で，口径14.3cm器高4.8cmである。わずかに底部を有し，径は1.5cmほどである。器内は赤褐色，器表は黒変している。胎土には砂粒を含み，焼成は普通より硬い。完存率75％。

3は覆土から出土した土師式の杯形土器である。口径は13.5㎝，器高は4.5㎝で，底部の推定径は3.5㎝ほどである。器内は橙色，胴部は赤色の器表が黒変している。胎土には石英粒・スコリアを含み焼成はやや硬い。完存率75％。

5は覆土から出土した土師式の杯形土器で底部を欠損している。口径は15㎝と推定され，現存する器高は5㎝ほどある。口縁部はやや内彎する。器表は橙色を呈し，胎土には石英を含み焼成はやや硬い。胴部は篦削りであろう。完存率25％。

6は覆土中から出土した土師式の高杯形土器の脚部である。色調は橙色で，胎土はスコリア・石英を含み焼成は硬い。脚部中ほどの径は4㎝ほどある。

7は同じく覆土から出土した土師式の高杯型土器の脚部で，中ほどの径は3.8㎝ほどである。にぶい橙色を呈し，胎土はスコリアを含み，焼成は硬い。

第12号住居址出土土器（第93図4，8～15）

4は床面から出土した土師式の杯形土器である。推定で口径14㎝，器高は5㎝ほどであろう。色調は器表は黒色で摩耗している。胎土には石英粒子を含み，焼成は硬い。植物繊維痕が胴部にある。完存率は35％。

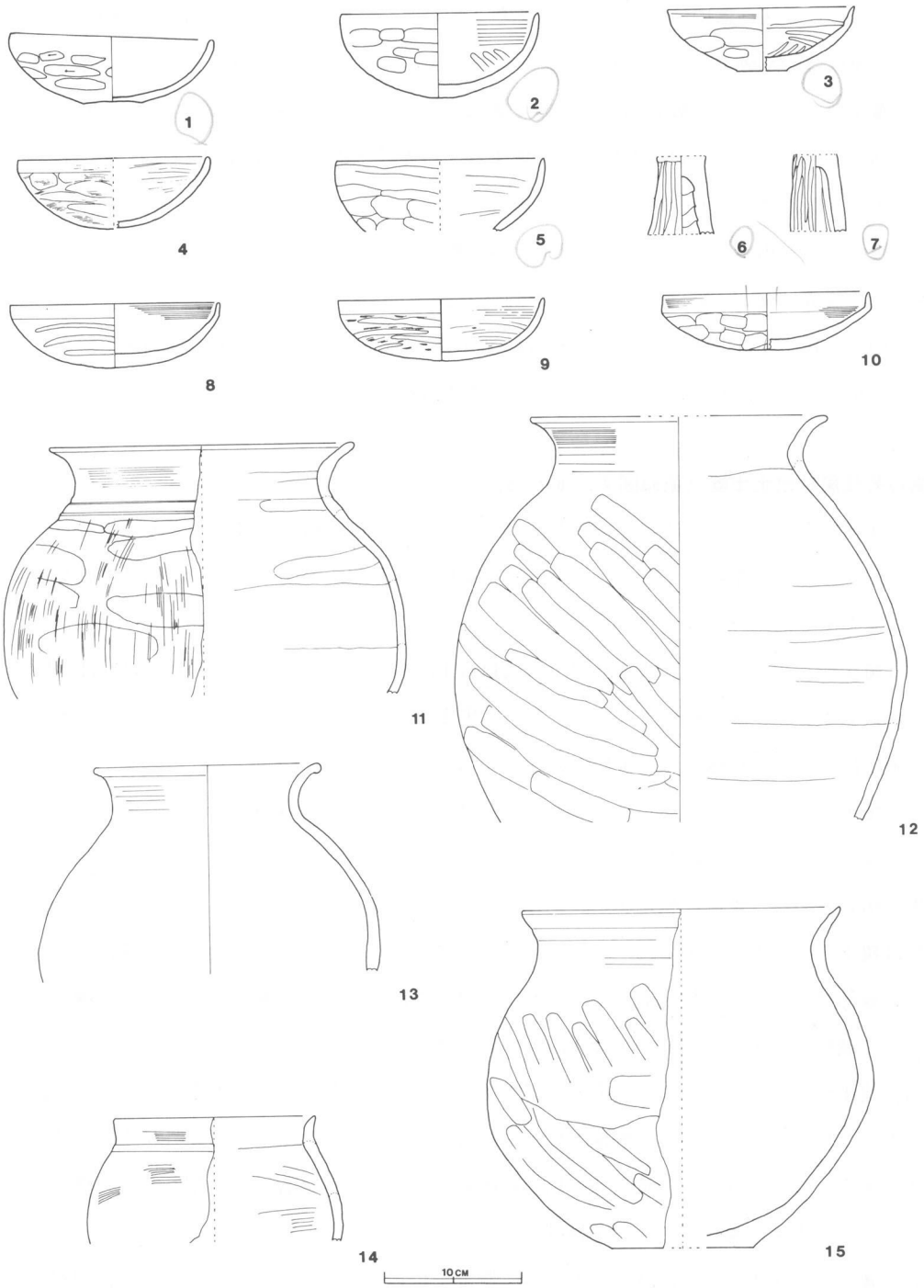
8は覆土から出土した土師式の杯形土器で口径15.2㎝，器高は4.6㎝である。口縁部は胴部上位から直立する。色調は橙色であるが，器内は黒変する。胎土はわずかに石英を含み，焼成は硬い。胴部は篦なで，口縁はなで調整。完存率80％。

9は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径15㎝，器高は4.5㎝である。胴部から口縁部にかけゆるく内彎する。器厚は均一で色調は橙色，胎土にはスコリア及び石英粒子を含み，植物繊維を用いている。焼成は軟らかい。完存率85％。

10は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径15㎝，器高は4㎝である。色調はにぶい褐色で，口縁部は黒変する。胴部上位に稜をもち，口縁部は直立する。胴部は篦削り，口縁部の内外共になで調整。胎土にスコリアを含み，焼成は普通。完存率は55％。

11は覆土から出土した土師式の壺形土器で胴部中位以下を欠損する。推定で口径は22㎝，現存部の器高は18㎝ほどしかない。胴部上位から口縁部にかけて「く」の字形に外反する。色調は橙色で，胎土にはスコリア・石英と3㎜以上の礫粒を含む。焼成は普通。篦削りのあと櫛目で調整したものか。内部は輪積みのあとを篦削りしている。完存率は35％。

12は覆土から出土した土師式の壺形土器で胴部下位以下を欠損している。推定で，口径21.5㎝，現存する器高は29㎝ほどである。胴部上位から口縁部にかけて「く」の字に外反する。色調は赤橙色で一部変色がみられる。胎土には，わずかに石英粒子・スコリアを含む。焼成は軟かい。整形は篦削り。時期は和泉Ⅱ期頃であろうか。完存率は30％。



第93図　住居址出土遺物（その6）

13は覆土から出土した土師式の壺形土器で胴部中位以下を欠損している。11，12と同様口縁部は「く」の字に外反する。口径は16.5cm，最大巾は胴部中位で24.5cmである。色調は赤褐色を呈し，胎土には石英・砂礫を含む。焼成は軟らかい。器表は摩耗している。完存率は30%。

14は覆土から出土した土師式の小型甕形土器である。推定で口径は11cmほどで現存器高は7.5cmである。胴部上位から口縁部にかけて垂直に立ち上る。色調は黄褐色に変色しているが本来は赤色と思われる。胎土にはスコリアを含み，焼成は軟らかい。肌荒れしていて調整の手法は不明瞭である。完存率は８%ぐらい。

15は覆土から出土した土師式の壺形土器である。推定した器高は24.5cm，口縁部径23cm，底部径は10cmで，最大巾は胴部中位にあり28cmほどである。口縁部には「く」の字の外反がみられる。色調は橙色で，胎土にはスコリア・石英粒子を含み焼成は硬い。完存率は30%ぐらい。

第13号住居址出土土器（第94図１～２）

１は床面から出土した土師式の碗形土器である。口縁部径14.8cmで器高は７cmほどである。口縁部はわずかに外反する。色調は橙色で，口縁部は黒変する。胎土にはスコリア・石英粒子を含み，焼成は普通。胴部は削り，口縁部はなで調整。完存率55%。

２はカマド内から出土した土師式高杯形土器で，器高12cm，口縁部15cm，底部径10cmである。胴部上位と下位に稜をもつ。赤色の着色がある。胎土は石英粒・砂粒を含む。器内部及び器表に煤が付着している。カマド内で二次的に使用されたものか。完存率78%。

第14号住居址出土土器（第94図３～６）

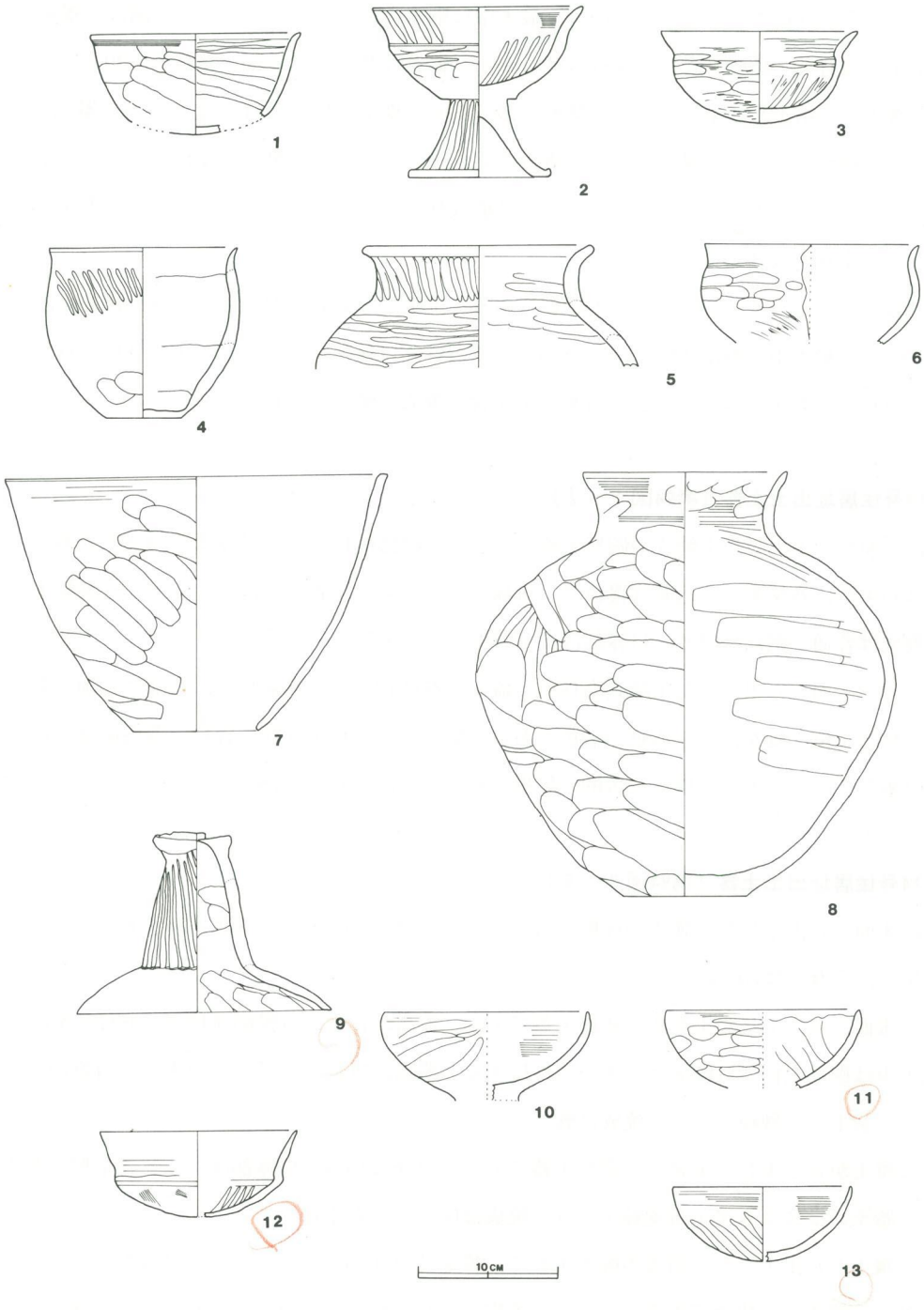
３は床面から出土した土師式の杯形土器である。口径14.0cm，器高は6.5cmを測る。にぶい橙色を呈し，完存率は70%ほどである。

４は床面から出土した土師式の鉢形土器である。器高は12cm，口縁部径13.4cm底径5.5cm。

最大巾は胴部上位で口縁部はわずかに外反する。器表は肌荒れしているが赤色の着色のあとがみられ，胎土には砂粒を含み，焼成は軟らかい。

５は覆土から出土した土師式の壺形土器である。口径は16cm，口縁部は「く」の字形。器表は橙色，胎土にはスコリア・石英粒を含み，焼成は硬い。完存率15%。

６は覆土から出土した土師式の椀形土器で，推定で口径15cmほどである。口縁部はやや「く」の字外反。器表は炭化物で黒変している。器内は赤色で胎土にスコリア・石英粒子を含み，焼成は普通。



第94図　住居址出土遺物（その7）

第15号住居址出土土器（第94図 7～13）

7は覆土から出土した土師式の甑形土器である。口径27cm，器高18cm底径9cmを測る。器表はにぶい橙色で胎土には石英・砂粒を含み，焼成は軟らかい。胴部に煤が付着している。箆削りのあとなで調整。完存率60%。

8はカマドから出土した土師式の壺形土器である。口径14.5cm，器高30cm，底径8.6cmで，口縁部は「く」の字状に外反する。胴部は箆削り，口縁部は削りのあとなで調整。

9は覆土から出土した土師式の高杯形土器の脚部である。底径は18cmほどで，脚部継目までの高さは12.6cmを測る。橙色を呈し，胎土に砂粒を含む。焼成は普通。完存率は35%。

10は覆土から出土した土師式の高杯形土器で，脚部以下を欠損している。推定で口径は13.7cmほどである。口縁部の立上りはやや内彎する。赤色の着色がある。胎土は石英粒子を含み，焼成はやや硬い。箆削りのあとなで調整。

11は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径13.7cm，器高6cmを測る。口縁部はわずかに内彎する。色調は橙色で器内外に煤が付着し肌荒れしている。胎土は石英粒及びスコリアを含む。焼成は普通。完存率は50%。

12は覆土から出土した土師式の杯形土器である。推定で口径14cm，器高は6cmほどを測る。胴部下位に稜があり，口縁部は外反する。底部はきわめて薄い（2mm）。橙色を呈するが，赤色の着色がある。胎土は砂粒・礫を含み焼成は良好。箆磨き，内部はなで。完存率50%。

13はカマドから出土した土師式の杯形土器で，口径12.8cm，器高5.2cmを測る。箆磨き及びなで。赤橙色を呈し，口縁部に赤色の着色がある。胎土は荒い砂粒，石英粒子を含む。焼成は軟らかい。完存率は65%。

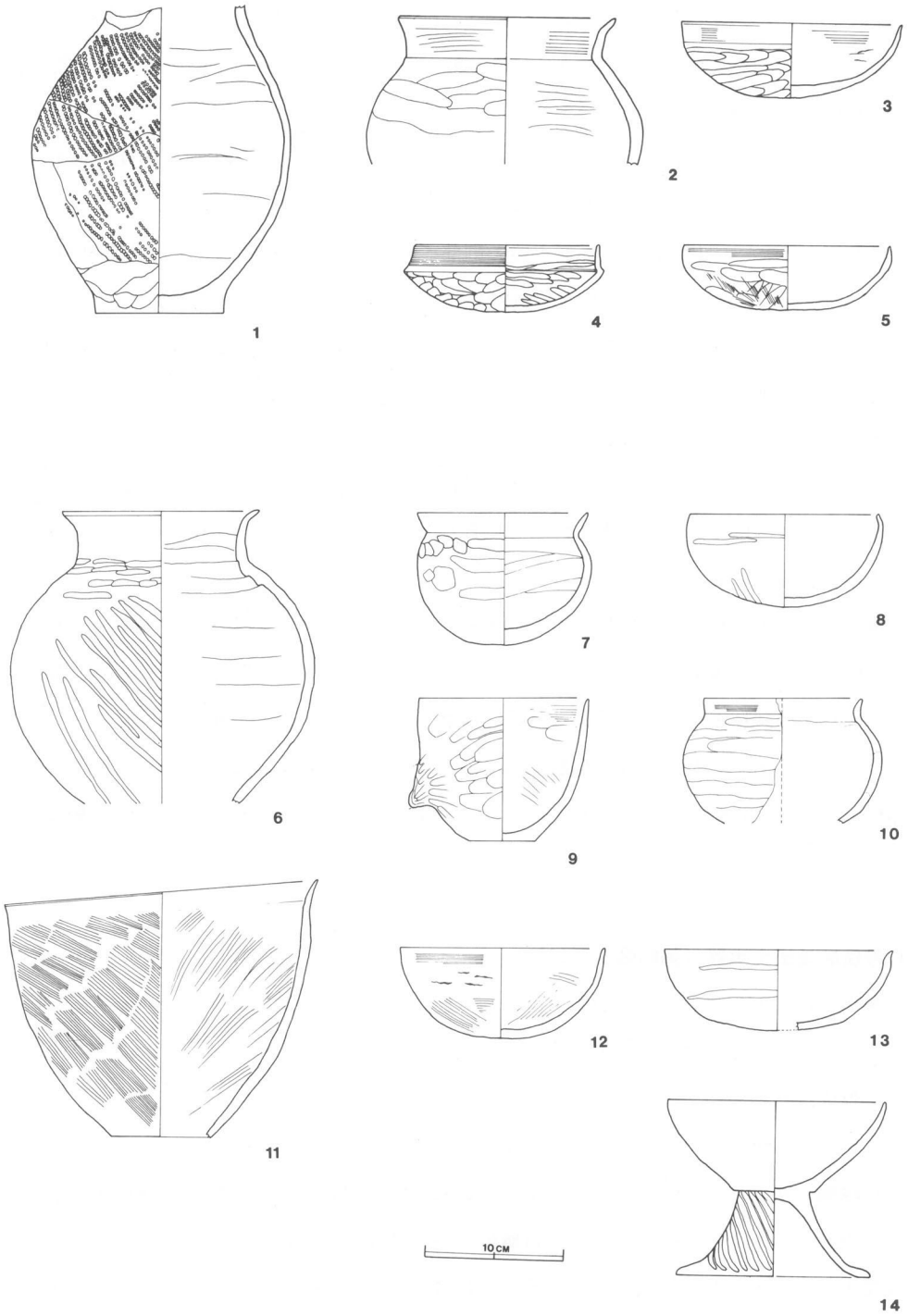
第17号住居址出土土器（第95図 6～14）

6は覆土から出土した土師式の壺形土器で，口径14cm，胴部の最大巾は21.7cmを測る。口縁部は「く」の字外反。器表はにぶい黄橙色を呈し，赤色の着色がみられる。胎土にはスコリア・砂粒を含む焼成は軟らかい。箆削りのあと箆磨き。完存率70%。

7はカマドから出土した土師式の小型甕であろう。口径12.6cm，器高は9.4cmである。胴部上位から口縁部にかけて「く」の字に外反する。器表は明赤褐色を呈し，胎土は砂粒を含みやや軟らかい。胴部は箆削り，内部は箆なで。口縁部は内外共なで。ほぼ完形である。

8は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径13.6cm，器高は6.5cmを測る。口縁部はわずかに内彎する。胎土はスコリア・礫を含む。色調は赤橙色。焼成はやゝ硬い。完存率96%。

9は床面から出土した土師式の把手付鉢形土器である。胎土は砂粒を含み，焼成は良好。底部に布目痕がある。把手部は箆なでで丁寧に接合している。完存率60%。



第95図　住居址出土遺物（その8）

10は覆土から出土した土師式の鉢形土器で，推定で口径11㎝ほどであろう。口縁部はわずかに外反する。色調は赤橙色。胎土はスコリア・石英粒子を含み，焼成はやゝ硬い。完存率45％。

11はカマドから出土した土師式の甑形土器で，横位の状態で出土し，７の小形甕が置かれた状態で検出された。口径は22.5㎝，器高は17.5㎝で底部径は７㎝を測る。歪形しており，明赤褐色を呈する。胎土は砂粒・礫を含み，焼成は軟らかい。篦削りのあとなで整形。完形品である。

12は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径は15㎝を，器高は6.5㎝を測る。色調はにぶい橙色で，胎土には石英粒子を含み，植物繊維を用いている。胴部に刷毛目がみられる。焼成は軟らかい。完存率は75％。

13は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径16.5㎝，器高は5.8㎝を測る。胎土は石英粒子を含み焼成はやや硬い。篦磨き整形。完存率は50％。

14はカマド内から出土した土師式の高杯形土器である。口径は15.8㎝，器高は12.5㎝，底径は14㎝を測る。胴部下位に稜を持つ。赤色を呈し，胎土は砂粒・スコリアを含む。焼成はやや硬い。脚部が欠損しており，二次的に使用されたものか。完存率は75％。

第18号住居址出土土器（第95図２～５）

２は覆土から出土した土師式の壺形土器で，口径15㎝，現存器高は10㎝ほどである。口縁部は「く」の字外反。にぶい橙色を呈し胴部の一部は黒変する。胎土には石英粒を含み，焼成は普通。

３は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径15.8㎝器高5.3㎝を測る。口縁部は薄く，底部ほど厚い。にぶい橙色を呈し，胎土には石英粒を含み，焼成は良い。篦削り，なで整形。

完存率80％

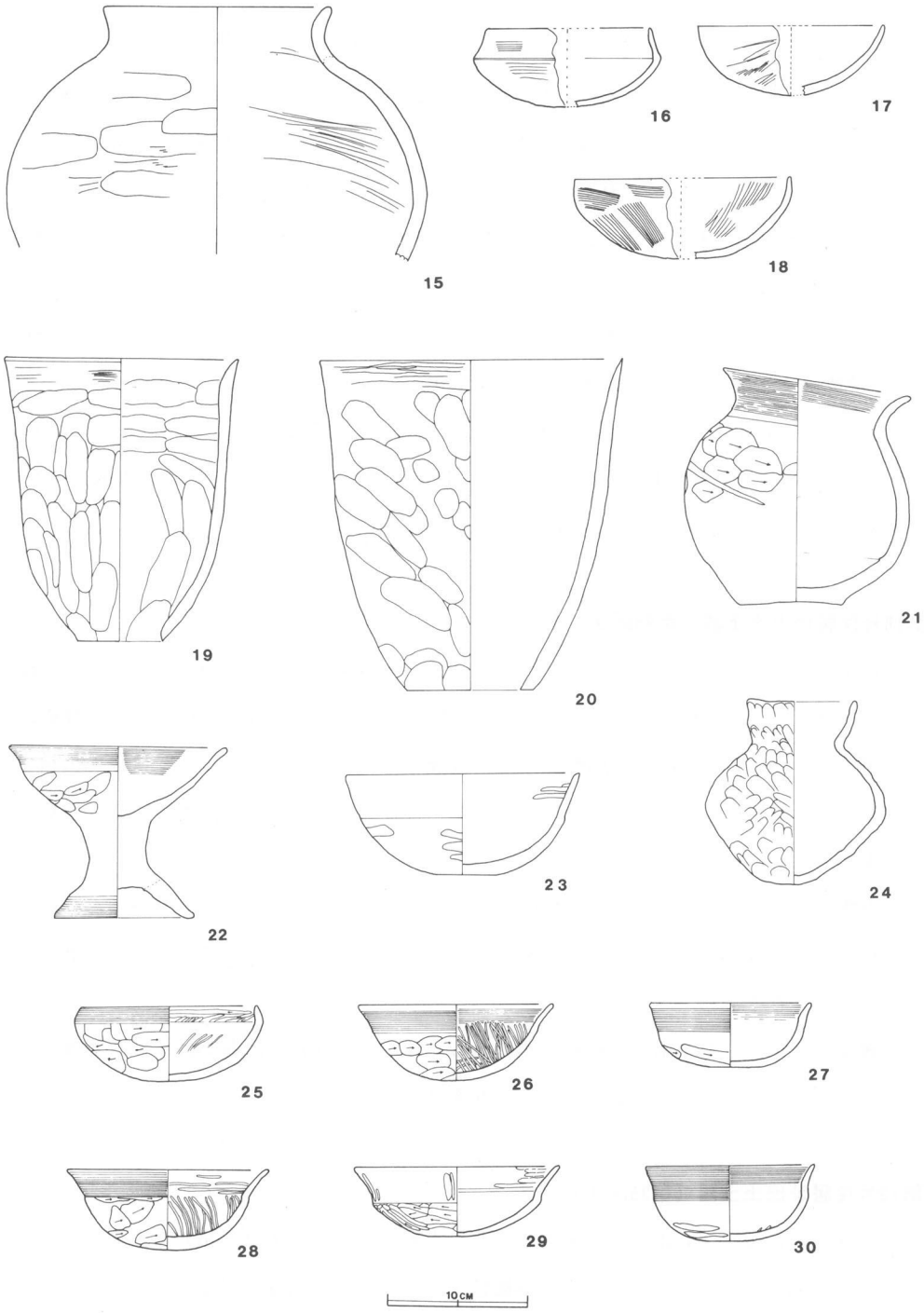
４は不明位置から出土した須恵器の杯形土器である。口径14.8㎝，器高は4.8㎝を測る。胴部上位に稜をもち口縁部はほぼ直立する。墨色の着色があり，底部は布目で，丹念な篦磨きである。焼成は良好で完存率75％。

５は覆土から出土した土師式の杯形土器である。推定で口径15㎝，器高は４.５㎝を測る。墨色の着色があり，焼成は良好。篦磨き整形。完存率は65％。

第19号住居址出土土器（第95図１）

１は床面に近い覆土から出土した弥生式の壺形土器で，頸部以上は欠損している。胴部の最大径は18.5㎝を測り歪形している。にぶい赤褐色を呈し，胴部には煤が付着している。

底径は９㎝を測り摩耗している。胴部から底部にかけて斜行する縄文が施文される。胎土は砂粒を含み，焼成は硬い。



第96図　住居址出土遺物（その9）

第20号住居址出土土器（第96図15～18）

15は床面から出土した土師式の壺形土器で，胴部中位以下を欠損している。口径16.8cmで最大巾は29.6cmを測る。にぶい橙色で，胎土にはスコリアを含む。植物繊維痕がみられる。

16は覆土から出土した土師式の杯形土器で，推定で口径は13.5cmほどである。胴部上位に稜をもち，口縁部は内傾する。色調は浅黄色。煤が付着しているが焼成は良い。完存率35%。

17は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径は推定で13.4cm，器高は5cmである。色調は橙色。底部を損傷している。完存率45%。

18は不明位置から出土した土師式の杯形土器である。推定で口径は15.6cm，器高は5.8ほどであろうか。口縁部が胴部上位でやや内彎する。胎土は砂粒を含む。色調はにぶい橙色。なで調整で完存率25%。

第21号住居址出土土器（第96図24）

24は貯蔵穴周口から出土した土師式の壺形土器である。器高13.1cm，口径は7.9cmを測る。

黄褐色を呈し，胎土は砂礫を含み，焼成は良い。表面がざらついているが箆削りであろう。

完形品である。

第22号住居址出土土器（第96図19～23，25～30）

19は床面から出土した土師式の甑形土器で，胴部下位をわずかに欠損している。口径は16.6cm器高は20cmで底部径は6cmを測る。にぶい黄橙色を呈し，胎土には砂粒・スコリアを含み焼成は普通。植物繊維を多分に使用しており，整形は箆削り。すんなりした形でほぼ完形品である。

20は床面から出土した土師式の甑形土器で，口径21.5cm器高23.5cm底径は8.8cmを測る。口縁部が薄く，全体に細長い形である。にぶい黄橙色を呈し，赤色の着色がみられる。胎土は砂粒，スコリアを含み焼成は普通。出土の際，一旦四分したが復元完形である。

21は覆土から出土した土師式の壺形土器で，器形は歪形する。口径は13.6cm，器高16cm，底径は7.4cmを測り，底部には木葉痕がみられる。橙色を呈するが，胴部に煤が付着する。胎土は砂礫を含み焼成は良好。胴部は箆削りのあと箆磨き，口縁部はなで調整。口縁部がわずかに欠損するが完存率は90%である。

22は床面から出土した土師式の高杯形土器で，完形品である。口径は15.6cm，器高12.3cm，底径は10cmを測る。橙色を呈するが，黒く変色している。胎土に砂礫・スコリア（多量）に含み焼成は良好。胴部は箆削り，口縁部と底縁部はなで整形。

23は覆土から出土した土師式の杯形土器で，推定で口径16.8cm，器高は7.2cmを測る。明褐色を呈し，赤色の着色がある。胎土に砂礫・スコリアを含む。焼成は良い。完存率は50%。

25は覆土から出土した土師式の杯形土器である。口径13.5cm，器高は5.4cmを測る。完存率50%。

26は貯蔵穴から出土した土師式の杯形で口径は14cm，器高は5.4cmを測る。口縁部が外反する。色調は明赤褐色で胎土は砂礫を含み，焼成は良好。口縁部はなで調整，胴部は箆磨きで内側は磨き。完形品である。

27は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径14.7cm，器高は4.6cmを測る。口縁部は胴部上位から外反する。橙色を呈し，胎土は砂礫を含み，焼成は良好。口縁部はなで調整。胴部は箆削り。ほぼ完形である。

28は床面から出土した土師式の杯形土器で完形品である。口縁部はゆるやかに外反する。口径14.5cm器高は5.8cmで明赤褐色を呈する。胎土は砂礫を含み，焼成は良い。口縁部はなで整形，内側はなで整形のあと磨き。胴部は外側が箆削り。内側は磨き。

29は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径は14.8cm器高は5.4cmを測る。胴部上位に稜があり，口縁部は外反する。にぶい褐色を呈し，底部は煤が付着する。胎土は砂粒質で焼成は良好。口縁部は箆磨き，胴部は削りがみられる。完存率は50%。

30は床面から出土した土師式の杯形土器でほぼ完形である。口縁部は胴部から一旦立ち上ってから外反する。口径は12.2cm，器高は5.4cmを測る。橙色を呈し，胎土は砂礫・スコリアを含む焼成は良好。口縁部はなで整形，底部は箆削り。

第23号住居址出土土器（第97図31～33）

31は床面から出土した土師式の甑形土器である。推定で口径は24cm器高は20cmほどで，底径は7.4cmで歪形である。にぶい橙色を呈し，胎土には石英・砂礫を含み焼成はやや軟らかい。

底縁部は箆削り，器表はなで整形。器内は箆削りで完存率は50%。

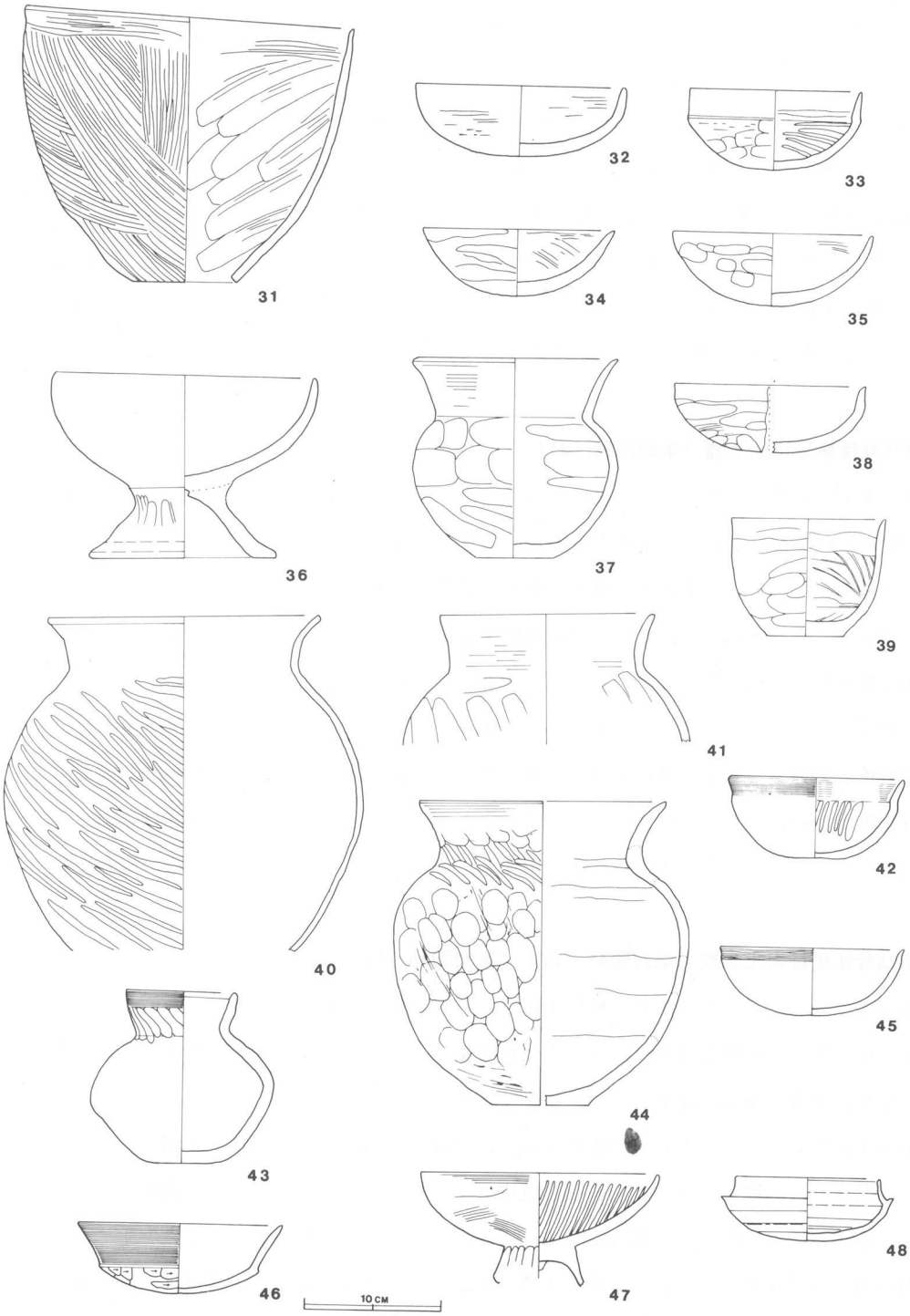
32は床面から出土した土師式の杯形土器でほぼ完形である。口径15.2cm，器高は5.2cmを測る。赤色の着色があるが，本来は淡黄色である。底部に煤が付着している。胎土に砂粒を含み，焼成は良好。なで整形であろう。

33はカマドから出土した土師式の杯形土器で，ほぼ完形である。口径は12.5cm，器高は5.8cmを測る。なで調整の丁寧な作りである。胴部上位に稜があり，口縁部はほぼ垂直に立ち上る。

色調は橙色で，胎土石英粒子を含み焼成は硬い。

第24号住居址出土土器（第97図34～37）

34は覆土から出土した土師式の杯形土器で，推定で口径14cm，器高は5cmほどである。橙色を呈し，胴部に炭化物が付着する。器形は鉄鉢形で，胎土は粗い石英粒・スコリアを含む。焼成は普通。器内は黒変している。完存率は75%。



第97図　住居址出土遺物（その10）

35はカマドから出土した土師式の杯形土器で，推定で口径14.5cm器高は5.2cmを測る。赤橙色を呈し，胎土にはスコリア・石英粒を含む。焼成は軟らかく，器全体が変色している。完存率70%。

36はカマドから出土した土師式の高杯形土器で，ほぼ完形である。口径18.8cm，器高13.3cm，底径は13.6cmである。橙色であるが，赤く着色されている。胎土には砂礫を含み，焼成は良好。口縁部は内彎し，歪形する。削りのあと磨き。

37はカマドから出土した土師式の壺形土器で，口径15.2cm，器高14.5cm，底径は5.5cmほどである。胴部上位から口縁部にかけて「く」の字に外反する。表面がざらざらしている。橙色で胎土はスコリア系，焼成は軟らかい。完存率は60%。

第25号住居址出土土器（第97図38～41）

38は覆土から出土した土師式の杯形土器である。推定で口径14cm，器高は5cmほどである。胴部上位から口縁部にかけてほぼ垂直。朱色の着色がある。完存率25%。

39は覆土から出土した土師式の鉢形土器で，器高8.5cm，口径11cm，底径5.5cmを測る。植物繊維を用いている。黄橙色で，胎土には石英粒を含む。焼成は良い。完存率65%。

40は覆土から出土した土師式の壺形土器である。口径は19.7cm，推定で器高は27cmほどであろう。胴部下位から欠損している。胴部から口縁部にかけてS字形を示す。褐色を呈するが火を受けて変色している。胎土に砂粒を含み焼成は良い。箆磨き，なで整形。完存率は65%である。

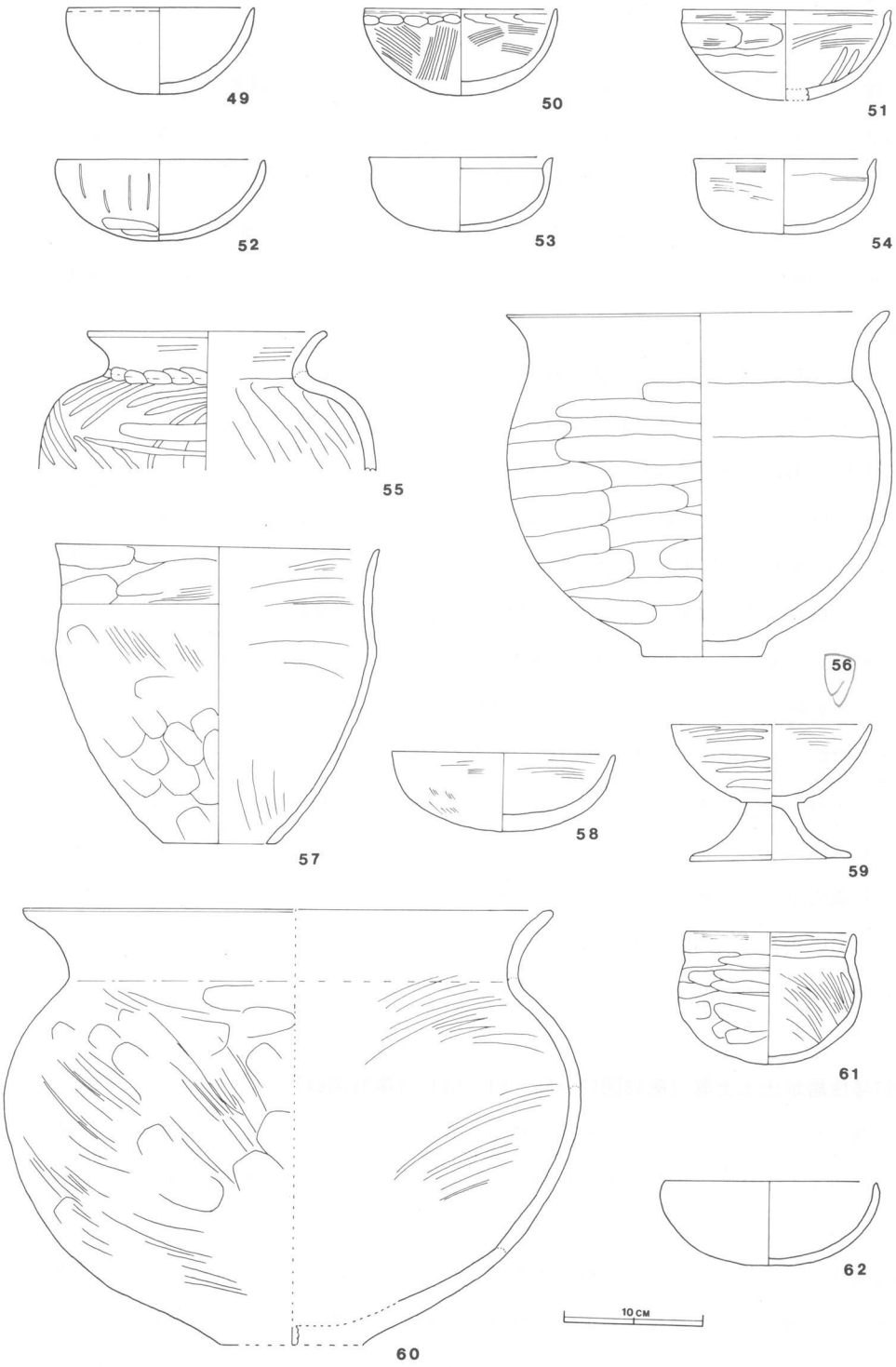
41は覆土から出土した土師式の壺形土器で完存率は15%ほどである。口径は15.5cm。口縁部はやや「く」の字を呈する。胎土は砂礫分が多く，焼成は軟らかい。口縁部のみが現存する。

第26号住居址出土土器（第97図42～48）（第98図49～52）

42は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径は13cm，器高は5.9cmである。胴部上位にわずかに稜をもち，口縁部は外反する。赤褐色を呈し，胎土は砂礫を含む。焼成は良い。口縁部はなで整形，底部，胴部は箆磨き。ほぼ完形である。

43は床面から出土した土師式の壺形土器で，口径13.4cm，器高は12.6cmを測る。にぶい橙色を呈し，胎土には砂礫・スコリアを含む。焼成はやや軟らかい。口縁部はなで調整，頸部は箆削り，胴部は刷毛目のあと削り。内部は箆なでによるものか。胴部は摩耗している。完形である。

44は覆土から出土した土師式の壺形土器である。推定で口径は18cm，器高は22cmであろう。胴部から口縁部にかけて「く」の字状に外反する。にぶい黄橙色を呈し，胎土はスコリア系で焼成は軟らかい。完存率は50%。胴部に煤の付着が顕著である。内部は輪積みのあとがのこる。箆削りによる整形で，縦位に植物繊維の条痕がみられる。



第98図　住居址出土遺物（その11）

45は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径13.5cm，器高は5cmを測る。口縁部でわずかに外反する。胎土に砂礫・スコリアを含み，焼成は良い。赤色の着色がある。ほぼ完形である。

46は覆土から出土した土師式の杯形土器で，胴位に稜をもち，口縁部は外反する。口径は14.9cm，器高5.1cmで完形である。黄橙色を呈し，胎土は砂礫・石英粒を含み，焼成は軟らかい。

47はカマドから出土した土師式の高杯形土器である。脚部を欠損する。口径17.4cm。胴部から口縁部にかけてゆっくりカーブする。器高の現存高は8.2cmであるが推定では11cmほどであろう。なで整形の丁寧な作りであるが脚部を欠損する。明褐色を呈し，胎土は砂礫を含み焼成は良好。完存率65%

48は不明位置から出土した須恵器の杯形土器で，完存率は50%。立ち上りの受部に稜をもつ。灰オリーブの色調で，胎土は砂粒・砂礫を含む。水引による整形で，口縁部は内外共右廻りの回転なで調整，底部の外側は回転篦削り調整である。

49は床面から出土した土師式の杯形土器で，椀形に近い。口径は13.5cm，器高は6.2cmを測る。器表はにぶい褐色を呈し朱色の着色がある。胎土には砂礫・スコリアを含み，焼成は軟らかい。内側はなで整形，外側は削りのあとなで調整。底部はかなり摩耗しているが完形品である。

50は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径は13.5cm，器高は6.2cmを測る。明褐色を呈し，赤色の着色がある。篦削りのあとなで調整している。ほぼ完形であろう。

51は不明位置から出土した土師式の杯形土器である。口径13.8cmで，器高は6.2cmである。赤色の着色があるが，器体は明褐色である。胎土は砂粒・石英粒を含み，焼成はわるい。完存率50%である。

52は貯蔵穴出土の土師式の杯形土器で完形である。胴部の外側に縦位の篦なでが規則的に施される。にぶい褐色で，内側に朱色の着色がある。胎土に砂礫を含み，焼成は良好。内側はなで整形，外側は削りのあと磨きであろうか。

第27号住居址出土土器（第98図53～55，57～62）（第99図64）

53は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径13.3cm，器高は5.3cmを測る。口縁部の内側は口唇部以下で内彎する。暗赤褐の色調を呈し，胎土は砂礫を含み焼成は良好。なで整形で内側は磨き，ほぼ完形である。

54は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径13.1cm器高は5.3cmほどである。赤褐色を呈し，胎土に砂礫を含み，焼成は良好。外側はなで整形，内側は磨き。やや完形に近い。

55はカマドから出土した土師式の壺形土器で胴部以下を欠損している。推定で口径17cmで，口縁部は「く」の字に外反する橙色で，胎土はスコリア系，焼成は軟らかい。完存率25%。

57は床面から出土した土師式の甑形土器である。口径23.2cm，器高は21cmを測る。胴部上位か

ら口縁部にかけてゆるやかに外反する。赤橙色で，胎土に石英粒・砂粒を含み焼成は良い。

箆削りのあとなで調整。完存率75%。

58は覆土から出土した土師式の杯形土器である。口径は15.8cmで器高は5.6cmを測る。橙色を呈するが，赤色の着色がある。胎土には礫を含み，焼成は軟らかい。なで整形によるものであろう。ほぼ完形である。

59はカマドから出土した土師式の高杯形土器である。口径14.5cm，器高は9.6cm，底径は11.5cmを測る。器表は赤橙色を呈し，赤色の着色がある。胎土は石英粒・スコリアを含み，焼成は軟らかい。完存率は70%。

60は不明位置出土で土師式の甕形土器である。口径は推定で38cm，器高は31cm，底径は10cmほどである。胴部上位から口縁部にかけて「く」の字状に外反する。にぶい橙色で，植物繊維を用いている。胎土には，石英粒子・スコリア，粗い礫を含み焼成は軟らかい。箆削りのあとなで整形。完存率は45%。

61はカマドから出土した土師式の椀形土器で，口径12cm，器高は9.5cmを測る。赤色の器表が黒変している。胎土にスコリア・石英粒を含み焼成は硬い。完存率80%。

62は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径15.8cm，器高は6cmを測る。明赤褐色を呈するが，煤が付着している。胎土に砂粒・礫を含み焼成は良好である。内側はなで調整，外側は磨きによるものであろう。完形品である。

64は床面から出土した土師式の壺形土器で，推定で口径19.2cm，器高25.2cm，底径は7.5cmほどである。胴部上位から口縁部にかけて「く」の字形に外反する。にぶい橙色を呈し，胎土には砂粒を含み焼成は軟らかい。完存率は45%。

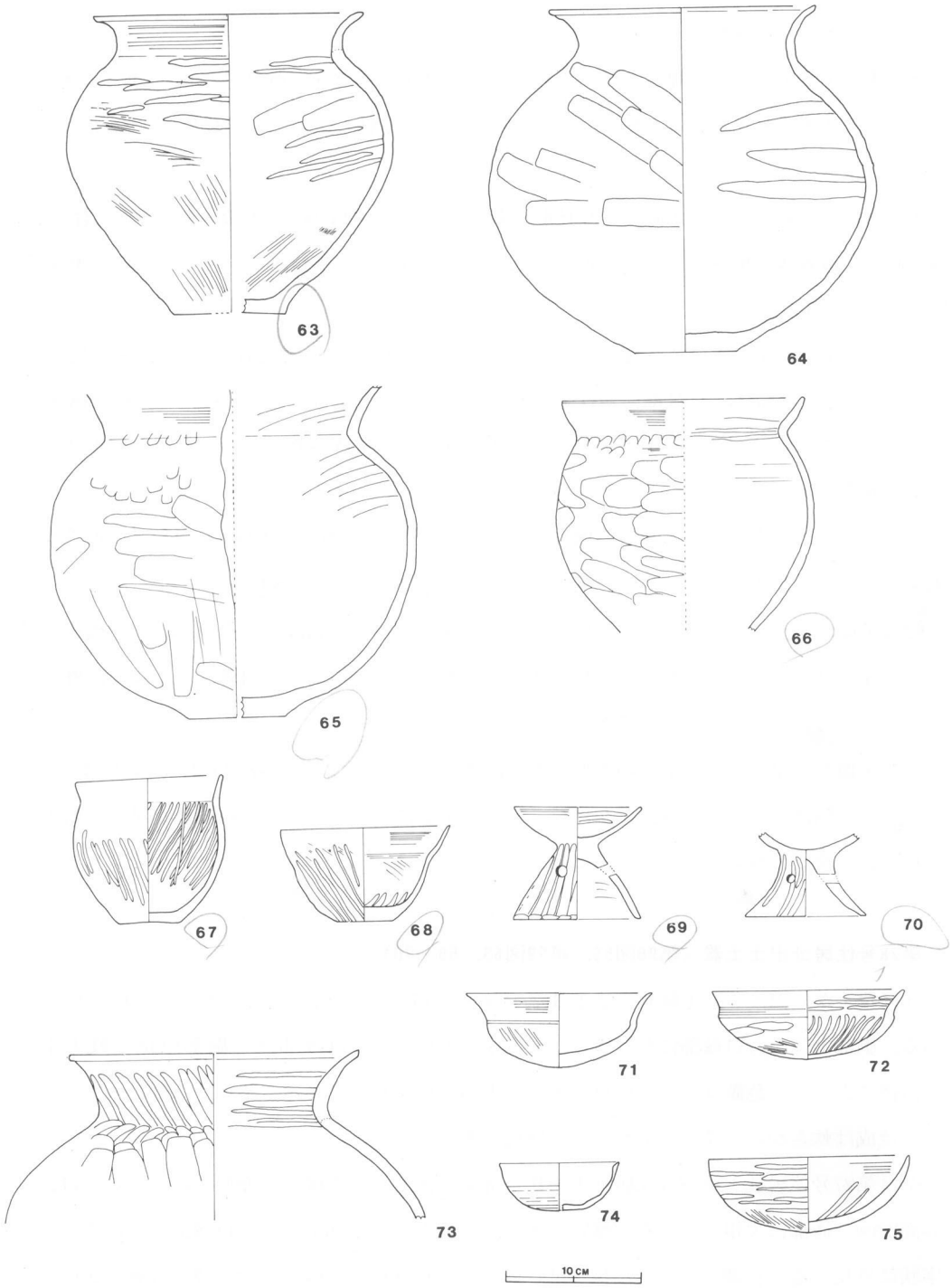
第28号住居址出土土器（第98図56，第99図63，65～70）

56は覆土から出土した土師式の甕形土器である。口径27.5cm，器高は24.5cm，底径は7.5cmを測る。胴部上位から口縁部にかけて「く」の字に外反する。口縁部径と胴部中位の最大巾はほぼ同径であろう。色調はにぶい橙色を呈し，表面が肌荒れしている。胎土には砂粒・スコリアを含み焼成は軟らかい。煤の付着がある。修復完形。

63は第27号住居址と第28号住居址との複合部から出土した土師式の壺形土器である。口径20cm器高22cm，底部は欠損しているが推定で8cmほどである。胴部上位から口縁部にかけて「く」の字状に外反する。色調はにぶい橙色を呈し，胎土は石英粒子，砂粒を含み焼成は軟らかい。

胴部は箆なで調整，口縁部は横なで。胴部から底縁部にかけて炭化物の付着がある。

65は床面から出土した土師式の壺形土器である。口唇部及び底部が欠損している。口縁部は「く」の字外反。胴部のやや上位が最大巾である。橙色を呈し，胎土にスコリア・石英粒を含み



第99図　住居址出土遺物（その12）

焼成は軟らかい。肌荒れしている。完存率は40%。

66は不明位置から出土した土師式の甕形土器である。胴部上位から口縁部にかけ「く」の字に外反する。器表は橙色で，胎土には石英粒子及びスコリアを含む。焼成は軟らかい。炭化物の付着が口縁部から胴部にかけてある。完存率は45%。

67は覆土から出土した土師式の小型甕形土器である。口径11cm，器高10.7cm，底径4.4cmを測る。胎土に砂粒・スコリアを多量に含み焼成は軟らかい。器の内外とも縦位に箆磨き，口縁部内側はなで調整。完形品である。

68は覆土から出土した土師式の鉢形土器である。口径12.8cm，器高6.9cm，底径は4.8cmを測る。色調は淡黄色を呈し，胎土にわずかに砂礫を含む。焼成は良好。完存率は60%である。

69は覆土から出土した土師式の器台である。口径9.3cm，器高は8.3cm，底部径は9.5cmを測る。脚部の穿孔は3孔を有する。にぶい黄橙色で，砂礫粒をわずかに含む。焼成は硬い。箆なでで整形している。時期は五領II期あたりと思われる。ほぼ完形に近い。

70は床面から出土した土師式の器台で，推定で器高は7.1cmであろう。口縁部を欠損している。器表は明赤褐色で，胎土は砂粒・スコリアを含む。箆磨き整形であろうか。穿孔は3孔で完存率は60%である。

第29号住居址出土土器（第99図71～75）

71は床面から出土した土師式の杯形土器である。胴部上位に稜をもち，口縁部は外反する。色調はにぶい黄橙色で，表面はざらついている。胎土に砂粒・石英粒を含み焼成は軟らかい。口縁部はなで調整。完存率は65%。

72は覆土から出土した土師式の杯形土器で，推定で口径14.2cm，器高は5.1cmほどである。形状は71と同形。胎土は石英粒を含む。焼成は硬い。完存率は45%。

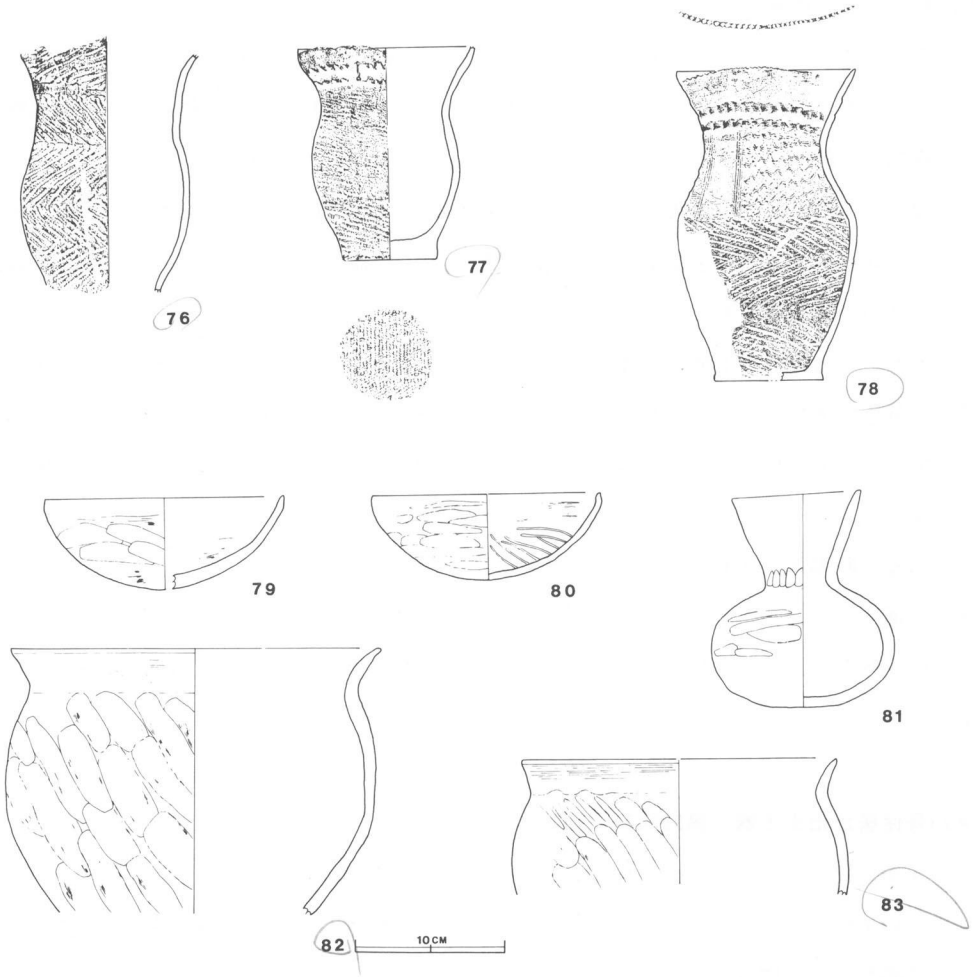
73は床面から出土した土師式の壺形土器である。胴部上位以下を欠損する。口径は21.2cmほどである。胴部上位から口縁部にかけて「く」の字に外反する。色はにぶい黄橙色，胎土は良質の粘土と思われ，焼成は硬い。完存率は15%である。

74は不明位置から出土した須恵器の杯形土器の蓋であろうか。表面に自然釉がかかっている。円孤状櫛目で，色調は灰色。ロクロ整形によものであろう。完存率は45%。

75は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径14.5cm，器高は5.5cmを測る。橙色を呈し，赤色の着色がある。胎土に石英粒を含む。箆磨き整形。完存率は85%。

第30号住居址出土土器（第100図76～77）

76は覆土から出土した弥生式の壺形土器である。口縁部と底部を欠損しているが，広口長胴の



第100図　住居址出土遺物（その13）

壺形土器と思われる。文様は，底部から頸部まで撚糸紋を羽状に施文する。色調は煤で黒変しているが，明赤褐と思われる。胎土は砂粒・砂礫を含む。現存する器高は17cm，胴部最大巾は11.2cmほどである。完存率は約40%。

77は覆土から出土した弥生式の小型の壺形土器である。口縁部をわずかに欠損しているがほぼ完形である。口径は11.8cm，器高は14.1cm，底径は6.4cmを測る。頸部は竹箆様の工具で刺突した紋様帯で，約4cm間隔で貼付された6個の突起があり，1個は欠落している。胴部は上位から底部まで撚糸紋が斜行する。色調は橙色を呈し，灰褐色に変色している部分がある。胎土は石英粒子を含み，焼成はほぼ良好である。底部は布目である。

78は覆土から出土した弥生式の壺形土器である。口径は12cm，器高は20.5cm，底径は推定で7cmほどである。口唇部は鋸歯紋を施文する。頸部は2条の隆起帯でその下位は，縦位の櫛目が3

条ずつで4等分されている。横位の波状の櫛目は7～8条ずつである。胴部から底部までは撚糸紋を羽状に施文する。底部はわずかに布目痕がのこる。十王台式比定のものか。

第31号住居址出土土器（第101図84）

84は床面から出土した土師式の鉢形土器と思われる。胴部上位を欠損しているが，底径は5cmである。器表は橙色であるが変色している。完存率は30%。

第32号住居址出土土器（第101図85～88）

85は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径13.8cm，器高は6.7cmを測る。明赤褐色を呈し，胎土には砂粒，砂礫を含み焼成は軟らかい。口縁部の外側はなで調整，底部は箆磨き。完形である。

86は覆土から出土した土師式の杯形土器。推定で口径13.3cm器高5.5cm，赤色の着色がある。胎土はスコリア・石英粒で焼成は軟らかい。完存率は60%。

87は覆土から出土した土師式の杯形土器で，口径は15.7cm，器高は6cmを測る。赤色の着色がある。胎土に砂粒・砂礫・スコリアを含む。焼成は良好。器内はなで整形，器表は摩耗があるが箆削りと思われる。完形である。

88はカマドから出土した土師式の杯形土器である。推定で口径は14.5cm，器高は5.2cmほどである。橙色だが，煤により黒変している。完存率は40%。

第33号住居址出土土器（第101図89～93）

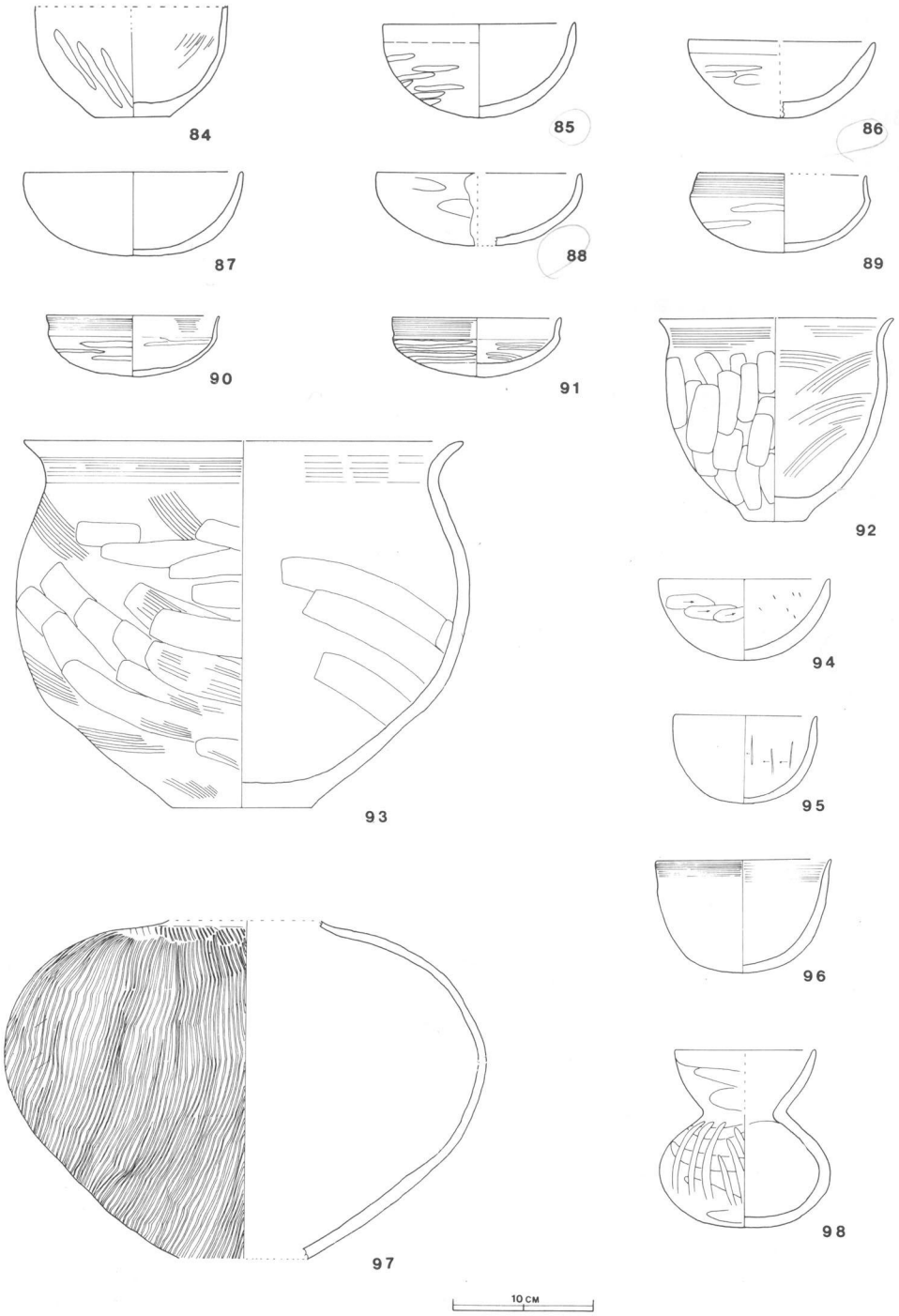
89はカマドから出土した土師式の杯形土器で，推定で口径12cm，器高は5.6cmほどである。色調は赤色を呈し，胎土には砂礫を含み焼成は硬い。完存率は60%。

90は覆土から出土した土師式の杯形土器で，胴部上位にわずかに稜があり，口縁部はほぼ垂直である。口径は12.2cm，器高は4.2cmである。にぶい橙色で胎土に砂粒を含み，焼成は硬い。完存率は70%である。

91は覆土から出土した土師式の杯形土器で，胴部上位に稜をもつ。口縁部はほぼ垂直に立ち上る。口径は12cm，器高は4.1cm。胎土に石英粒子を含む。色調は黄橙色。焼成は良い。完存率60%。

92は覆土から出土した土師式の鉢形土器である。口径16.5cm，器高14.3cm，底径4.5cm。胴部上位から口縁部にかけてわずかに「く」の字に外反する。箆削りの整形。なで調整。炭化物の付着がある。色調はにぶい橙。胎土は礫，砂粒を含む。焼成は軟らかい。

93は覆土から出土した土師式の甕形土器である。口径31cm，器高26cm，底径9.7cmほどである。



第101図　住居址出土遺物（その14）

口縁部は「く」の字に外反する。にぶい黄橙色で胴部は煤けている。胎土に礫，石英粒子を含む。焼成は普通。完存率は65%。

第34号住居址出土土器（第100図79～80，第101図94～98）

79は床面から出土した土師式の杯形土器で，口径16cm，器高は6cmほどである。朱色の着色が黒変している。胎土はスコリア・石英粒子を含む。完存率50%。

80はカマドから出土した土師式の杯形土器で，器高は5.7cm，推定で口径は15cmほどである。色調は赤色で，胎土には石英粒・砂礫を含み焼成は普通である。完存率は70%。

94は床面から出土した土師式の椀形土器で，口径12.3cm，器高は5.9cmを測る。橙色で，底部は黒変している。胎土は砂礫を含み，焼成は良好。口縁部は内外共なで調整。底部は内側は篦磨き，外側は篦削り。完存率50%。

95は床面から出土した土師式の椀形土器で，口径は10.4cm，器高は6.3cmを測る。にぶい黄橙色を呈する。胎土には砂粒を含み，焼成は良好。口縁部は内外共なで調整。底部は内側は篦なで，外側は磨きか。完存率80%。

96は床面から出土した土師式の椀形土器である。口径12.6cm，器高は8cmである。にぶい黄橙色を呈する。外側に赤色の着色がある。胎土は砂粒を含み，やや軟らかい。口縁部は内外共なで調整。ほぼ完形。

97は貯蔵穴周口部から出土した須恵器の横瓮形土器かと思われるが，口縁部と底部を欠損しており明瞭ではない。最大巾は34cmで，器高は24cmだけ現存している。胎土に石英粒子を含む，櫛目で色調は灰青色。完存率は40%。

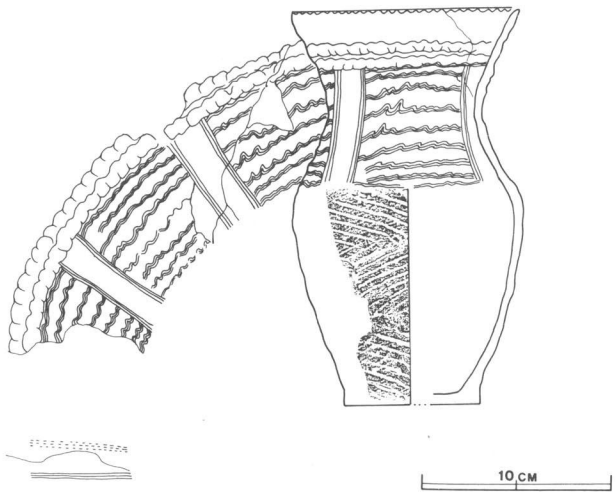
98はカマドから出土した土師式の坩形土器で，器高12.5cm，推定で口径10cm。胴部上位と口縁部はS字形で，明赤褐色である。胎土にスコリア及び石英粒を含み，焼成は軟らかかい。完存率75%。

第37号住居址出土土器（第100図81）

81はカマドから出土した坩形土器である。口径は8.7cm，器高は14cmほどで，にぶい黄橙色を呈する。胎土に砂礫を含み，焼成は良好である。口縁部外側はなで整形，内側は削りのあとなで調整，頸部で接合している。完存率は50%。

第39号住号址出土土器（第100図82，83）

82は床面から出土した土師式の甕形土器で，胴部中位以下を欠損している。口縁部は「く」の字外反。にぶい橙色で，胎土は砂粒を含み焼成は普通。



第102図　第30号住居址出土土器(弥生式壺形土器) 展開図

83はカマドから出土した土師式の甕形土器である。胴部中位以下を欠損する。口径は21cm，色調は赤色で，胎土はスコリア・石英粒子を含む。焼成は軟らかい。完存率は20%。

2．土壙出土の遺物

第25号土壙出土の遺物（第103図）

第25号土壙（地下式壙）の覆土から出土した内耳の鉄鍋である。口径36cm，器高は21cm，底形は21cmほどである。直胴形で，胴部上位から口縁部は上方にひろがる。内耳は鍵形で片側に1，対角線上に2あり吊手の用をなすものであろう。

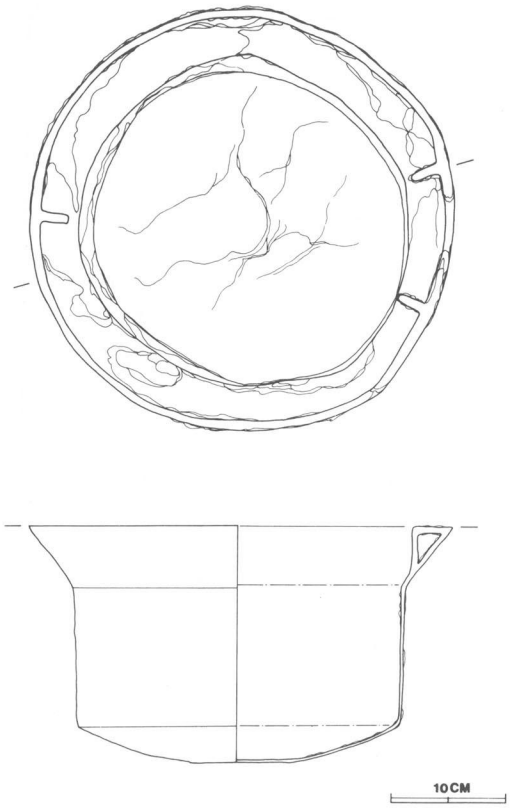
3．各遺構出土の土製品・石製品その他の遺物

(1)　手捏（てづくね）土器（第104図1～8）

1は第14号住居址覆土から出土した。口径4.5cm，底径3cmほどで口縁部は欠損している。

2は第16号住居址覆土から出土した。口径4.5cm，器高2.6cmで盃形である。赤褐色を呈し，焼成はわるい。煤が付着している。

3は第29号住居址のカマドから出土した。口径5.5cm，器高2.6cmほどで作りは粗雑である。胎土はわずかに砂粒を含む程度。橙色を呈し，焼成は普通。明瞭な指頭痕をのこす。



第103図　第25号土壙（地下式壙）出土遺物

4は第29号住居址の不明位置から出土した。底部を欠損しているので，坐りが悪い。口縁部は朝顔状にひらく。口径4cmほどで，橙色を呈する。胎土は砂粒を含み，焼成は軟らかい。指頭の圧痕がのこる。

5は第30号住居址の不明位置から出土した。口縁部を欠損している。推定する器高は7cm，口径は10cmほどのものか。底径は4cmほどである。色調は淡黄色を呈し，胎土は良質で焼成も硬い。

6は第34号住居址の不明位置から出土した。口径，底径はともに4.5cm，器高は2.7cmである。指頭で押圧して調整している。にぶい橙色で，胎土は石英粒を含み焼成は普通。

7は第38号住居址の覆土から出土している。口径3cm，器高3.1cmのにぶい橙色を呈し，胎土はローム粒子を混入。焼成は硬い。ほぼ完形であろう。

8はＣ２ａ８の第１層から出土した。口径5.1cm，器高3.2cmで褐色を呈する。内部，底部共黒変している。口縁部は朝顔状にひらく。やや完形に近い。

(2)　土　玉

土玉一覧（**第104図，第105図，第106図，第107図**）

(3)　管状土錘

管状土錘一覧（**第108図**）

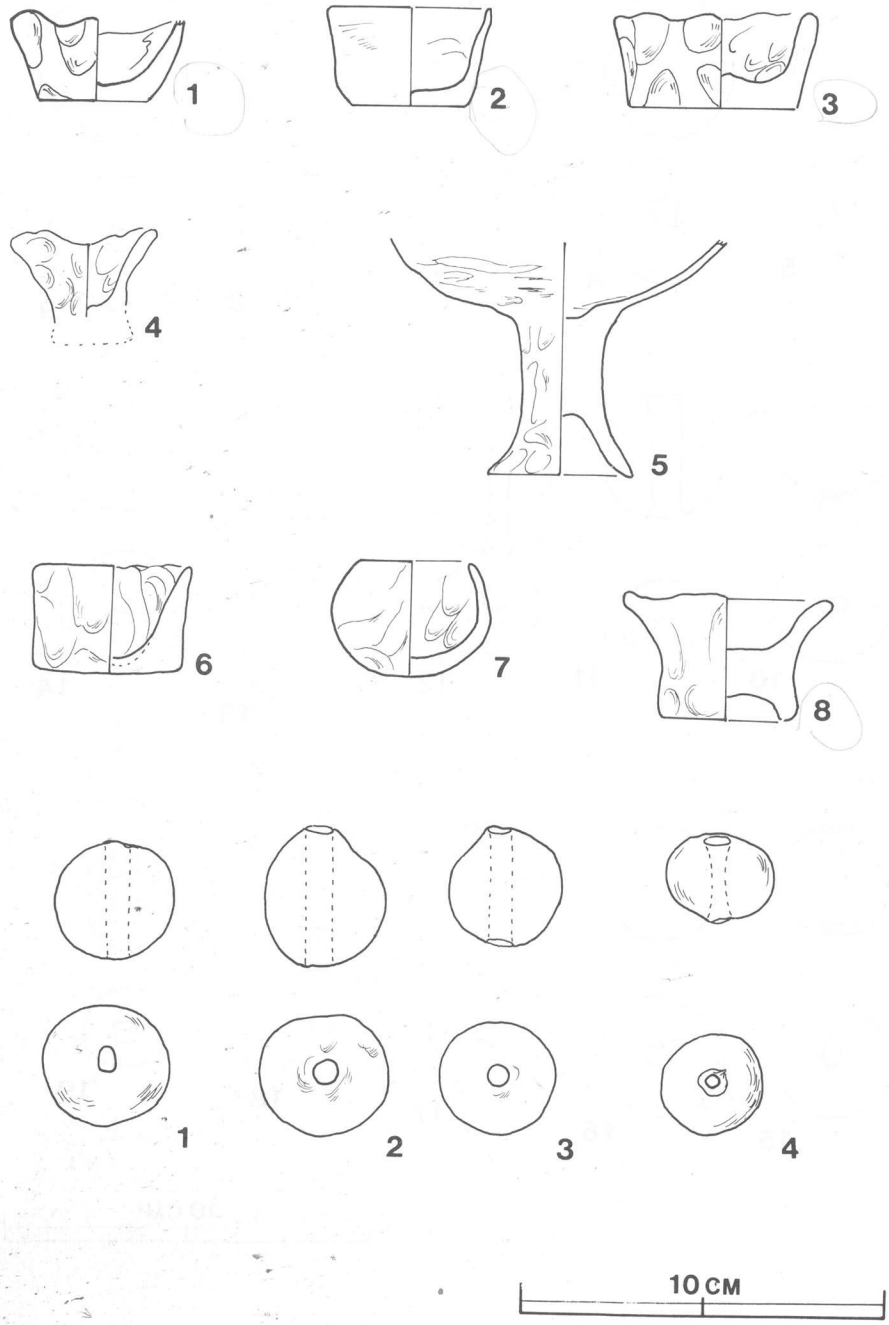
土　玉　一　覧

No.	遺構名	出土位置			法量		色調	胎土	焼成	備考
		X	Y	Z	長さ(cm)	直径(cm)				
1	第7号住居址	○			3.2	3.4	うすい橙			
2	第9号住居址		○		3.7	3.3	にぶい橙	石英	良好	歪形
3	第9号住居址			○	3.2	3.0	橙	石英 スコリア	良好	
4	第6号住居址	○			2.4	2.8	明褐			扁平，中孔は内部が細い
5	第15号住居址	○			3.0	2.7	明褐		良好	扁平
6	第12号住居址		○		4.2	3.5	明褐		良好	歪形
7	第11号住居址	○			3.5	3.1	明褐		良好	
8	第11号住居址		○		4.1	4.1			悪い	隋円形
9	第6号住居址		○		4.1	4.0	橙		良好	歪形
10	第12号住居址		○		2.7	3.3	明橙		良好	
11	第14号住居址			○	3.3	3.3	暗褐		悪い	扁平，½欠損
12	第11号住居址			○	4.4	3.2	暗褐	礫	悪い	½欠損，管状
13	第16号住居址			○	4.1	3.8	明褐		悪い	煤付着
14	第16号住居址			○	3.3	3.3	橙		良好	わずかに欠損
15	第16号住居址			○	2.9	3.2	橙			歪形
16	第18号住居址	○			3.4	3.4				
17	第19号住居址			○	1.4(存)	3.1	赤褐		普通	½欠損
18	第24号住居址ベルト	○			2.8	3.2	橙	砂粒		ひび割れがある（焼成時），扁平
19	第18号住居址			○	2.0	2.1	明赤褐		普通	
20	第27号住居址			○	3.0	3.1	明赤褐	砂粒 ローム		塗色してある。煤付着（一部）
21	第17号住居址	○			2.7	2.7	明褐		普通	ヘラ整形，塗色あり ひび割れ（焼成時）
22	第24号住居址			○	3.1	3.2	明赤褐	砂粒	良好	塗色あり 煤付着（⅓程）
23	第20号住居址			○	2.4	2.5	黒(表)・赤(内)			
24	第23号住居址			○	3.2	3.5	明褐		良	わずかに欠損
25	第7号住居址	○			3.7	3.5	にぶい黄橙	砂粒	良	
26	第23号住居址		○		3.0	3.1	にぶい黄橙	砂粒	普通	
27	第24号住居址			○	3.4	3.8	橙	砂粒	普通	歪形
28	第24号住居址			○	2.5	2.4	にぶい橙	砂粒	良	

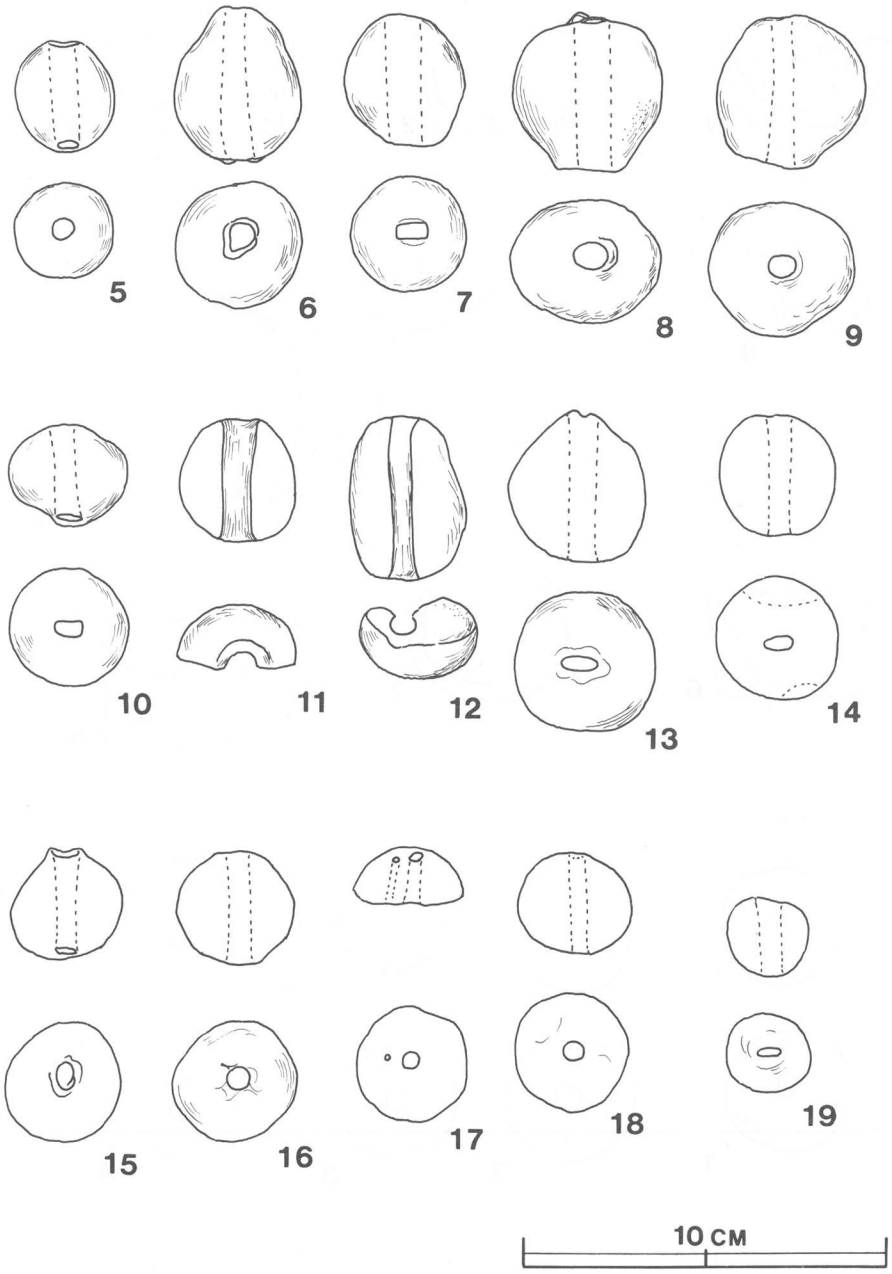
No.	遺構名	出土位置			法量		色調	胎土	焼成	備考
		X	Y	Z	長さ(cm)	直径(cm)				
29	第25号住居址	○			3.8	4.0	明黄褐	砂粒，礫	良好	
30	第25号住居址			○	4.0	4.2	にぶい黄橙	砂粒，石英	良好	
31	第27号住居址カマド	○			3.1	3.6	にぶい黄橙 橙色	砂粒，石英	良好	塗色あり
32	第27号住居址ベルト	○			4.3	4.8	灰黄褐	砂礫	良好	大形，摩擦痕
33	第29号住居址			○	2.8	3.2	にぶい黄橙 橙	砂粒	普通	
34	第28号住居址			○	3.0	3.1	橙			
35	第28号住居址			○	2.9	3.1	にぶい黄橙			煤付着
36	第33号住居址ベルト	○			4.4	3.6	にぶい黄橙	ローム粒子	良好	指圧紋，炭化物付着，歪形
37	第34号住居址			○	2.4	2.9	橙	砂粒	良好	扁平
38	第34号住居址ベルト	○			2.6	3.1	橙	粗いローム粒子，礫	良好	扁平
39	第1号溝	○			2.3	2.2	浅黄	ローム粒子	良好	歪形
40	第34号住居址			○	2.8	3.0	明橙黄 黒（一部）			刺突(3～4cm)
41	第34号住居址			○	2.2	2.5	赤褐，赤 明褐(一部)		良好	塗色あり
42	第34号住居址			○	2.4	2.4	明褐 黒（一部）			塗色あり
43	表採			○	4.5	2.8				管状
44	表採			○	2.6	3.2				表面欠損 扁平
45	Grit C 2 a 9			○	2.5	2.3	にぶい橙	砂粒	普通	表面欠損 扁平
46	Grit C 2 a 7			○	2.8	2.8	にぶい橙	砂粒	普通	炭化物付着（一部）
47	Grit C 2 d 9			○	3.2	3.1	にぶい橙	砂粒	普通	炭化物付着（一部）
48	Grit C 2 b 5			○	2.1	2.4	にぶい褐	砂礫	悪い	炭化物付着
49	Grit C 2 g 9			○	—	2.2	にぶい橙	砂粒	悪い	貫通した穴なし 未製品

管　状　土　錘　一　覧

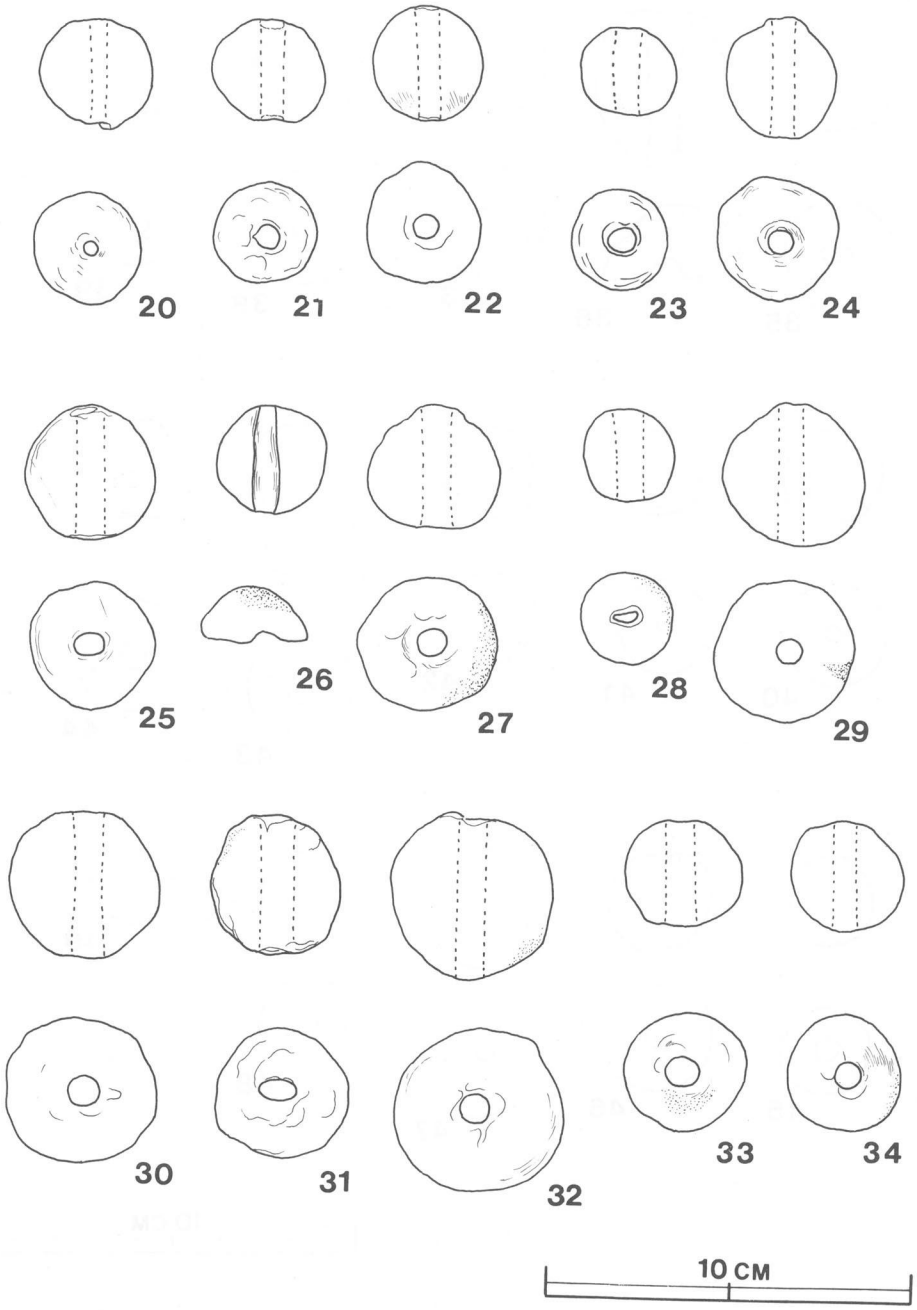
No.	遺構名	出土位置			法量		色調	胎土	焼成	重さ（g）	備考
		X	Y	Z	長さ(cm)	直径(cm)					
1	第6号住居址			○	2.8	0.6	明黄褐	ローム粒子	良好	0.7	
2	第25号住居址			○	2.6	0.7	にぶい黄橙	ローム粒子	良	1.0	
3	第34号住居址			○	3.8	1.7	にぶい黄橙	ローム粒子	良	4.8	
4	表採			○	4.4	1.1	にぶい黄橙	ローム粒子	良	5.0	
5	表採			○	2.3	0.7	にぶい黄橙		普通	0.8	
6	第14号住居址	○			4.5	1.0	赤橙			5.0	朱塗あり
7	第14号住居址	○			4.0	0.9	橙			4.0	表面欠損
8	Grit D3g1			○	3.5	0.9	にぶい橙			2.5	
9	第14号住居址	○			4.0	0.9	橙			3.0	わずか欠損
10	第20号住居址			○	2.7	0.6	にぶい橙			1.0	
11	表採			○	2.3	0.7	にぶい橙			1.5	
12	表採			○	2.6	0.4	にぶい赤褐			1.0	わずか欠損（孔口部）
13	表採			○	3.0	0.5	灰褐			1.0	
14	表採			○	2.9	0.65	にぶい橙			1.5	一部欠損
15	表採			○	4.1	1.0	橙			3.5	わずか欠損
16	表採			○	3.8	1.1	にぶい橙			5.0	煤付着（20%）一部欠損
17	Grit C2i6			○	4.2	0.9	にぶい橙	粘土	普通	4.0	
18	Grit C2c9			○	3.5	1.1	にぶい黄橙	粘土	普通	3.0	
19	Grit C2i0			○	4.8	1.0	にぶい橙	粘土	普通	5.4	
20	第19号住居址	○			2.4	0.6	赤褐		普通	0.8	
21	第16号住居址			○	3.1	0.6	明褐		良好	—	



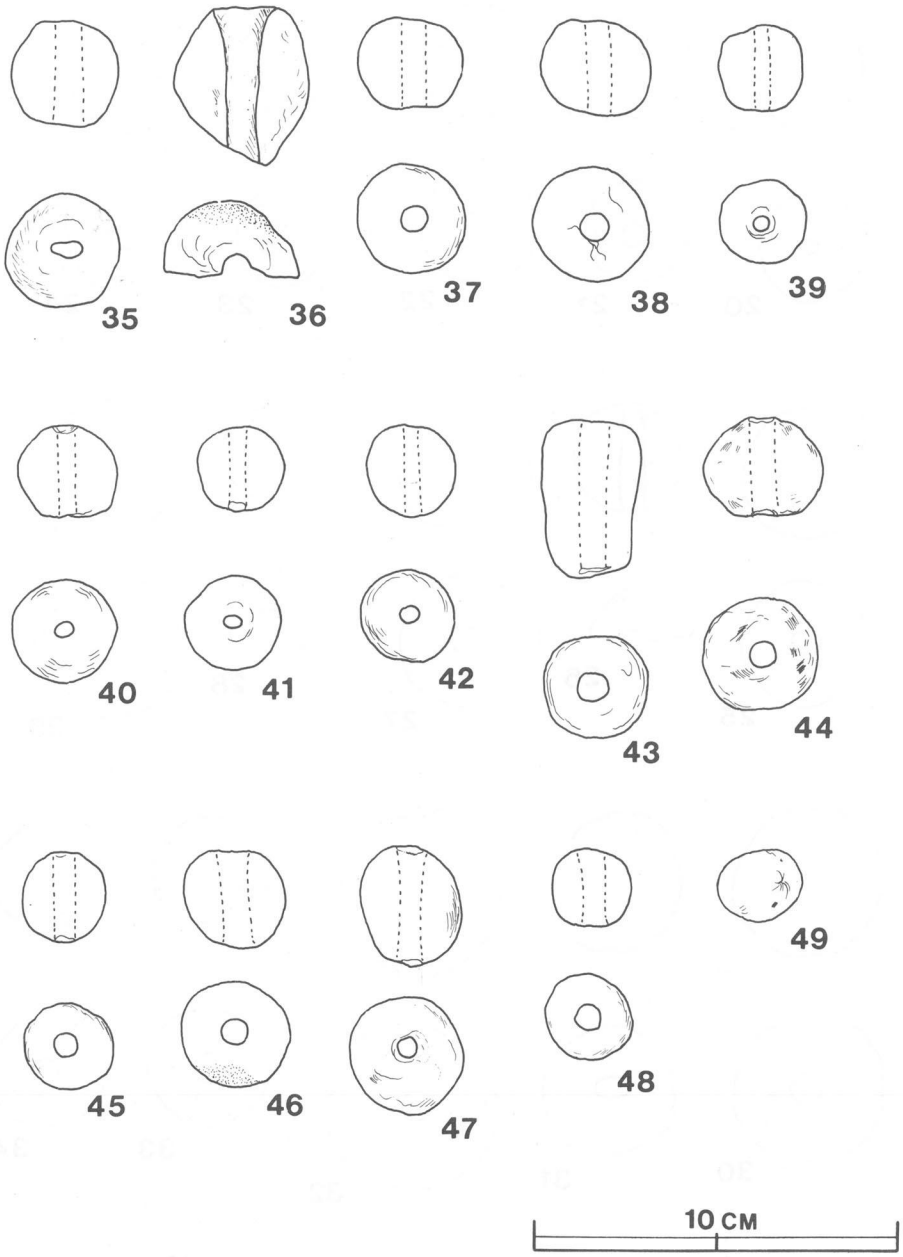
第104図　各遺構出土遺物（手捏土器，土玉）



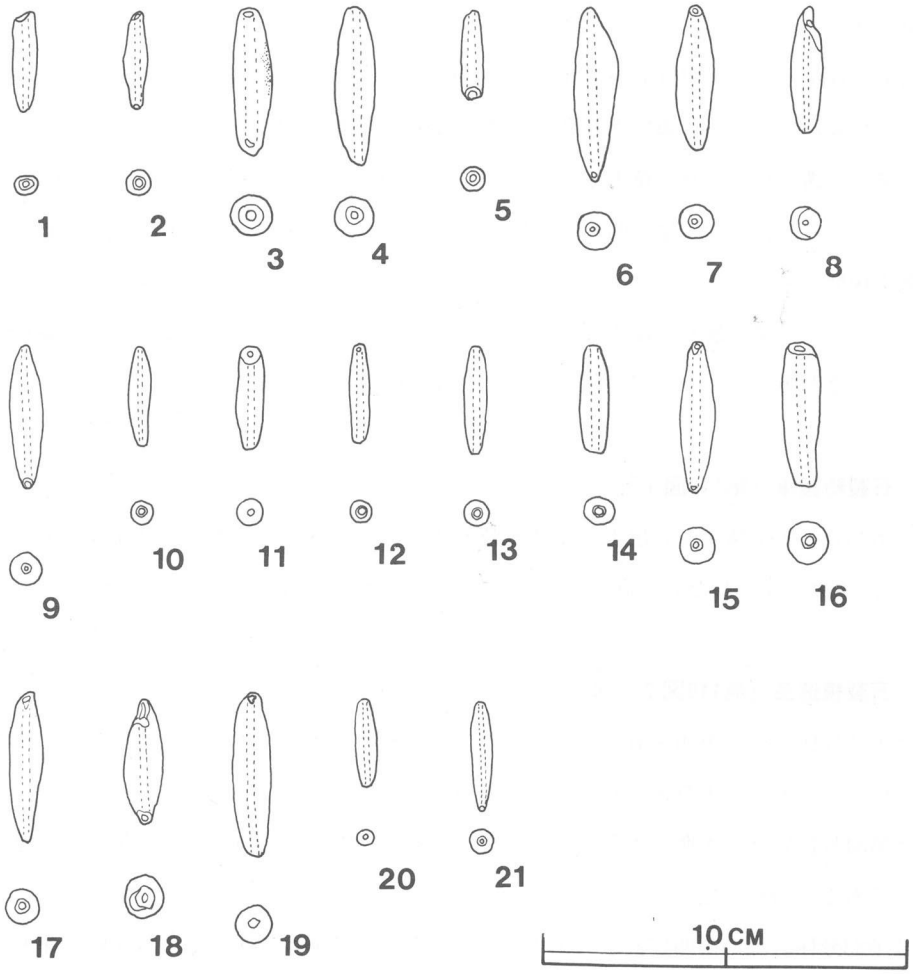
第105図　各遺構出土遺物（土玉）



第106図　各遺構出土遺物（土玉）



第107図　各遺構出土遺物（土玉）



第108図　各遺構出土遺物（管状土錘）

(4)　土器片錘（第109図１～６）

１は第19号住居址の不明位置から出土している。4.2×2.9cmで重さは19ｇである。短辺の両辺中央部に刻みを入れている。長軸中央に突帯があり，褐色を呈し一部が黒変する。縄文後期。

２はＣ２ａ０の第１層から出土している。4.0×3.3cmで重さは17ｇである。短辺の両辺中央部に刻みを入れている。色調は赤褐色。縄文後期。

３は第24号住居址の不明位置から出土した。6.5×3.6cmで重さは36ｇである。短辺の両端の中

央部に刻みを入れている。色調は明褐色を呈し焼成も良い。中央の沈線文をはさんで櫛目がある。縄文中後期。

4は第25号住居址の不明位置から出土した。6.0×3.6cmで，重さは30gほどである。短辺の両辺に刻みを入れている。色調は赤褐色で，焼成は硬い。縄文後期。

5は第1号溝（C2a9）覆土から出土した。6.3×2.9cmで重さは31gである。短辺の両辺中央に刻みがある。長辺の一端の凹部は欠損によるものか。褐色を呈し，櫛目が直行または斜交する。縄文後期。

6はC2a9の第1層から出土した。7.0×3.3cmで重さは30gである。短辺の両端に刻みがあるが，やゝ不明瞭である。にぶい褐色を呈し，焼成はわるい。縄文中後期。

(5) 石製紡錘車（第110図1）

1は第23号住居址覆土から出土した滑石製の紡錘車で円盤形を呈する。直径は3.7cmで，厚さは1.2cm，中央に穿たれた孔は直径5mmほどである。

(6) 石製模造品（第110図2～9）

2は第27号住居址の不明位置から出土した。滑石製で3.5×2.9cmの勾玉状をなす。厚さは4mmほどで単孔。片面には未貫通の孔が並んでいる。青灰色。

3は第34号住居址の不明位置から出土した。滑石製で2.3×2.1cmの円形を呈する。厚さは3mmで双孔である。暗緑灰色。

4は第23号住居址の不明位置から出土した。滑石製で4.3×2.6cm。厚さは7mmで単孔である。灰青色。

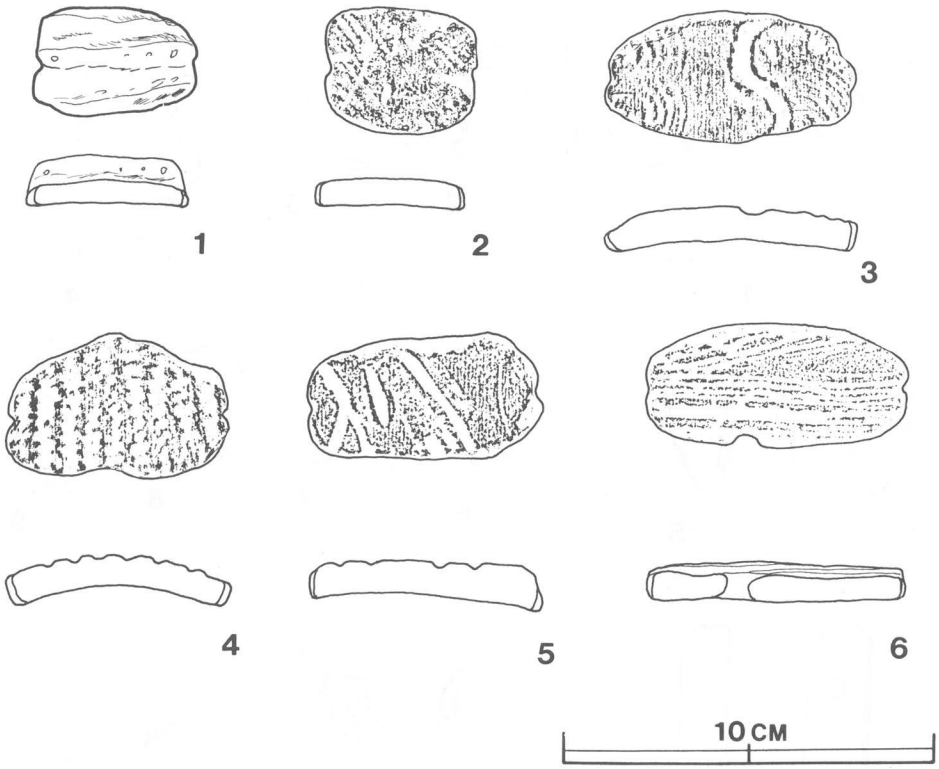
5は第24号住居址の床面から出土した。滑石製で4.0×1.9cmでハート型を呈する。厚さは5mmで単孔である。灰色。

6は第10号住居址の貯蔵穴から出土した。滑石製で2.4×2.2cmの円盤状を呈し，厚さは4mmである。双孔で青灰色。

7は第35号住居址の覆土から出土した。滑石製で2.2×1.4cmのハート型を呈し，厚さは3mmで単孔である。青灰色。

8は第37号住居址の覆土から出土した。滑石製で2.4×2.2cmの円盤状を呈し，厚さは3mmで双孔である。青灰色。

9は表採で不明位置から出土した。滑石製で2.6×2.4cmの円盤状を呈し，厚さは2mmで双孔である。灰青色。



第109図　各遺構出土遺物（土器片錘）

(7)　砥　石（第110図10～13）（第111図14～19）

10は第21号住居址の覆土から出土した粘盤岩製の提げ砥石である。12.1×1.6cmの長方形で厚さは２cmほどである。中央部が磨り減っている。上端に紐をとおす穿孔がある。色調は淡黄色。

11は第12号住居址の覆土から出土した粘盤岩製の破片である。7.4×2.7cmで厚さは1.6cm。

12は第17号住居址の床面から出土した粘盤岩製の破片である。

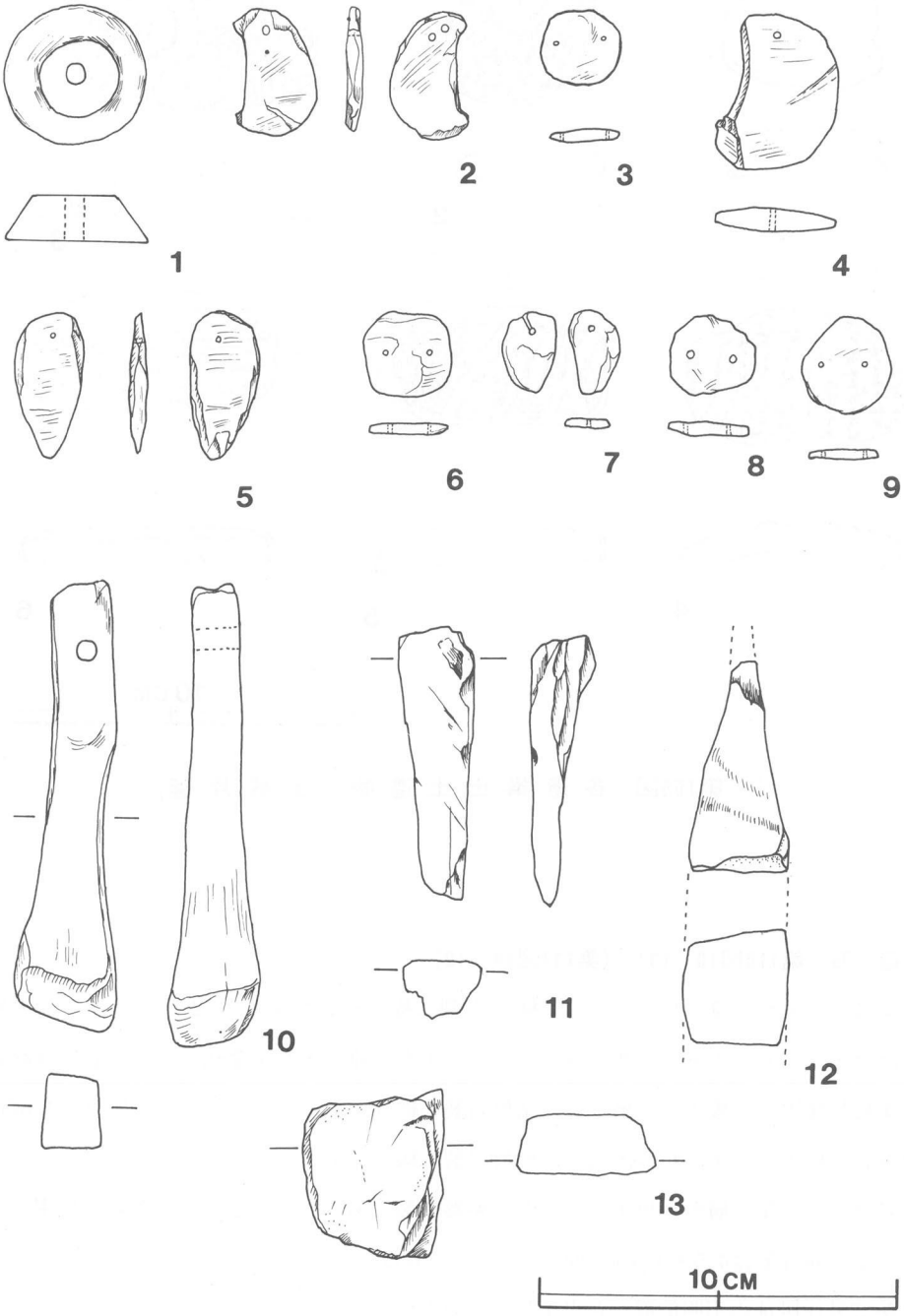
13はＣ２ｂ４の第１層から出土したもので粘盤岩製である。形状からみて置いて使用したものであろうか。現存形は4.5×3.5cmで厚さは1.6cmである。

14は第27号住居址の不明位置から出土した。原石は判別しにくい。

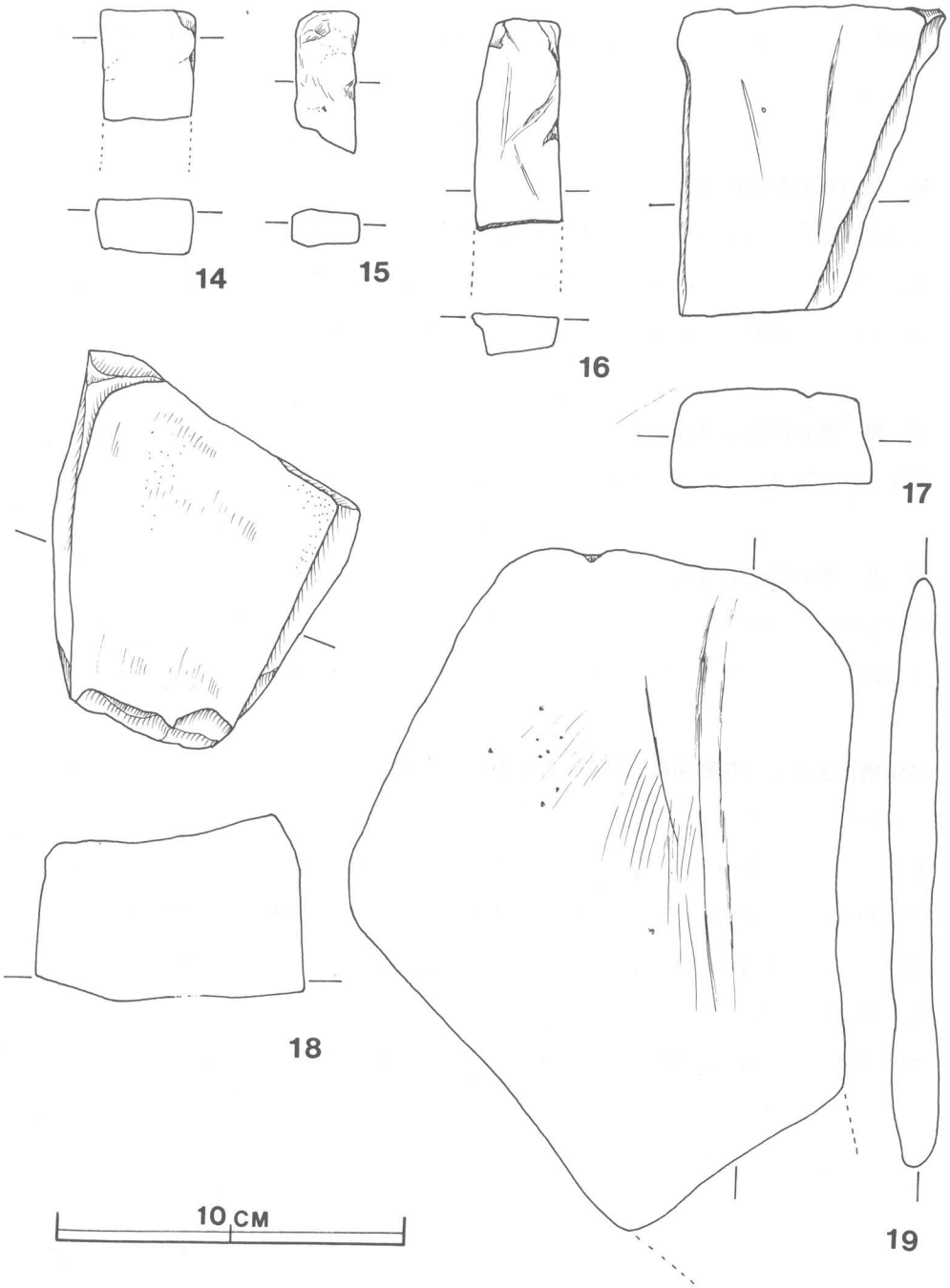
15は第29号住居址の不明位置から出土した。使用痕はきわめて不明瞭である。

16は第27号住居址床面から出土した。使用痕はみとめられる。

17は第17号住居址の床面から出土した。平面形状は8.4×5.2cmで厚さは2.8cmほどである。鋭い刃器のようなもので引掻いたような痕がある。砂岩で製作したものか。



第110図　各 遺 構 出 土 遺 物　（紡錘車・石製模造品・砥石）



第111図　各遺構出土遺物（砥石）

18は第16号住居址の床面から出土した。砂岩で，形状は長方形であったかと思う。使用した面は２mmほどの深さを呈する。厚みは4.5cm。

19は第18号住居址の床面から出土した砂岩で，平板状をしている。使用痕は細い溝状のものと，刺突したものとある。

(8) 軽　石（第112図20，21）

20は第28号住居址の覆土から出土した。重さは15ｇほどで灰白色である。

21は第29号住居址の不明位置から出土した。重さは13ｇほどで，にぶい褐色を呈する。

20，21はいづれも摩耗しているが，切目をつけたと思われる痕がある。

(9) 石　鏃（第112図22，23）

22は表採で，23はＢ２ａ６から検出されている。

(10) 剝　片（第112図24，25）

24は第16号住居址の覆土から，25は第18号住居址の床面から夫々検出されている。チャートである。本遺跡からの出土はほかにないので判らないが，25は先土器期のものであろうか。

(11) 各遺構出土土器（拓影図第113図～第133図）

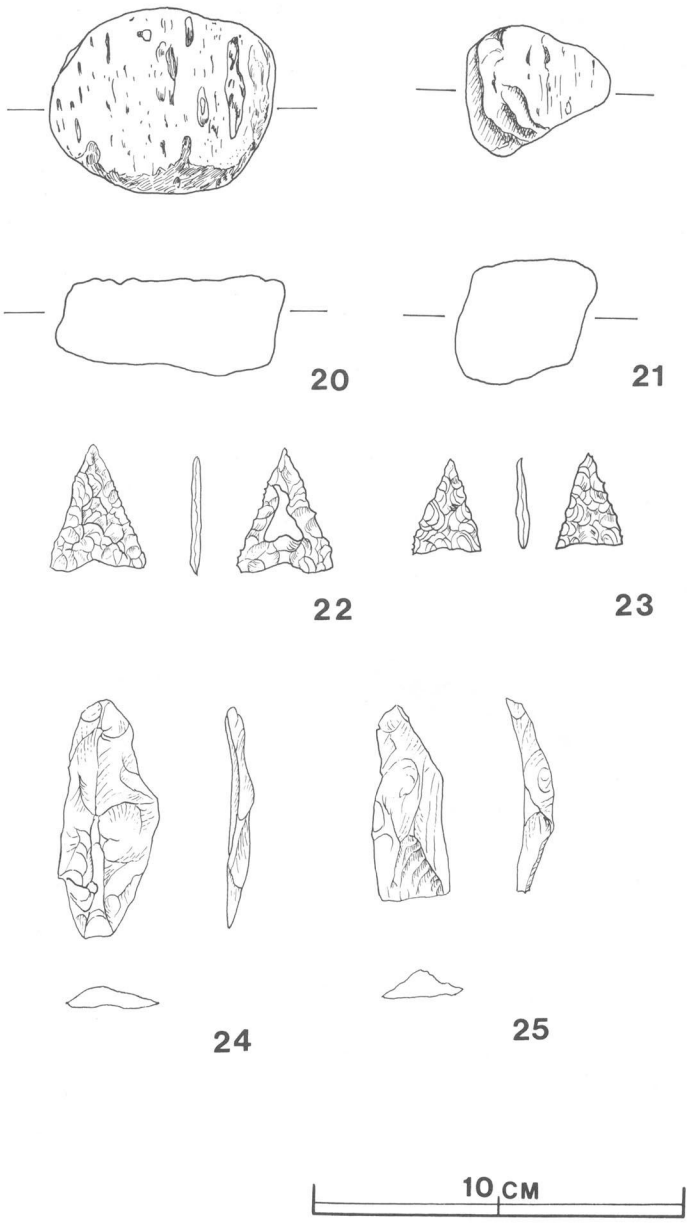
拓影に収録した土器片は全部で661である。

第１群としては縄文中期として加曽利E(3)あたりからで，後期に入り称名寺１式―２式，堀之内１―２式が加わる。中期に属するものはそれ程多くないので中後期として分類した。

第２群としては弥生式土器群であるが，主として十王台式平行のものが多数を占めている。

須恵器は18点ほどである。

その他は土師２点の他に，縄文早期と思われるもの（第125図33）がみられた。



第112図　各遺構出土遺物（軽石，石鏃，剝片）

土　器　拓　影　一　覧

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第113図	1	002住			○			○			
〃	2	〃			○			○			
〃	3	〃			○			○			
〃	4	〃			○			○			
〃	5	〃			○			○			
〃	6	〃			○			○			
〃	7	〃			○		○				
〃	8	〃			○		○				
〃	9	〃				○		○			
〃	10	003住	○					○			十王台式併行
〃	11	〃	○					○			〃
〃	12	〃		○				○			〃
〃	13	〃		○				○			〃
〃	14	〃		○				○			〃
〃	15	〃	○					○			複合口縁
〃	16	〃	○					○			
〃	17	〃			○			○			
〃	18	〃			○			○			
〃	19	〃			○			○			
〃	20	〃			○			○			
〃	21	〃				○		○			（底縁部）
〃	22	〃			○			○			
〃	23	〃			○			○			
〃	24	〃			○			○			
〃	25	〃			○			○			
〃	26	〃			○			○			
〃	27	〃			○			○			
〃	28	〃			○			○			
〃	29	〃			○			○			
〃	30	〃			○			○			
第114図	1	004住			○			○			
〃	2	〃			○		○				

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第114図	3	００６住			○			○			
〃	4	〃			○			○			
〃	5	〃			○			○			
〃	6	００７住			○				○		平行叩目
〃	7	００８住	○					○			複合口縁
〃	8	〃	○					○			〃
〃	9	〃	○				○				
〃	10	〃			○			○			
〃	11	〃			○			○			
〃	12	〃	○					○			
〃	13	〃			○			○			
第115図	1	〃				○		○			木葉痕
〃	2	〃				○		○			〃
〃	3	〃				○		○			
〃	4	〃				○		○			木葉痕
〃	5	〃				○		○			〃
〃	6	〃				○		○			
〃	7	〃				○		○			
〃	8	〃	○				○				貫通孔
〃	9	〃				○		○			木葉痕
〃	10	〃			○			○			
〃	11	〃				○		○			木葉痕
〃	12	〃				○		○			
〃	13	〃	○					○			複合口縁
〃	14	〃	○					○			
〃	15	〃	○					○			
〃	16	〃			○			○			
〃	17	〃			○			○			
第116図	1	０１０住			○			○			
〃	2	〃			○			○			
〃	3	〃			○			○			
〃	4	〃			○			○			
〃	5	〃			○			○			

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第116図	6	010住			○			○			
〃	7	〃	○				○				称名寺1式
〃	8	011住		○				○			
〃	9	〃			○			○			
〃	10	〃			○		○				
〃	11	〃			○			○			
〃	12	〃			○			○			
〃	13	〃			○		○				
〃	14	〃			○		○				
〃	15	〃			○			○			
〃	16	〃			○			○			
〃	17	〃			○			○			
〃	18	〃			○			○			
〃	19	〃			○			○			
〃	20	〃			○			○			
〃	21	〃			○			○			
〃	22	〃			○			○			
〃	23	〃				○		○			
〃	24	〃			○			○			
〃	25	〃			○			○			
〃	26	〃			○			○			
〃	27	〃			○			○			
〃	28	〃			○			○			
〃	29	〃			○		○				
〃	30	〃			○			○			
〃	31	〃			○		○				
〃	32	〃			○		○				
〃	33	〃		○				○			
〃	34	〃			○		○				
第117図	1	〃			○			○			
〃	2	〃			○			○			
〃	3	〃			○			○			
〃	4	〃			○			○			

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第117図	5	011住			○			○			
〃	6	〃			○				○		平行叩目内型痕
〃	7	〃		○				○			櫛目7本
〃	8	〃			○			○			櫛目4本
〃	9	〃			○		○				
〃	10	〃				○		○			木葉痕
〃	11	〃				○		○			〃
〃	12	〃				○		○			〃
〃	13	〃				○		○			〃
〃	14	〃				○		○			〃
〃	15	012住			○			○			
〃	16	〃			○			○			
〃	17	〃			○			○			
〃	18	〃			○			○			
〃	19	〃			○			○			
〃	20	〃		○				○			
〃	21	〃			○			○			櫛目4本
〃	22	〃			○			○			
第118図	1	〃				○		○			木葉痕
〃	2	〃				○		○			〃
〃	3	〃				○		○			〃
〃	4	〃				○		○			〃
〃	5	013住			○				○		平行叩目
〃	6	〃			○		○				称名寺1式
〃	7	〃			○		○				〃
〃	8	〃			○		○				〃
〃	9	〃			○				○		平行叩目, 内型痕
〃	10	〃			○				○		〃
〃	11	〃			○				○		〃
〃	12	〃			○				○		平行叩目
〃	13	〃			○				○		平行叩目, 内型痕
〃	14	〃			○			○			
〃	15	〃		○				○			

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第118図	16	013住			○			○			
〃	17	〃			○			○			
〃	18	〃		○				○			
〃	19	〃			○			○			
〃	20	〃			○			○			
〃	21	〃			○			○			
〃	22	〃			○			○			
〃	23	〃			○			○			
〃	24	〃			○			○			
〃	25	〃			○			○			
〃	26	〃			○				○		平行叩目
〃	27	〃			○		○				
〃	28	〃				○		○			木葉痕
第119図	1	014住	○					○			複合口縁
〃	2	〃			○			○			
〃	3	〃			○			○			
〃	4	〃			○			○			
〃	5	〃			○			○			
〃	6	〃			○			○			
〃	7	〃			○		○				
〃	8	〃				○		○			木葉痕
〃	9	〃		○				○			
〃	10	〃			○		○				
〃	11	〃			○		○				
〃	12	〃			○				○		平行叩目
〃	13	〃		○				○			
〃	14	〃	○					○			
〃	15	〃			○			○			
〃	16	〃			○			○			
〃	17	〃			○		○				
〃	18	〃			○		○				
〃	19	〃			○		○				
〃	20	〃			○		○				

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第119図	21	016住			○			○			
〃	22	〃			○		○				櫛目4本，堀の内Ⅰ式併行
〃	23	〃		○				○			櫛目
〃	24	015住	○					○			複合口縁
〃	25	〃			○			○			
〃	26	〃			○			○			
〃	27	〃			○			○			
〃	28	〃			○			○			
〃	29	〃				○		○			木葉痕
〃	30	〃			○		○				
〃	31	〃			○		○				
〃	32	〃			○		○				
〃	33	〃			○		○				
〃	34	〃		○				○			櫛目3本
〃	35	〃				○		○			
〃	36	〃			○		○				
第120図	1	016住			○		○				称名寺1式
〃	2	〃			○		○				〃
〃	3	〃			○		○				〃
〃	4	〃			○		○				〃
〃	5	〃	○				○				〃
〃	6	〃		○			○				〃
〃	7	〃			○		○				〃
〃	8	〃			○		○				称名寺2式
〃	9	〃			○		○				〃
〃	10	〃			○		○				〃
〃	11	〃			○		○				
〃	12	〃	○				○				称名寺1式
〃	13	〃			○		○				〃
〃	14	〃			○		○				
〃	15	〃			○		○				称名寺2式
〃	16	〃			○		○				加曽利E3
〃	17	〃			○		○				

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第120図	18	016住			○		○				称名寺1式
〃	19	〃			○		○				〃
〃	20	〃			○		○				
〃	21	〃			○		○				
〃	22	〃			○		○				
〃	23	〃			○		○				（把手部）
〃	24	〃			○		○				
〃	25	〃			○		○				称名寺1式
〃	26	〃			○		○				
〃	27	〃			○		○				
〃	28	〃			○		○				
〃	29	〃			○		○				
〃	30	〃			○		○				
〃	31	〃			○		○				
〃	32	〃			○		○				
〃	33	〃			○		○				
〃	34	〃			○		○				
〃	35	〃			○		○				
〃	36	〃			○		○				
第121図	1	〃			○		○				
〃	2	〃			○		○				
〃	3	〃			○		○				
〃	4	〃			○		○				
〃	5	〃			○		○				
〃	6	〃			○		○				
〃	7	〃			○			○			
〃	8	〃			○			○			
〃	9	〃			○		○				
〃	10	〃			○		○				
〃	11	〃			○		○				
〃	12	〃			○		○				
〃	13	〃			○		○				
〃	14	〃	○					○			

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第121図	15	016住			○			○			櫛目3本
〃	16	〃		○				○			〃
〃	17	〃			○			○			
〃	18	〃			○			○			十王台式併行
〃	19	〃			○			○			〃
〃	20	〃			○			○			〃
〃	21	〃	○					○			
〃	22	〃			○			○			
〃	23	〃			○			○			
〃	24	〃			○			○			櫛目5本
〃	25	〃			○			○			
〃	26	〃			○			○			櫛目4本
〃	27	〃		○				○			櫛目3本
〃	28	〃			○			○			
〃	29	〃			○			○			
〃	30	〃			○		○				
〃	31	〃			○			○			
〃	32	〃			○			○			
〃	33	〃			○			○			
〃	34	〃			○			○			
〃	35	〃			○			○			
〃	36	〃			○			○			
〃	37	〃			○			○			
〃	38	〃			○			○			
〃	39	〃			○			○			
〃	40	〃			○			○			
〃	41	〃			○			○			
〃	42	〃			○			○			
〃	43	〃			○			○			
〃	44	〃			○			○			
〃	45	〃			○			○			
〃	46	〃			○			○			
〃	47	〃			○			○			

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第121図	48	016住		○				○			
〃	49	〃			○				○		平行叩目内型痕
〃	50	〃		○				○			
〃	51	〃			○			○			
〃	52	〃			○		○				
〃	53	〃			○			○			
第122図	1	〃				○		○			木葉痕
〃	2	〃				○		○			
〃	3	〃				○		○			木葉痕
〃	4	〃				○		○			
〃	5	〃				○		○			
〃	6	〃				○		○			木葉痕
〃	7	017住			○		○				称名寺1式
〃	8	〃	○				○				〃
〃	9	〃			○		○				〃
〃	10	〃			○		○				
〃	11	〃			○		○				称名寺2式
〃	12	〃			○		○				称名寺1式
〃	13	〃			○		○				〃
〃	14	〃		○			○				〃
〃	15	〃			○		○				
〃	16	〃			○		○				称名寺1式
〃	17	〃			○		○				
〃	18	〃			○		○				称名寺1式
〃	19	〃			○		○				
〃	20	〃			○		○				称名寺1式
〃	21	〃			○		○				〃
〃	22	〃			○		○				〃
〃	23	〃			○		○				
〃	24	〃			○		○				
〃	25	〃	○				○				
〃	26	〃			○		○				称名寺1式
〃	27	〃			○		○				〃

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第122図	28	017住			○		○				称名寺1式
〃	29	〃			○		○				称名寺2式
〃	30	〃			○		○				
〃	31	〃	○				○				称名寺1式
〃	32	〃			○		○				称名寺1式
〃	33	〃			○		○				〃
〃	34	〃			○		○				〃
〃	35	〃			○		○				
第123図	1	〃			○		○				称名寺1式
〃	2	〃	○				○				〃
〃	3	〃		○			○				加曽利E3？
〃	4	〃			○		○				
〃	5	〃			○		○				
〃	6	〃			○		○				
〃	7	〃			○		○				
〃	8	〃			○		○				
〃	9	〃	○				○				称名寺1式
〃	10	〃			○		○				
〃	11	〃			○		○				
〃	12	〃			○		○				
〃	13	〃			○		○				
〃	14	〃			○		○				
〃	15	〃			○		○				
〃	16	〃			○		○				
〃	17	〃			○		○				
〃	18	〃			○		○				
〃	19	〃			○		○				
〃	20	〃			○		○				
〃	21	〃			○		○				
〃	22	〃			○		○				称名寺1式
〃	23	〃	○					○			複合口縁
〃	24	〃	○					○			〃
〃	25	〃			○		○				

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第123図	26	017住		○				○			十王台式併行
〃	27	〃		○				○			十王台式併行
〃	28	〃	○					○			複合口縁
〃	29	〃	○					○			
〃	30	〃			○			○			
〃	31	〃			○			○			
〃	32	〃			○			○			
〃	33	〃		○				○			
〃	34	〃			○		○				堀之内式
〃	35	〃	○					○			
〃	36	〃			○			○			
〃	37	〃	○					○			
〃	38	〃			○			○			
〃	39	〃		○			○				堀之内式
〃	40	〃			○			○			
〃	41	〃			○			○			
〃	42	〃			○		○				
〃	43	〃			○		○				
〃	44	〃			○		○				
〃	45	〃			○		○				
第124図	1	〃			○			○			櫛目5本
〃	2	〃	○					○			
〃	3	〃			○			○			
〃	4	〃			○			○			
〃	5	〃		○				○			
〃	6	〃			○		○				
〃	7	〃			○		○				
〃	8	〃			○		○				堀之内式
〃	9	〃			○			○			櫛目9本
〃	10	〃			○			○			
〃	11	〃			○			○			
〃	12	〃			○		○				
〃	13	〃			○		○				

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第124図	14	017住			○		○				
〃	15	〃			○		○				
〃	16	〃			○		○				
〃	17	〃			○			○			
〃	18	〃			○			○			
〃	19	〃			○			○			
〃	20	〃			○			○			
〃	21	〃			○			○			
〃	22	〃			○			○			
〃	23	〃			○			○			
〃	24	〃		○				○			
〃	25	〃		○				○			
〃	26	〃			○			○			
〃	27	〃			○		○				
〃	28	〃			○			○			
〃	29	〃			○			○			
〃	30	〃			○		○				
〃	31	〃			○		○				
〃	32	〃			○			○			
〃	33	〃			○			○			
〃	34	〃			○			○			
〃	35	〃			○			○			
〃	36	〃			○			○			
〃	37	〃			○			○			
〃	38	〃		○			○				
〃	39	〃				○		○			
〃	40	〃				○		○			
〃	41	〃				○		○			木葉痕
第125図	1	018住		○			○				
〃	2	〃			○		○				
〃	3	〃			○		○				

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
	4	018住			○		○				（把手部）
〃	5	〃	○				○				称名寺1式
〃	6	〃			○		○				〃
〃	7	〃			○		○				称名寺2式
〃	8	〃	○				○				〃
〃	9	〃			○		○				称名寺1式
〃	10	〃			○		○				〃
〃	11	〃	○				○				〃
〃	12	〃			○		○				〃
〃	13	〃			○		○				〃
〃	14	〃		○			○				称名寺2式
〃	15	〃		○			○				〃
〃	16	〃			○		○				称名寺1式
〃	17	〃			○		○				
〃	18	〃	○				○				
〃	19	〃			○		○				
〃	20	〃			○		○				称名寺1式
〃	21	〃			○		○				
〃	22	〃			○		○				
〃	23	〃			○		○				
〃	24	〃			○		○				
〃	25	〃			○		○				
〃	26	〃			○		○				
〃	27	〃			○		○				
〃	28	〃			○		○				
〃	29	〃	○				○				
〃	30	〃			○		○				
〃	31	〃			○		○				
〃	32	〃			○		○				堀之内式
〃	33	〃	○							○	縄文早期？ 子母口式？
〃	34	〃			○		○				
〃	35	〃			○		○				
〃	36	〃			○		○				

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第125図	37	018住		○			○				
〃	38	〃			○		○				
第126図	1	019住			○		○				
〃	2	〃	○				○				
〃	3	〃			○		○				
〃	4	〃			○		○				
〃	5	〃			○		○				称名寺1式
〃	6	〃			○		○				〃
〃	7	〃			○		○				〃
〃	8	〃			○		○				堀之内1式
〃	9	〃	○				○				称名寺1式
〃	10	〃				○		○			
〃	11	〃				○		○			
〃	12	〃				○		○			
〃	13	〃		○				○			
〃	14	〃				○		○			
〃	15	020住				○		○			
〃	16	〃			○			○			
〃	17	022住		○				○			
〃	18	020住				○		○			
〃	19	〃	○						○		櫛目18本
〃	20	021住				○		○			
〃	21	〃		○			○				称名寺2式
〃	22	022住			○		○				称名寺1式？
〃	23	〃			○			○			
〃	24	〃				○		○			木葉痕
第127図	1	023住	○				○				
〃	2	〃			○		○				
〃	3	〃	○					○			
〃	4	〃	○					○			
〃	5	〃			○				○		平行叩目
〃	6	〃	○					○			複合口縁
〃	7	〃			○			○			

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第127図	8	023住		○				○			櫛目3本
〃	9	〃				○		○			
〃	10	024住		○			○				称名寺1式
〃	11	〃			○			○			櫛目4本
〃	12	〃			○		○				
〃	13	〃		○				○			櫛目3本
〃	14	〃			○			○			
〃	15	〃			○			○			
〃	16	〃			○			○			櫛目4本
〃	17	025住	○				○				
〃	18	〃			○		○				称名寺2式
〃	19	〃	○				○				
〃	20	〃			○					○	（把手）土師
〃	21	〃			○		○				称名寺2式
〃	22	〃				○	○				
〃	23	〃			○		○				
〃	24	〃			○		○				
〃	25	〃			○		○				櫛目5本
〃	26	〃			○		○				称名寺1式
〃	27	〃			○		○				
〃	28	〃		○				○			櫛目7本？
第128図	1	026住			○		○				称名寺1式
〃	2	〃			○		○				
〃	3	〃			○		○				称名寺1式
〃	4	〃	○					○			複合口縁
〃	5	〃			○				○		平行叩目，内型痕
〃	6	〃				○		○			
〃	7	〃	○					○			複合口縁
〃	8	〃		○				○			
〃	9	027住	○					○			
〃	10	〃	○					○			
〃	11	〃	○						○		櫛目6本
〃	12	〃	○					○			

挿　図	No.	遺　構	部　位				時　期				備　考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第128図	13	０２７住		○				○			十王台式併行
〃	14	〃			○			○			
〃	15	〃	○					○			
〃	16	〃	○					○			
〃	17	〃				○		○			
〃	18	〃				○		○			
〃	19	〃			○		○				
〃	20	〃				○		○			
〃	21	０２８住	○					○			複合口縁
〃	22	〃	○					○			
〃	23	〃			○			○			
〃	24	〃			○			○			
〃	25	〃	○					○			複合口縁
〃	26	〃			○			○			
〃	27	〃			○			○			
〃	28	〃		○				○			
第129図	1	〃			○			○			
〃	2	〃			○		○				
〃	3	〃			○			○			
〃	4	〃			○			○			
〃	5	〃			○			○			
〃	6	〃			○			○			
〃	7	〃		○				○			
〃	8	〃			○			○			
〃	9	〃			○			○			
〃	10	〃			○			○			
〃	11	〃			○			○			
〃	12	〃			○			○			
〃	13	〃		○				○			
〃	14	〃			○		○				
〃	15	〃			○			○			
〃	16	〃				○		○			布目痕
〃	17	〃				○		○			木葉痕

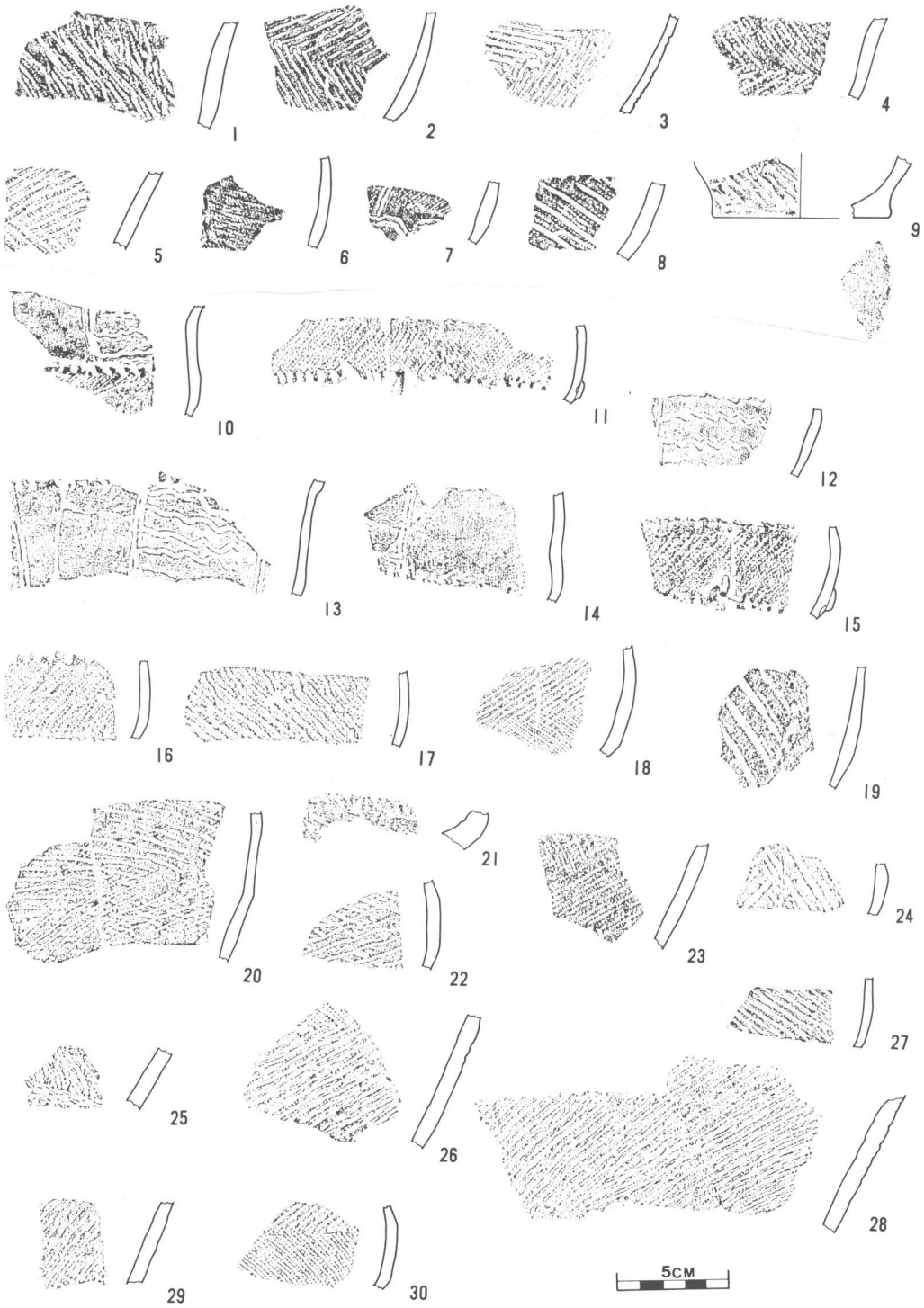
挿　図	No.	遺　構	部　位				時　期				備　考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第129図	18	０２９住			○		○				
〃	19	〃			○		○				
〃	20	〃			○		○				
〃	21	〃			○		○				
〃	22	〃			○		○				
〃	23	〃		○			○				
〃	24	〃			○		○				
〃	25	〃	○				○				
〃	26	〃			○		○				加曽利Ｅ３？
〃	27	〃			○		○				
〃	28	〃			○		○				
〃	29	〃			○		○				称名寺２式
〃	30	〃			○		○				
〃	31	〃			○		○				
〃	32	〃	○				○				
〃	33	〃			○		○				称名寺２式
〃	34	〃			○			○			櫛目３本
〃	35	〃			○		○				
〃	36	〃			○		○				
〃	37	〃			○		○				
〃	38	〃			○		○				称名寺２式
〃	39	〃			○		○				
〃	40	〃			○		○				
〃	41	〃			○		○				
〃	42	〃				○	○				
〃	43	〃			○			○			
〃	44	〃			○		○				
第130図	1	〃			○		○				
〃	2	〃			○		○				
〃	3	〃			○		○				
〃	4	〃			○		○				
〃	5	〃			○		○				
〃	6	〃			○		○				

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第130図	7	029住			○		○				
〃	8	〃			○			○			
〃	9	〃		○				○			
〃	10	〃		○				○			
〃	11	031住			○			○			
〃	12	029住			○			○			
〃	13	〃			○		○				
〃	14	〃			○			○			櫛目3本
〃	15	〃	○					○			
〃	16	〃			○			○			
〃	17	〃			○			○			
〃	18	030住	○					○			連続櫛目（8本）
〃	19	〃			○			○			
〃	20	〃			○		○				
〃	21	〃		○			○				
〃	22	〃			○			○			
〃	23	〃			○		○				
〃	24	〃			○			○			
〃	25	〃			○		○				
〃	26	〃			○			○			
〃	27	〃			○		○				
〃	28	〃				○		○			布目痕
〃	29	〃				○		○			木葉痕
〃	30	〃				○		○			
〃	31	〃			○		○				称名寺1式
〃	32	〃			○		○				
第131図	1	031住	○					○			折り返し口縁
〃	2	〃			○			○			
〃	3	〃				○		○			
〃	4	〃			○		○				
〃	5	〃			○		○				
〃	6	032住	○					○			折り返し口縁
〃	7	〃			○		○				称名寺1式

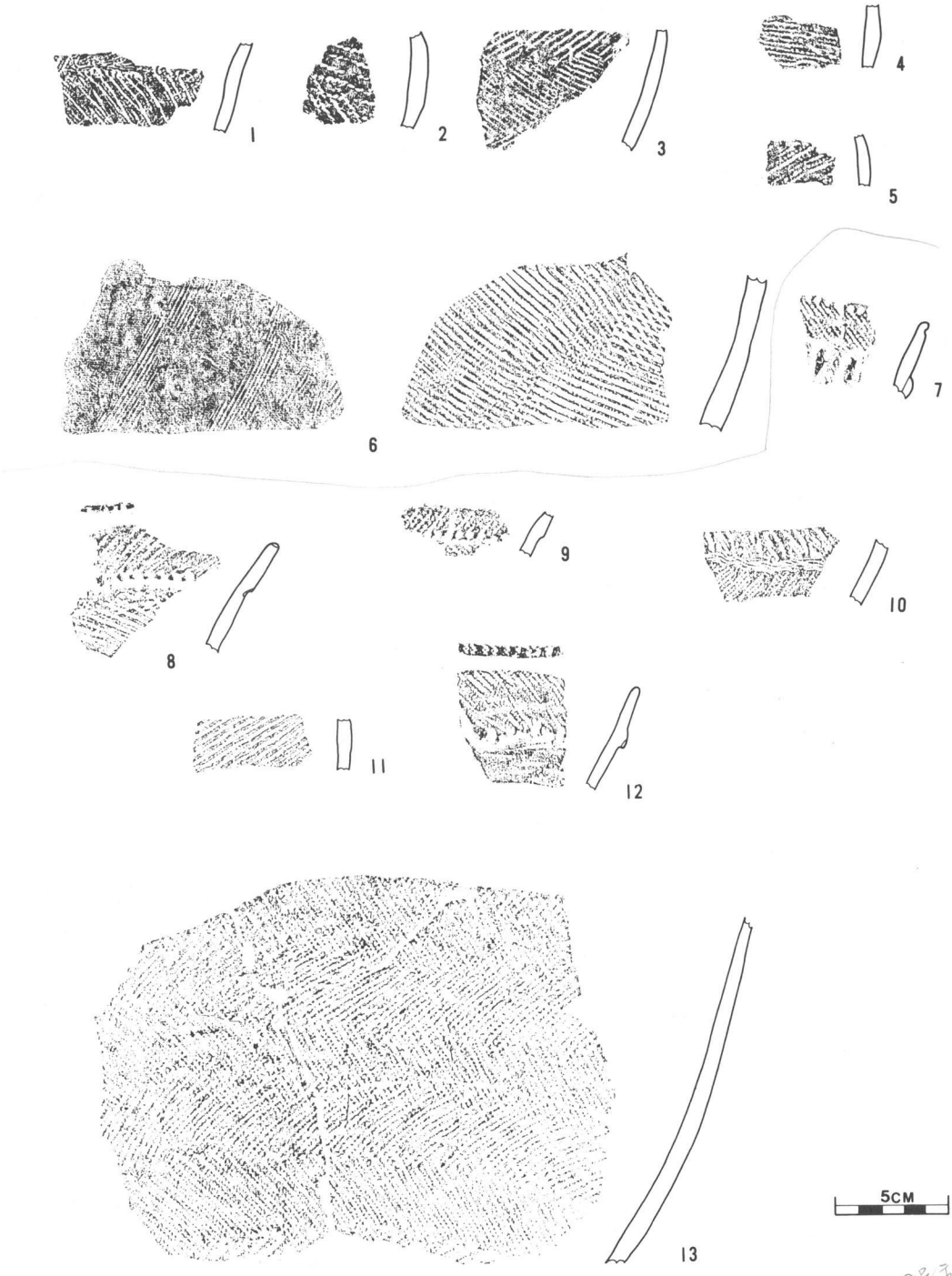
挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第131図	8	032住	○					○			折り返し口縁 十王台式併行？
〃	9	〃			○			○			
〃	10	〃			○			○			
〃	11	〃			○			○			
〃	12	〃			○				○		平行叩目， 内型痕
〃	13	〃	○					○			折り返し口縁
〃	14	〃			○			○			
〃	15	〃				○		○			木葉痕
〃	16	〃				○		○			木葉痕
〃	17	〃				○		○			
〃	18	〃				○		○			木葉痕
第132図	1	〃				○		○			〃
〃	2	033住			○		○				堀之内式
〃	3	〃			○		○				
〃	4	〃			○		○				
〃	5	〃				○		○			木葉痕
〃	6	〃			○			○			
〃	7	〃				○		○			
〃	8	〃			○		○				
〃	9	〃			○		○				
〃	10	〃	○				○				
〃	11	034住	○				○				
〃	12	〃			○		○				称名寺２式
〃	13	〃		○			○				
〃	14	〃	○				○				
〃	15	〃			○		○				
〃	16	〃			○		○				
〃	17	〃	○					○			折り返し口縁
〃	18	035住			○			○			
〃	19	034住			○				○		櫛目波状
〃	20	035住	○				○				
〃	21	036住	○				○				称名寺２式
〃	22	035住				○				○	磁器，糸切痕 （歴史時代）

挿図	No.	遺構	部位				時期				備考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第132図	23	０３６住			○		○				称名寺２式
〃	24	〃			○		○				
〃	25	〃			○		○				
〃	26	０３７住			○			○			
〃	27	〃			○			○			櫛目４本
〃	28	０３６住				○		○			木葉痕
第133図	1	００１溝	○				○				
〃	2	〃		○			○				称名寺１式
〃	3	〃		○			○				〃
〃	4	〃			○		○				〃
〃	5	〃			○		○				
〃	6	〃			○		○				称名寺１式
〃	7	〃			○		○				
〃	8	〃			○		○				
〃	9	〃			○		○				
〃	10	〃		○				○			
〃	11	〃		○				○			
〃	12	〃			○			○			
〃	13	Ｅ２ｂ７			○			○			
〃	14	〃			○			○			
〃	15	〃			○			○			
〃	16	〃	○					○			
〃	17	〃			○			○			
〃	18	〃			○			○			
〃	19	〃			○			○			
〃	20	Ｅ２ｃ９			○			○			
〃	21	Ｅ２ｂ７			○			○			
〃	22	〃			○			○			
〃	23	〃				○		○			
〃	24	〃				○		○			
〃	25	〃				○		○			
〃	26	〃				○		○			
〃	27	〃			○			○			

挿　図	No.	遺　構	部　位				時　期				備　考
			口縁部	頸部	胴部	底部	縄文中後期	弥生期	須恵器	その他	
第133図	28	Ｅ２ｂ７			○			○			
〃	29	〃			○			○			
〃	30	〃			○			○			
〃	31	〃			○			○			
	661	計	74	53	465	69	287	354	17	3	

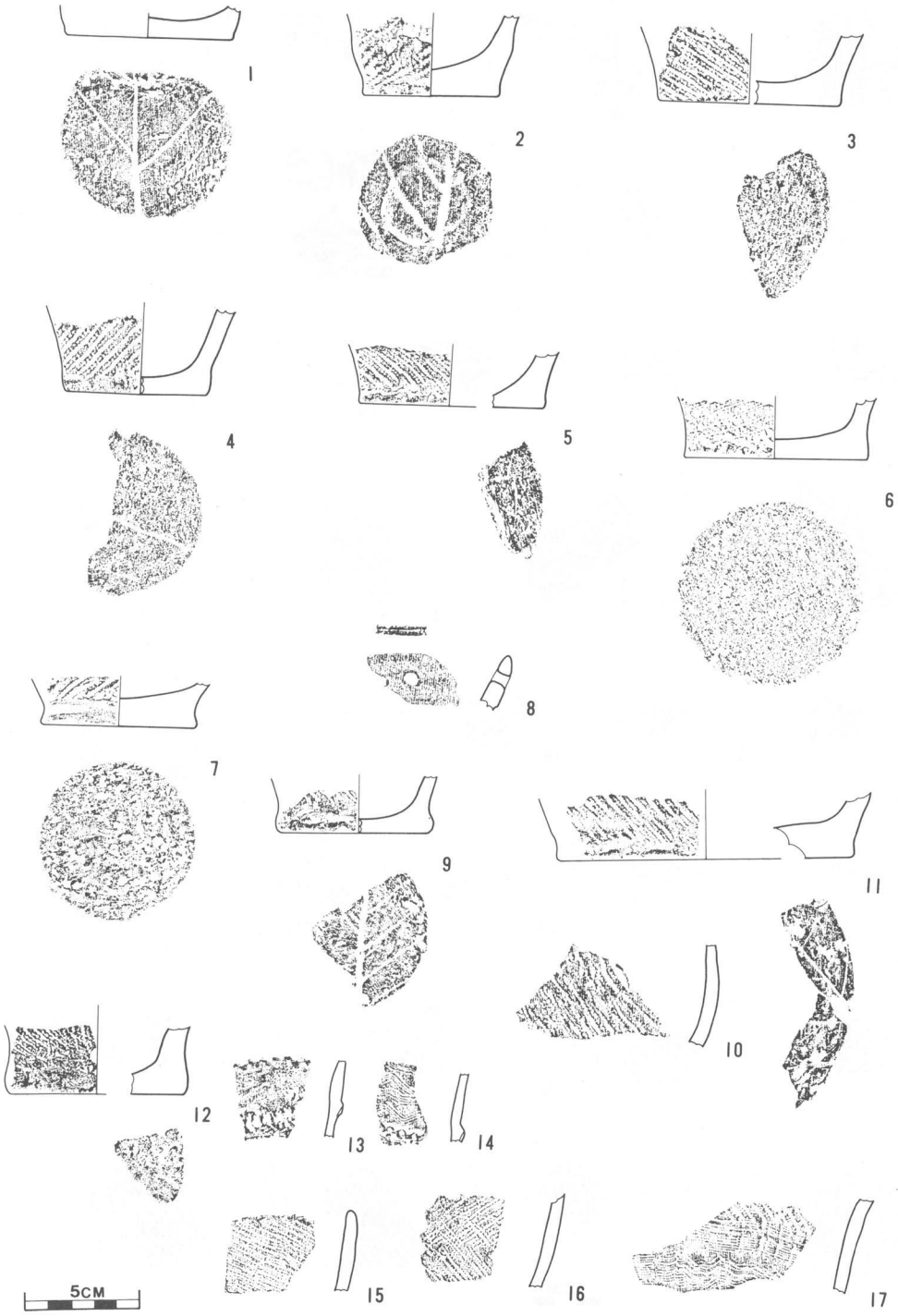


第113図　各遺構出土土器　　（その1）

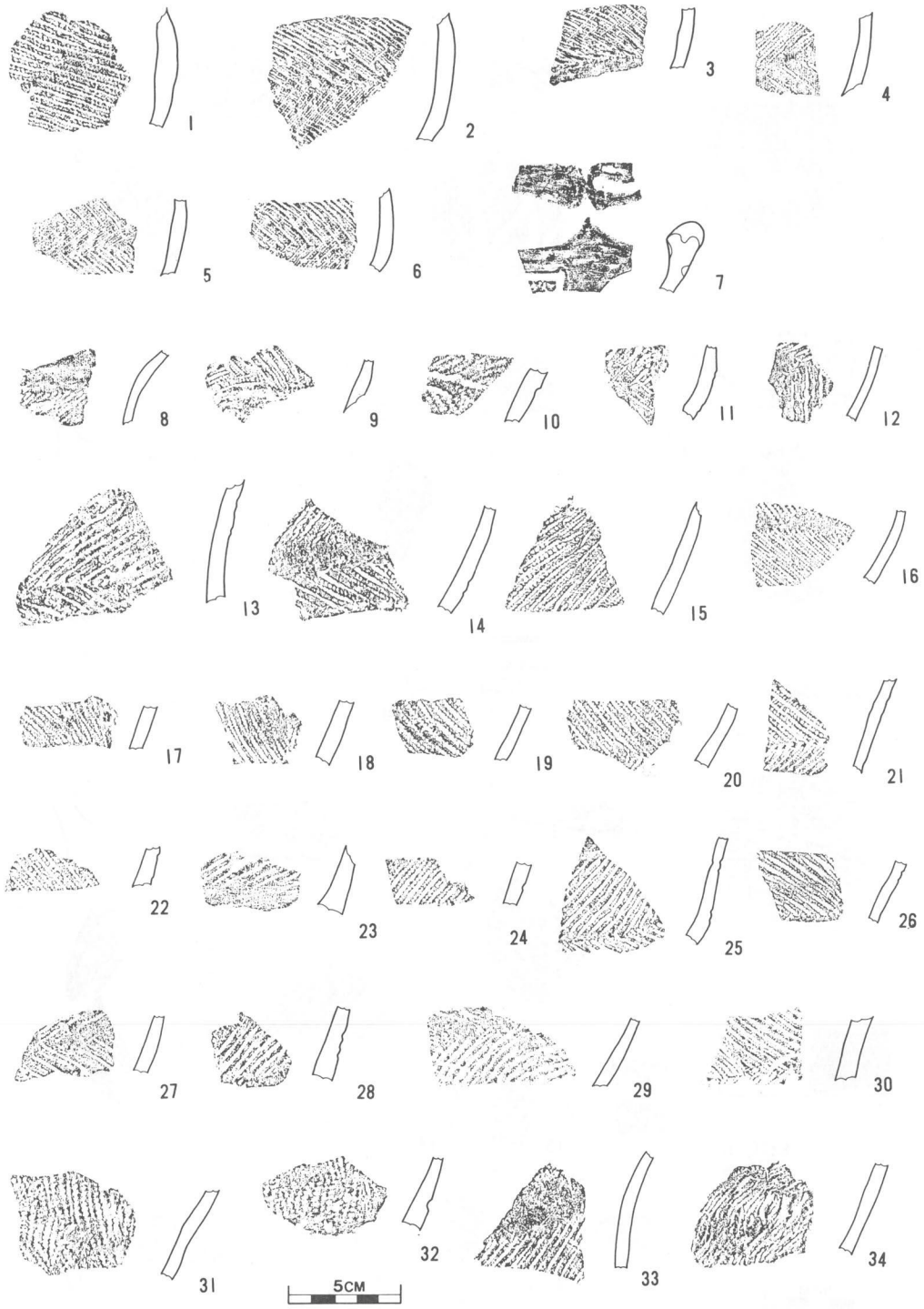


7～13 ―8号住

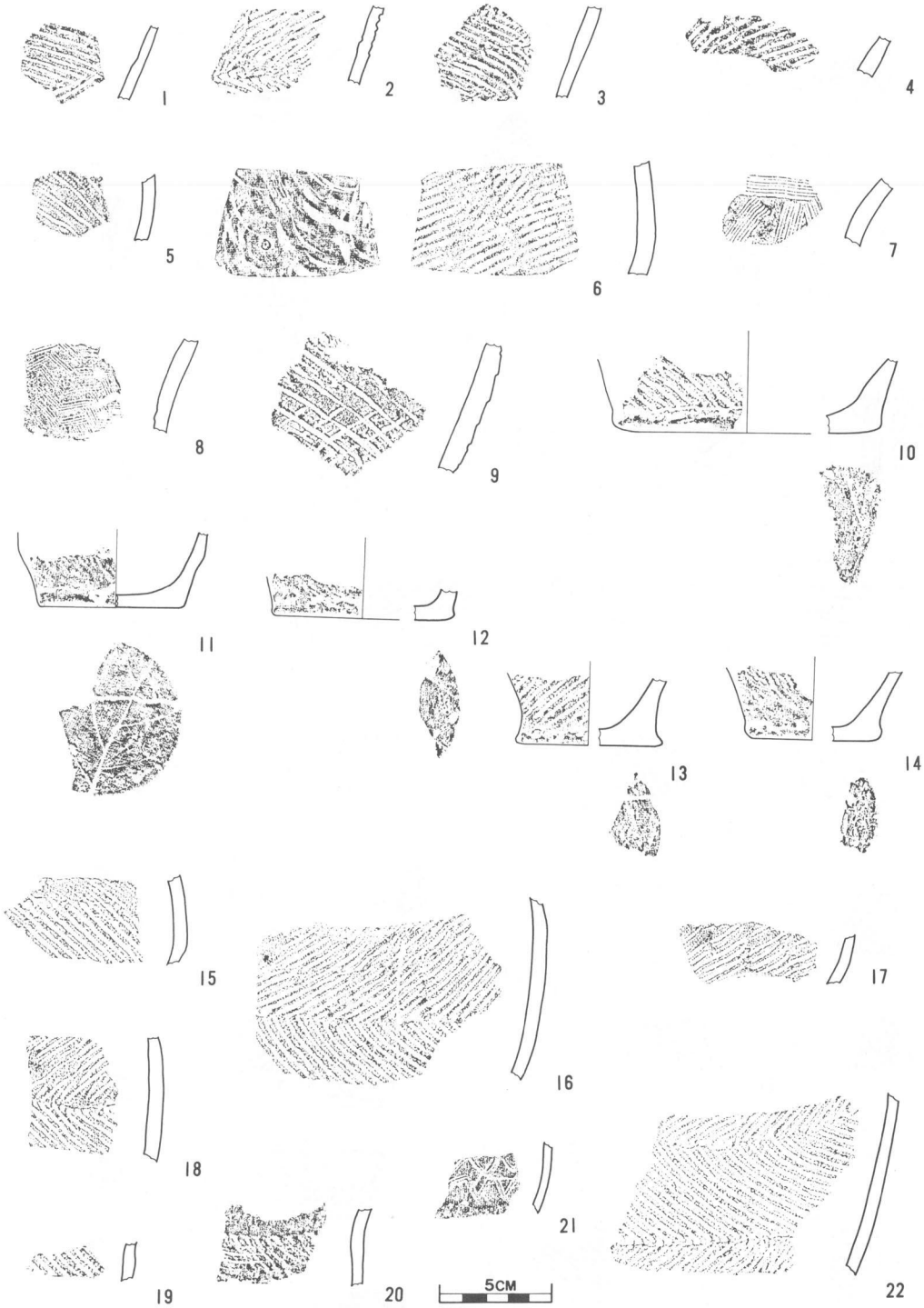
第114図　各遺構出土土器拓影（その2）



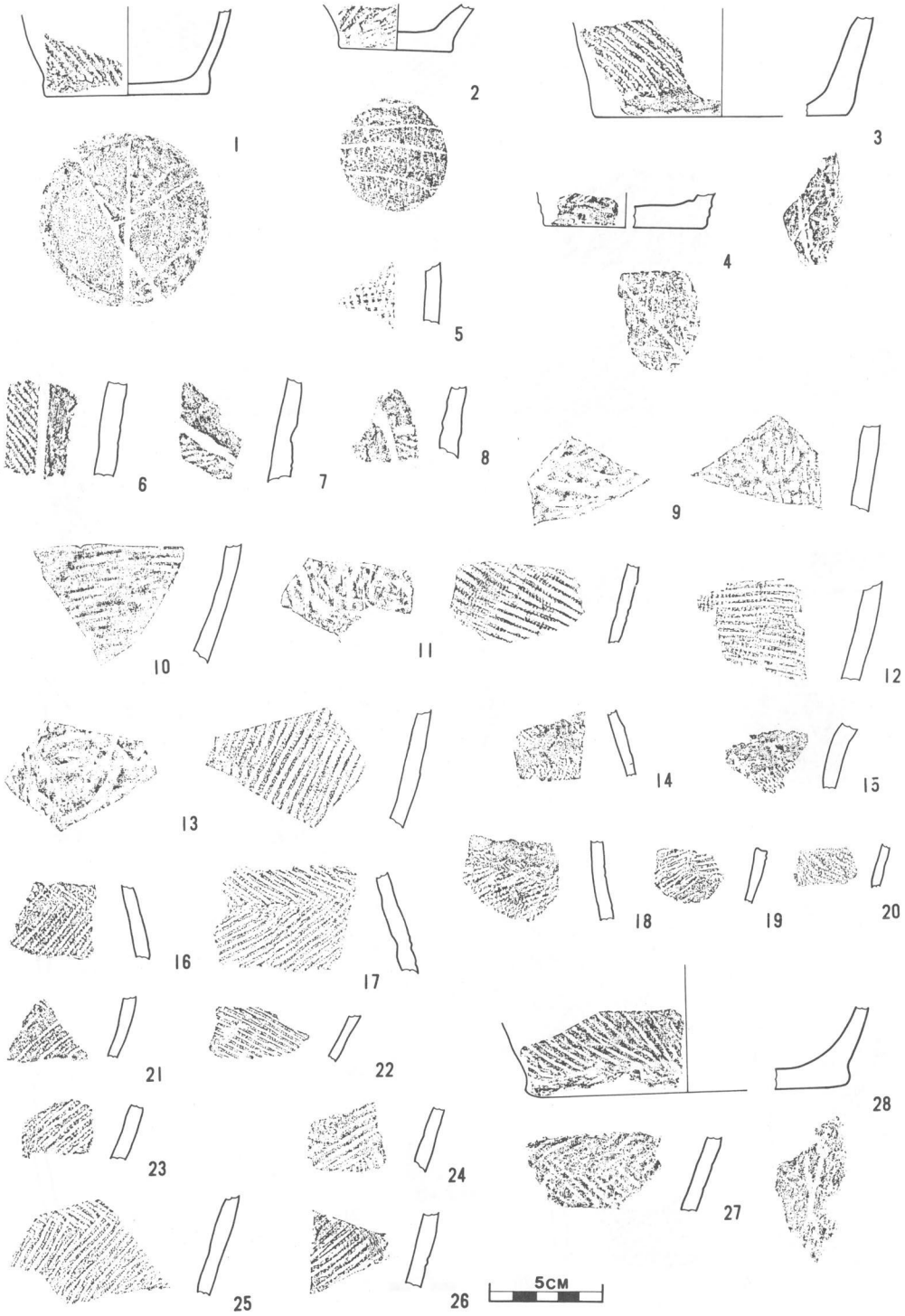
第115図　各遺構出土土器拓影（その3）



第116図　各遺構出土土器拓影（その４）

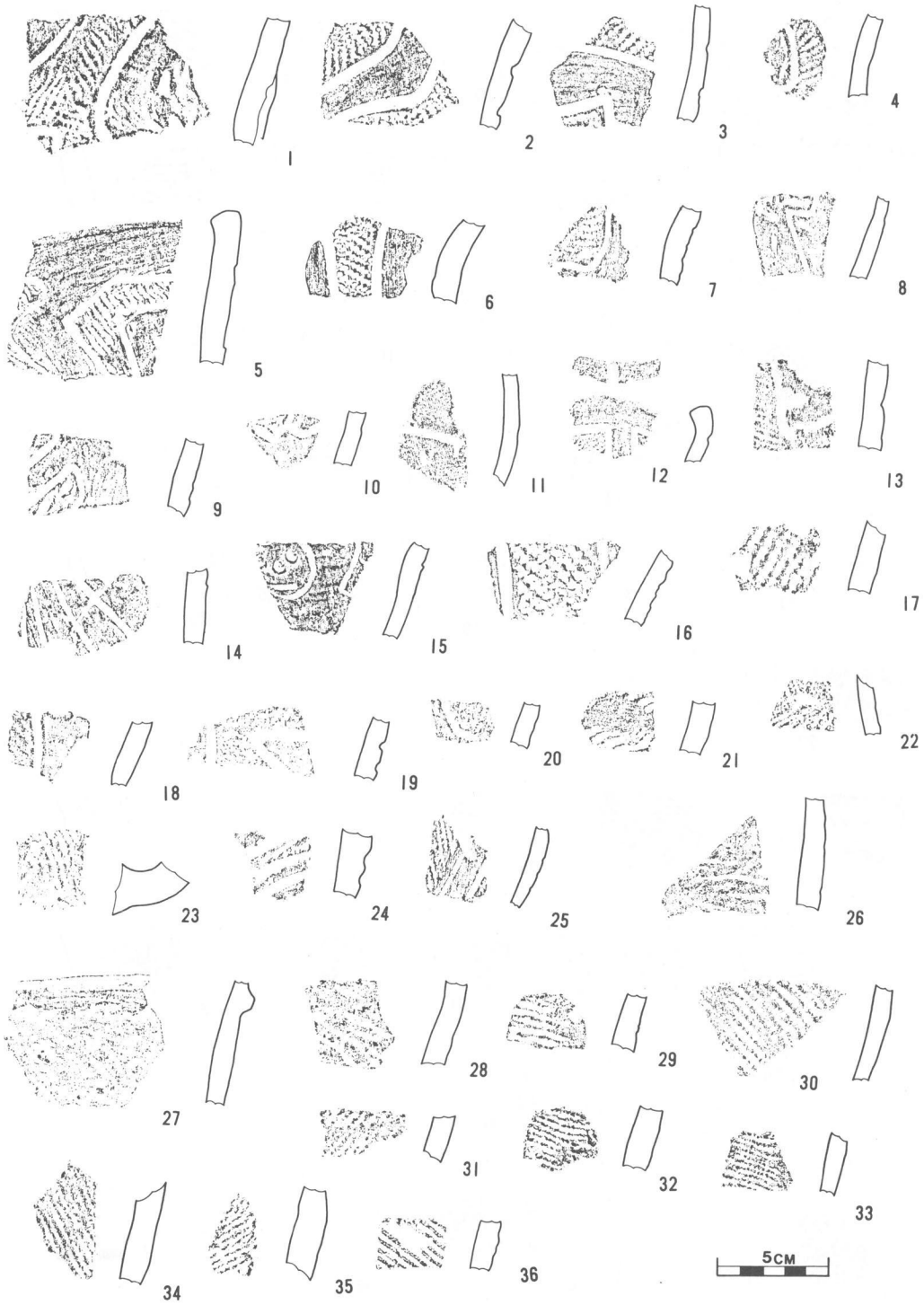


第117図　各遺構出土土器拓影（その5）

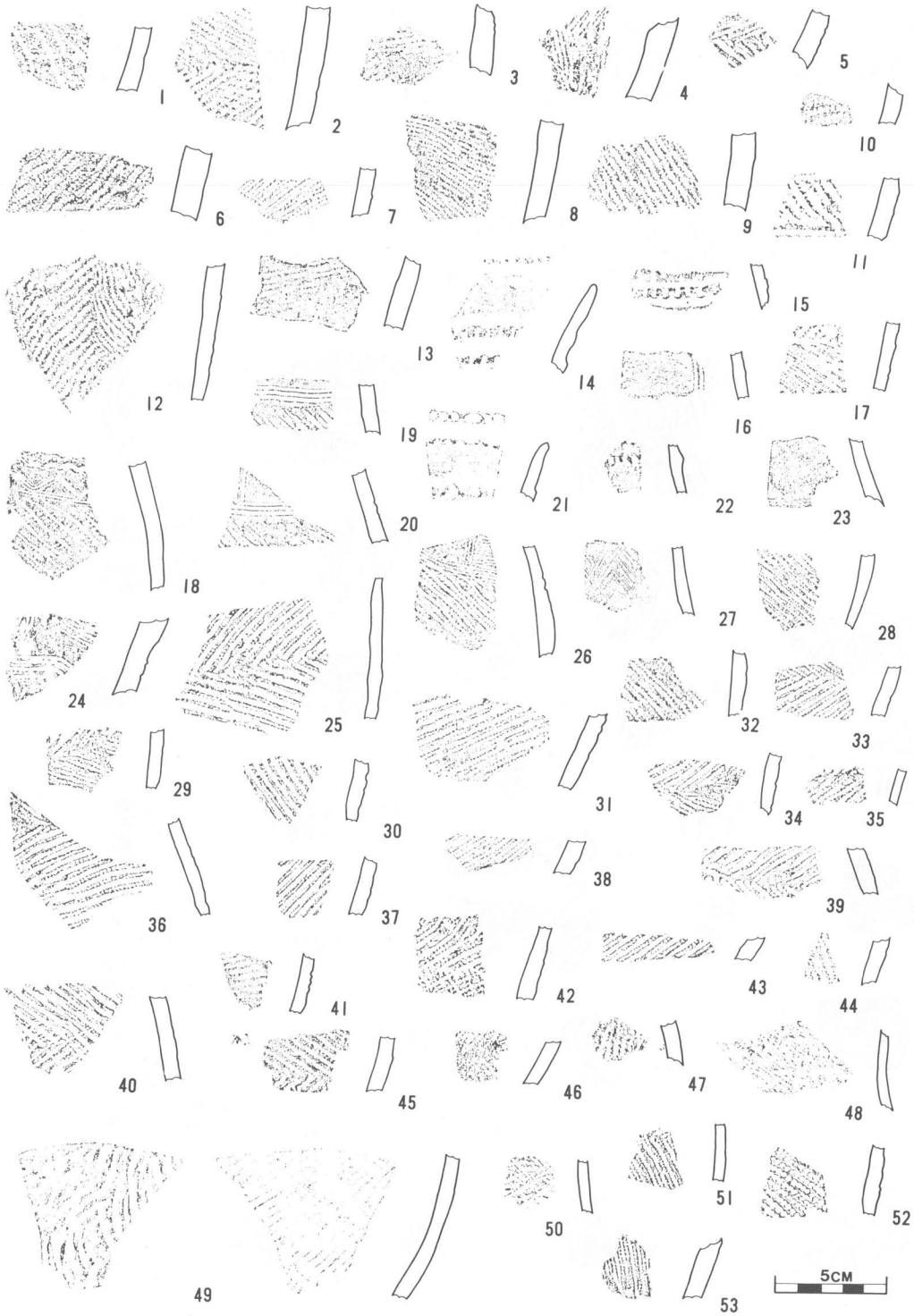


第118図　各遺構出土土器拓影（その6）

第119図　各遺構出土土器拓影（その７）

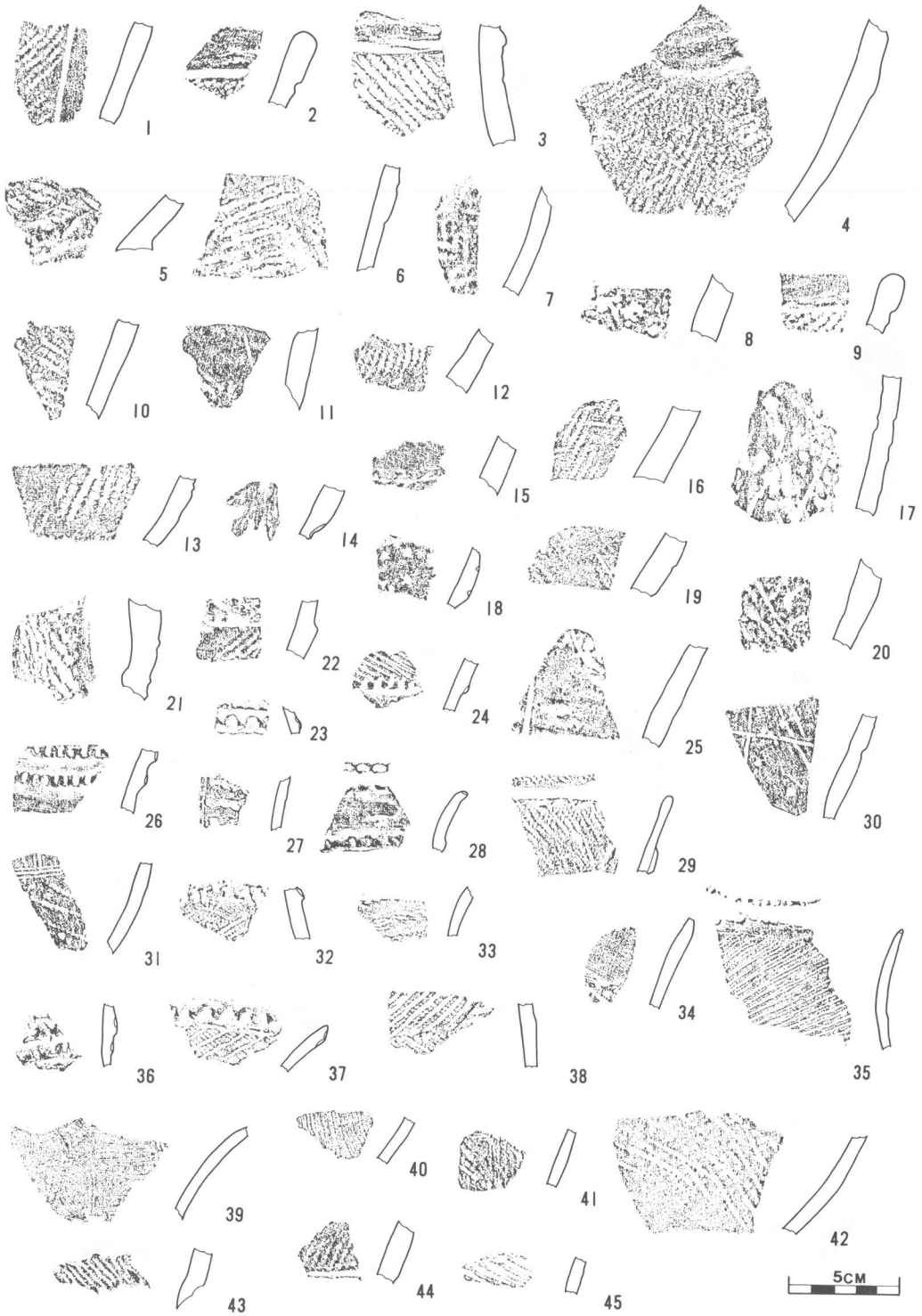


第120図　各遺構出土土器拓影（その８）

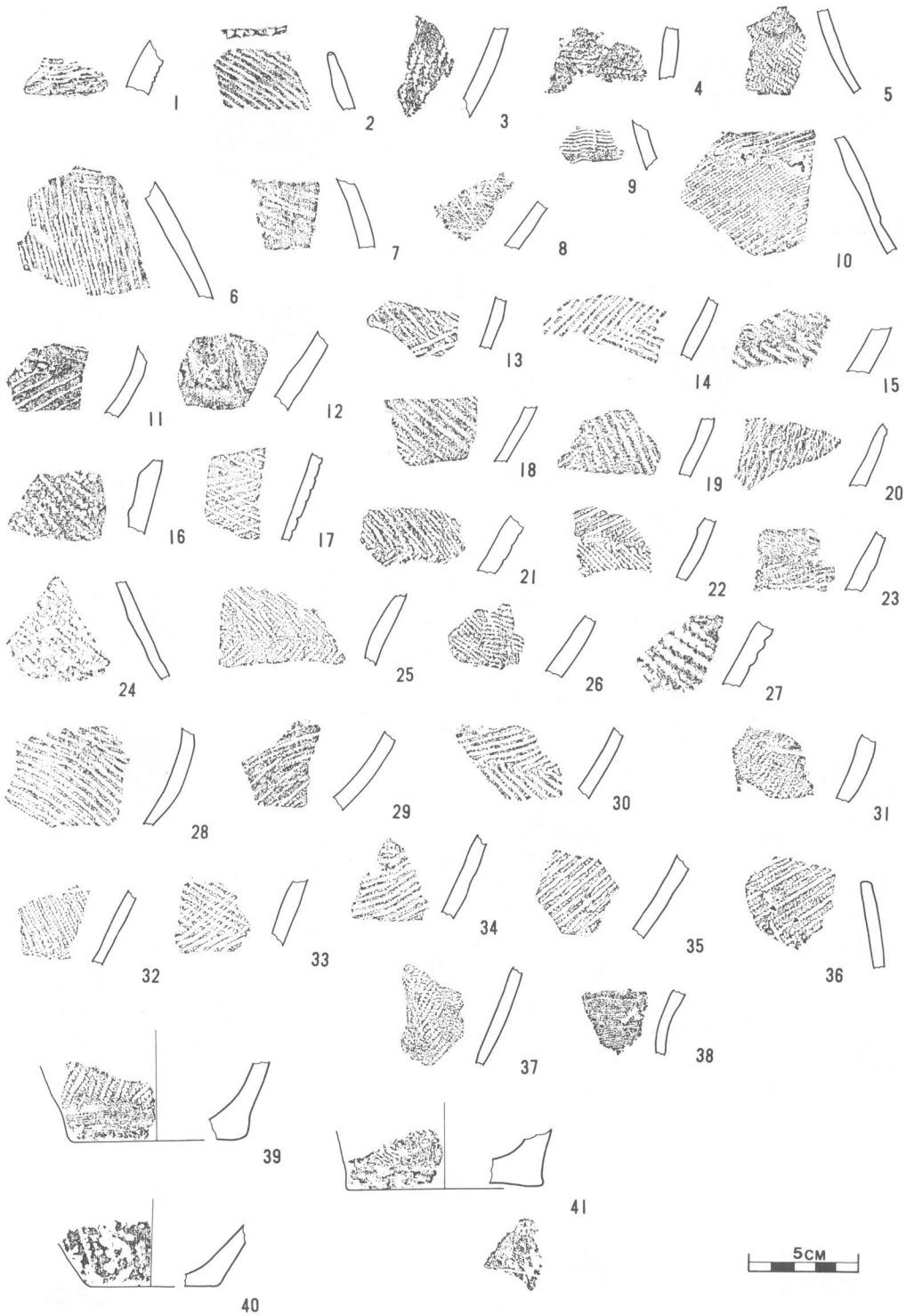


第121図　各遺構出土土器拓影（その9）

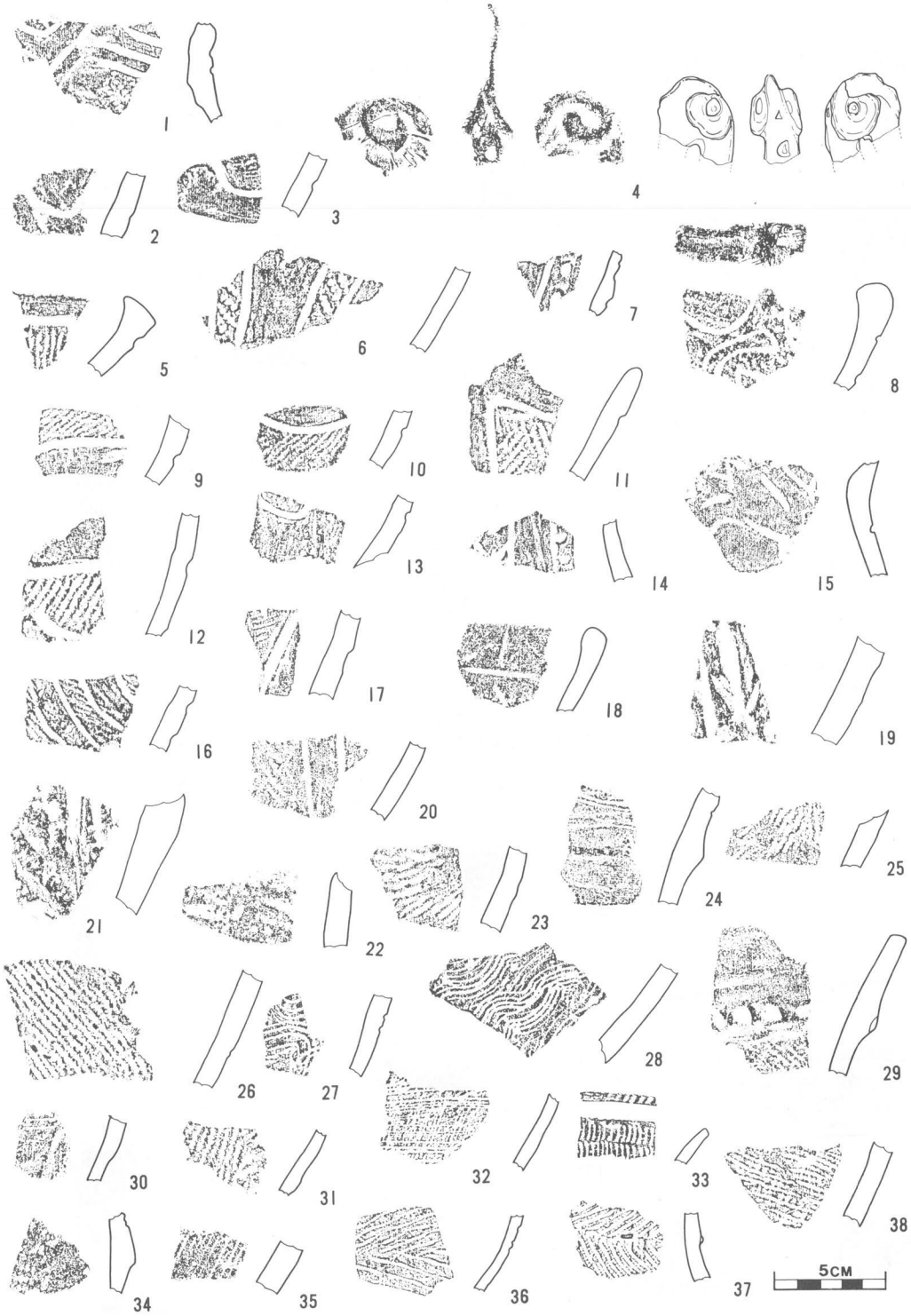
第122図　各遺構出土土器拓影（その10）



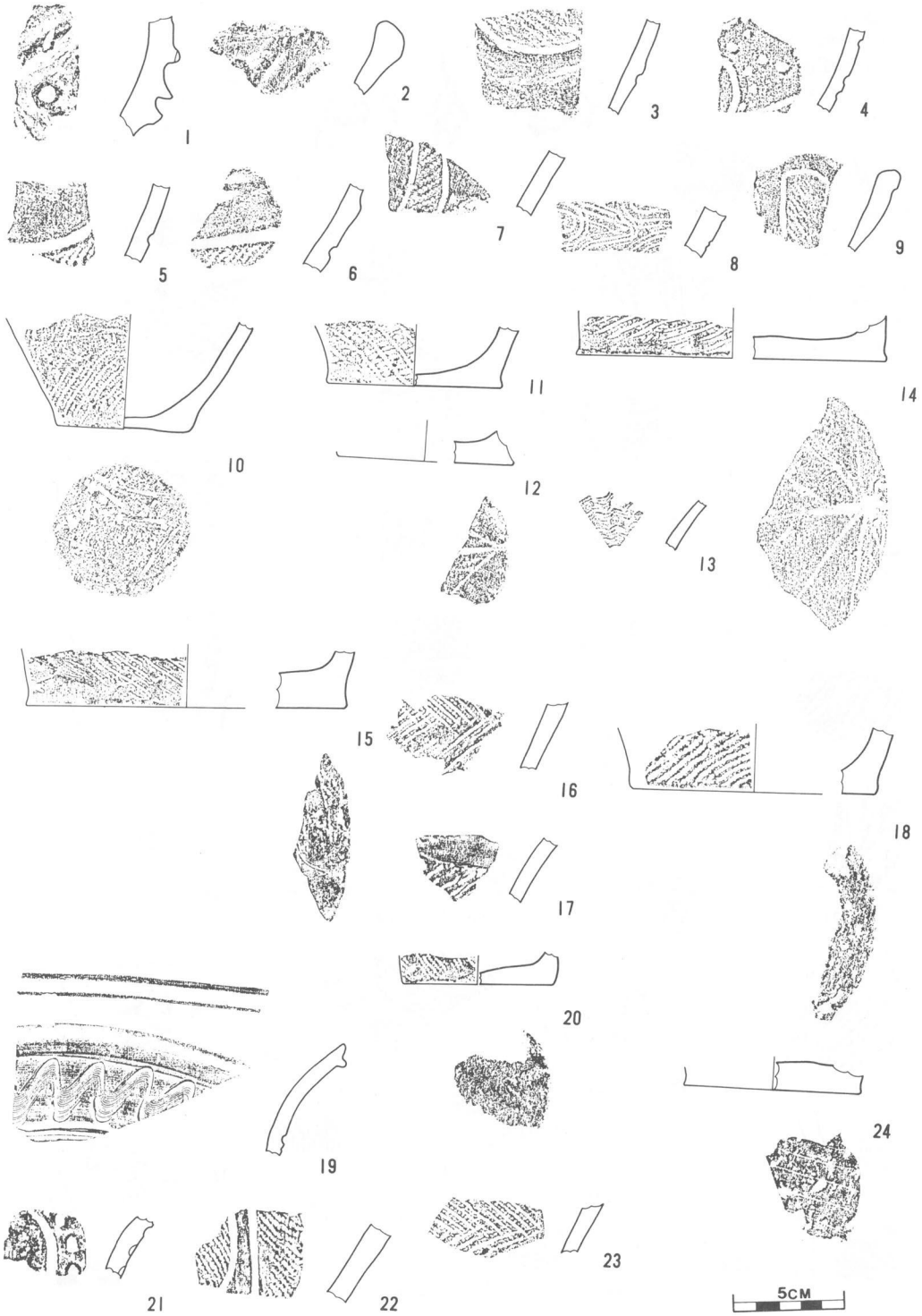
第123図　各遺構出土土器拓影（その11）



第124図　各遺構出土土器拓影（その12）

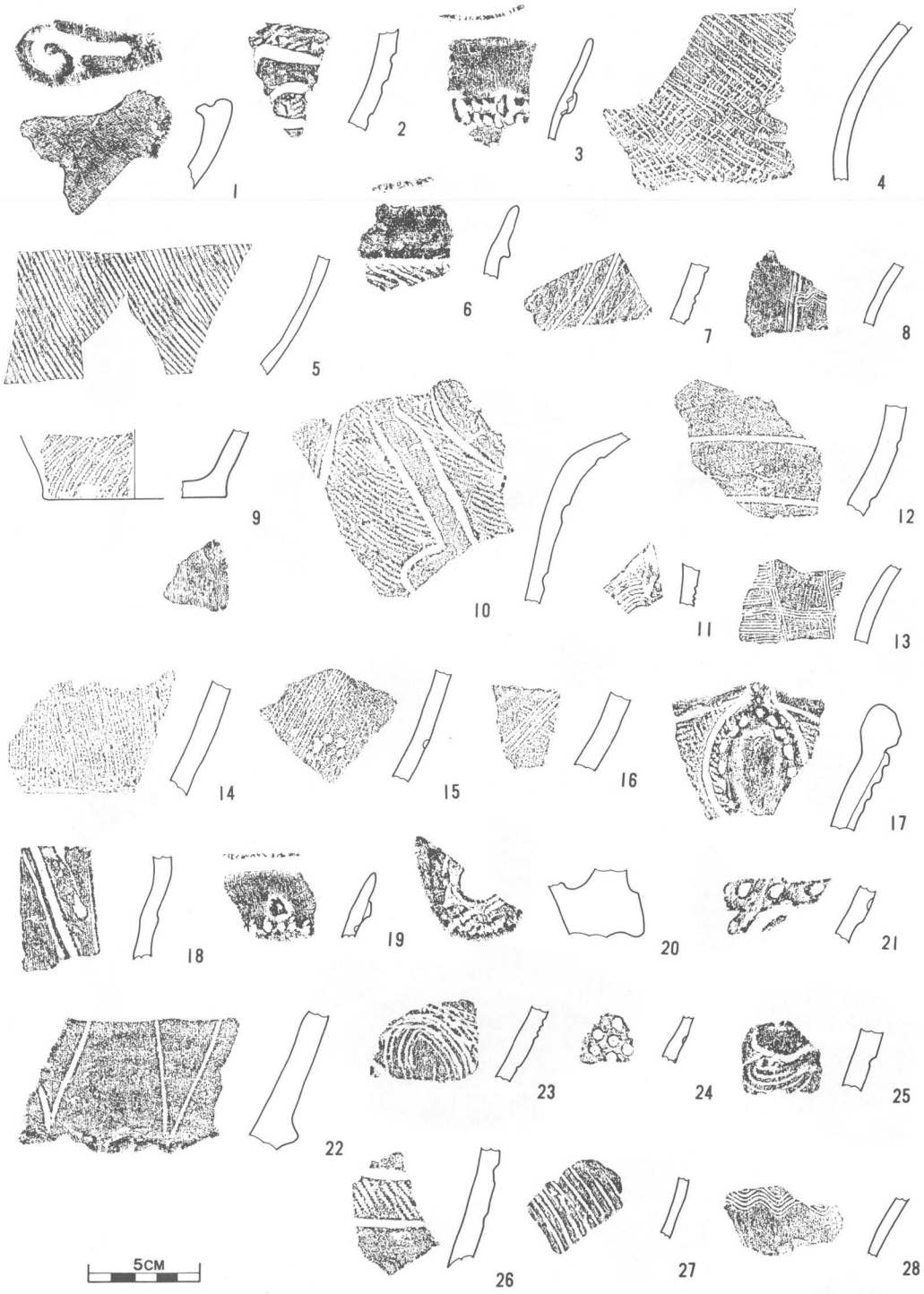


第125図　各遺構出土土器拓影（その13）



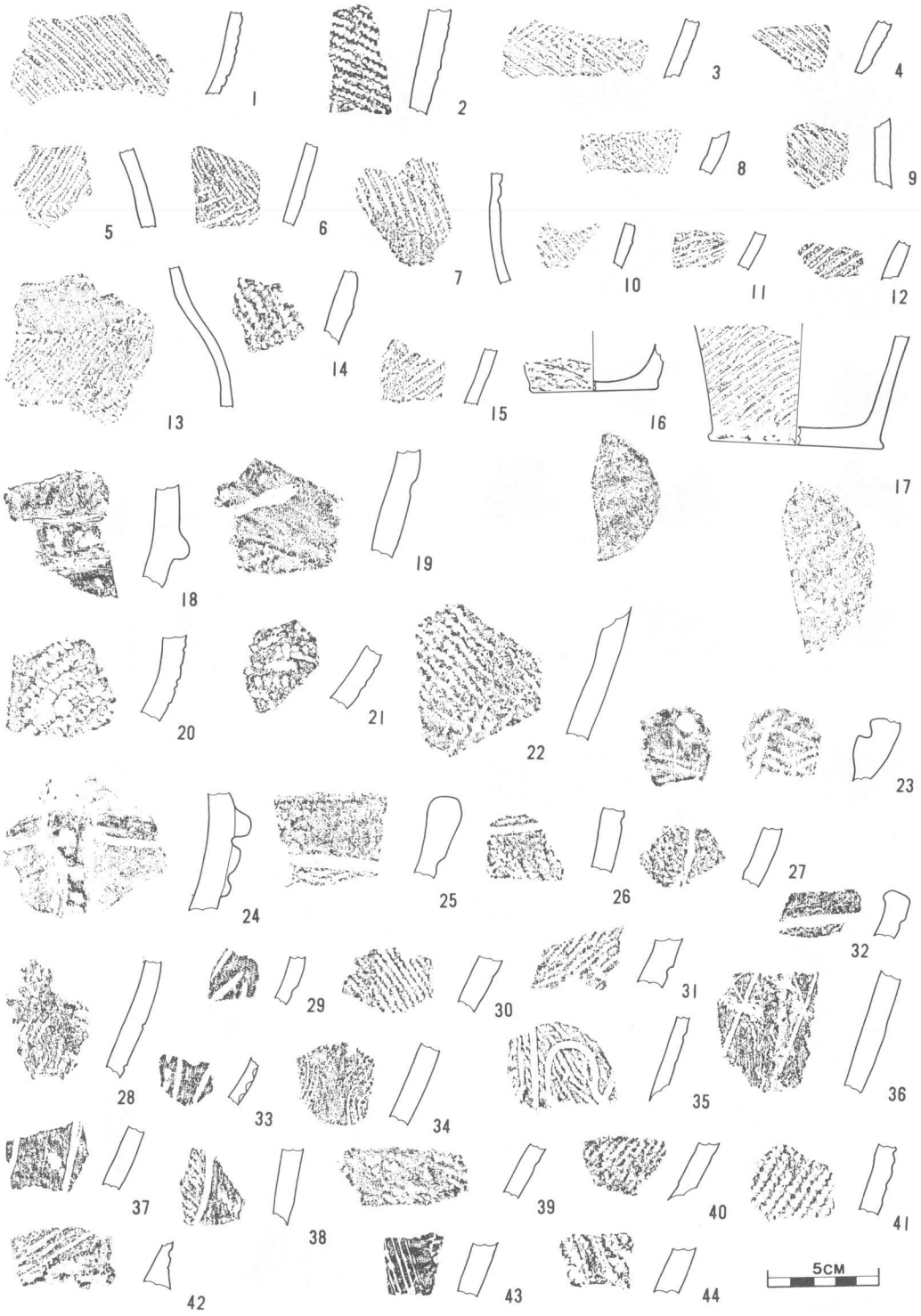
第126図　各遺構出土土器拓影（その14）

1～14 1939
388

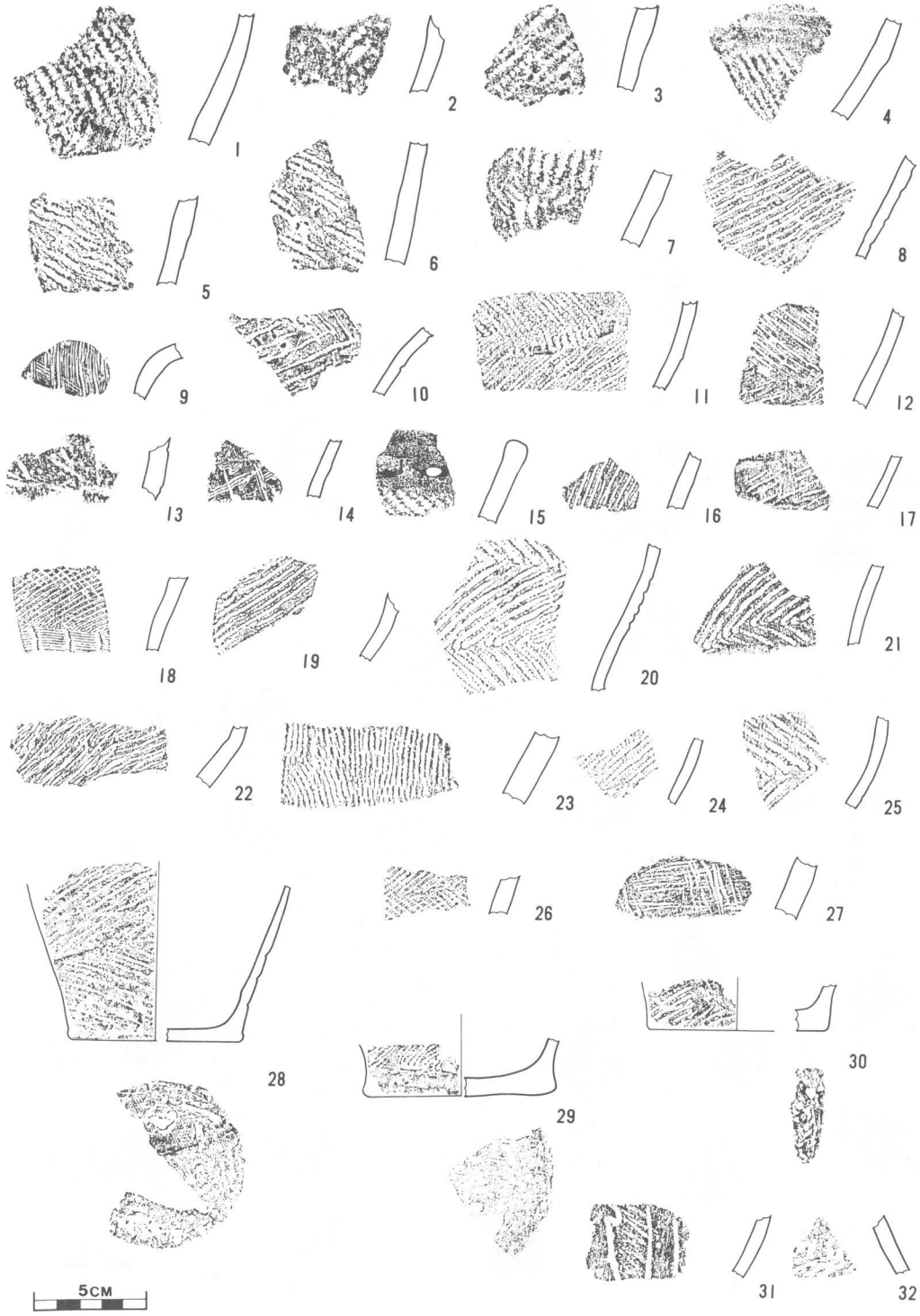


第127図　各遺構出土土器拓影（その15）

第128図　各遺構出土土器拓影（その16）

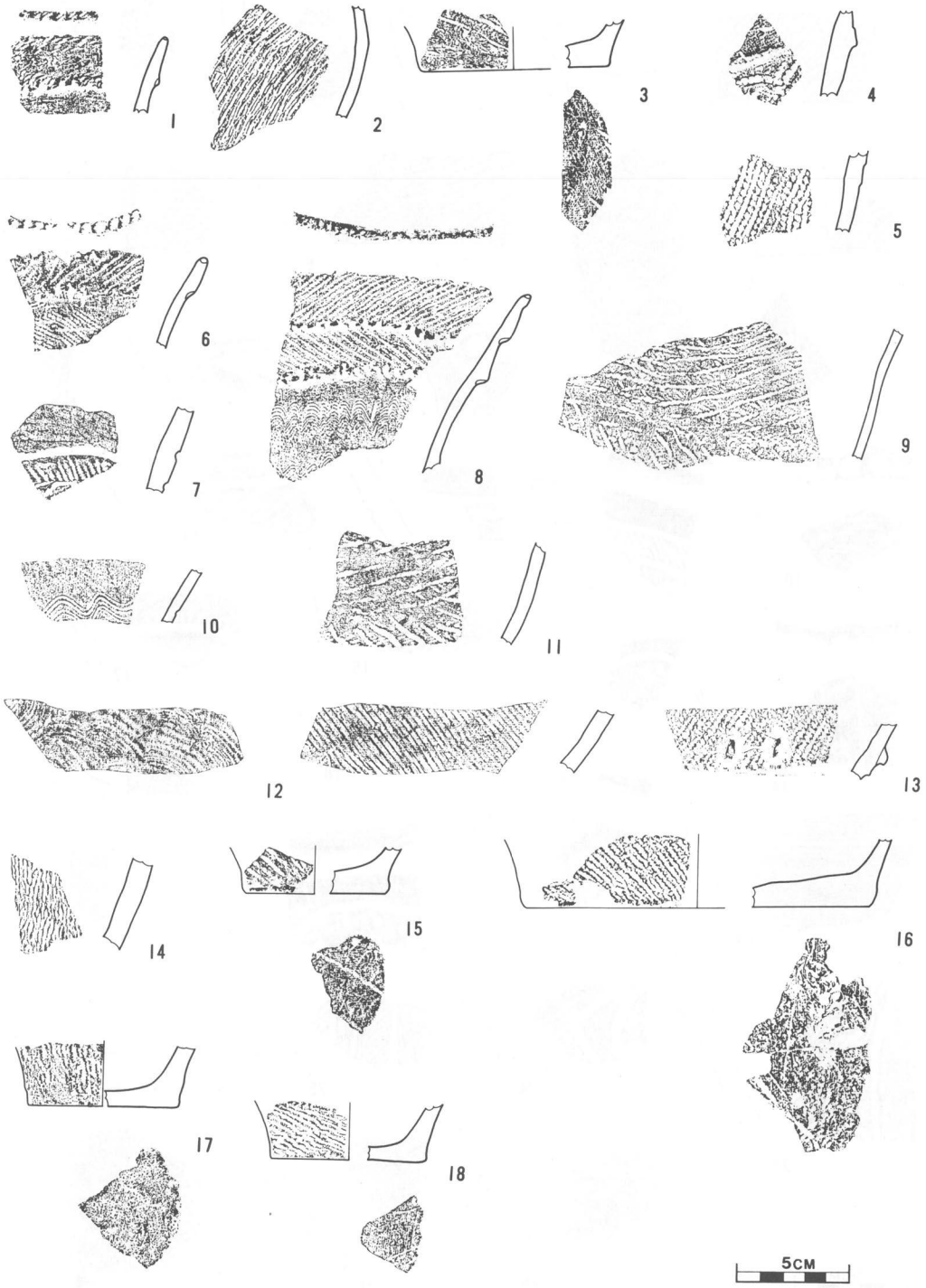


第129図　各遺構出土土器拓影（その17）

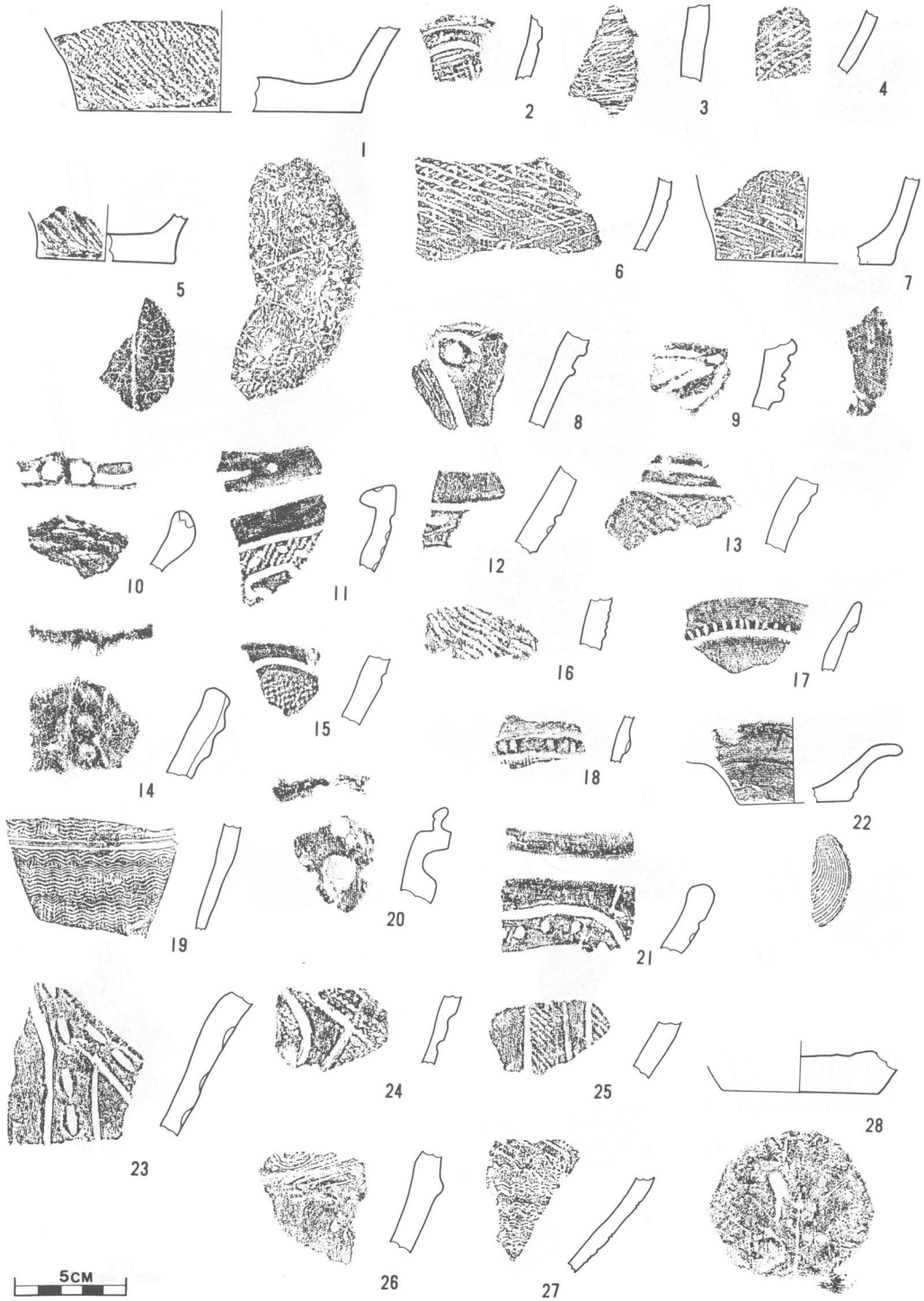


第130図　各遺構出土土器拓影（その18）

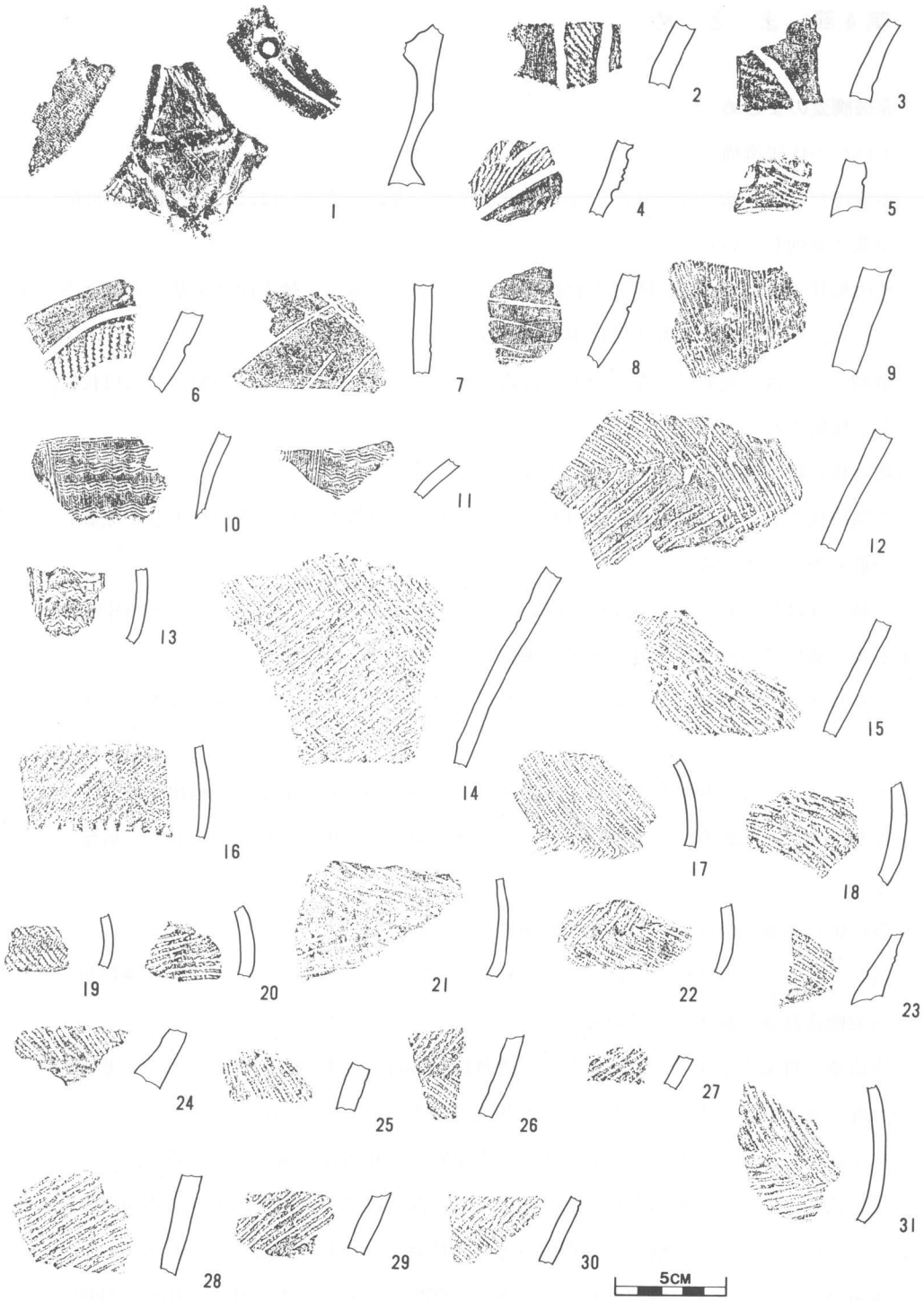
18～32 ― 30年度



第131図　各遺構出土土器拓影(その19)



第132図　各遺構出土土器拓影（その20）



第133図　各遺構出土土器拓影（その21）

第4節　ま　と　め

(1)　発掘調査のまとめ

弥生時代の住居遺構について

本遺跡からは4基の弥生式住居址が検出された。遺跡台地上にほぼ20m～45mの間隔をおいて南北に並列している。

楕円形状のものが1基，隅丸方形状のものが3基である。主軸方向は4基とも東西方向を示しており，炉址はいづれも住居址中央にある。

遺物としては，完形ではないが十王台式平行のもの，ほぼ完形では小型だが広口長胴の壺形土器が検出されている。

古墳時代の住居遺構について

古墳時代と思われる住居遺構は34基ほどで，出土遺物等から見ると和泉Ⅰ期～鬼高Ⅱ期あたりが最も多いと考える。

主軸方向はN—49°—E（第12号住居址）が最も西へ傾き，N—60°—E（第39号住居址）が最も東へ傾いている。第39号住居址は東側にカマドを持つプランを示している。

貯蔵穴はカマドの両わき，又はカマドの正反対側，もしくは南壁の東又は西コーナー部である。

カマドは，ごぼう耕作等のために破壊されたものが多く，煙道部まで検出されたものはなかったが，火袋を二個有すると見られるのが2基（第2号住居址北壁部，第10号住居址北壁部）ある。

各住居址の廃絶は火災によるものが多く見うけられた。

遺物としては，円窓付式土器・大型高杯形土器のほか，土器片錘，土玉等の漁撈用具，砥石や石製模造品等が検出されている。

本遺跡の特徴を示すものは，複合した遺跡群が10群ほどあることであろう。4基複合のものが2群，3基複合のものが2群で1・2基複合のものが6群である。

弥生期の住居址は4基のうち3基までが古墳時代の住居址と複合している。

地下式壙は2基ほど検出されたが，地域からの聞きこみで数年？ほど前に本遺跡の東側500mほどの所で，同様の遺構と考えられるものが農耕中に発見されたといわれる。

本遺跡についてはまだ解明されるべき多くの問題があるが，本台地上は相当長期間にわたって生活面として利用されていたと考えられる。

(2) 整理のまとめ

本調査は短期間に行なわれた緊急調査であったが，整理作業にも相当のスピードが要求された。

整理作業は昭和54年４月から開始され，概略のものが昭和55年２月に終了した。経過は次のとおりである。労を惜しまず御援助をいただいた，助手並に作業員の方々に厚く御礼を申しあげる。

月別 / 種目	昭和54年									昭和55年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
土器洗浄	―	―	―									
遺物註記		―	―	―								
遺構写真整理		―										
遺構図整理		―	―	―	―							
遺物分類				―								
接合・修復				―	―	―	―	―				
遺物実測					―	―	―	―	―			
拓本							―	―	―			
実測図トレース								―	―	―		
拓本整理									―	―		
遺物写真撮影										―		
図版作成										―	―	
写真整理											―	―
原稿執筆										―	―	
レイアウト											―	
印刷												―

参考文献並びに資料等

埋蔵文化財発掘調査の手びき　文化庁文化財保護部　昭和50年

松葉遺跡　茨城県教育財団文化財調査報告Ⅰ　昭和54年

茨城県大洗町長峯遺跡　大洗町文化財調査報告書　第４集

日本考古学辞典　監修者藤田亮策　昭和51年

世界考古学大系　１日本Ⅰ先縄文・縄文時代　平凡社

〃　２日本Ⅱ弥生時代　平凡社

〃　３日本Ⅲ古墳時代　平凡社

十王台式土器分類図譜Ⅰ　井上義安・宮田毅編　昭和53年

鹿島神宮驛北部埋蔵文化財調査報告Ⅰ　1977　鹿島町教育委員会

山内清男編　日本先史土器図譜　先史考古学会　1967

埼玉県遺跡発掘調査報告書　第８集　鶴ヶ丘　昭和51年　埼玉県教育委員会

〃　第15集　中堀・耕安地・久城前　昭和53年　埼玉県教育委員会

高野寺畑遺跡調査報告書　1979・３　茨城県勝田市教育委員会　高野寺畑遺跡調査会

小澤野　編集茂木雅博　小沢野遺跡調査会　茨城県東海村教育委員会　昭和53年

尾崎遺跡　神奈川県埋蔵文化財調査報告　13　神奈川県教育委員会　1977

京葉Ⅱ　千葉市東寺山戸張作遺跡　1977　財団法人千葉県文化財センター

佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書　Ⅰ　千葉県教育委員会　千葉県文化財センター　1977年３月

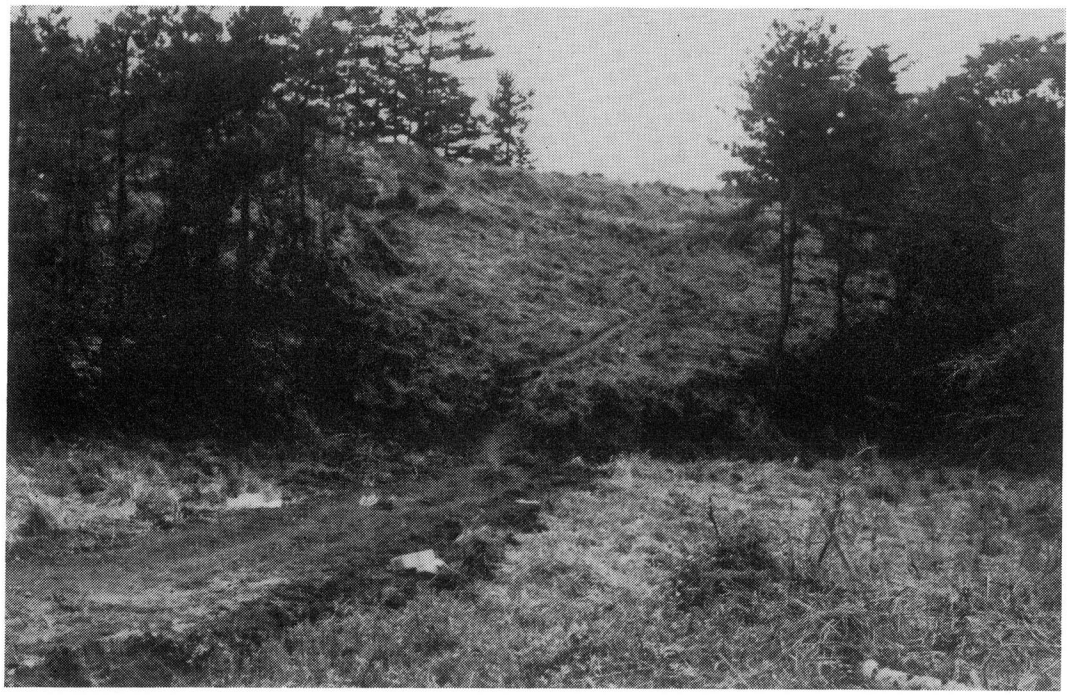
日本考古学概説　小林行雄　東京創元社

日本考古学を学ぶ　(1)日本考古学の基礎　大塚初重　戸沢充則　佐原真

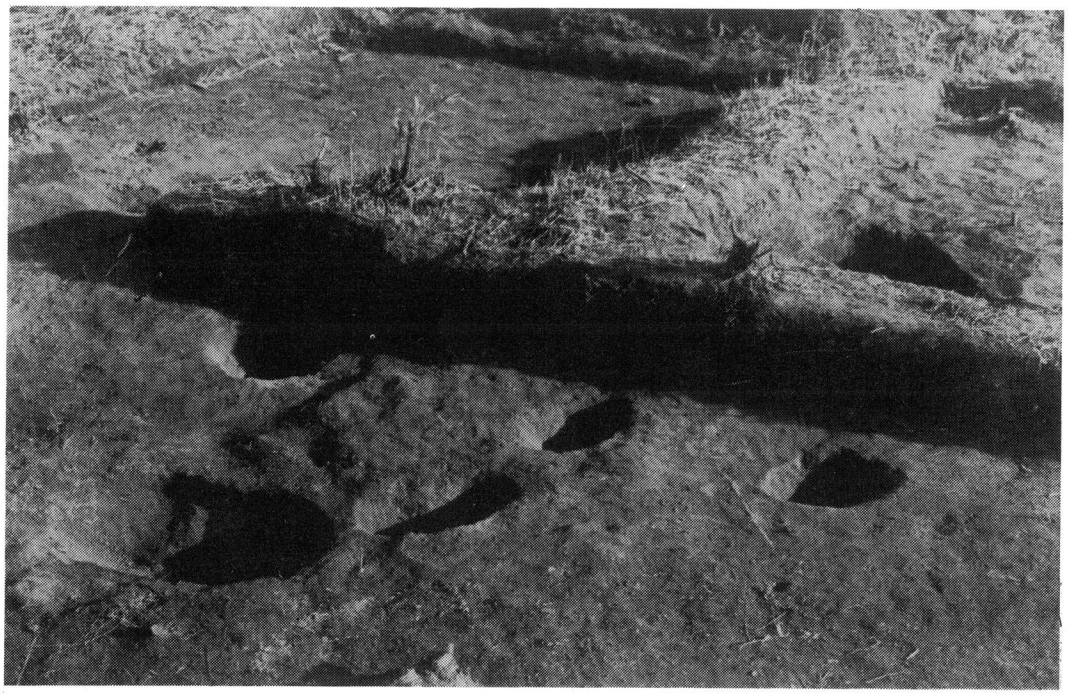
〃　(2)原始・古代の生産と生活　〃　〃　〃

〃　(3)原始・古代の社会　〃　〃　〃

徳　宿　遺　跡



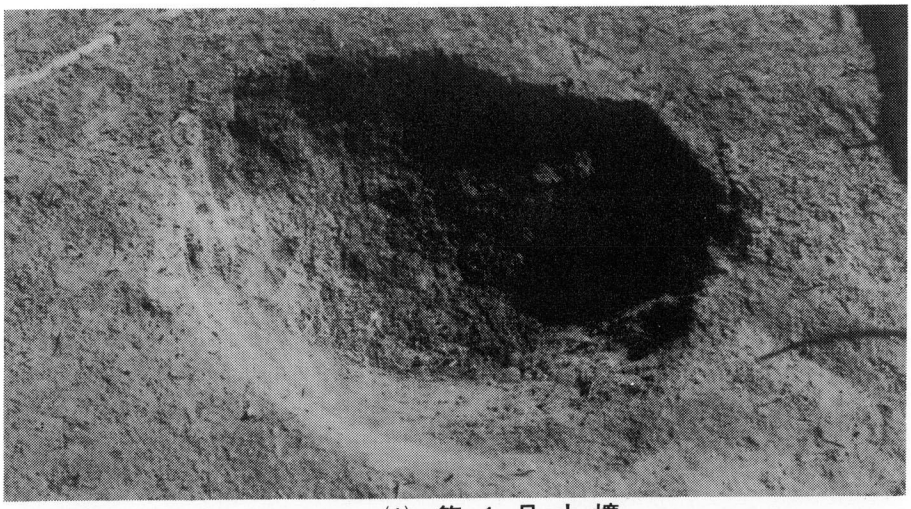
(1) 徳 宿 遺 跡 遠 景



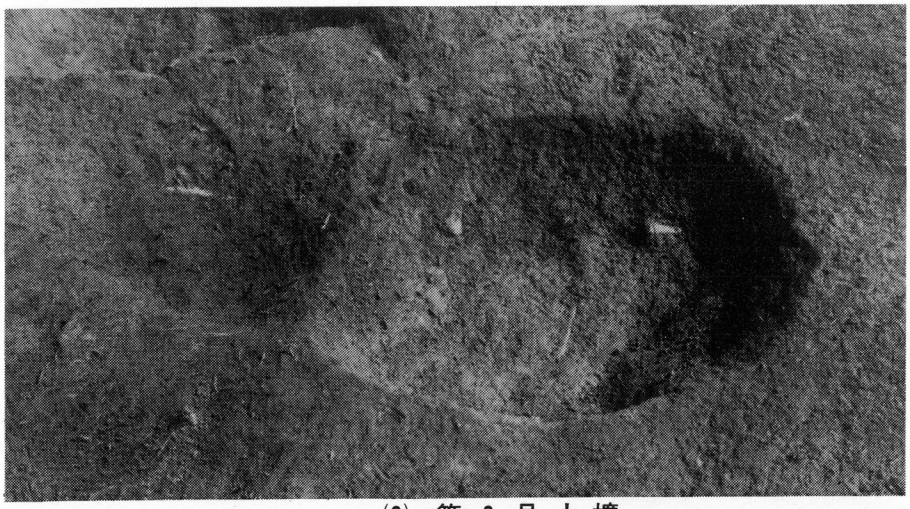
PL 1　　(2) 徳宿遺跡全景 — 1

(1) 徳宿遺跡全景―2

PL 2　　(2) 層　　位



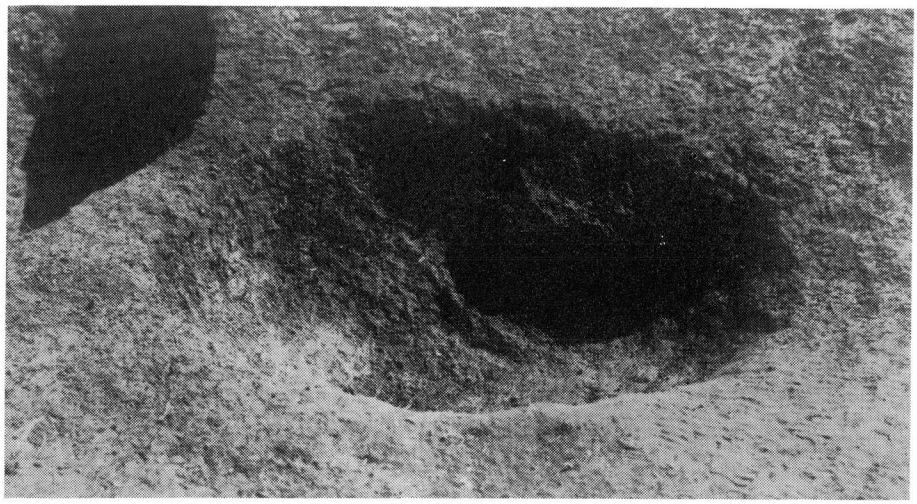
(1) 第 1 号 土 壙



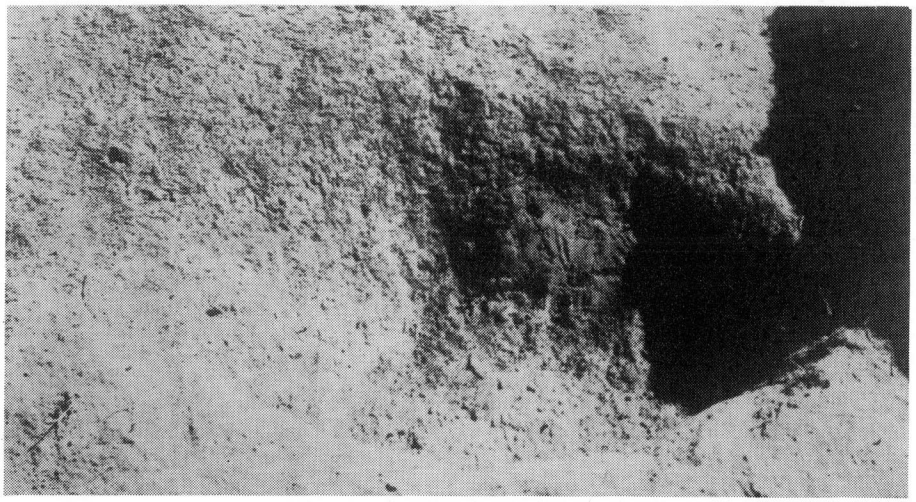
(2) 第 2 号 土 壙

PL 3

(3) 第 3 号 土 壙



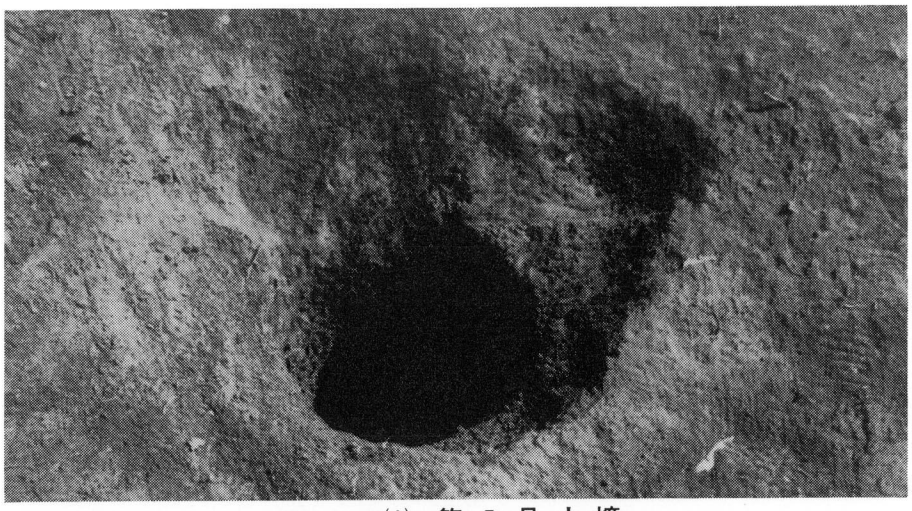
(1) 第 4 号 土 壙



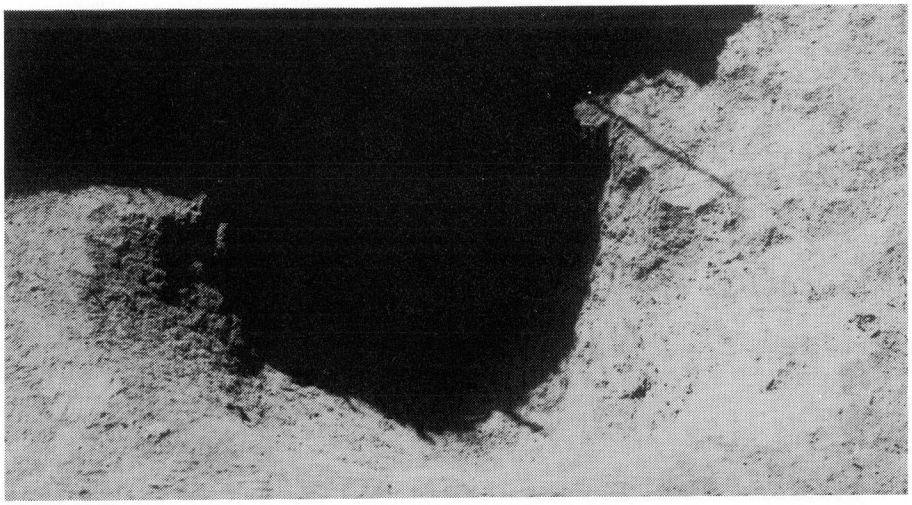
(2) 第 5 号 土 壙

PL 4

(3) 第 6 号 土 壙



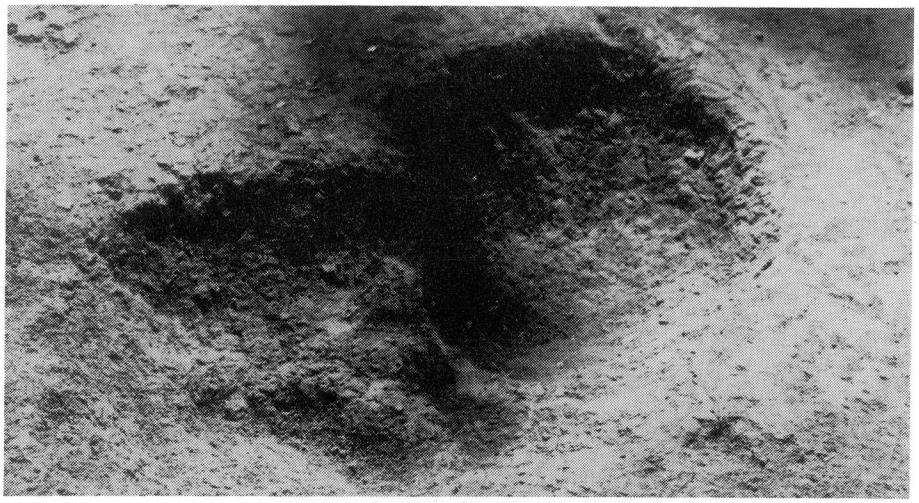
(1) 第 7 号 土 壙



(2) 第 8 号 土 壙

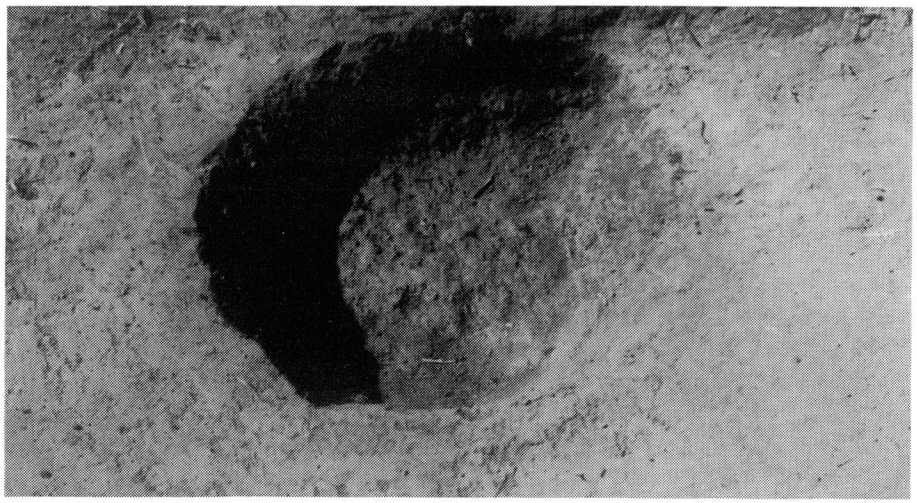
PL 5

(3) 第 9 号 土 壙



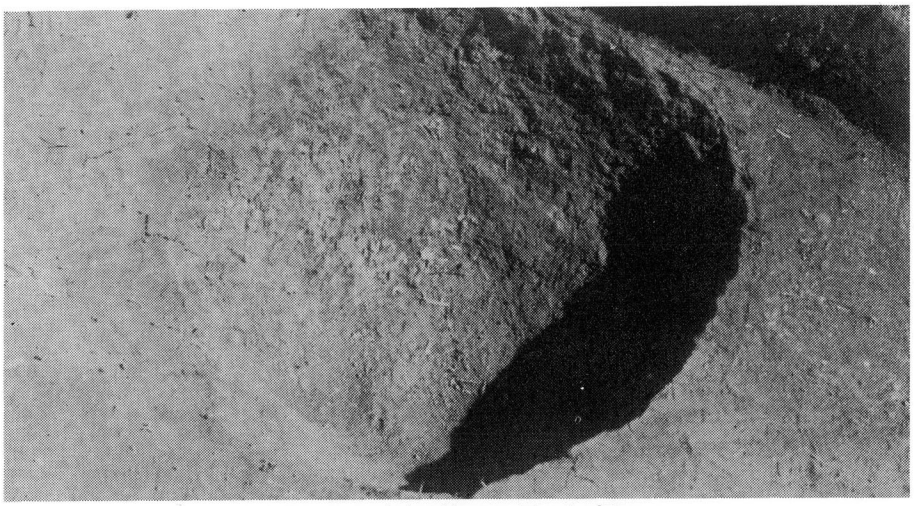
(1) 第 10 号 土 壙

(2) 第 11 号 土 壙

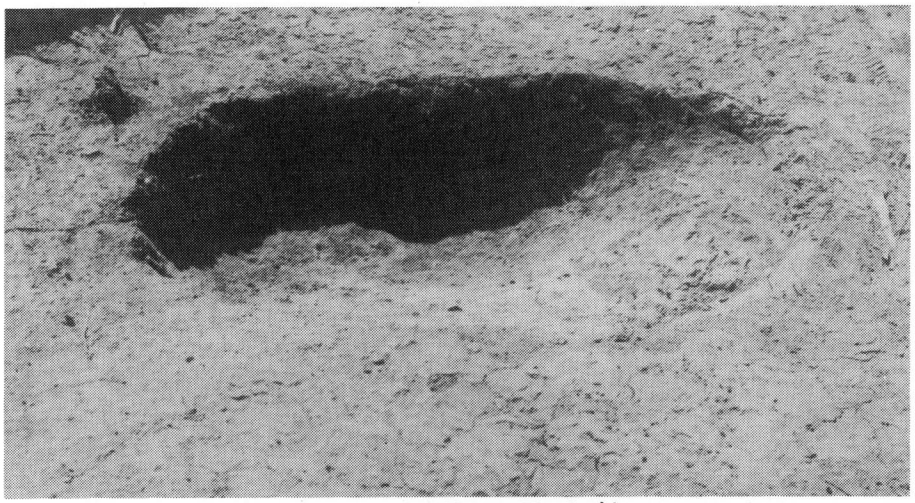


PL 6

(3) 第 12 号 土 壙



(1) 第 13 号 土 壙



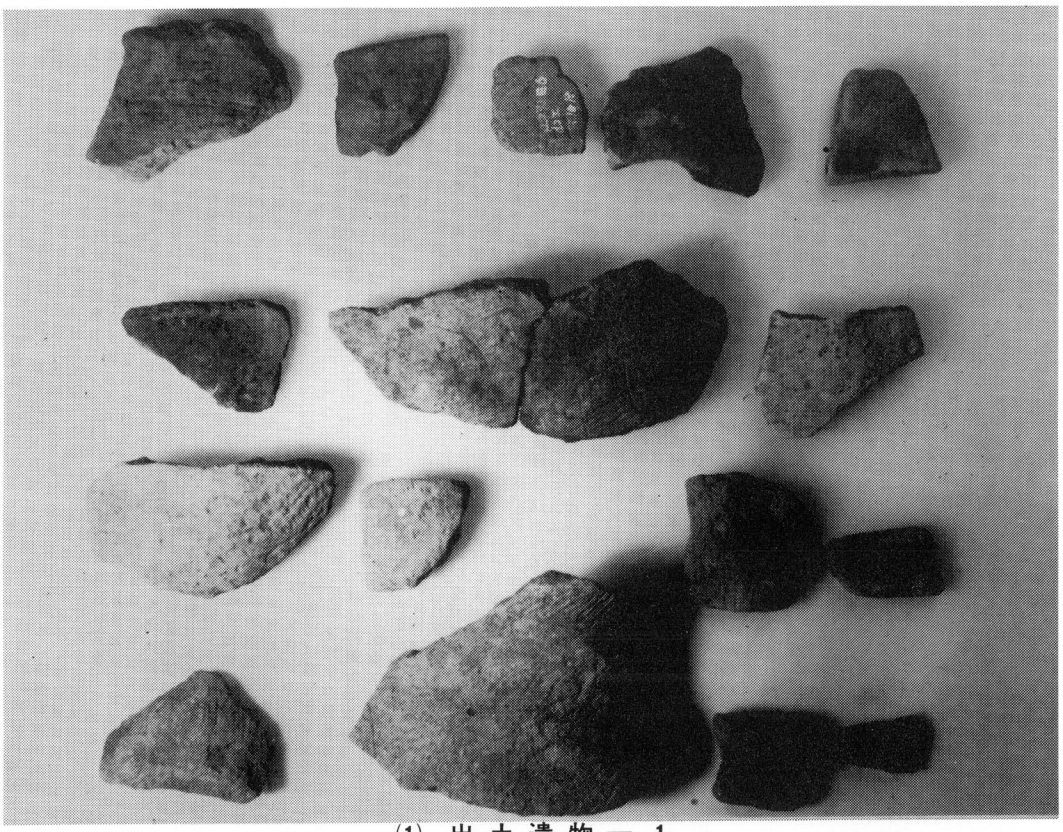
(2) 第 14 号 土 壙

PL 7

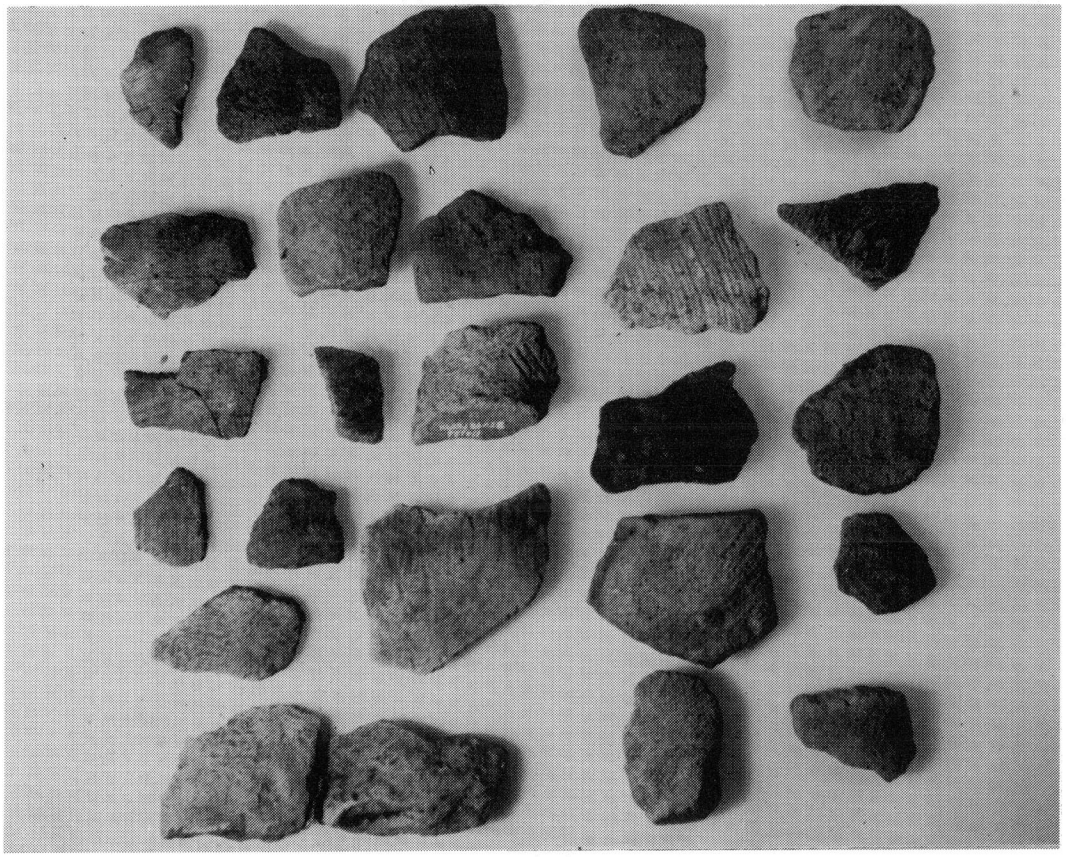
(3) 第 15 号 土 壙

(1) 第 16 号 土 壙

PL 8　　(2) 第 17 号 土 壙

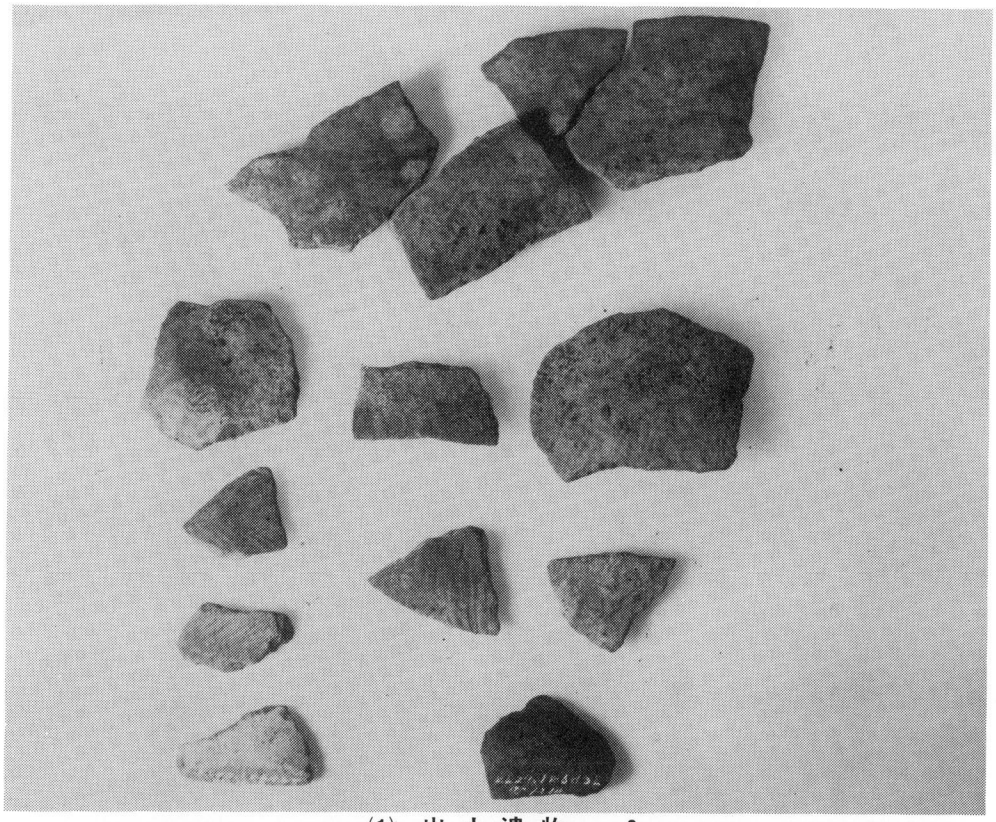


(1) 出土遺物一 1



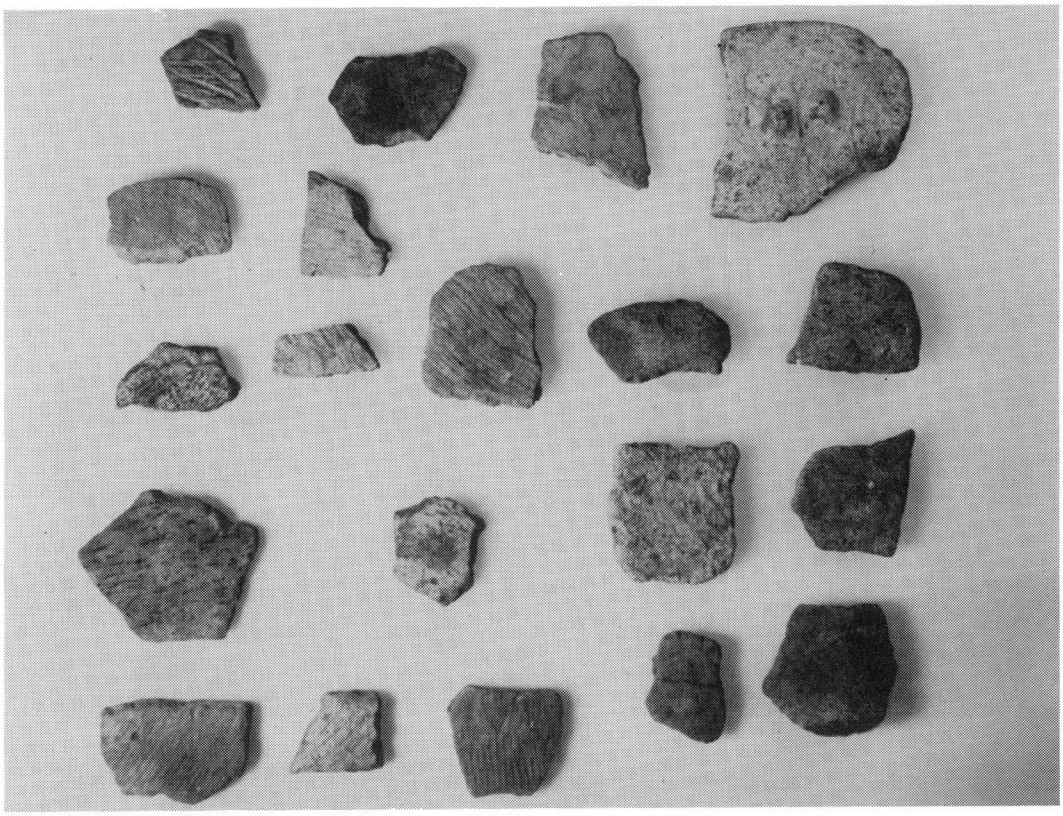
PL 9

(2) 出土遺物一 2

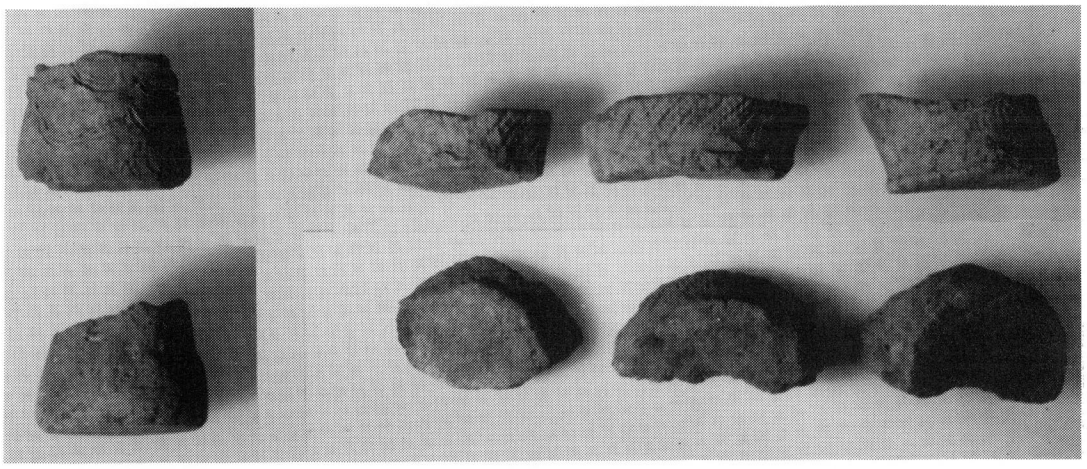


(1) 出土遺物一 3

PL10 (2) 出土遺物一 4



(1) 出土遺物一 5



PL11

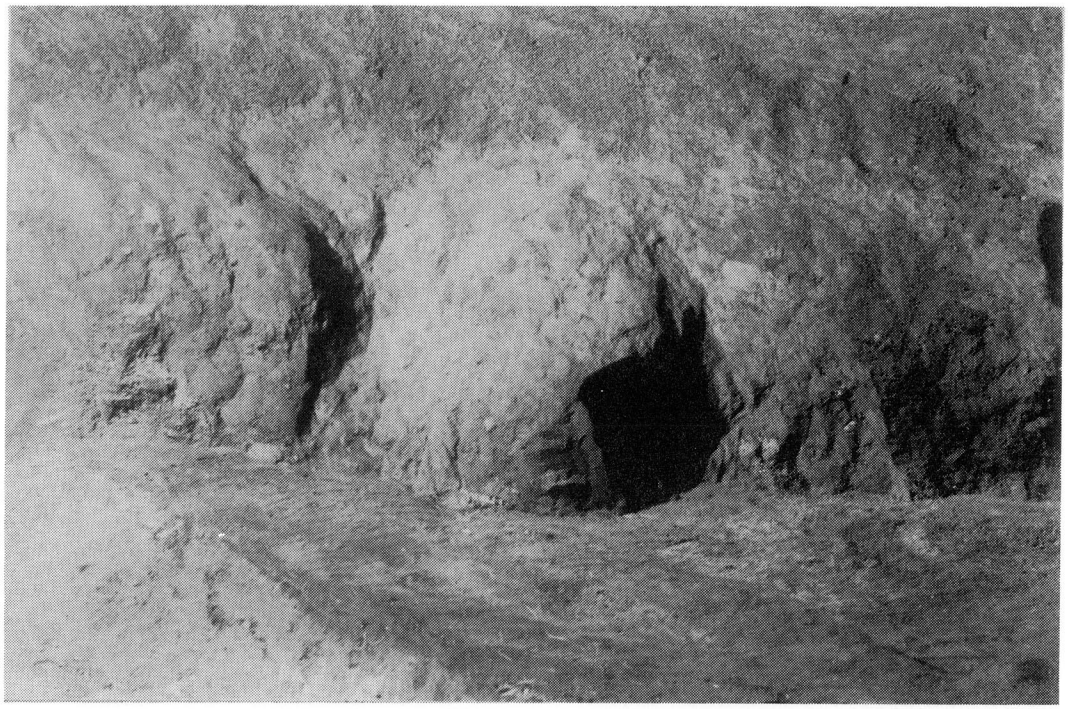
(2) 出土遺物一 6

塙　遺　跡

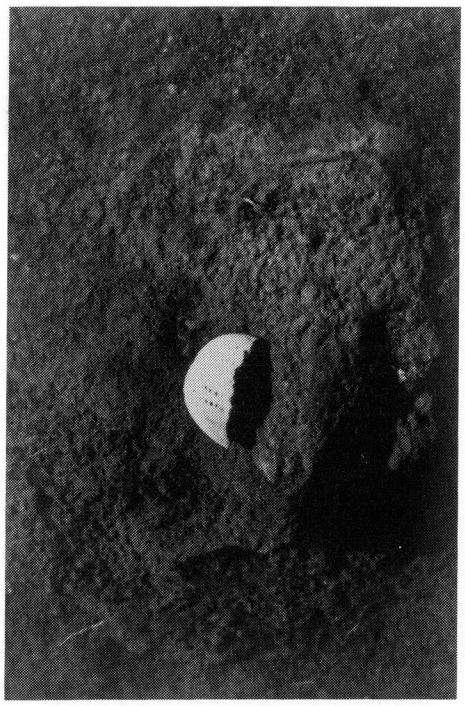
(1) 塙　遺　跡　遠　景

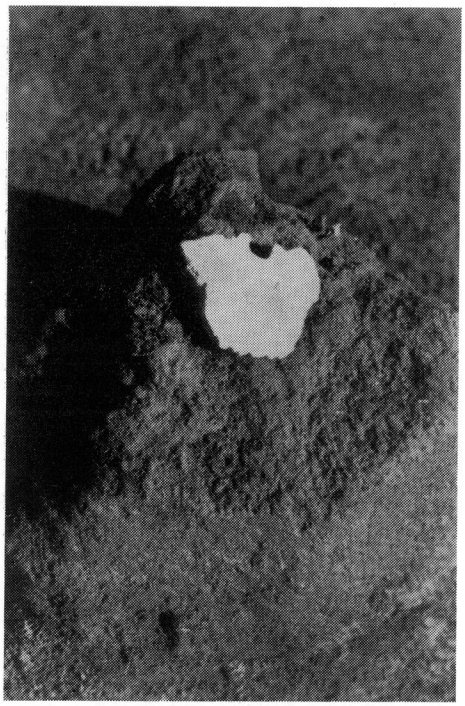
PL 1

(2) 第1A号住号址，第1B号住号址



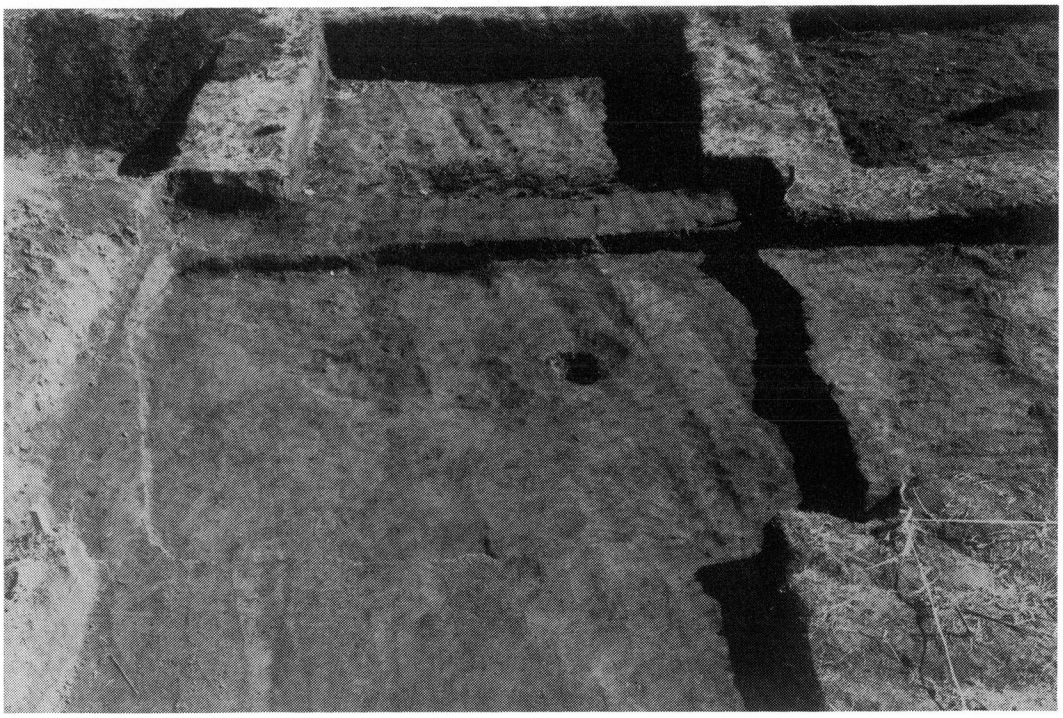
(1) 第 1 B 号住居址カマド





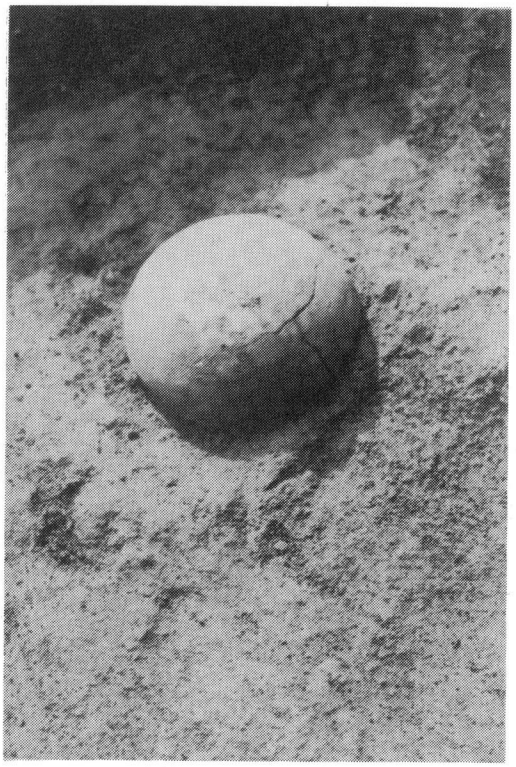
PL 2　(2)第1 A 号住居址遺物出土状況－1　(3)第1 A 号住居址遺物出土状況－2

(1) 第 2 号 住 居 址

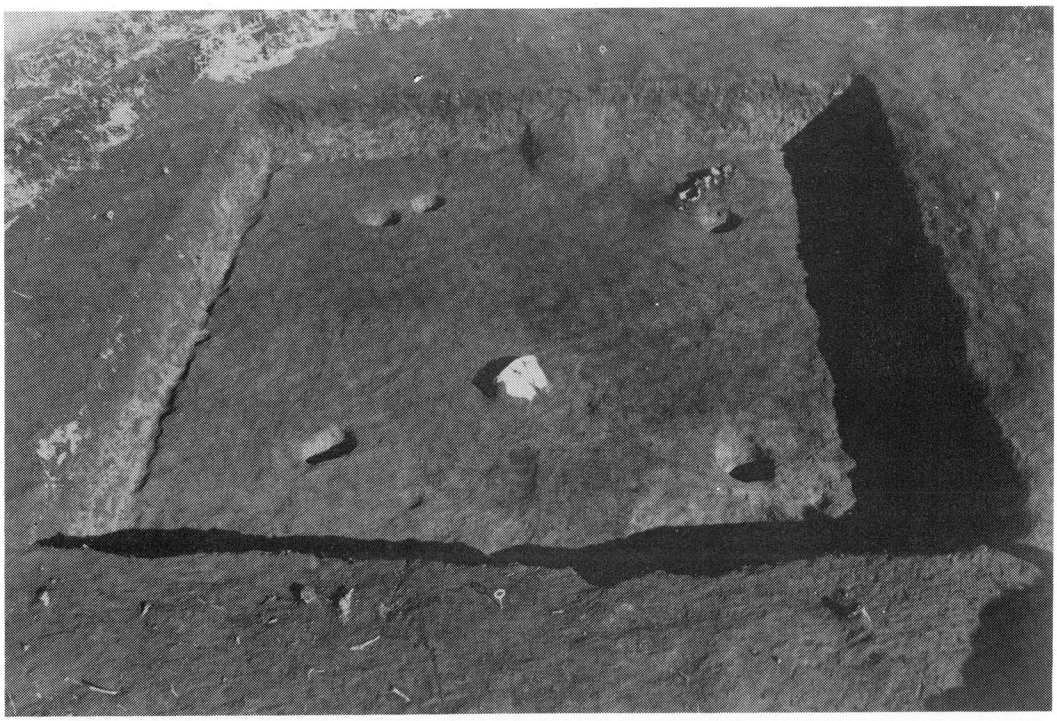


PL 3　　(2) 第 2 号住居址遺物出土状況— 1

(1)　第 2 号住居址遺物出土状況— 2

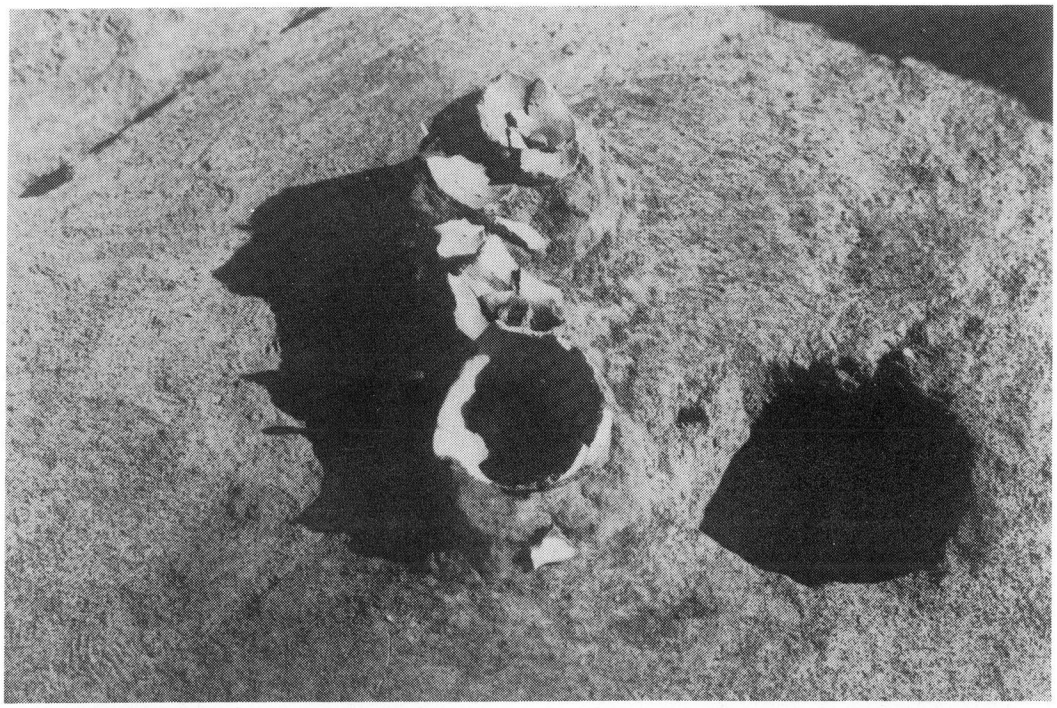


PL 4　(2)第2号住居址遺物出土状況－3　(3)第2号住居址遺物出土状況－4

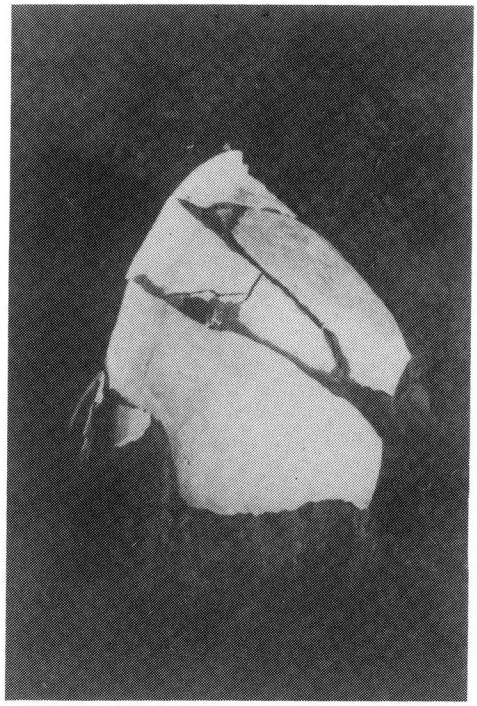


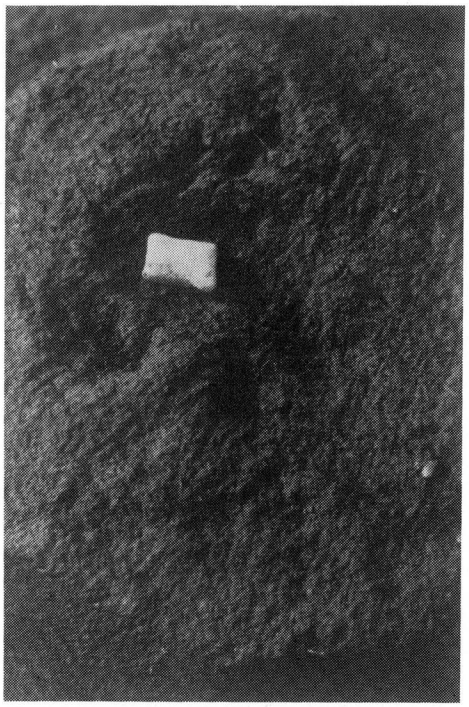
(1) 第 3 号 住 居 址

PL 5　　(2) 第 3 号 住 居 址 貯 蔵 穴



(1)　第 3 号住居址遺物出土状況— 1

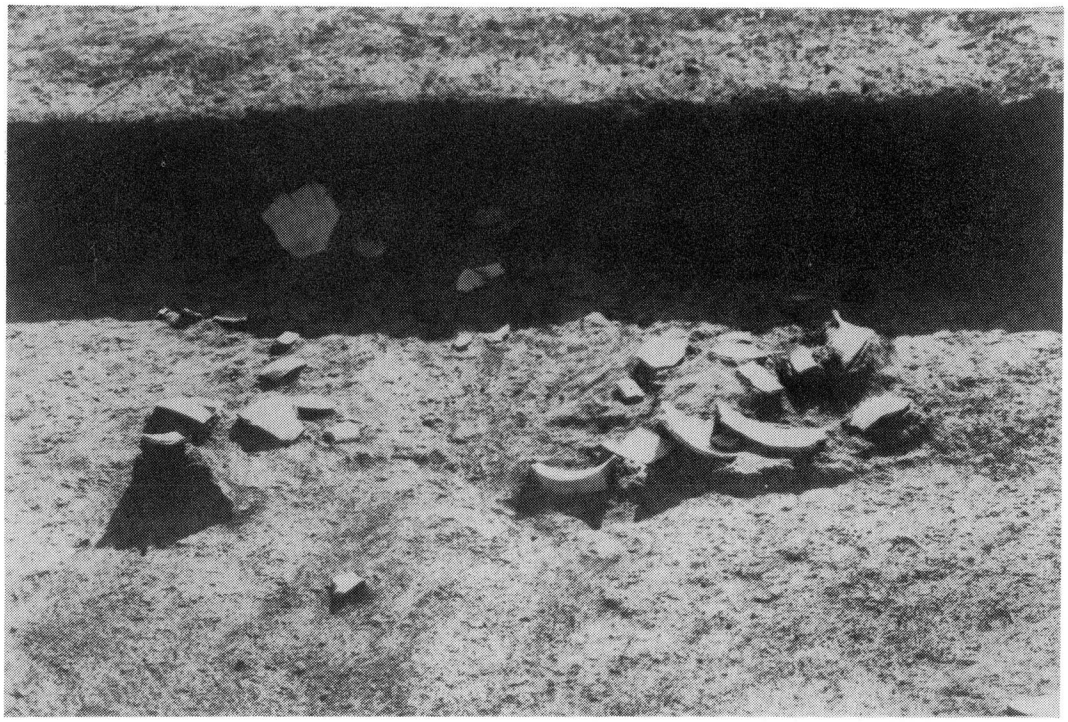




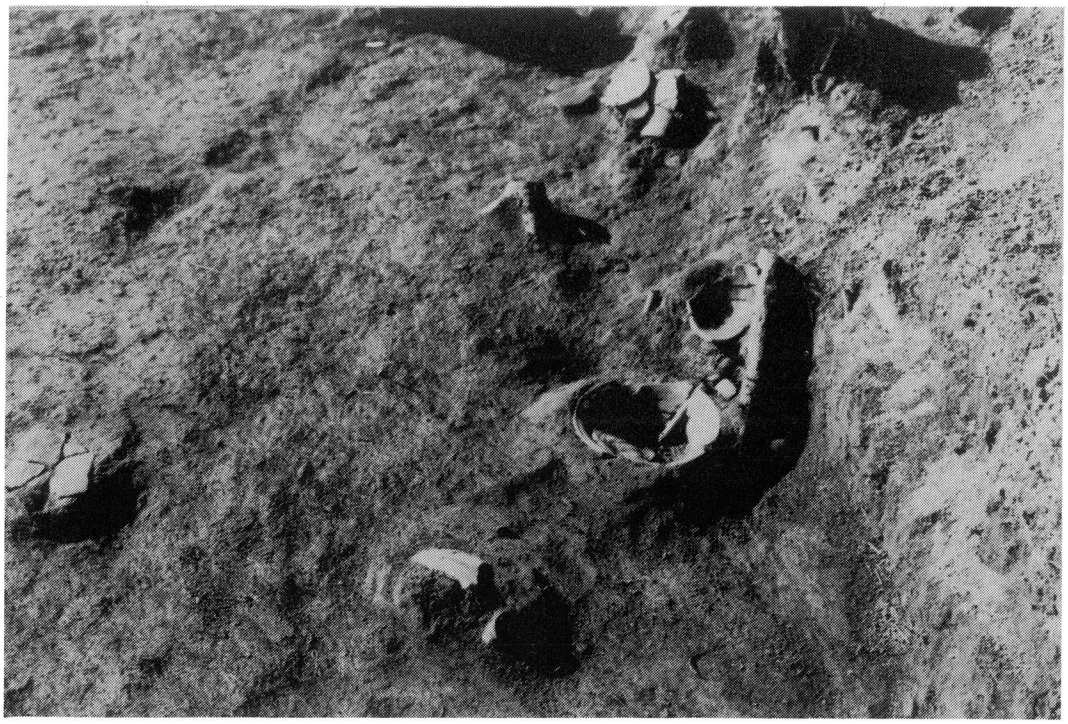
PL 6　(2)第3号住居址遺物出土状況－2　(3)第 3 号住居址遺物出土状況－3

(1) 第 4 号 住 居 址

PL 7　　(2) 第 4 号住居址遺物出土状況— 1



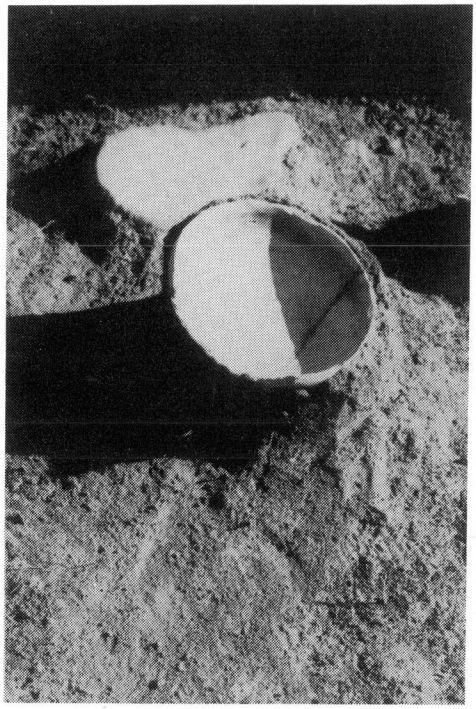
(1) 第4号住居址遺物出土状況—2

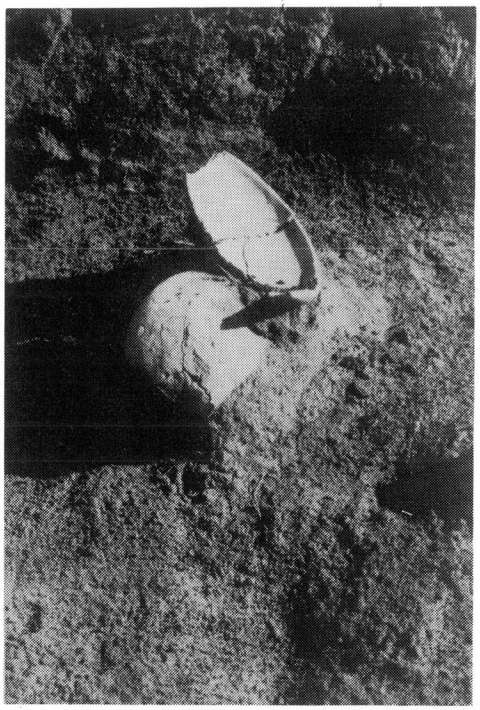


PL 8

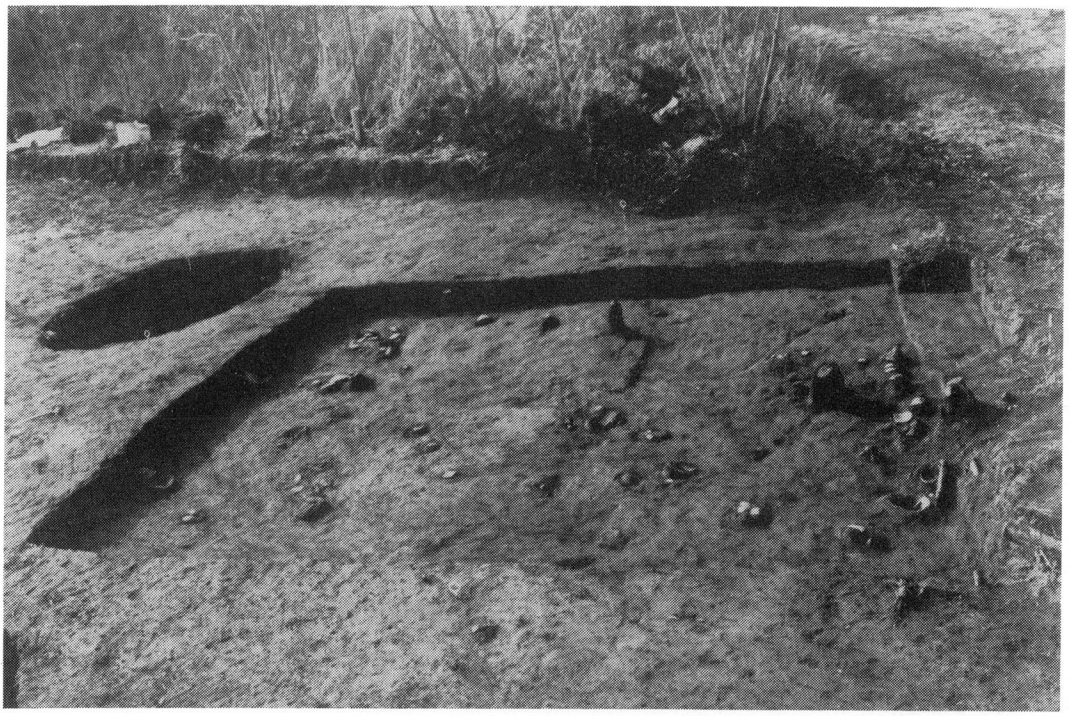
(2) 第4号住居址遺物出土状況—3

(1)　第 4 号住居址遺物出土状況— 4

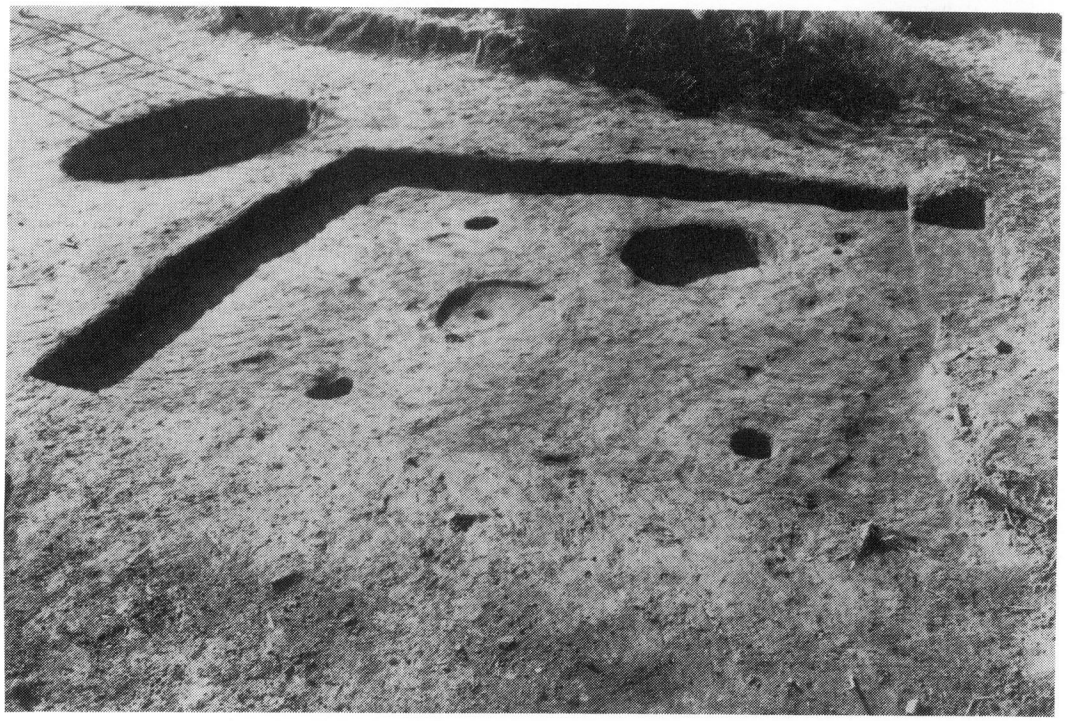




ＰＬ 9　(2)第4号住居址遺物出土状況—5　　(3)第4号住居址遺物出土状況—6

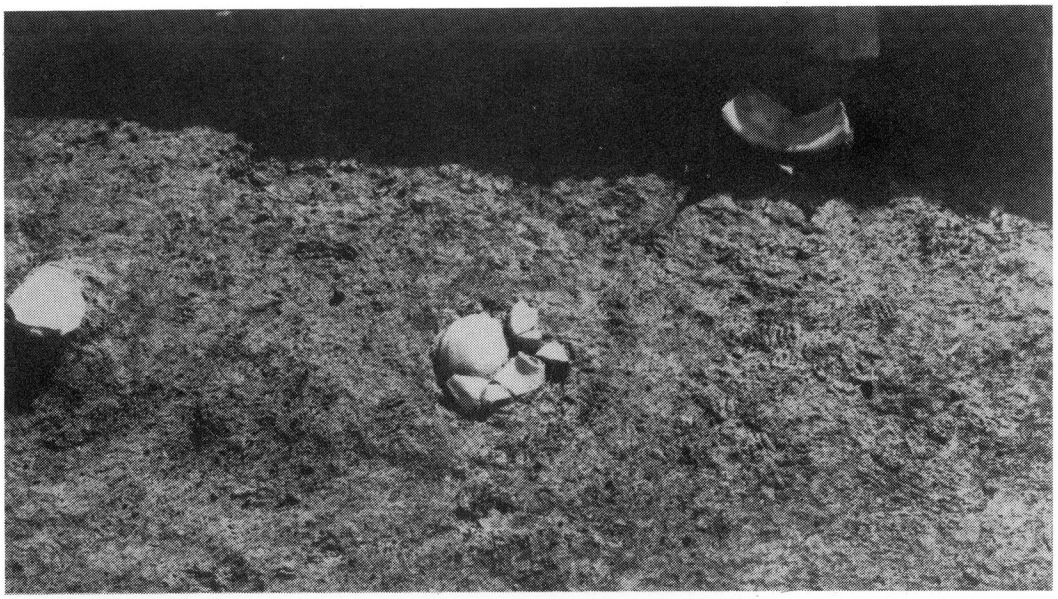


(1) 第 5 号 住 居 址

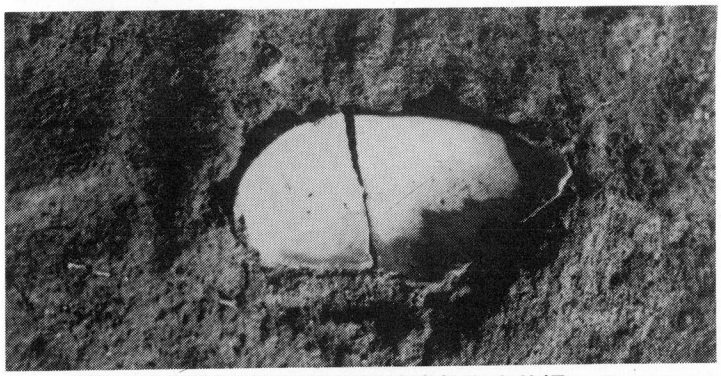


PL10

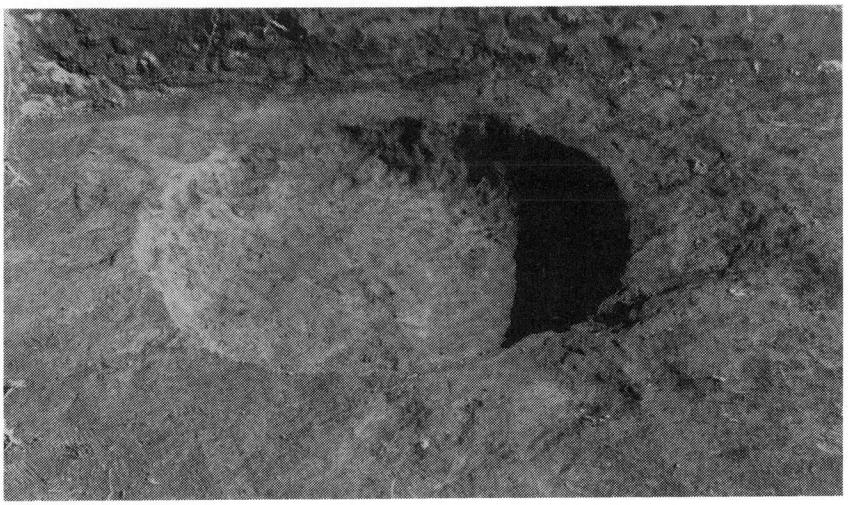
(2) 第5号住居址遺物出土状況— 1



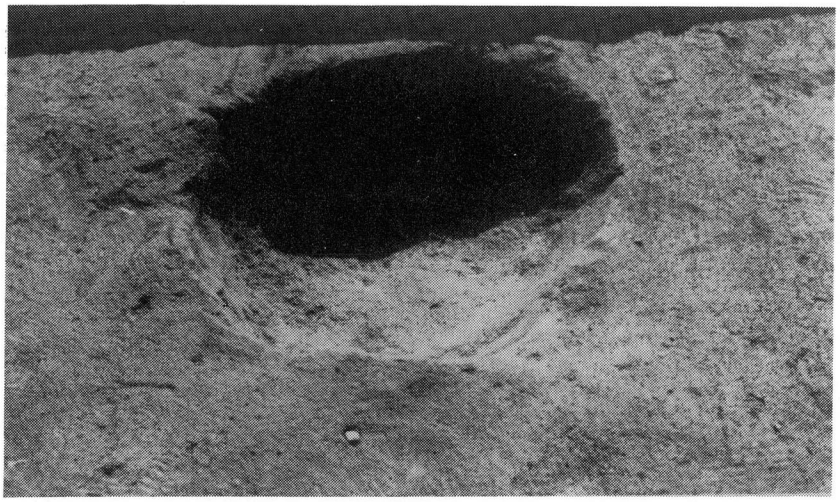
(1) 第5号住居址遺物出土状況— 2



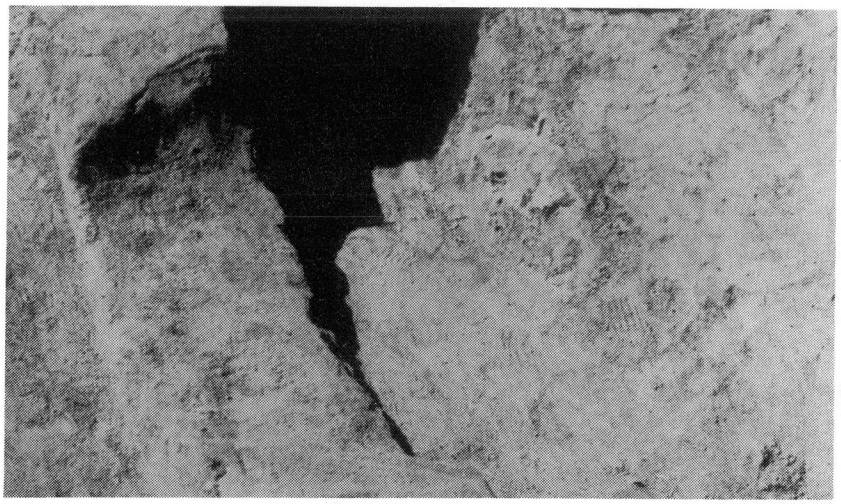
(2) 第5号住居址遺物出土状況— 3



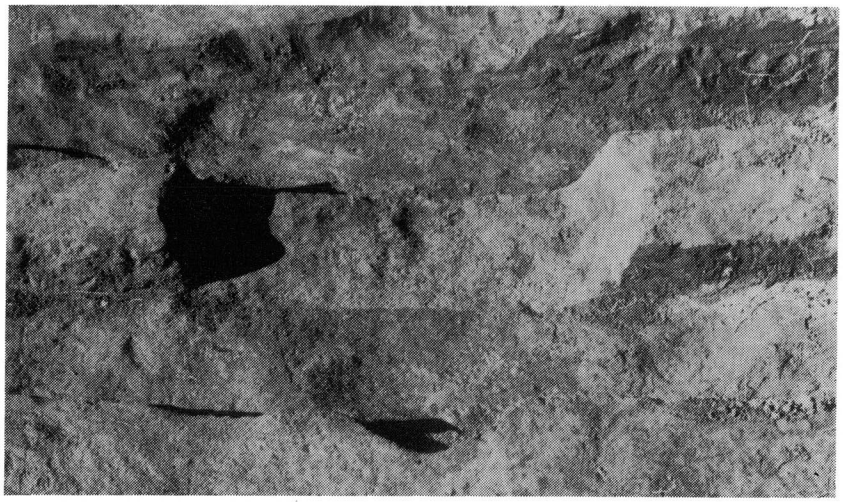
PL11 (3) 第 1 号 土 壙



(1) 第 2 号 土 壙

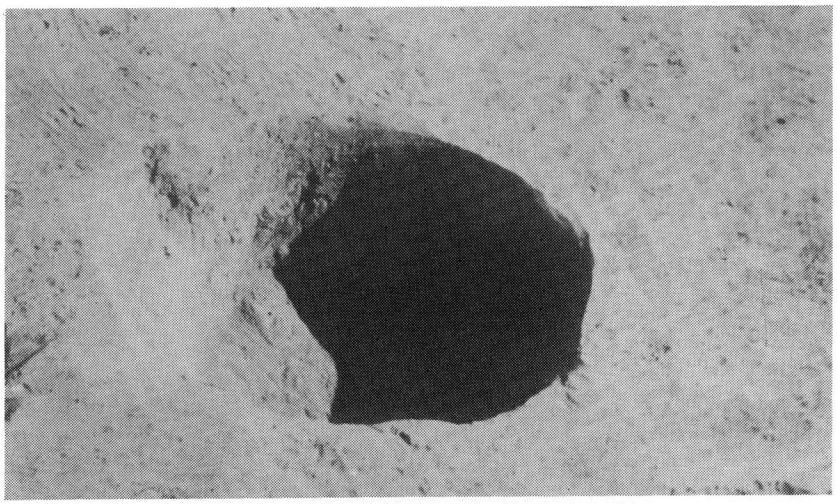


(2) 第 3 号 土 壙

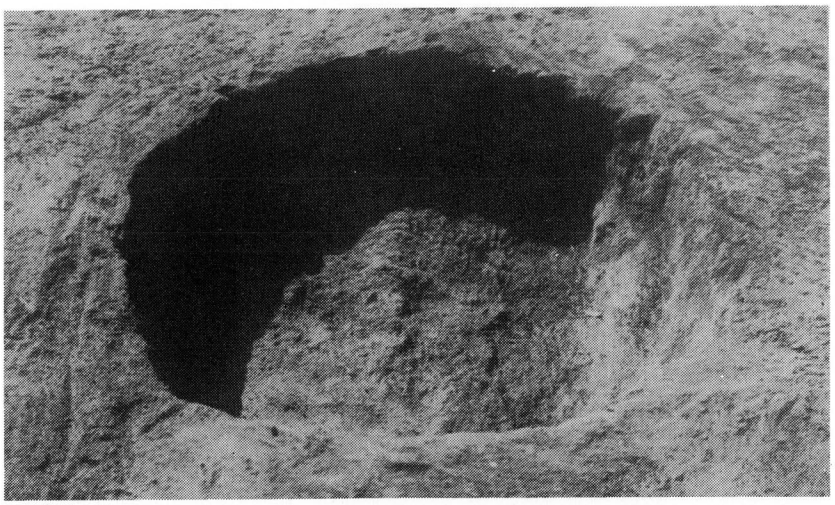


PL12

(3) 第 4 号 土 壙

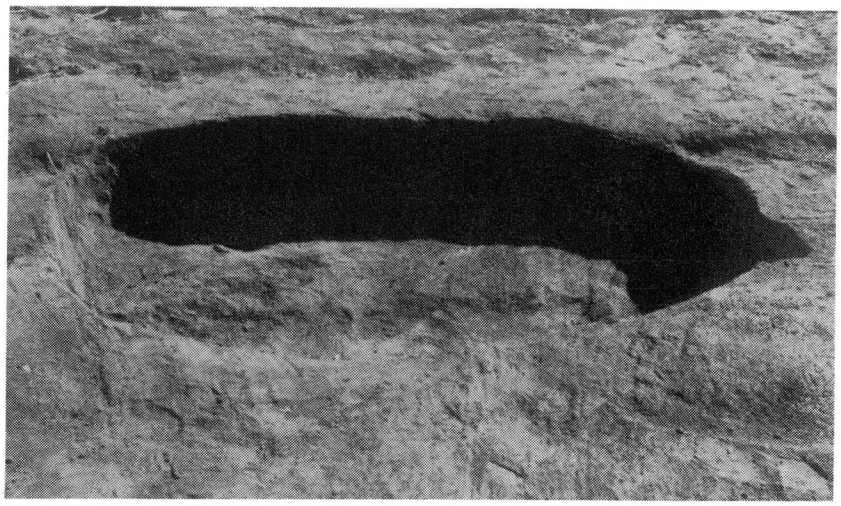


(1) 第 5 号 土 壙

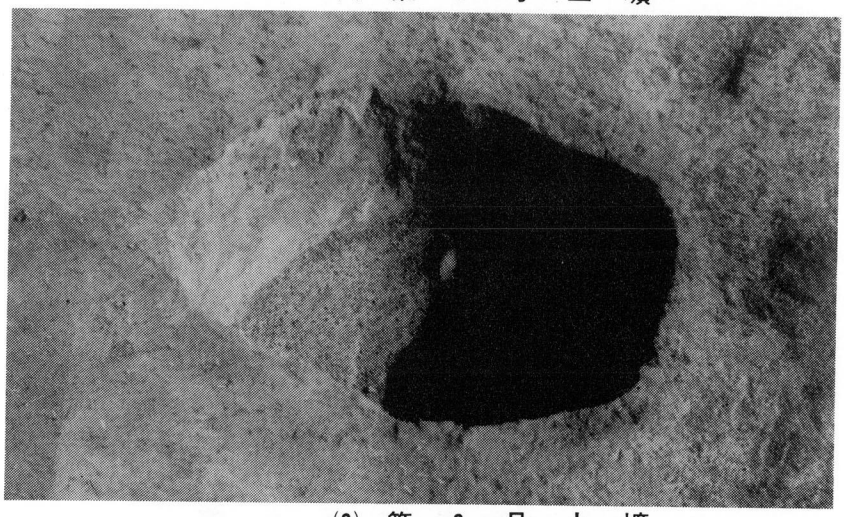


(2) 第 6 号 土 壙

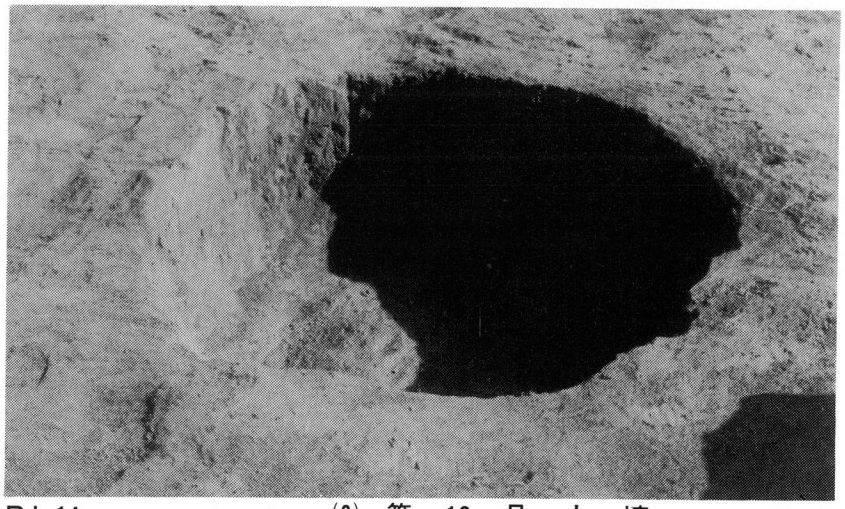
PL13 (3) 第 7 号 土 壙



(1) 第 8 号 土 壙

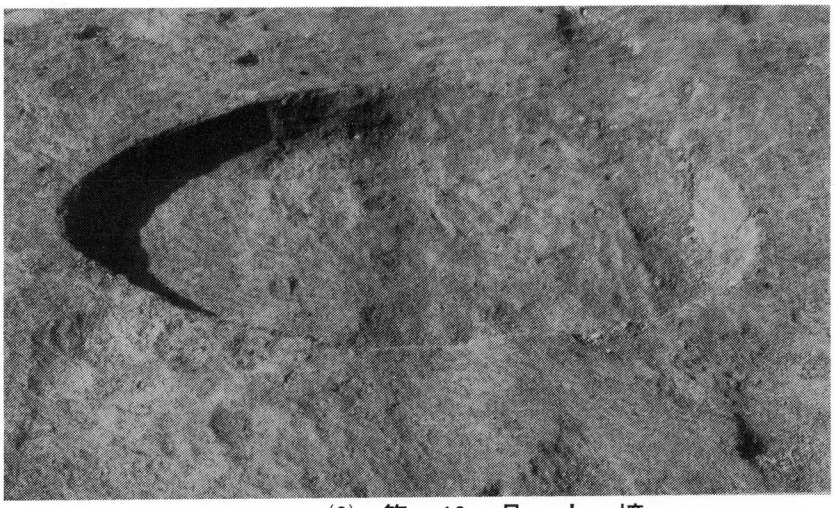


(2) 第 9 号 土 壙

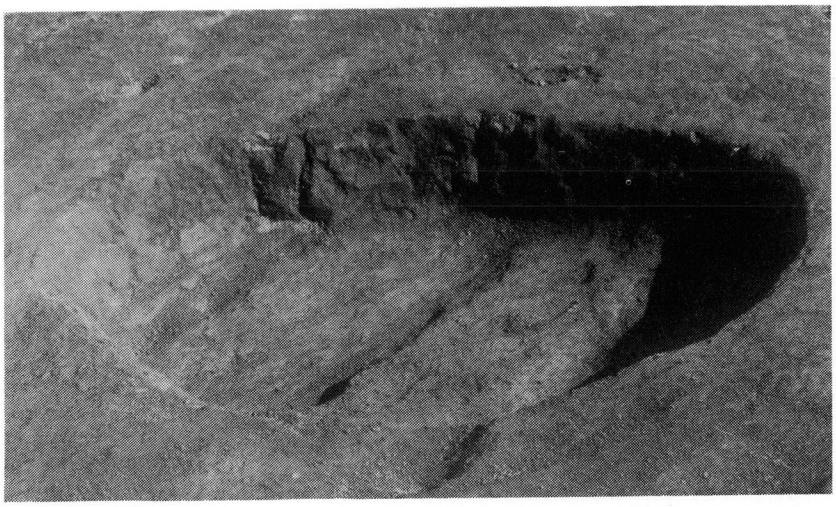


PL14 (3) 第 10 号 土 壙

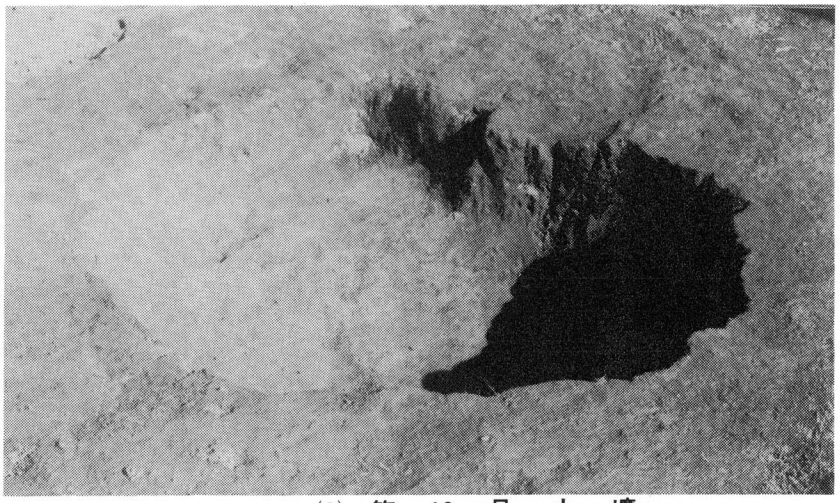
(1) 第 11 号 土 壙



(2) 第 12 号 土 壙

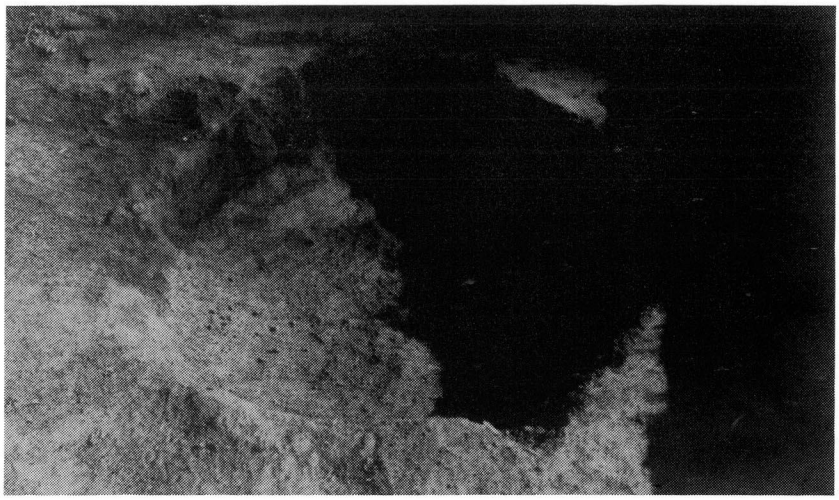


PL15 (3) 第 13 号 土 壙

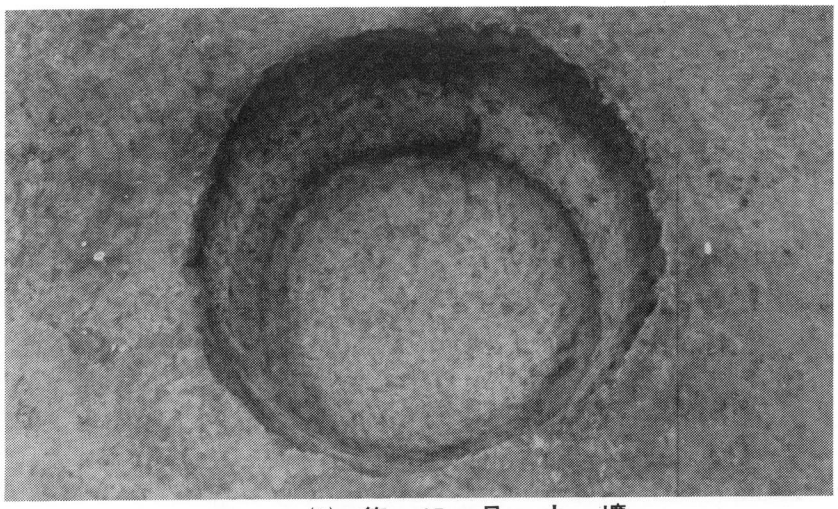


(3) 第 16 号 土 壙

(2) 第 15 号 土 壙

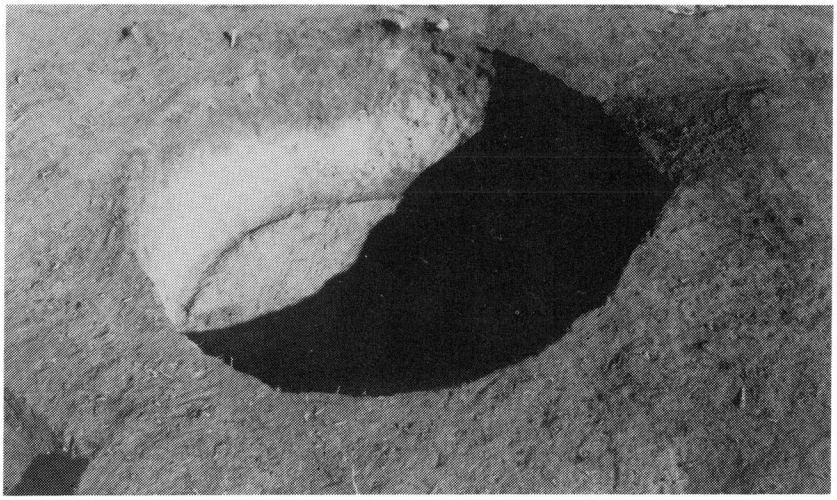


PL16 (1) 第 14 号 土 壙



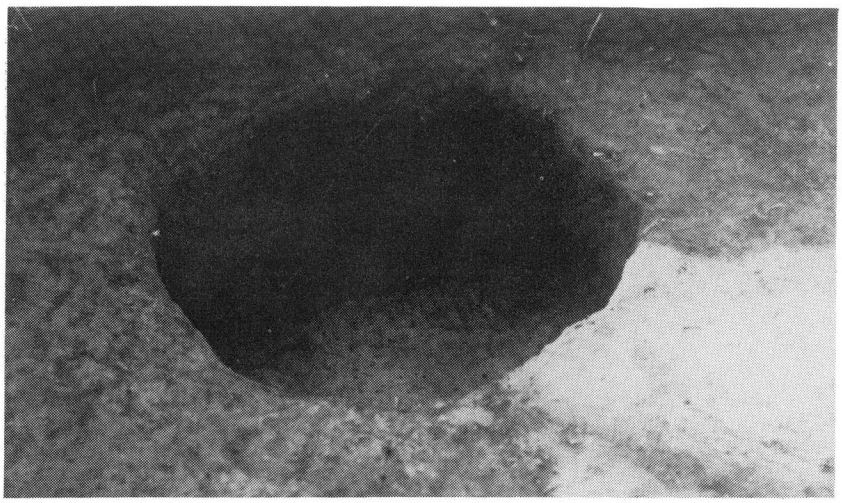
(1) 第 17 号 土 壙

(2) 第 18 号 土 壙

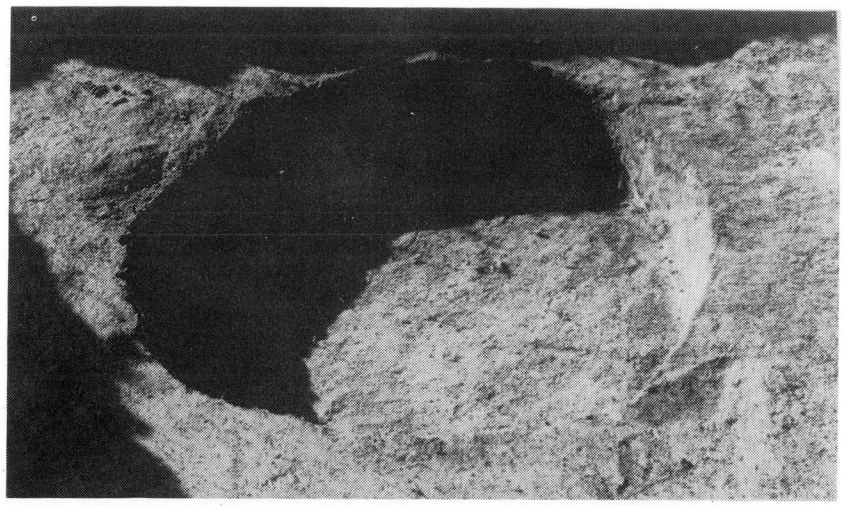


PL17

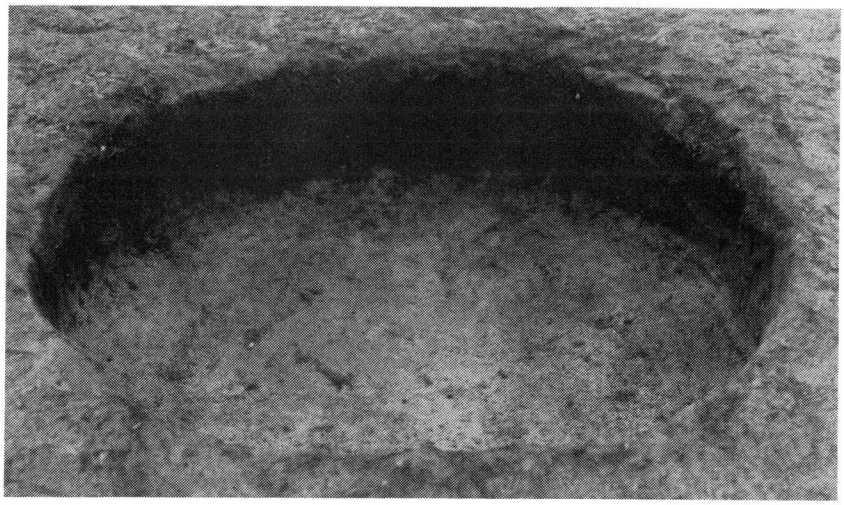
(3) 第 19 号 土 壙



(1) 第 20 号 土 壙

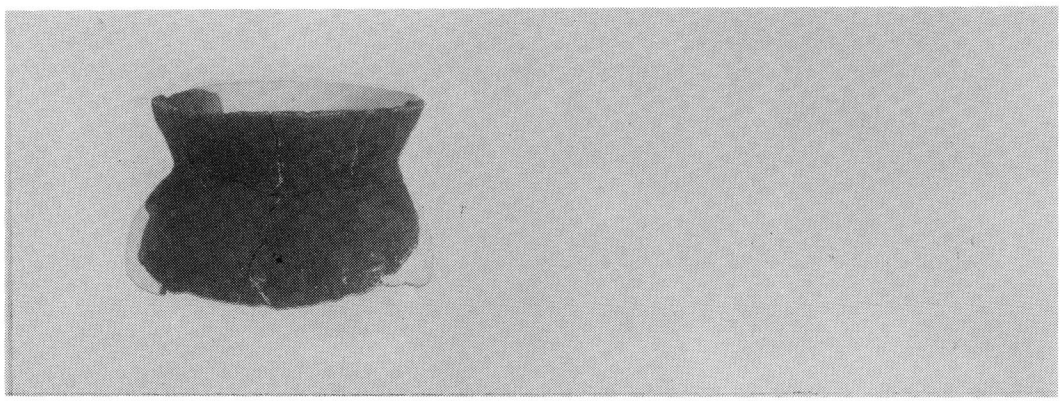


(2) 第 21 号 土 壙

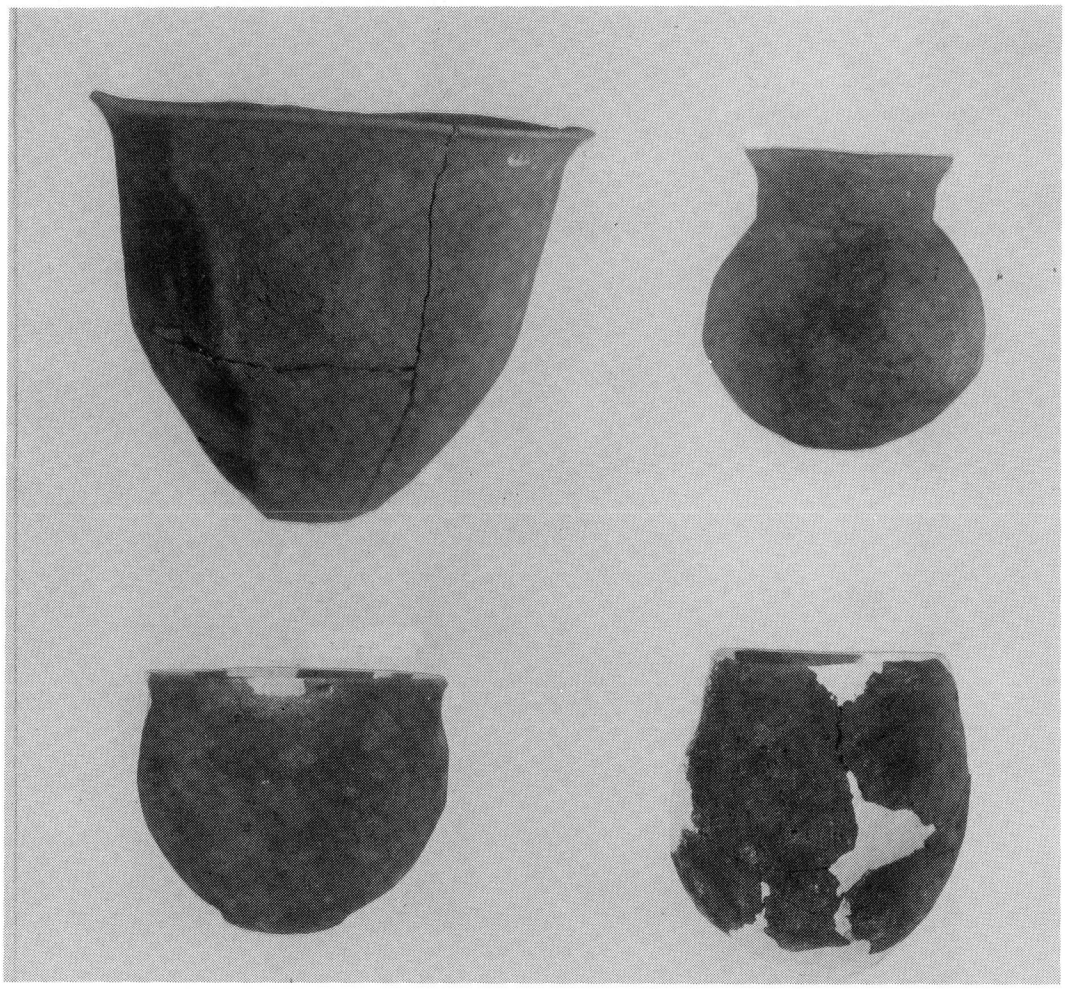


PL18

(3) 第 22 号 土 壙

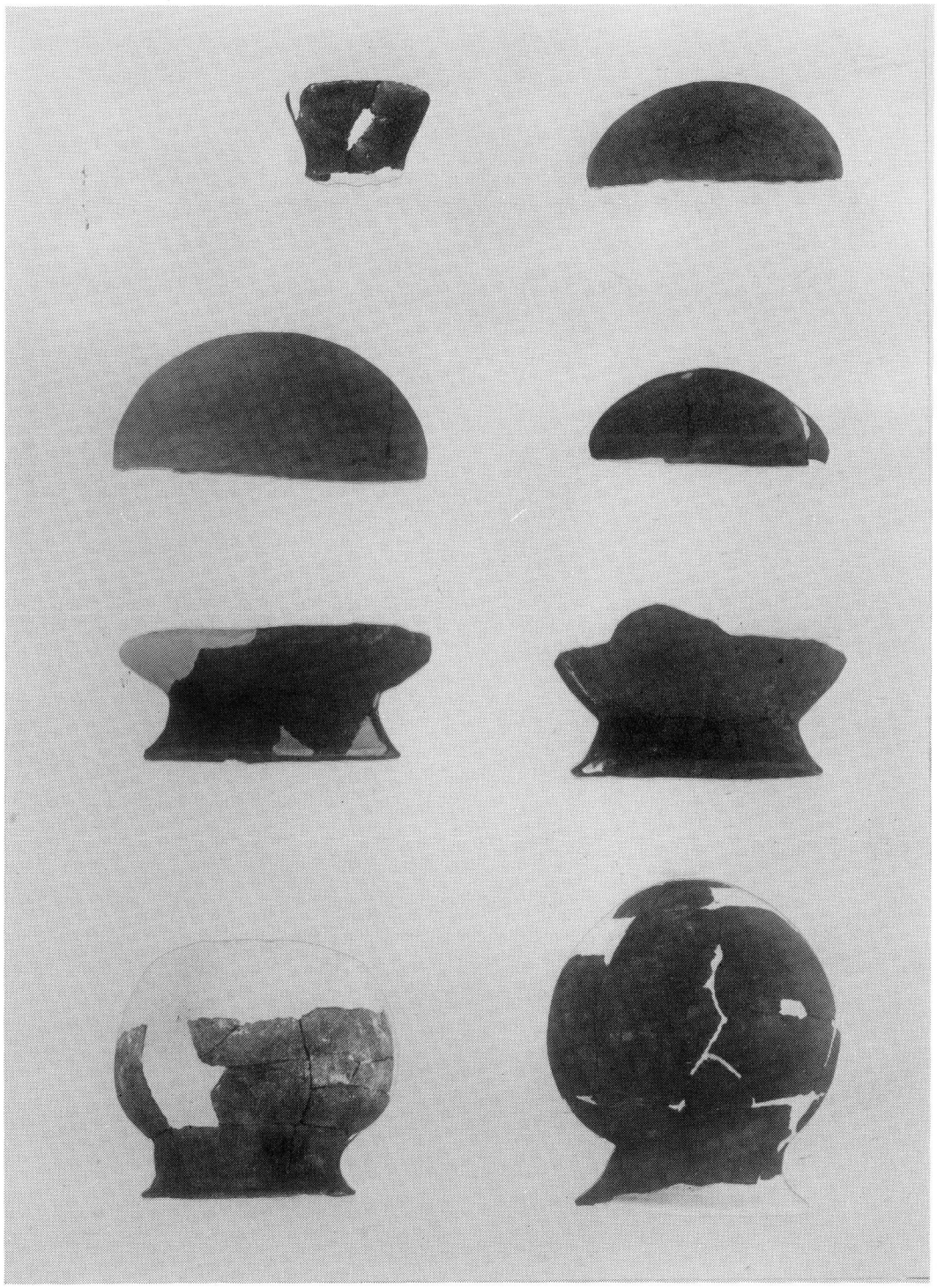


(1) 第 2 号住居址出土遺物

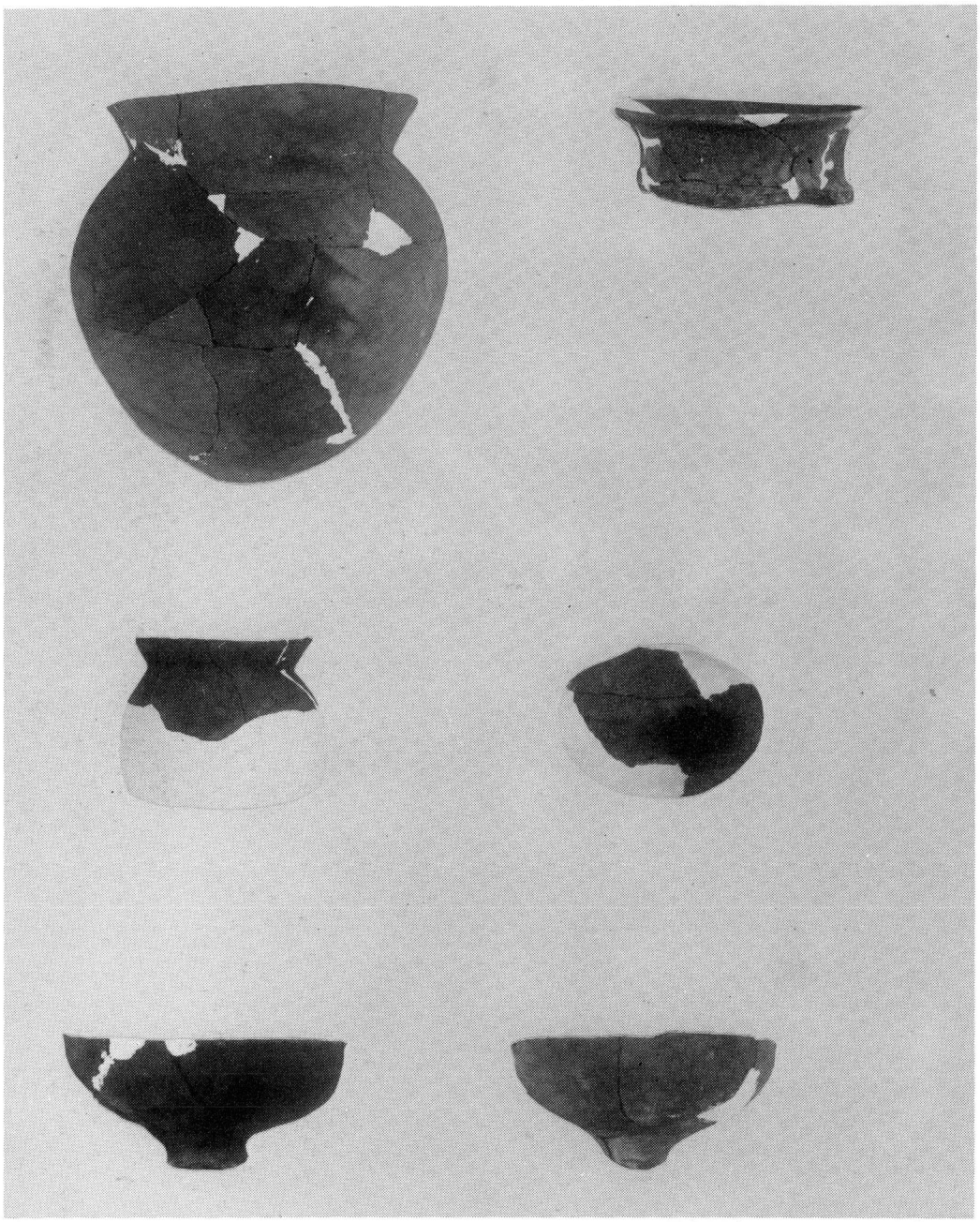


PL19

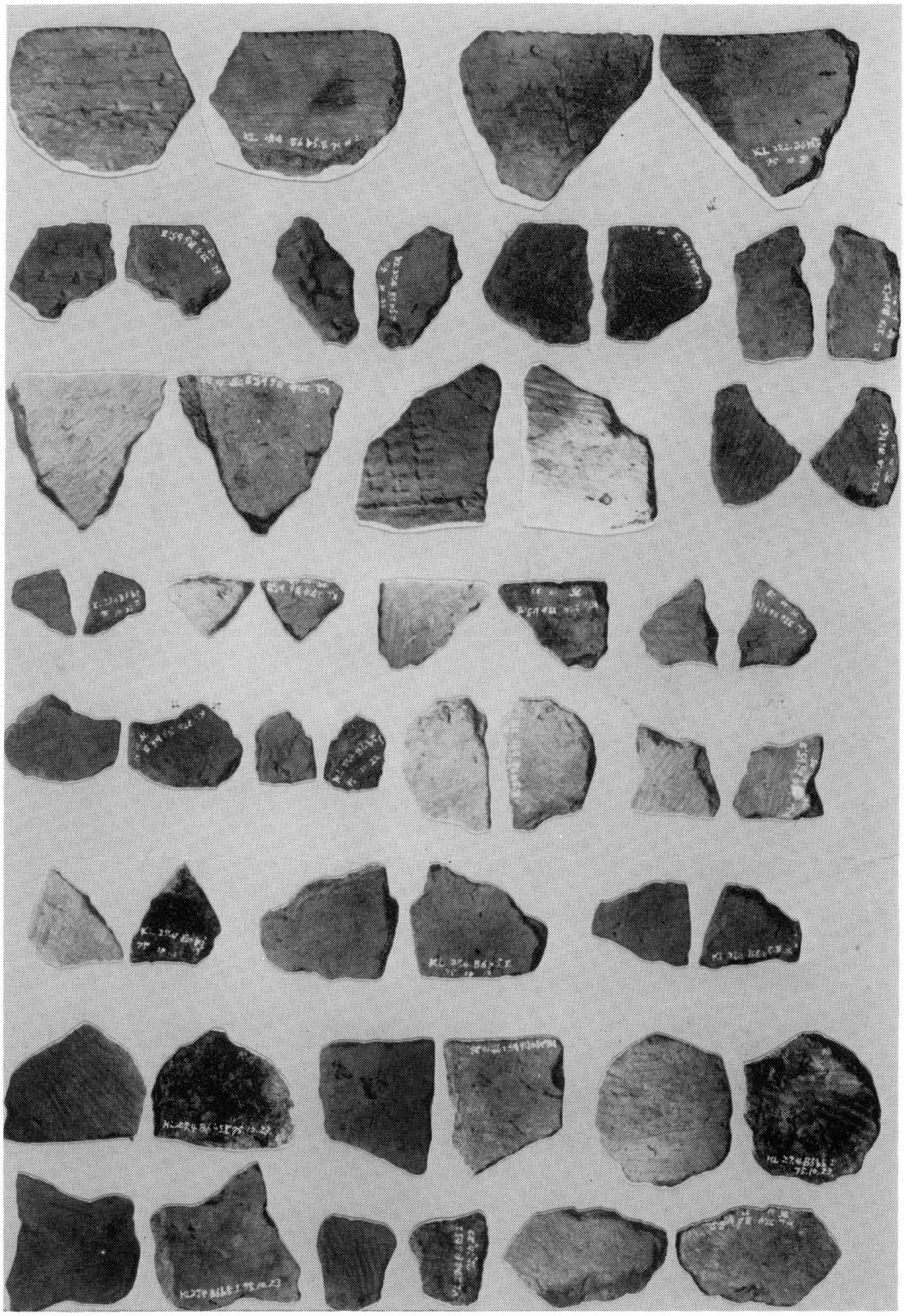
(2) 第 3 号住居址出土遺物



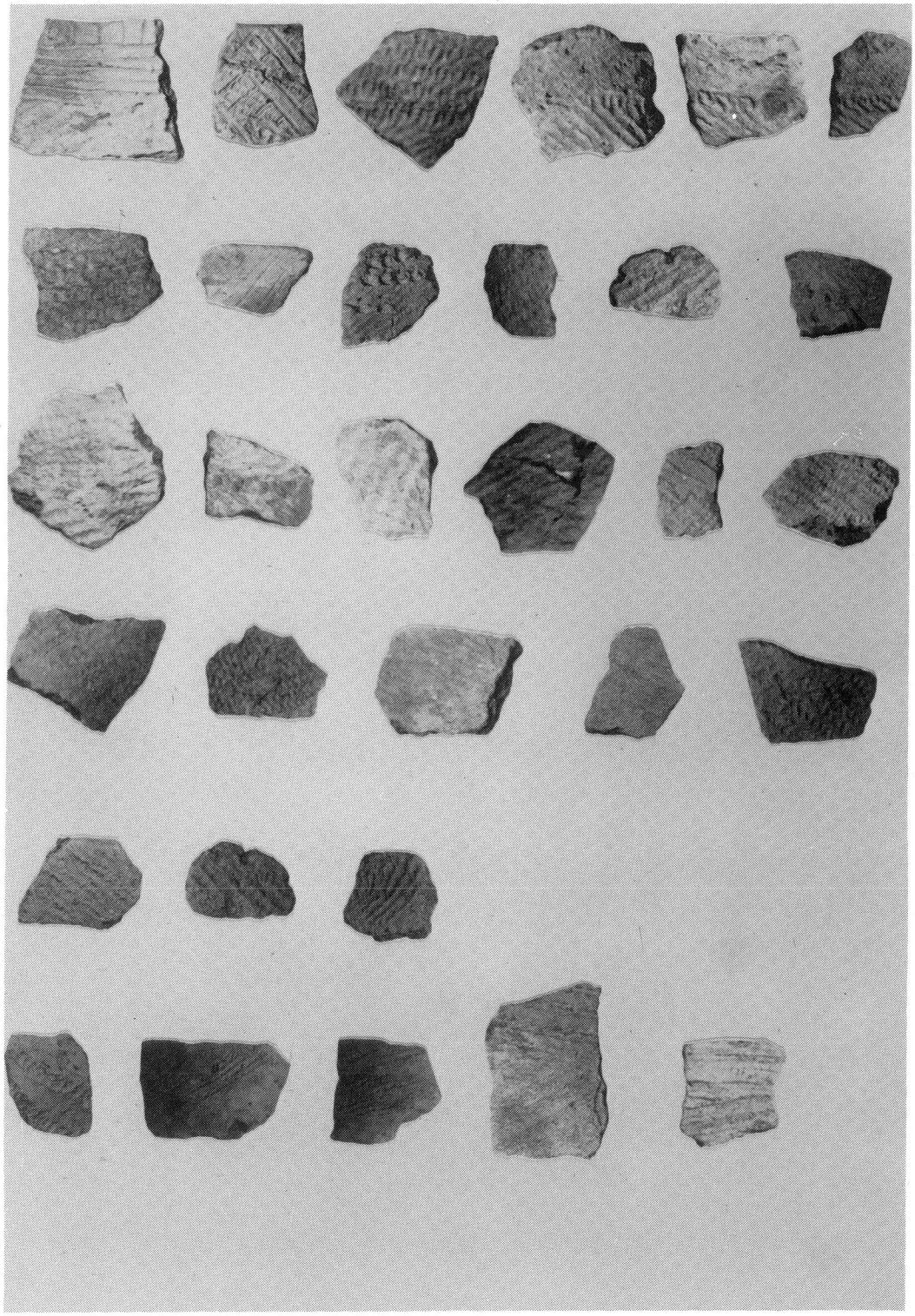
PL20　　(1) 第 4 号住居址出土遺物



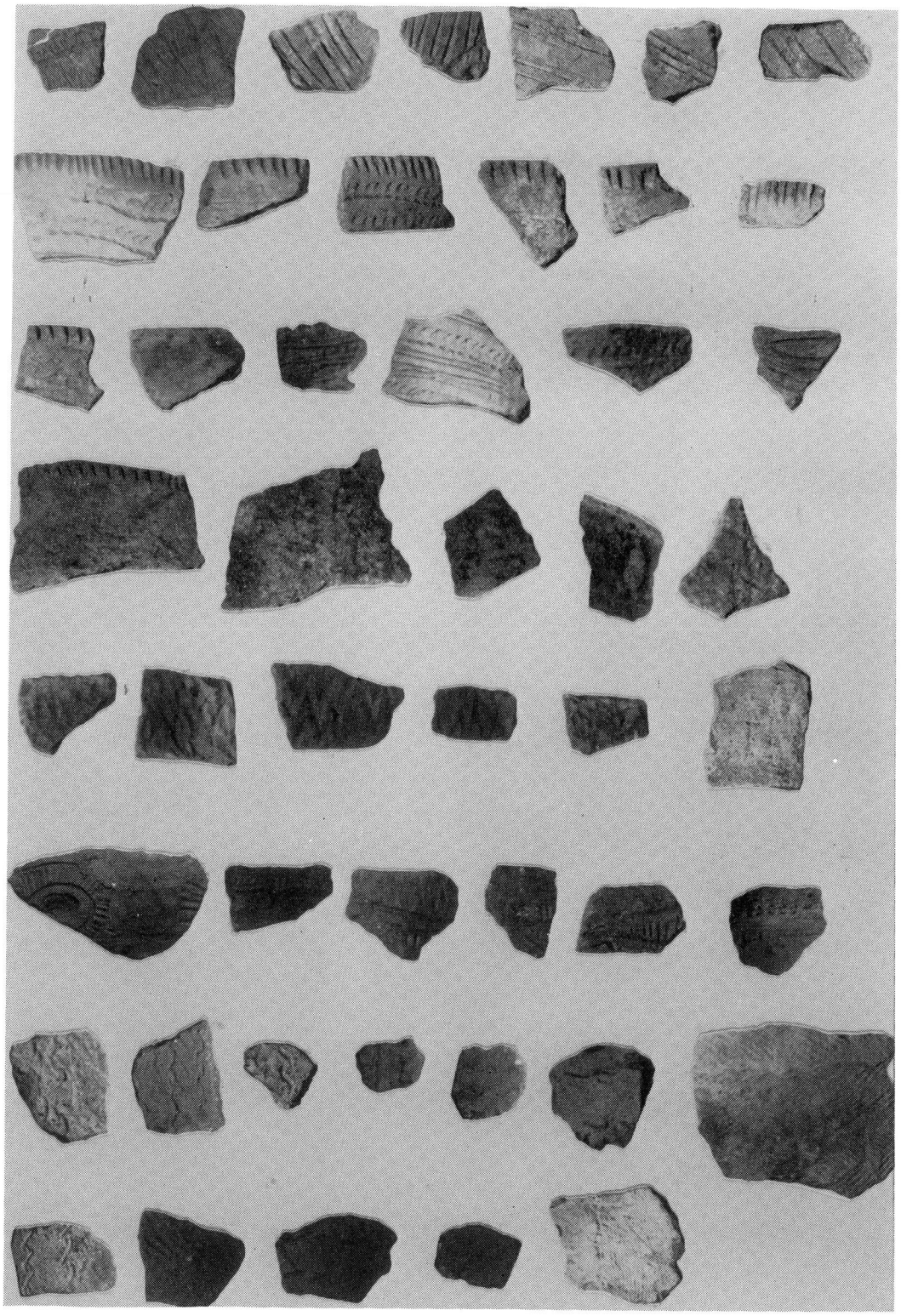
PL21　　(1) 第 5 号住居址出土遺物



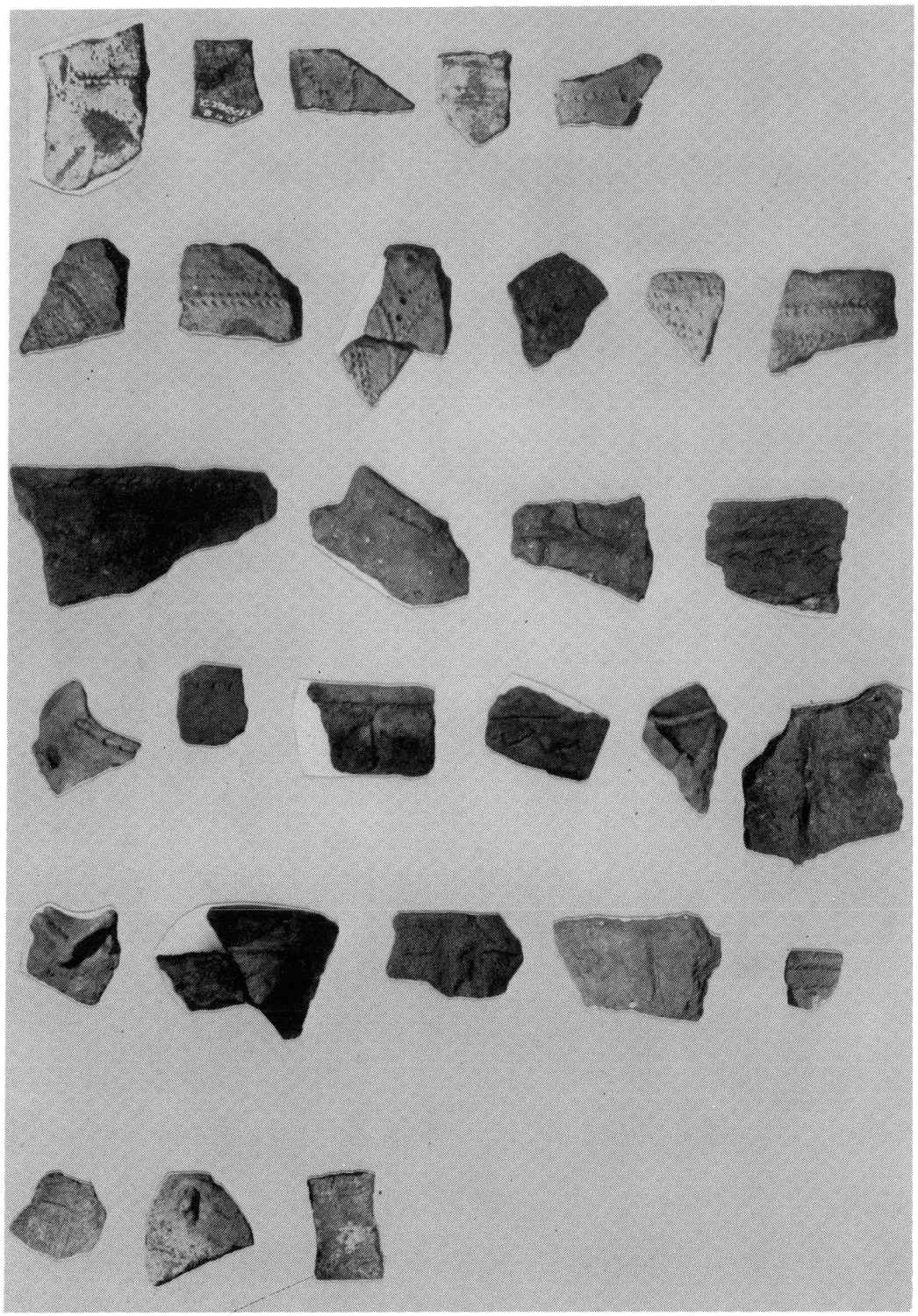
PL22　　(1) グリット出土遺物―1



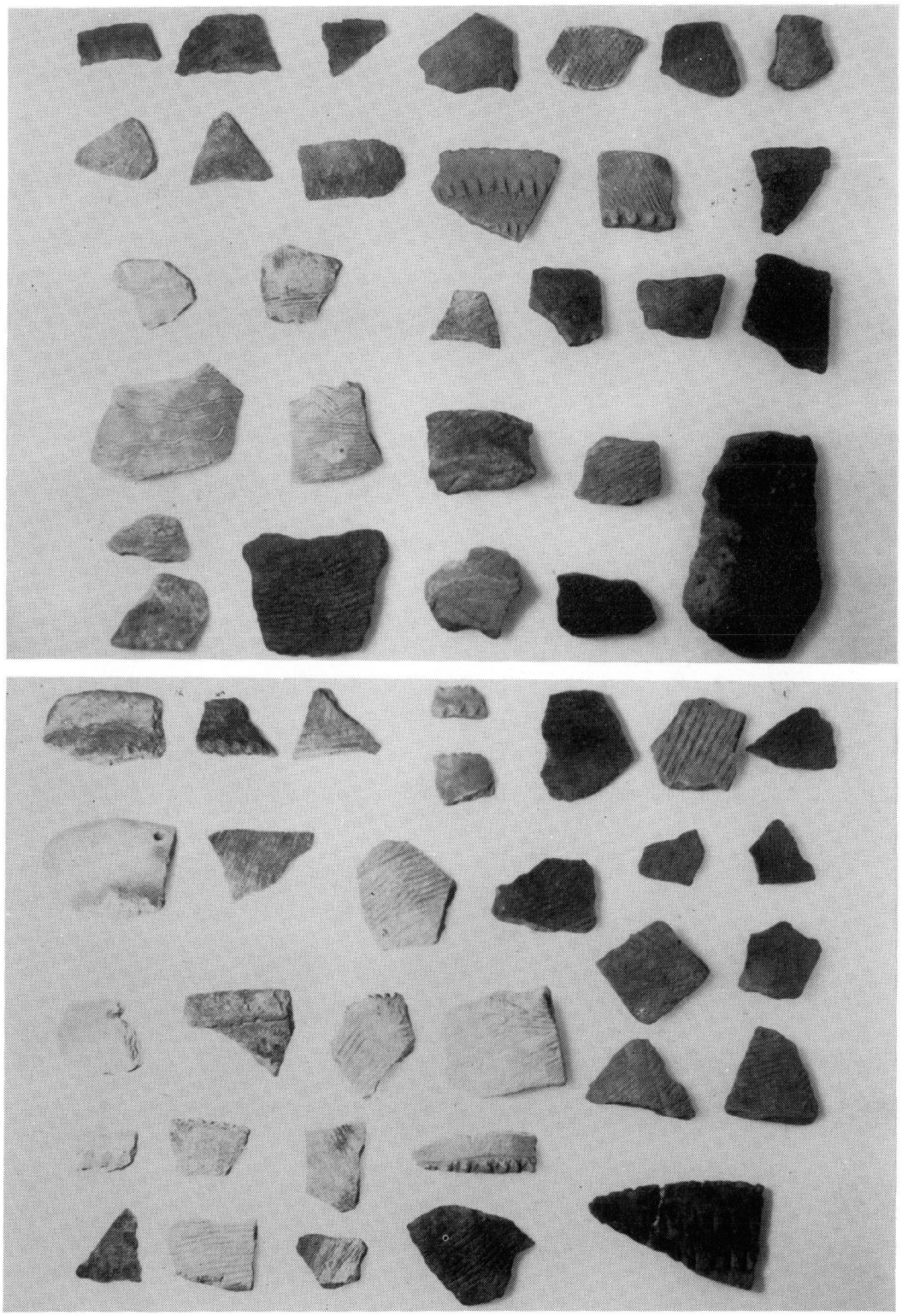
PL23　　(1) グリット出土遺物一 2



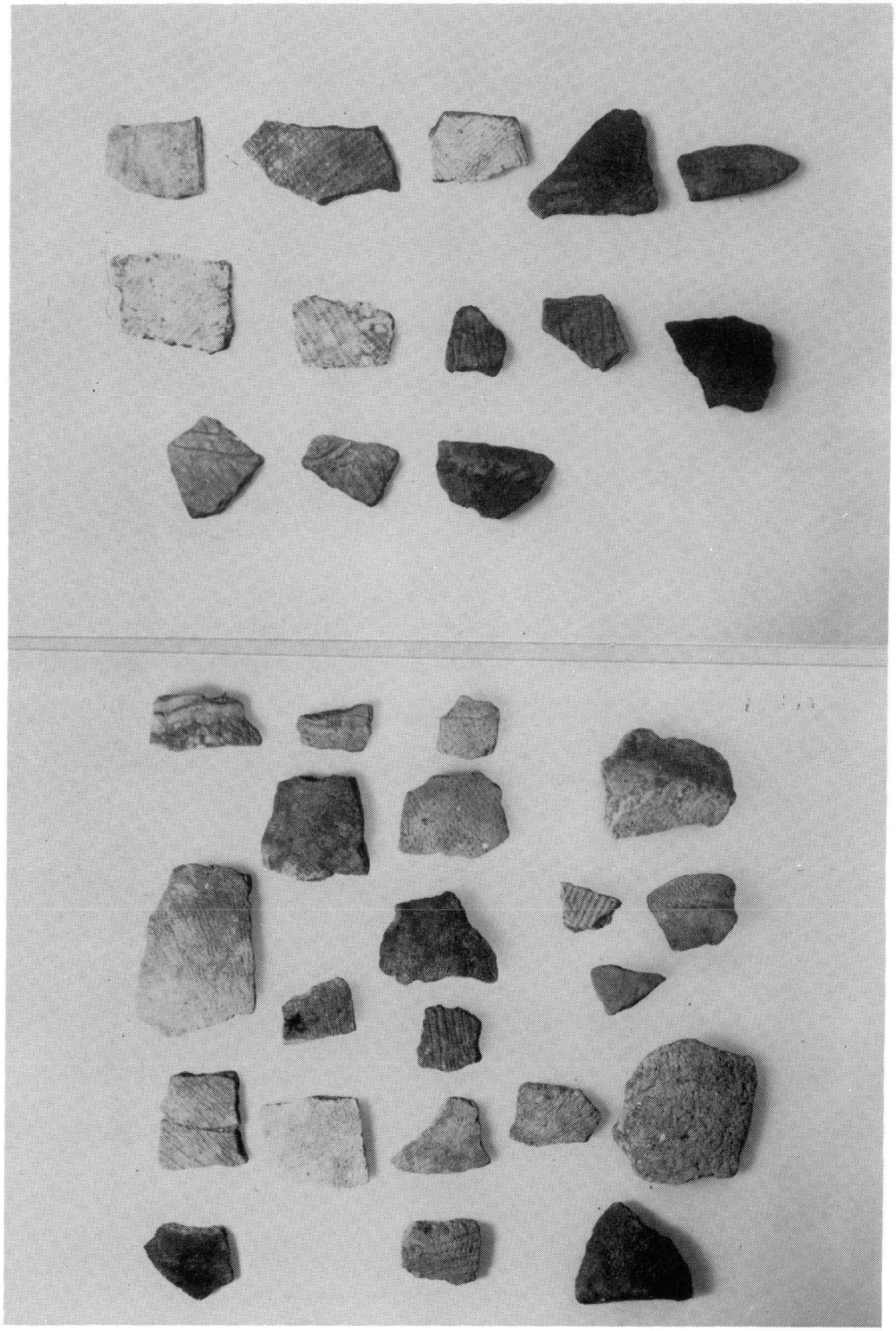
PL24　　(1) グリット出土遺物―3



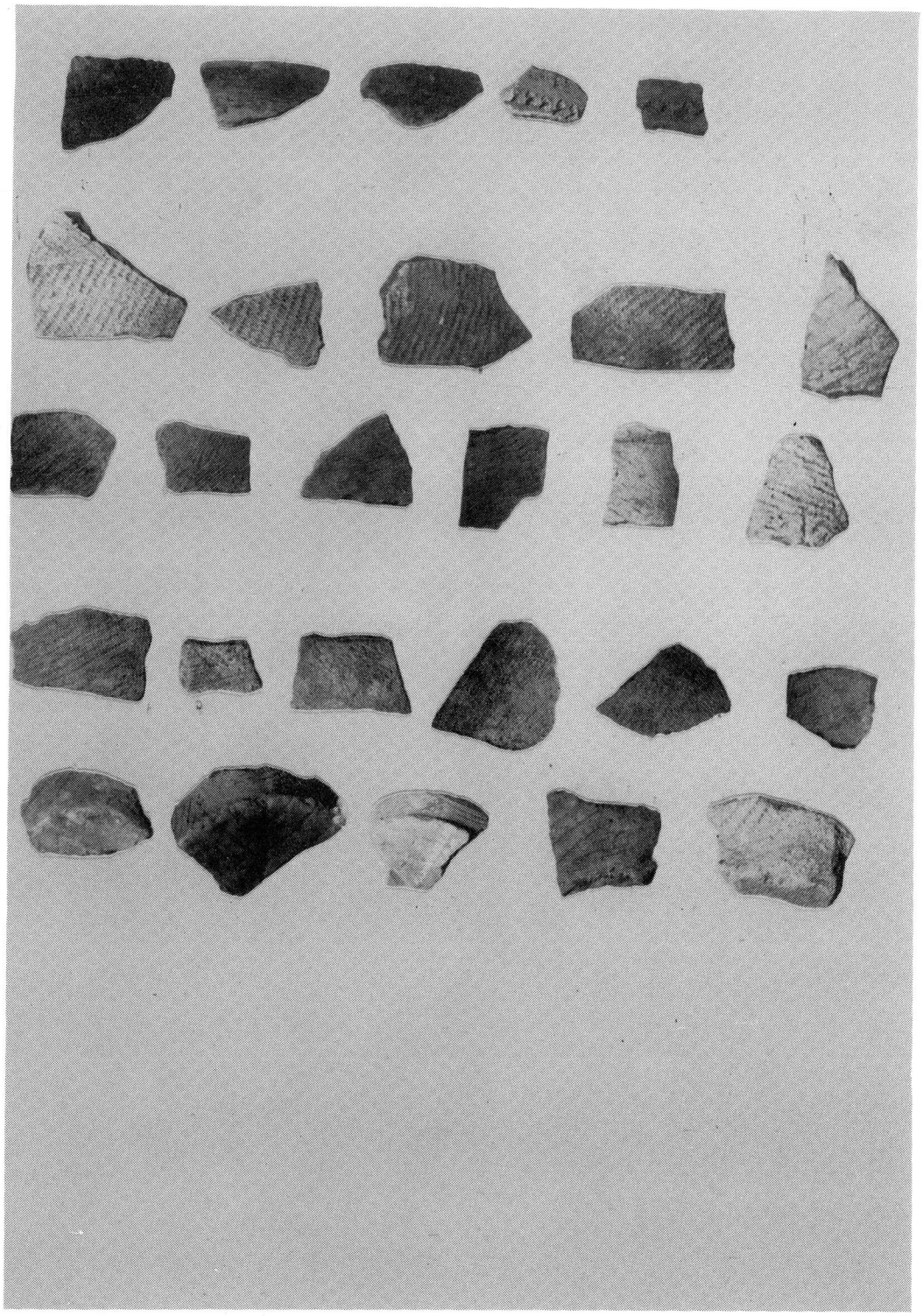
PL25　　(1) グリット出土遺物一4



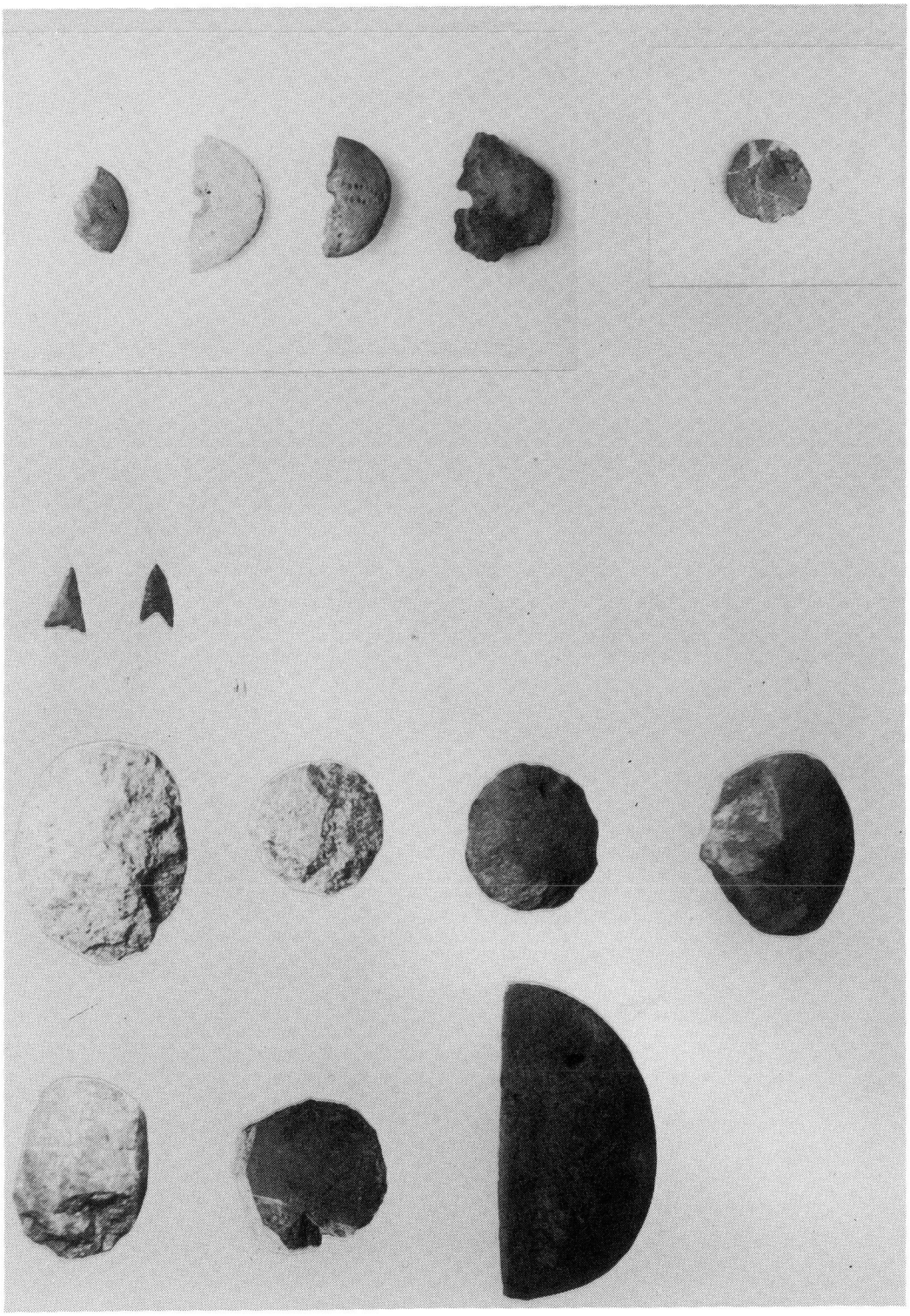
PL26　　(1) グリット出土遺物一5



PL27　　(1) グリット出土遺物一6



PL28　　(1) グリット出土遺物－7



PL29　　(1) グリット出土遺物一 8